熊本県文化財調査報告第250集

The Taroumaru Site
太郎丸遺跡

The Nishiyashiki Site
西屋敷遺跡

The Sehagi Site
瀬萩遺跡

— 九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

2009
熊本県教育委員会

1．玉名平野上空より雲仙普賢岳(長崎県)を望む
2．菊池川(左)、木葉川(右)合流点より木葉山を望む

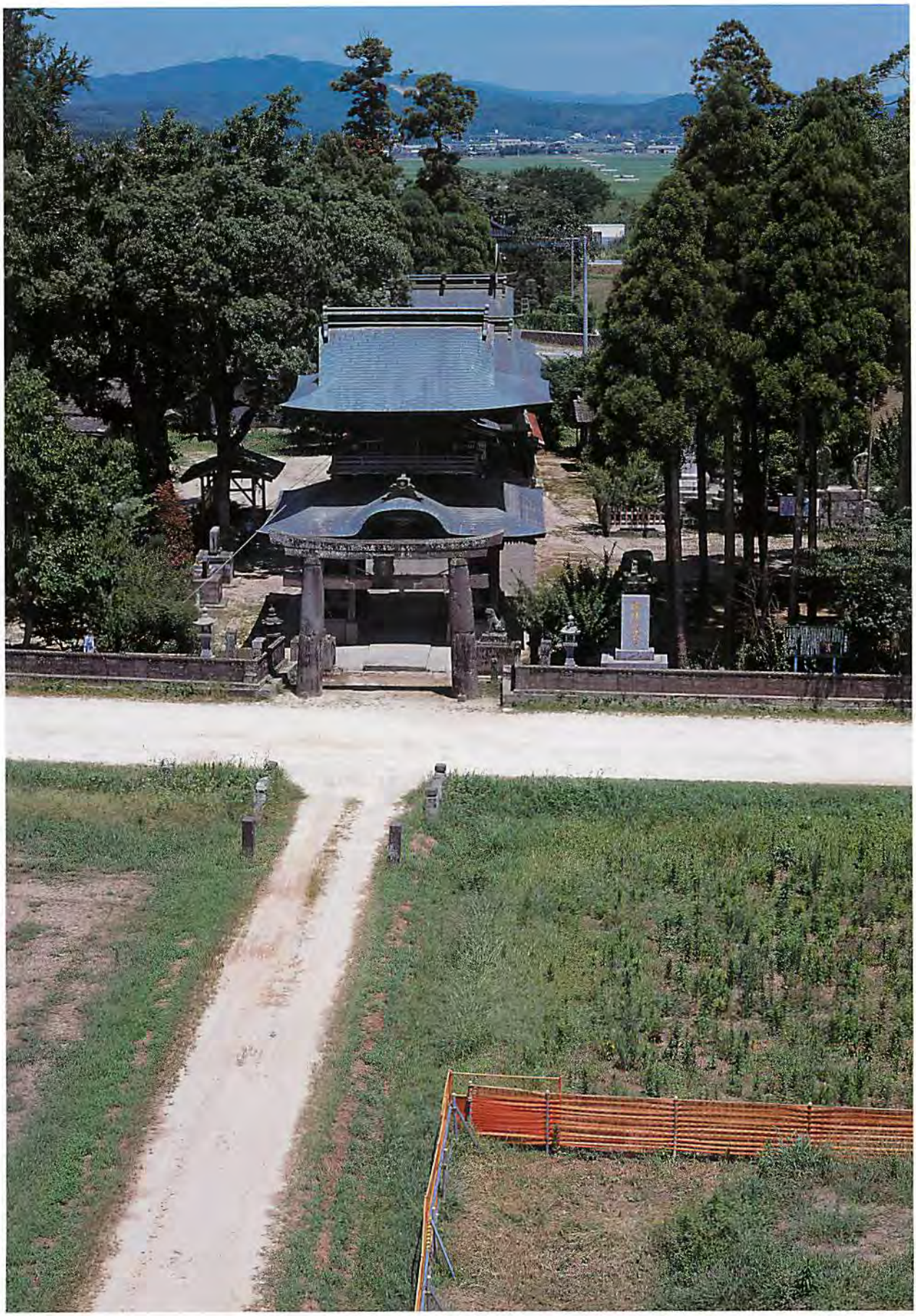
太郎丸遺跡１区中世面完掘状況（東より）

太郎丸遺跡２区中世面相当層迄完掘状況（東より）

太郎丸遺跡３区中世面完掘状況(東より)

太郎丸遺跡４区中世面完掘状況（新幹線、菊池川橋架上より撮影）

太郎丸遺跡４区東側(上)、南側(下)土層断面（Fig15 参照）



梅林天満宮（参道から楼門を望む）

西屋敷遺跡１区自然地形露出状況

西屋敷遺跡２区近世墓検出状況

瀬萩遺跡 古墳時代面完掘状況(西より)

太郎丸遺跡
西屋敷遺跡
瀬萩遺跡

— 九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

2009
熊本県教育委員会

序　文

この書は、九州新幹線建設工事に伴い発掘調査を実施した、熊本県玉名市に所在する「太郎丸遺跡・瀬萩遺跡・西屋敷遺跡」の発掘調査報告書です。

遺跡は、熊本県北部に位置し、熊本県四大河川の一つ、菊池川の下流域に広がる玉名平野上に位置しています。菊池川は、阿蘇外輪山に源を発し、上流の菊池市・山鹿市で国指定史跡鞠智城を望み、中流域で九州でも装飾古墳の最も多く所在する山鹿市を経由し、銀象眼銘太刀を始めさまざまな大陸系の遺物を出土した国指定史跡江田船山古墳（清原古墳群）が所在する和水町を経て玉名市へ至ります。さらに、玉名市では平野の中央を西に貫流し、平野左右に肥沃な沖積地を形成し、有明海に注ぎこみ広大な干潟を形成しています。

このたび、このような歴史的・地理的背景を有し、文化の育まれる条件の整った本地域において、九州新幹線鹿児島ルート計画が策定され建設工事が始まることとなりました。

本書はそのようななかで、玉名平野左岸に所在する「太郎丸遺跡」「瀬萩遺跡」、右岸の丘陵性台地縁辺部に所在する「西屋敷遺跡」の調査成果を整理・報告したものです。本書を学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財発掘調査に御理解、御協力いただいた独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 九州新幹線建設局を始め、玉名市教育委員会及び地元の方々に対し、衷心より感謝申しあげます。

平成２２年 ３ 月 １ 日

熊本県教育長　山本隆生

太郎丸遺跡・西屋敷遺跡・瀬萩遺跡発掘調査報告

— 九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

目　次

第1章　序　言

1　調査の経緯 …… 1
2　調査の契機となる九州新幹線について …… 2
3　事前照会と予備調査の経緯 …… 2
4　玉名郡市における新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査について …… 2
5　調査組織 …… 3
6　報告書の作成 …… 4

第2章　調　査

1　調査地域 …… 7
A　遺跡の位置及び歴史的背景　　B　地理的環境
C　測量　　D　その他
2　調査日誌抄 …… 11
A　太郎丸遺跡　　B　西屋敷遺跡
C　瀬萩遺跡

第3章　各遺跡の報告

1　太郎丸遺跡 …… 22
A　遺跡（1区から4区の概要）　　B　出土遺物
C　まとめ（主に道路状遺構 SF001 を中心に）
2　西屋敷遺跡 …… 65
A　調査に至る経緯　　B　調査の手法
C　1区の概要　　D　2区の概要
E　総括
3　瀬萩遺跡 …… 98
A　遺跡の概要　　B　遺物
C　附編

写真図版
報告書抄録
奥付

挿図目次 （Fig）

Fig.1　熊本県域における地形表記と九州新幹線により発掘調査を実施した遺跡
Fig.2　玉名平野遺跡地図
Fig.3　太郎丸遺跡周辺遺跡分布図（1/5,000）
Fig.4　太郎丸遺跡 1 区遺構配置図
Fig.5　1 区土坑 SK001・土坑 SK002・土坑 SK003 平面図と断面図
Fig.6　2・3 区中世面遺構配置図
Fig.7　3 区柵列 SA001 平面図と断面図
Fig.8　3 区掘立柱建物 SB001 平面図と断面図
Fig.9　3 区溝 SD001・土坑 SK001 平面図と断面図
Fig.10　3 区土坑 SK002 平面図と土層断面図
Fig.11　3 区土坑 SK003 平面図と断面図
Fig.12　3 区土坑 SK004 平面図と断面図
Fig.13　3 区柱穴 SP001・柱穴 SP002・柱穴 SP005 平面図と断面図
Fig.14　4 区溝 SD001 平面図と断面図
Fig.15　4 区遺構配置図
Fig.16　4 区溝 SD002 平面図と土層断面図
Fig.17　4 区柵列 SA001 平面図と土層断面図
Fig.18　4 区掘立柱建物 SB001 平面図と柱穴断面図
Fig.19　4 区溝 SD003 から溝 SD011 平面図と土層断面図
Fig.20　4 区道路状遺構 SF001 平面図と断面図及び出土遺物
Fig.21　4 区土坑 SK001・土坑 SK003・土坑 SK002・土坑 SK005 平面図と断面図
Fig.22　4 区土坑 SK004 と道路状遺構 SF001 の隣接状況、平面図と断面図
Fig.23　4 区土坑 SK007・土坑 SK008 平面図と断面図
Fig.24　4 区土坑 SK010 と土坑 SK011 切り合い状況、土坑 SK012・溝 SD012 と土坑 SK013 の切り合い状況、平面図と断面図
Fig.25　4 区墓 ST001・墓 ST002・墓 ST003 平面図と断面図
Fig.26　1 区溝 SD002（1 ～ 5）出土遺物実測図
Fig.27　1 区土坑 SK002（6）・土坑 SK003（7）出土遺物実測図
Fig.28　1 区包含層（8 ～ 22）出土遺物実測図－①
Fig.29　1 区包含層（23 ～ 32）出土遺物実測図－②
Fig.30　2 区（33 ～ 36）出土遺物実測図
Fig.31　3 区（37 ～ 43）出土遺物実測図
Fig.32　4 区溝 SD004（44・48）・溝 SD007（45 ～ 47）出土遺物実測図
Fig.33　4 区溝 SD006（49・50）・溝 SD007（51）・溝 SD008（52）出土遺物実測図
Fig.34　4 区道路状遺構 SF001（53 ～ 71）出土遺物実測図－①
Fig.35　4 区道路状遺構 SF001（72 ～ 88）出土遺物実測図－②
Fig.36　4 区土坑 SK003・土坑 SK017・調査区（89 ～ 95）出土遺物実測図
Fig.37　西屋敷遺跡周辺遺跡地図（1/10,000）
Fig.38　西屋敷遺跡 1 区・2 区地形測量図
Fig.39　西屋敷遺跡 1 区マウンド状地形平面測量及び土層断面図
Fig.40　墓石本体分類一覧
Fig.41　墓石名称及び展開図凡例
Fig.42　花燈形分類一覧
Fig.43　西屋敷遺跡 2 区近世墓配置図
Fig.44　墓 ST001 ～墓 ST003 立面実測図及び拓本
Fig.45　墓 ST004 ～墓 ST006 立面実測図及び拓本
Fig.46　墓 ST007 ～墓 ST009 立面実測図及び拓本
Fig.47　墓 ST010・墓 ST011 立面実測図及び拓本
Fig.48　墓 ST012 ～墓 ST014 立面実測図及び拓本
Fig.49　墓 ST016 ～墓 ST018 立面実測図及び拓本
Fig.50　墓 ST015・墓 ST019 立面実測図及び拓本
Fig.51　墓 ST020 ～墓 ST022 立面実測図及び拓本
Fig.52　墓 ST023 ～墓 ST025 立面実測図及び拓本

挿図目次 （Fig）

Fig.53　墓 ST026 立面、平面実測図及び拓本
Fig.54　瀬萩遺跡周辺遺跡分布図（1/5,000）
Fig.55　瀬萩遺跡 古墳時代遺構配置図及び地形図（1/600）
Fig.56　竪穴住居跡 SI001 平面図と断面図
Fig.57　竪穴住居跡 SI002 平面図と断面図
Fig.58　土坑 SK001 平面図と土層断面図
Fig.59　竪穴住居跡 SI001(1 ～ 5)・竪穴住居跡 SI002（6）出土遺物実測図
Fig.60　包含層 (7 ～ 11) 出土遺物実測図－①
Fig.61　包含層 (12 ～ 18) 出土遺物実測図－②
Fig.62　包含層 (19 ～ 34) 出土遺物実測図－③
Fig.63　包含層 (35 ～ 42) 出土遺物実測図－④
Fig.64　植物珪酸体

表（Tab）

Tab.1　九州新幹線八代・博多間建設工事に伴う玉名郡市地区埋蔵文化財発掘調査一覧
Tab.2　太郎丸遺跡土層推移模式図
Tab.3　太郎丸遺跡・西屋敷遺跡・瀬萩遺跡の基準点成果
Tab.4　遺跡地名表
Tab.5　太郎丸遺跡 1 区出土遺物観察表
Tab.6　太郎丸遺跡 2 区出土遺物観察表
Tab.7　太郎丸遺跡 3 区出土遺物観察表
Tab.8　太郎丸遺跡 4 区出土遺物観察表 - ①
Tab.9　太郎丸遺跡 4 区出土遺物観察表 - ②
Tab.10　本体形及び法量一覧
Tab.11　成人墓属性表
Tab.12　墓石観察表
Tab.13　墓石編年表
Tab.14　瀬萩遺跡出土遺物観察表
Tab.15　植物珪酸体含量の層位的変化
Tab.16　植物珪酸体分析結果－1
Tab.17　植物珪酸体分析結果－2

写真（PL）

PL.1　1. 玉名平野上空より雲仙普賢岳（長崎県）を望む　2. 菊池川（左）、木葉川（右）合流点より木葉山を望む
PL.2　太郎丸遺跡 1 区中世面完掘状況（東より）
PL.3　太郎丸遺跡 2 区中世面相当層迄完掘状況（東より）
PL.4　太郎丸遺跡 3 区中世面完掘状況（東より）
PL.5　太郎丸遺跡 4 区中世面完掘状況（新幹線、菊池川橋架上より撮影）
PL.6　太郎丸遺跡 4 区東側、南側土層断面（Fig.15 参照）
PL.7　梅林天満宮（参道から楼門を望む）
PL.8　西屋敷遺跡 1 区自然地形露出状況
PL.9　西屋敷遺跡 2 区近世墓検出状況
PL.10　瀬萩遺跡 古墳時代面完掘状況（西より）
PL.11　菊池川左岸側、玉名平野（玉名市津留から玉東町稲佐迄の遺跡分布）
PL.12　1. 1 区溝 SD002 検出状況　2. 1 区溝 SD002 完掘状況
3. 1 区土坑 SK001 検出、半裁状況　4. 1 区土坑 SK001 完掘状況
PL.13　1. 1 区土坑 SK002 検出、半裁状況　2. 1 区土坑 SK002 完掘状況
3. 1 区土坑 SK003 検出状況　4. 1 区土坑 SK003 完掘状況
PL.14　1 区調査区と梅林天満宮
PL.15　2 区調査区完掘状況
PL.16　1. 3 区柵列 SA001 検出、半裁状況　2. 3 区柵列 SA001 完掘状況
3. 3 区掘立柱建物 SB001(P1・P2・P3) 完掘状況　4. 3 区掘立柱建物 SB001(P3・P4・P5・P6) 完掘状況
PL.17　1. 3 区溝 SD001 完掘状況　2. 3 区土坑 SK001 検出状況
3. 3 区土坑 SK001 半裁状況　4. 3 区土坑 SK001 完掘状況
PL.18　1. 3 区土坑 SK002 検出状況　2. 3 区土坑 SK002 半裁状況
3. 3 区土坑 SK002 完掘状況　4. 3 区調査区完掘状況
PL.19　1. 4 区溝 SD001 検出状況　2. 4 区溝 SD001 土層断面、完掘状況
PL.20　1. 4 区溝 SD002 検出状況　2. 4 区溝 SD002 土層断面、完掘状況
PL.21　1. 4 区溝 SD003 遺物出土状況　2. 4 区溝 SD003 完掘状況
3. 4 区溝 SD004 検出状況　4. 4 区溝 SD004 遺物出土状況
PL.22　1. 4 区溝 SD005 完掘状況　2. 4 区溝 SD006 検出状況
3. 4 区溝 SD006 遺物出土状況　4. 4 区溝 SD006 完掘状況
PL.23　1. 4 区溝 SD007 完掘状況　2. 4 区溝 SD008 遺物出土状況
3. 4 区溝 SD008 完掘及び土坑 SK001 検出状況　4. 4 区溝 SD008 ～ SD011 完掘状況
PL.24　4 区道路状遺構 SF001 検出状況
PL.25　1. 4 区道路状遺構 SF001 波板状凸凹検出状況　2. 4 区道路状遺構 SF001 波板状凸凹完掘状況
3. 4 区道路状遺構 SF001 遺物出土状況
PL.26　4 区道路状遺構 SF001 完掘状況
PL.27　1. 4 区墓 ST001 検出状況　2. 4 区墓 ST001 人骨検出状況
3. 4 区墓 ST001 頭骸骨検出状況　4. 4 区墓 ST001 完掘状況
PL.28　1. 4 区墓 ST002 人骨検出状況　2. 4 区墓 ST003 検出状況
3. 4 区墓 ST003 人骨検出状況　4. 4 区墓 ST003 頭骸骨検出状況
PL.29　1. 4 区土坑 SK002 土層断面　2. 4 区土坑 SK004 獣骨検出状況
3. 4 区土坑 SK003 遺物出土状況
PL.30　4 区作業風景
PL.31　1. 西屋敷遺跡 1 区№ 1 トレンチ掘削状況（北より）　2. 西屋敷遺跡 1 区頂部五輪塔残欠検出状況（北より）
3. 西屋敷遺跡 1 区№ 4 トレンチ掘削状況（北より）　4. 西屋敷遺跡 1 区頂上部より西側落ち際礫検出状況
PL.32　1. 西屋敷遺跡 1 区自然地形露出状況　2. 西屋敷遺跡 1 区全景
3. 西屋敷遺跡 2 区全景
PL.33　瀬萩遺跡 古墳時代面完掘状況
PL.34　太郎丸遺跡 1 区包含層 (8 ～ 32) 出土遺物
PL.35　太郎丸遺跡 3 区 (37・38・41・42)・太郎丸遺跡 4 区溝 SD004 ～溝 SD008(44・48・50・51・52) 出土遺物
PL.36　太郎丸遺跡 4 区道路状遺構 SF001 出土遺物
PL.37　太郎丸遺跡 4 区道路状遺構 SF001(86 ～ 88)・土坑 SK003(89)・土坑 SK017(90)・調査区内 (91 ～ 93) 出土遺物
PL.38　瀬萩遺跡竪穴住居跡 SI001(1・2・4・5)・包含層 (7・9・11) 出土遺物
PL.39　瀬萩遺跡竪穴住居跡 SI002 出土遺物
PL.40　瀬萩遺跡包含層出土遺物

太郎丸遺跡・西屋敷遺跡・瀬萩遺跡発掘調査報告

― 九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 ―

第1章 序言

本書は、九州新幹線建設工事に伴い、熊本県玉名市大字津留字高畑４５７－２ほか９筆に所在する「太郎丸遺跡」、同市大字津留字川面１０３－３ほか３筆に所在する「瀬萩遺跡」、同市大坊字西屋敷２６６０－３ほか４筆に所在する「西屋敷遺跡」を熊本県教育委員会が2004年（平成16年）から2005年（平成17年）に発掘調査し、その成果をとりまとめたものである。

太郎丸遺跡・西屋敷遺跡・瀬萩遺跡の所在する玉名平野は、熊本県四大河川のひとつで最も北に位置する菊池川の下流域左岸に位置し、中世以来栄えてきた高瀬、現在の玉名市域の東側に位置する。

玉名平野は、肥沃な水田が広がる穀倉地帯であるが、現在のように河川堤防が整備される以前は、菊池川・繁根木川・木葉川の度重なる氾濫により大きな被害を受けるような不安定な地域であった。現在でも玉名平野はこれら河川流域の一部に熊本県、玉名市の防災ハザードマップで河川氾濫時の被害想定がなされるなど沖積平野特有の条件上に位置している。

太郎丸遺跡・瀬萩遺跡は標高約６ｍ、遺跡付近で菊池川が大きく流れの向きを西へ変えるとともに、支流のひとつである木葉川の流入もあり、現在でも氾濫源の様相を呈する地域である。

また、西屋敷遺跡は２つの遺跡とは違い、基盤に花崗岩風化層を主体とする丘陵の尾根南側斜面の中位に位置している。水田上面までは約１０ｍの比高差がある。

1 調査の経緯

太郎丸遺跡は、菊池川と木葉川の合流点付近、現在の梅林天満宮周辺では以前から土師器片が出土[1]することは知られていた。そして、周辺の小字図等の観察[2]により中世までさかのぼると考えられる地名や、隣接する梅林天満宮・院若社（印鑑社）等の存在などから周辺に遺跡の存在が窺われていた。しかしながら、発掘調査を経ていないこともあって、広く周知の埋蔵文化財包蔵地として共通理解を得るまでには至らなかった。

一方、先にも触れたが当該地域が菊池川と木葉川の合流点近くで氾濫源に近いこともあり、また出土する遺物が本来の位置を保っていたものかという意見もあり遺跡の存在は明らかにはなっていなかった。しかし、近年の本調査地から木葉川を挟んだ対岸（南側）において、木葉川河川改修工事により「群前遺跡[3]」の調査が行われ、中世の掘立柱建物を始めとする多数の遺構が検出され、当該地域の見直しが迫られることとなった。

西屋敷遺跡は、玉名市大坊字西屋敷に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地「西屋敷遺跡」西側に広がる低丘陵性台地の尾根上に所在する。周知の埋蔵文化財包蔵地として知られる「西屋敷遺跡」は本来、調査を実施した調査区の東側に位置し、現在、小集落の営まれる範囲内に留まる。そのため、開発に伴う調査歴は少なく、遺跡の性格等、詳細が分からない遺跡である。しかし、数少ない出土遺物等から中世以降に開発が行われ、現在の地割から方形区画を有する居館が置かれた可能性が指摘されている。今回、調査を実施した範囲は九州新幹線建設工事に先立ち、予備調査（踏査）を実施した結果、玉名平野に向かって南面し開けた小規模な谷上に円形の高まりが見られたこと、近接する位置に前方後円墳が営まれることなどから、古墳の存在する可能性があると判断したため要調査と判断した。

瀬萩遺跡は太郎丸遺跡の東約１kmに位置する。遺跡は現在、一見すると平野上に独立したように見えるが近隣の発掘調査、地形等の観察の結果、南に位置する低丘陵性台地から伸びる尾根先端部に位置していると判断された。確認調査の結果、古墳時代の遺物を含む土器がまとまって出土したことから、範囲を絞り調査地として設定した。

---

1 玉名市教委の西田道世氏のご教示による。

2 熊本県教育委員会「祭田下遺跡」熊本県文化財調査報告第247集 2008、「第５章 安楽寺領玉名荘についての文献等調査成果報告」大山智美・青木勝士

3 熊本県教育委員会「群前遺跡」熊本県文化財調査報告第219集 2004

以上３遺跡について、工事に伴い設計変更等も不可能であったことから、記録・保存のための調査が必要と判断し、工事に先立ち発掘調査を実施した。

2　調査の契機となる九州新幹線について

九州新幹線鹿児島ルートは、国民経済の発展及び国民生活領域の拡大、並びに地域の振興を図る目的で「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設されるもので、福岡市から熊本市、鹿児島県川内市を経由し、鹿児島市に至るまでの総延長約 249km の大動脈である。完成により、移動時間の短縮、県内総生産にもたらす経済波及効果及び地域間交流の拡大等、多くのメリットがもたらされることから、各界から早期の開業が望まれている。

当該ルートは昭和 48 年 11 月 13 日に整備計画の決定及び建設の指示がなされた後、昭和 61 年 8 月 29 日に工事実施認可申請がなされたが、その後の経済情勢や社会情勢の変化に伴い、平成３年８月 22 日に先行して八代 - 西鹿児島間について工事実施計画が認可され、同年９月７日に起工した。その後、平成 10 年３月 12 日に船小屋 - 西鹿児島間の工事実施計画が認可され、同年６月２日に博多 - 船小屋間が起工している。現在、平成 16 年３月 13 日の新八代 - 鹿児島中央間の部分開業を経て、博多 - 新八代間について、平成 23 年春の開業を目指して工事が鋭意進められている。

3　事前照会と予備調査の経緯

熊本県内における九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成９年の日本鉄道建設公団 九州新幹線建設局【現：独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 九州新幹線建設局（以下、「鉄道建設・運輸機構」と言う。）】からの芦北郡津奈木町地内における文化財及び埋蔵文化財の予備調査依頼を契機として、熊本県内における新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が始まった。

今回報告する玉名市内における埋蔵文化財への取り組みは、熊本県南域の調査がほぼ終了し、調査の対象が県央、県北へと移ってきた平成 15 年度からである。同年、鉄道建設・運輸機構から玉名郡玉東町稲佐から玉名市津留までの予備調査依頼を始めとし、玉名市から福岡県との県境までの予備調査を実施した。その結果、玉名郡市における新幹線本線工事に伴い発掘調査が必要と判断した遺跡数を９ヵ所（Tab.1）に絞り込み、埋蔵文化財を保護するための設計変更等に関し鉄道建設・運輸機構と協議を実施した。一部橋脚間の距離を延長するなどの協力は得られたが、ほぼ設計変更は不可能という結論に至ったため、記録・保存による対応をとることで合意し、発掘調査のための協議を開始した。

玉名郡玉東町稲佐から玉名市津留間に関しては、平成 15 年８月８日付けで予備調査依頼が教育長あてに提出され、平成 16 年１月 26 日から３月 13 日にかけて同区間における予備調査を実施した。合計 45 ヵ所の試掘坑（以下「トレンチ」と言う。）を設定した。その結果、当該区間で「稲佐津留遺跡」「瀬萩遺跡」「祭田下遺跡」「太郎丸遺跡」を確認し、平成 16 年３月３日付けで鉄道建設・運輸機構あてに回答した。

この結果を受け、同年「祭田下遺跡」の調査を実施し、その後「太郎丸遺跡」「西屋敷遺跡」「瀬萩遺跡」の調査に着手した。

4　玉名郡市における新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査について

玉名市域における同事業での埋蔵文化財の取り組みは、先にあげた玉名郡玉東町～玉名市津留地区における祭田下遺跡調査を始めとし、平成 17 年度の稲佐津留遺跡、太郎丸遺跡、西屋敷遺跡、瀬萩遺跡調査でピークを迎え、平成 19 年度実施した玉名平野条里跡（古閑前地区）の発掘調査をもって終了した。

調査は、玉名平野を横断し沖積地上をはじめ一部洪積台地にまで及び、調査面積は、35,665.5㎡にのぼった。本地域における埋蔵文化財の密度の高さを改めて知ることとなった。

No.	遺跡名	所在地	博多駅からの新幹線距離程	調査面積	調査期間	調査員名	遺跡の年代	主な遺構・遺物
1	長山前田遺跡	玉名郡南関町大字永山字前田 2627-2	66km700m ～ 66km900	600m²	H16.4.27 H18.5.21	坂口圭太郎 松森由美 坂本亜矢子 横田光智	弥生・中世	掘立柱建物、柵列、道路、溝、土坑
2	稲佐津留遺跡	玉名郡玉東町稲佐字津留 91-1 ほか 14 筆	80km383 ～ 80km598m	1,860.54m²	H16.5.27 H17.12.28	尾形圭子 今村和徳 横田光智	弥生・古墳 古代	掘立柱建物、土坑、溝、竪穴住居跡、柱穴群 巴型銅器、山陰型甑等
3	祭田下遺跡	玉名市津留字祭田下 223-2 ほか 9 筆	78km227m ～ 78km400m	5,762m²	H16.6.1 H16.10.27	長谷部善一 吉田徹也 早田利宏 園田恭子	古墳・中世 近世	溝、杭列、土坑 13C ～ 14C 代 青・白磁、中世須恵器、瓦器椀等
4	小薗遺跡	玉名市石貫字小薗 345-2 ほか 9 筆	74km220m ～ 74km300m	2,406m²	H16.6.14 H16.10.31	坂口圭太郎 松森由美 坂本亜矢子 遠山　宏	弥生・中世 近世	掘立柱建物、竪穴住居跡 土坑・溝 弥生後期・土師期・須恵等
5	太郎丸遺跡	玉名市大字津留字高畑 457-2 ほか 9 筆	77km840m ～ 78km230m	14,148m²	H16.11.1 H17.10.31	長谷部善一 吉田徹也 早田利宏 園田恭子 水上　悌	古代・中世 近世	土坑・土坑墓・溝・掘立柱建物、道路状遺構 土師・中世須恵器・龍泉窯系青磁、瓦器椀、白磁
6	西屋敷遺跡	玉名市大坊字西屋敷 2660-3 ほか 4 筆	75km230m ～ 75km500m	325.41m²	H17.4.9 H17.5.13	長谷部善一 吉田徹也 早田利宏 園田恭子	中世・近世	五輪塔、近世墓
7	瀬萩遺跡	玉名市津留字川面 103-3 ほか 3 筆	78km860m ～ 78km985m	2,395.35m²	H17.4.19 H17.9.30	吉田徹也 早田利宏	古墳・古代 中世	竪穴住居跡、溝、焼成土坑 土師、須恵、青・白磁等
8	両迫間日渡遺跡	玉名市両迫間 316-3 ほか 18 筆	76km277m ～ 76km420m	742.92m²	H18.8.23 H18.10.10	坂口圭太郎 亀田　学	弥生・古墳	水田畦畔
9	玉名平野条里跡（古閑前地区）	玉名市両迫間字古閑前 158-2 ほか 9 筆	76km721m ～ 76km873m	2,537.85m²	H19.6.1 H20.1.31	長谷部善一 吉田徹也 手柴智晴 坂本亜矢子 園田恭子 吉井英二	弥生後期 古墳初頭・後期 古代・中世 近世	弥生後期（竪穴住居跡・溝状遺構） 古墳時代（竪穴住居跡・製鉄関連遺構・井戸・溝状遺構・土坑） 古代（掘立柱建物・溝状遺構） 近世（粘土採掘坑） 弥生後期、土師・須恵器、天草式製塩土器等

Tab.1 九州新幹線八代・博多間建設工事に伴う玉名郡市地区埋蔵文化財発掘調査一覧

5 調査組織

今回報告する調査は、熊本県教育庁文化課で実施したものである。以下、各々の発掘調査責任者と調査担当者を掲げ、調査協力者を一括して列記する。（*は調査非常勤職員、**は整理非常勤職員）

予備調査【２００４年（平成１６年）】

文化課長　成瀬烈大
教育審議員（課長補佐）　島津義昭
主幹（文化財調査第１係長）　高木正文
調査担当　主任学芸員　長谷部善一　宇田員将*

発掘調査【２００４年（平成１６年）】

文化課長　島津義昭
課長補佐　倉岡　博
課長補佐（文化財調査第１係担当）　高木正文
調査担当　主任学芸員　長谷部善一
　　主任主事　吉田徹也
　　調査員　早田利宏*　園田恭子*

発掘調査【２００５年（平成１７年）】

文化課長　梶野英二
課長補佐　倉田　博
課長補佐（文化財調査第１係担当）　高木正文
調査担当　主任学芸員　長谷部善一
　　主任主事　吉田徹也
　　調査員　早田利宏*　園田恭子*

整理報告【２００９年（平成２１年)】

文化課長	米岡正治
教育審議員	宗村士郎
課長補佐	木崎康弘
文化財調査第１係長	村崎孝宏
参　事(文化財資料室長)	坂田和弘
整理担当　参事	長谷部善一
	稲葉貴子※※　唐木ひとみ※※　坂本千恵※※

調査助言・指導及び調査協力者

独立行政法人 国立文化財研究所 奈良文化財研究所、玉名市教育委員会、菊水町教育委員会（現和水町教育委員会)、 大牟田市教育委員会、高田町教育委員会（現みやま市教育委員会)、熊本県立装飾古墳館

牛嶋　茂　杉本和樹　西田道世　竹田宏司　兵谷有利　末永 崇　田中康雄　螢父雅史　荒木隆宏
宮本利那　古閑敬士　大倉千寿　益田浩二　鳥津亮二　西山由美子　坂井義哉　猿渡真弓　髙田英樹
青木勝士　原田範昭　坂田和弘　坂口圭太郎　馬場正弘　尾方圭子　松森由美　池田朋生　上髙原 聡
猿渡式子　横田 愛　毛利恒彦　手柴智晴　米村 大　北原美和子　内田成香　本田麻紀

調査（整理）に伴う業務委託先

４級基準点測量及びメッシュ杭設置業務	株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 熊本支店
	株式会社 九州文化財研究所
空中写真撮影業務	株式会社 写測エンジニアリング
遺構実測・デジタルトレース業務	株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 熊本支店
自然科学分析（瀬萩遺跡)	パリノ・サーヴェイ株式会社

6　報告書の作成

報告書の作成は、熊本県文化財資料室（熊本市黒髪3-15-15 その19（下益城郡嘉島町大字上仁1677））にておこない、発掘調査終了後の 2006 年（平成 18 年）に１次（水洗・注記・接合)・２次整理（実測)、2009 年（平成 21 年）に遺構図版、原稿等の作成を行った。

発掘調査及び遺構関係の整理は、発掘調査を担当した文化財調査第１係が担当し、遺物の整理は文化財資料室が実施した。また、鉄製品は同資料室 保存処理室にておこなった。

報告書の作成に際しては整理担当職員が執筆、編集した。

本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第１章　序　言

1　調査の経緯　吉田徹也　　2　調査組織　吉田

3　報告書の作成　長谷部

第２章　調　査

1　調査地域

A　遺跡の位置　①太郎丸遺跡　②西屋敷遺跡　③瀬萩遺跡

B　地理的環境　　C　測量

D　その他

2　調査日誌抄

A　太郎丸遺跡　　B　西屋敷遺跡

C　瀬萩遺跡

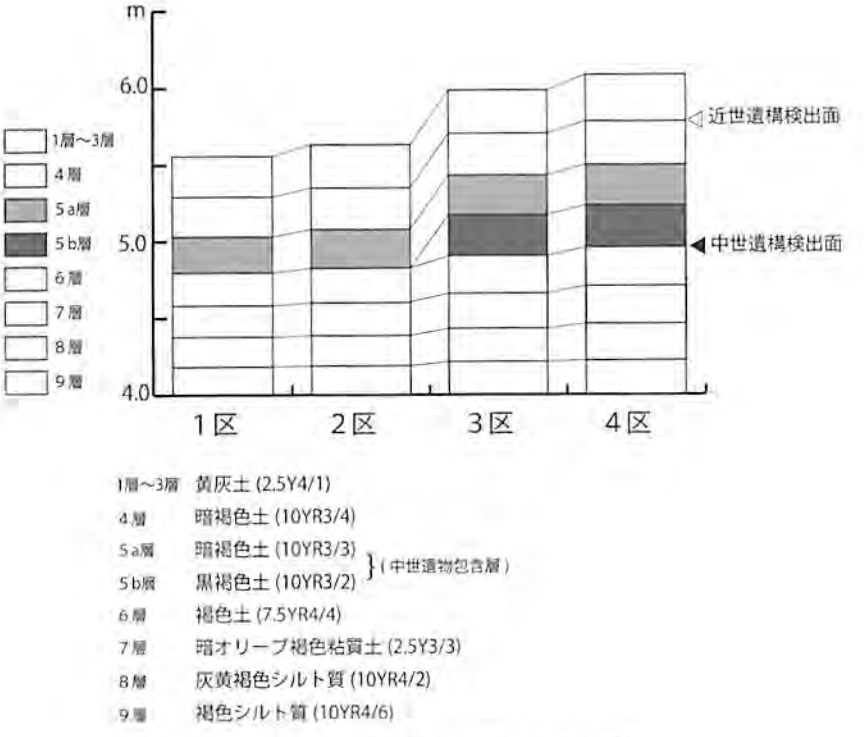
第3章　遺　構
1　太郎丸遺跡　長谷部
遺構各説
①1区　②2区
③3区　④4区
2　西屋敷遺跡　長谷部
遺構各説
1区（五輪塔の所在する高まり周辺の調査）　2区（近世墓の石塔調査）
3　瀬萩遺跡　吉田・早田利宏・長谷部
遺構各説

凡　例

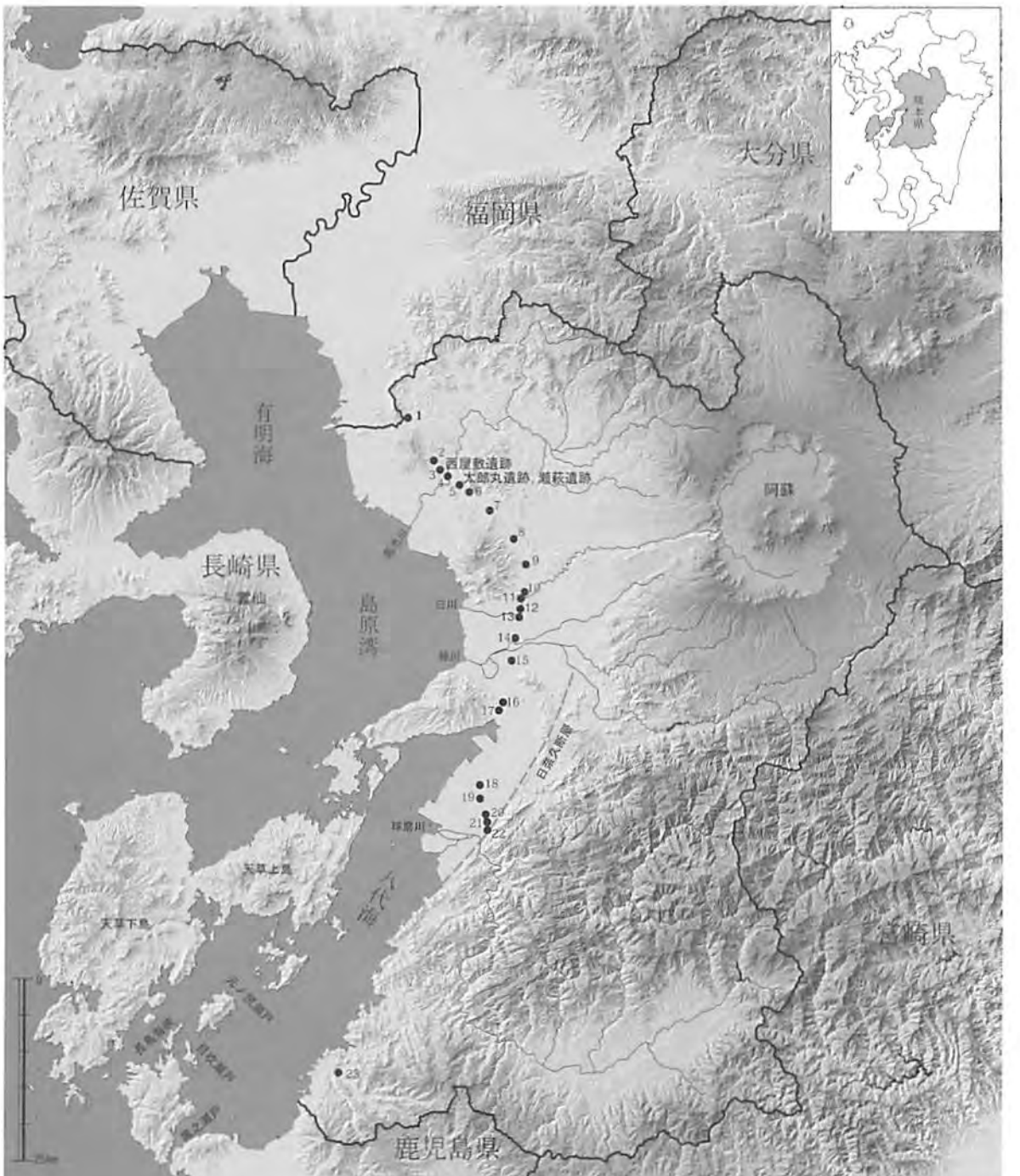
1　本書の執筆及び整理担当者は以下のとおりである。

整理担当職員　熊本県教育庁文化課文化財調査第1係　参　事　長谷部善一
〃　非常勤職員　坂本千恵　（2006年度）
〃　〃　稲葉貴子　（2009年度）
〃　〃　唐木ひとみ（2009年度）

2　遺構の写真撮影は、長谷部が担当し、吉田・早田・園田が補助した。
3　図面・図版・挿図・表の作成は稲葉が行い、土田みどりの協力を得た。
4　本書中での人名は、すべて敬称を省略させていただいた。
7　注釈は、頁ごとに下段にまとめ表記した。
8　本書の編集は、参事 坂田和弘の指導のもとに、長谷部がおこなった。



Tab.2　太郎丸遺跡土層推移模式図



No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	長山前田遺跡	11	二本木遺跡群（春日，田崎地区）	21	西片園田遺跡
2	小園遺跡	12	八島町遺跡		西片稲村遺跡
3	西屋敷遺跡		熊本平野条里跡		中片小路遺跡
4	両迫間日渡遺跡	13	上ノ郷遺跡	22	宮地年神遺跡
5	玉名平野条里跡（古閑前地区）	14	川尻下城遺跡		キリシタン寺院跡
	太郎丸遺跡	15	下江中島遺跡		宮地池尻遺跡
	梨田下遺跡	16	小曽部西園遺跡		宮地小畑遺跡
	瀬萩遺跡		南請遺跡		宮地飯行寺遺跡
6	稲佐津留遺跡	17	高良柳迫遺跡		古麓城下遺跡
7	西安寺遺跡	18	四百町開		古麓能寺遺跡
8	万楽寺出口遺跡	19	高田手永堤防		古麓城跡
9	北島遺跡・北島北遺跡	20	島田遺跡	23	長野遺跡
10	新馬倉遺跡		上日置女夫木遺跡		
	花岡山・万日山遺跡		西片百田遺跡		

Fig.1　熊本県域における地形表記と九州新幹線により発掘調査を実施した遺跡

第2章　調　査

1　調査地域

A　遺跡の位置及び歴史的背景

太郎丸遺跡・瀬萩遺跡は、熊本県北部の主要都市である玉名市の東部、玉名平野南の木葉川沿いに位置し、平野中央を貫流する菊池川の左岸にあたる。8世紀初頭成立とされる玉名郡衙・郡倉・郡家等が隣接して立地し7世紀末に創建され、七堂伽藍が造営された「立願寺」（立願寺地区）からは東へ約4ｋｍの距離で、当時の海岸線推定ラインから直線で3kmの場所に位置する。(Fig.1)

玉名郡衙[1]は立願寺地区の丘陵性低台地上に施設が分散し建設され、現在までに発掘調査等で庁院・館院・倉院（玉名郡倉）の存在が窺われる遺構・遺物が出土している。また、立願寺廃寺は県内に3例報告されている白鳳期寺院の一つで、肥後国ではもっとも北部に位置する古代寺院である。寺院は立願寺Ⅱ期に法起寺式伽藍が建立されたとされ、太宰府系の瓦を出土する遺跡として知られている。

立願寺地区は、現在の玉名地域において中心を成す役所等が置かれた歴史的背景から、「比企長者伝説」が発生し、政治・交通の要衝としての役割をになっていたことが窺える。

玉名平野を地形的に概観すると、菊池川を挟み右岸・左岸地域の平野部に分けることができる。

古代には、右岸・左岸共に条里が設置されており、左岸域には現在でも「唐ノ坪」・「十五」など条理地名を見出すことができる。中世には右岸に玉名東郷（仁和寺領玉名荘）、左岸は安楽寺領玉名荘の支配下にあり、それぞれ支配形態並びに信仰等の違いが文献調査等で見られている[2]。

このような歴史的背景が形作られたのには、中世菊池氏によるところが大きい。菊池氏における肥後北部の支配において、河口に位置する「高瀬」は天然の良港として発展し、菊池川を中心とする河川交通の要衝でもあった。高瀬（現在の玉名市高瀬本町付近）は今でも近世以降と考えられる町家の「地割」や、湊に付属する「俵転がし」が残るなど、人の交流や物流の集積地として栄えた跡を留めている。

それらの一部は発掘調査において肥前系の大量に出土する磁器や陶器を始め、広域交易圏を予想させる「Verenigde Oost-Indische Compagnie（オランダ連合東インド会社）」（以下、「VOC」と言う）、VOC銘芙蓉手文皿の出土等から窺えよう。

菊池川は有明海の干満の差を利用した水運があったことの一端を近世に描かれた絵図で知ることができる。現在でも、和水町（旧菊水町）の白石堰までは満潮時に海水の浸入が見られ、干満の差を利用した遡上が窺われる。白石堰から上流に約500m遡った、江田川と菊池川の合流には縄文後期の「若園貝塚（玉名郡和水町（旧菊水町）江田若園所在、並木式、貝高式、鼻ヶ島、北久根山式等）」があり縄文海進期の菊池川の姿を見ることができよう。

西屋敷遺跡は、前の2つの遺跡と違い玉名平野右岸に位置している遺跡である。玉名平野を望む花崗岩風化層の露出する低丘陵地域の南端に位置し、平野へ落ちる斜面上に所在する。本遺跡の北東側約200mには大坊古墳（国指定史跡全長約75m横穴式石室石屋形に連続三角文、円文を含む装飾文様あり）や同じく北東方向の約1kmの場所には永安寺東（円墳、複室横穴式石室の装飾古墳、線刻による連続三角文、円文、彩色、鞆、馬）・西古墳（円墳、単室横穴式石室、三段に渦巻円文15個を描く）がある。丘陵の上部は露出する花崗岩砂層であるため、古くから土砂取りが行われ旧地形を失っている。西屋敷遺跡本体は、当該地よりやや低い範囲に広がる中世の館跡であると考えられる。現在は、住宅が密集しており、現地では遺跡の全容を測り知ることはできない。

B　地理的環境

2009年（平成21年）熊本県教育委員会発行の熊本県文化財調査報告第247集『祭田下遺跡』「第二章調査、1　調査地域、B　地理的環境」（馬場正弘）を参照されたい。

1　玉名市歴史資料集成第十二集 - 市制四〇周年記念 -「玉名郡衙」玉名市　平成六年

2　熊本県教育委員会「祭田下遺跡」熊本県文化財調査報告第２４７集「安楽寺領玉名荘についての文献等調査成果報告」大山智美・青木勝士　参照

C 測 量

太郎丸遺跡・西屋敷遺跡・瀬萩遺跡の発掘調査を開始するにあたっては、事前に基準点測量と水準測量を実施した。基準点は本調査の契機となった九州新幹線建設工事に伴い、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備機構鉄道建設本部 九州新幹線建設局が設置した国土座標系Ⅱ系に基づく日本測地系により設置している。

2002 年（平成 14 年） 4 月 1 日からの改正測量法の施行に伴い、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、本事業における基準点が日本測地系となっていることから、熊本県内における埋蔵文化財調査で設置する基準点はすべて日本測地系に基づいて設置している。なお、世界測地との整合をとるために遺跡調査区内の杭の数値を日本測地、世界測地でそれぞれ示す。

項目 / 点名	日本測地系		世界測地系	
	X 座標	Y 座標	X 座標	Y 座標
太郎丸 (1 区) No.1	-7780	-38135	-740.4426	-38355.8790
太郎丸 (2 区) No.2	-7720	-38225	-7347.4396	-38445.8757
太郎丸 (3 区) No.3	-7680	-38285	-7307.4378	-38505.8733
太郎丸 (4 区) No.4	-7610	-38395	-7237.4343	-38615.8699
西屋敷 (1 区) No.1	-6064	-40157	-5691.378	-40377.9411
西屋敷 (2 区) No.2	-6035	-40165	-5662.378	-40385.9430
瀬萩 No.1	-8210	-37480	-7837.4631	-37700.9097
瀬萩 No.2	-8160	-37560	-7787.4609	-37780.9056

Tab.3 太郎丸遺跡・西屋敷遺跡・瀬萩遺跡の基準点成果

D その他

発掘遺構は遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記した。

SA（塀、柵列） SB（建物） SC（回廊） SD（溝） SE（井戸） SF（道路） SG（池） SI(竪穴住居跡)
SK（土坑） SP(柱穴) SS（足場） ST（墓） SX（その他、不明遺構等）
※本書で使用していない記号も含んでいる。

遺物観察表に記している色調については「新版標準土色帖」(1999)、DIC カラーガイド「中国の伝統色（第 2 版)、標準色カード 230 ©日本色研 1988」を使用した。

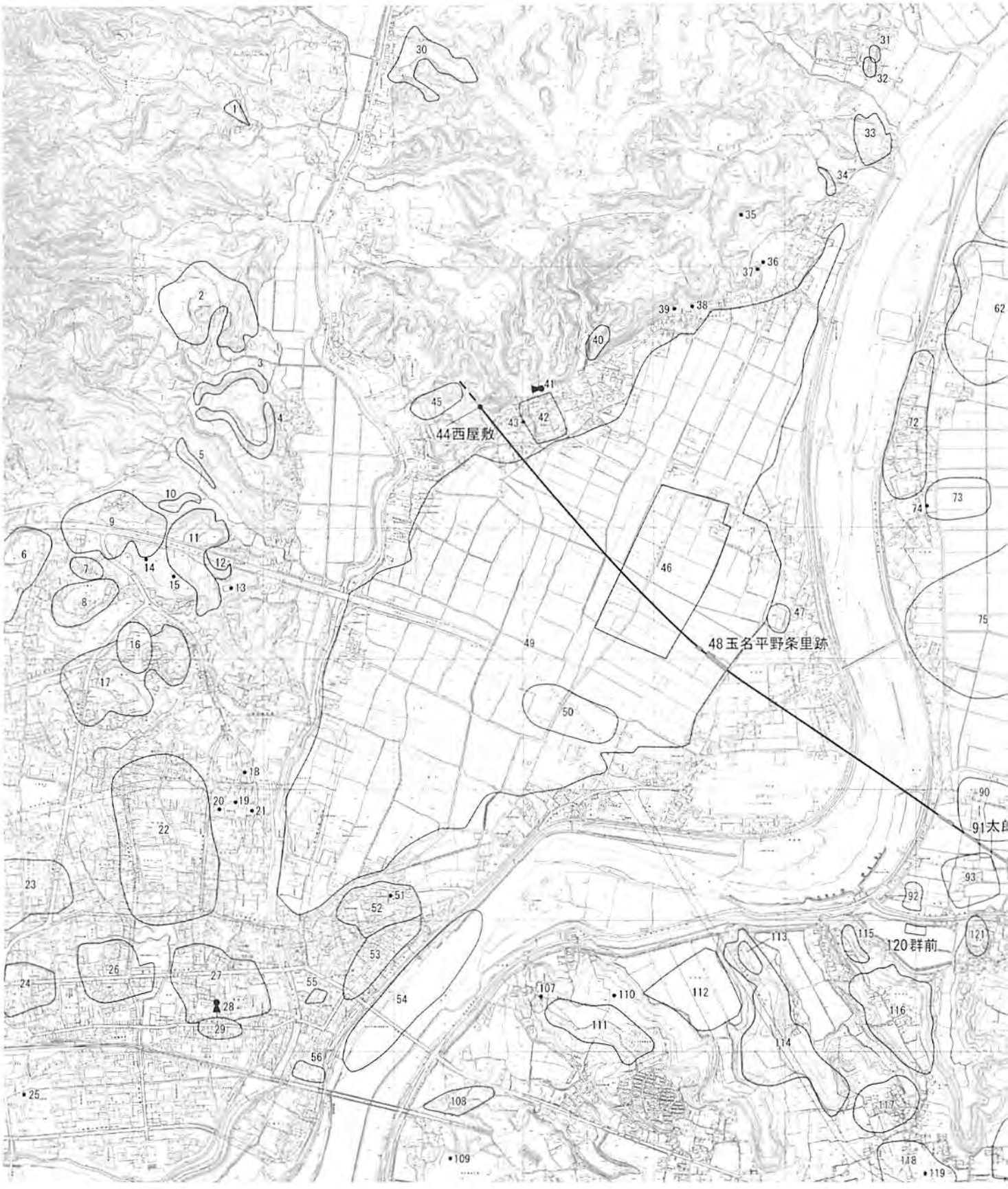


Fig.2 玉名平野遺跡地図

遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
1	上梁山遺跡	弥生後期・古墳
2	岩原	古墳
3	富尾浦谷横穴群	古墳
4	富尾原横穴群 A	古墳
5	富尾中尾横穴群	古墳
6	玉名郡家跡	古代
7	松尾原	弥生
8	立願寺跡	古代
9	松尾	古墳
10	富尾板碑横穴群	古墳
11	大塚・惣萩	弥生・古墳
12	冷水横穴群	古墳
13	冷水塚古墳	古墳
14	大塚古墳	古墳
15	小塚古墳	古墳
16	玉名郡倉跡	古代
17	下立願寺	縄文～中世
18	池田地下式横穴群	古墳
19	岩崎古墳	古墳
20	岩崎城跡	中世
21	岩崎古墳参考地	古墳
22	岩崎原	弥生～中世
23	玉名高校校庭	弥生・古墳
24	南田	弥生
25	だいの島古墳	古墳
26	玉名亀甲	縄文～中世
27	繁根木遺跡群	弥生
28	稲荷山古墳	古墳
29	繁根木貝塚	縄文
30	石貫薬師	弥生・古墳
31	青木横穴	古墳
32	青木磨崖梵字群	古代・中世
33	玉名の平城跡	中世
34	元玉名横穴群	古墳
35	絵下経塚古墳	古墳
36	小路古墳	古墳
37	馬出古墳	古墳
38	永安寺東古墳	古墳
39	永安寺西古墳	古墳
40	岡箱式石棺群	弥生
41	大坊古墳	古墳
42	名称不明	
43	大坊五輪塔群	中世
44	**西屋敷遺跡**	**中世・近世**
45	名称不明	
46	高道間目遺跡	弥生・古墳
47	名称不明	
48	玉名平野条里跡	古代・中世
49	〃	古代・中世
50	柳町遺跡	縄文～平安
51	保田木貝塚	縄文
52	保田木城跡 高瀬町奉行所跡	中世～近世
53	高瀬本町通	縄文～近世
54	高瀬菊池川河床	古代・中世
55	宝成就寺跡 古塔碑群 石仏群	中世
56	大倉山永徳寺跡	中世
57	南大門 地下式横穴	古墳
58	小路	近世
59	上小田宮の前	弥生
60	上小田下丸塚	古代
61	上小田城跡	中世
62	上小田古屋敷	縄文～中世
63	名称不明	
64	下小田護寺丸塚	中世
65	養音寺跡	中世
66	玉名平野条里跡	古代・中世
67	名称不明	
68	名称不明	
69	長建寺跡	中世
70	諏訪宮跡	中世
71	名称不明	
72	名称不明	
73	名称不明	
74	金光寺跡	中世

遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
75	名称不明	
76	名称不明	
77	下村城跡	中世
78	高城	古墳
79	山下古墳	古墳（消滅）
80	名称不明	
81	秋丸	弥生
82	海福寺跡	中世
83	名称不明	
84	名称不明	
85	大宝院跡	中世
86	名称不明	
87	名称不明	
88	賢長寺跡	中世
89	名称不明	
90	安楽寺	中世
91	**太郎丸遺跡**	**中世**
92	津留中林	縄文～中世
93	名称不明	
94	祭田下遺跡	古墳・中世
95	名称不明	
96	玉名平野条里跡	古代・中世
97	**瀬萩遺跡**	**弥生・古墳**
98	名称不明	
99	名称不明	
100	随岸寺跡	中世
101	浦方染山横穴群	古墳
102	安楽寺京塚	中世
103	養田横穴群	古墳
104	長福寺跡	中世
105	随月古墳	古墳
106	中神久	古代・中世
107	松林寺山古墳	古墳
108	桃田貝塚	縄文
109	桃田古墳	古墳
110	飯塚古墳	古墳
111	亀頭迫	弥生～中世
112	玉名平野条理跡	古代・中世
113	城ヶ辻古墳群	古墳
114	名称不明	
115	寺田古墳群	古墳
116	名称不明	
117	吉丸	古代・中世
118	吉丸西	縄文～中世
119	ナカント塚古墳	古墳
120	群前	中世
121	花群山吉兆寺跡	中世
122	上津留	縄文～中世
123	上津留古墳	古墳
124	郡田	弥生～中世
125	世間部塚古墳	古墳
126	寺田久保	縄文～中世
127	久保地下式横穴	古墳
128	朝日寺跡	中世
129	徳丸古墳群	古墳（消滅）

※本遺跡地図は、熊本県遺跡地図及び玉名市遺跡地図をもとに本報告書用に再編集したものである。
よって、本表における遺跡番号は遺跡地図に示める遺跡番号とは一致しない。

Tab.4 遺跡地名表

2　調査日誌抄

A　太郎丸遺跡　２００４年（平成１６年）

10.21　表土剥ぎ作業協議。

10.22　表土剥ぎ開始。

10.25　表土剥ぎを行うも、降雨のため午後は中止。

10.26　終日降雨のため、表土剥ぎは中止。

10.27　土層確認と水抜きに供するため調査区南側添いに深掘り箇所を設定し掘削する。掘削途中に溝SD001（三軒溝、近現代）を検出。

10.28　表土剥ぎを継続。調査区内での浸水が激しいため排水作業を行いながらの表土剥ぎ。

10.29　調査区の西側へ行くに従い、表土（耕作土）が薄くなる。包含層の一部を掘削しすぎか。

11.1　表土剥ぎ終了。調査区東側から作業員を入れ清掃等及び、深掘り部の土層断面を清掃し土層確認を開始。

11.2　土層の確認及び実測及び、SD001から東側で移行検出作業を開始。

11.4　SD001の東側において溝状の遺構を検出。平面形が今のところ不定形。幾筋かの溝が切り合っている模様。

11.5　午前中のみ、昨日に引き続き調査を行う。午後は県庁にて全員研修参加。

11.8　SD001東側の灰色粘質土掘り下げ及び調査区南壁土層断面実測。新幹線玉名建設所と新玉名駅（以下、「玉名st」と言う）周辺の予備調査について協議を実施。

11.9　SD001東側で溝状の遺構の存在を確認。

11.10　調査区西側の清掃を実施。磨滅の激しい土器片が多数出土。

11.11　朝から天候不順と判断し作業は中止。調査事務所で備品類、消耗品等の点検整理。

11.12　調査区西側清掃。相変わらず出土遺物が多い。南壁の土層断面実測、ひと通り終了。

11.15　Bm-57区で焼土の混じる遺構を検出（表土直下から）。玉名Stの予備調査を実施。№1～№5まで掘削。

11.16　調査区西側（Bk-55、Bl-58Grid）付近及び調査区東側の掘削を開始。ローリングを受けた土器小片が多数出土。溝SD003・SD004の検出、写真撮影。玉名stの予備調査終了。

11.17　溝SD003・SD004の完掘。写真撮影実施。実測作業を開始。

11.18　調査区西側の掘削を行うも降雨のため午後から作業を中止。

11.19　Bm-58周辺の5層（中世遺物包含層）掘り下げ。調査区南壁土層注記を実施。

11.22　Bm-59周辺を東に向かい5層の掘り下げ。Bo-59～Bo-63にかけて表土直下から掘り込まれた溝状遺構を確認（溝SD002）。検出写真撮影後、掘削し完掘。掘削が先行していたBt-71付近7層上面で検出していた溝SD003・SD004の掘削、完掘。

11.24　Bl-56周辺、5層の掘削。溝SD002の実測。Bt-71溝SD003・SD004調査。

11.25　Bl-56周辺から西側への掘削。溝SD002の実測。本日は隣接する梅林天満宮の秋大祭。馬場で流鏑馬が行われる。

11.26　溝SD002実測図チェック。午後からは降雨のため作業中止。

11.29　Bj-54周辺の掘削。Bt-71において溝SD004にトレンチを入れ下層に広がりがないか確認。

11.30　Bk-54・55周辺掘削。溝SD002完掘写真撮影。新幹線玉名建設所より大坊トンネル坑口付近の文化財確認の依頼あり。

12.1　Bm-56・57・58周辺の掘削。5層も下層にいくと中世の遺物のみの出土となってくる。玉名工業高校生徒3名調査見学。

12.2　Bm.n.o-61から西側の5層掘削。Bm-58.59でローリングを受けていない土師器片、青磁片が多数出土し始める。

12.3　昨日と同様のGridの掘り下げを実施。午後からは調査係会議出席のため調査は終了。

12.6　Bm-59周辺の5層掘削を継続。6層上面で面を揃える事とする。大坊トンネル坑口予備調査協議。

12.7　63Grid列から西側の5層掘削がほぼ終了。一部Gridにおいて6層中まで掘り下げ過ぎが判明。

12.8　溝SD002以西の掘り下げを実施。

12.9　昨日同様の作業を実施。Bp-61で試掘時のトレンチ坑を確認したため明日以降掘り上げる予定。

12.10　63列より西は6層上面までの掘り下げ終了。

12.13　66列までの5層掘削を実施。63列までの状況と合わせて以降検出を行う予定。遺構実測委託業務の入札。

12.14　66列までの5層掘削を実施。出土遺物は滑石製石鍋、中世須恵器（擂鉢．鉢）、青磁椀片（同安窯系）など食器類が出土。

12.15　66列までの5層掘削を継続。

12.16　昨日同様の作業を継続。遺物整理中に12.1に出土していた遺物の中から「熙寧元宝」（宋の神宗の元号（1068）に鋳造）がBk-66Gridから出土していたのを確認。54列より以西、2区との間について残っていた範囲の表土剥ぎを実施。

12.17　溝SD001（三軒溝）より西5層の掘り下げ終了。文化財調査第2係馬場文化財保護主事により土層の観察をして頂く。（結果は別頁に掲載）

12.20　溝SD001（三軒溝）以西、6層上面での遺構検出を行うが遺構が見られなかったので6層の掘り下げに入る。6層中の出土遺物は5層の出土遺物よりも形状が大きくなる。表土剥ぎを実施した範囲のメッシュ杭設置。

12.21　調査区全体について6層の掘り下げを継続。

12.22　昨日に引き続き6層の掘り下げを継続。午後からは調査区全体の清掃、調査面保護のシート張り、道具類の手入れ等をおこない、本年の発掘調査作業を終了。

12.24　事務所にて資料等整理。

12.27　八代市の資料室敷地内に保管している古麓城跡出土「五輪塔」清掃、整理を実施。

12.28　午前中、調査事務所で資料等整理業務。午後から県庁で仕事納め。

【2005年（平成17年）】

1.4　午前中、県庁にて仕事始め。午後から調査事務所で図面等整理。

1.5　終日、調査事務所にて資料等整理。

1.6　午前中は降雨のため作業中止。午後から調査を開始。溝SD002周辺で7層に似た土が検出されたため慎重に調査を進める。土地の起伏の範疇か。

1.7　溝SD001横で6層中から須恵器片出土。古代の須恵器か。

1.11　7層上面での以降検出に向けて6層の残りを掘り下げる。7層上面に近づくにつれ極端に遺物が少なくなる。Bq-64Gridにて土坑SK001を検出。トレンチにて切られ半裁状態で検出。

1.12　全体には6層の掘り下げを実施。昨日検出した土坑SK001の西側で長径約30cmの柱穴SP001を検出。

1.13　Bo-61Gridにて7層上面で土坑SK002を検出。本遺構もトレンチにより半裁状態で検出。検出写真撮影後、土層を残し掘り下げる。

1.14　Bl-56からBn-58Gridまで掘り下げを実施。中世の遺物と古代の遺物が混在して出土。大坊トンネル坑口の予備調査について協議。

1.17　6層の掘り下げを継続。調査区西側の調査予定地の表土剥ぎについて協議を実施。（五洋JV）

1.18　調査区西側の6層掘り下げを実施。7層上面近くで8～9世紀の須恵器片が出土。

1.19　昨日同様掘り下げを継続。

1.20　調査区全体の6層掘り下げを実施。

1.21　調査区全体の6層掘り下げを実施。

1.24　Bk-56Gridにて柱穴SP002を検出。Bk-54Gridでも遺構らしきラインを検出するも確定できず。午後4時頃から降雨のため作業中止。

1.26　6層の掘り下げ終了。大坊トンネル坑口周辺の予備調査を実施。

1.27　溝SD001（三軒溝）周辺の6層掘り残しを掘削。遺物は小さく少ない。大坊トンネル予備調査を実施。

1.25　7層上面での以降検出を行うも降雨のためできず。大坊トンネル予備調査では重機を搬入し崖面の掘削を実施。

1.28　6層の残りを掘り下げ。

1.31　溝SD003·SD004の一部の掘り残しがあるのが判明。溝SD001東側、72～74列の掘り下げ。

2.1　朝から作業を開始するも雪が降り始め、吹雪となるために作業を中止する。よって、事務所で遺物整理。

2.2　終日降雨のため、作業は中止する。

2.3　溝SD001より東側の掘り下げと清掃、トレンチ内の泥上げを行う。併せて今年度追加調査区（2区）の表土剥ぎを開始する。

2.4　1区中世面までの完掘写真撮影のため全面清掃。土坑SK001、柱穴SP001検出、検出状況撮影、半裁、完掘まで終了。

2.7　1区中世面完掘撮影（高所作業車使用）を計画していたが降雨のため中止。同じく2区表土剥ぎも中止。雨が止んだ後、水揚げベルトコンベアの移動、調査区周辺の清掃等を行う。

2.8　1区中世面完掘撮影のための清掃。2区調査区表土剥ぎ終了。Bv-68Gridにて土坑SK002を検出。検出、半裁、完掘状況撮影。

2.9　1区清掃。残存遺構の有無の確認。土層分層作業。

2.10　1区中世面、高所作業車による完掘写真撮影。

終了後、遺構実測（委託）。２区清掃開始。

2.14　２区清掃、掘り下げ。

2.15　表土剥ぎの残土除去を実施。遺物包含層を確認ののち、４級基準点測量及びメッシュ杭設置（委託）。１区遺構実測、完掘撮影終了。本日をもって１区調査を終了。

2.16　２区トレンチ内の土層断面（南壁）実測。

2.17　表土剥ぎ後、５層上面における遺構検出では遺構は確認されず。よって 44 ～ 46 列から５層掘り下げ。

2.18　昨日に引き続き５層掘り下げを行うも時折降る雨のため進まず。午後から降雨のため作業中止。

2.21　調査係会議のため作業は休止。

2.22　調査区全体、５層掘り下げ。

2.23　調査区全体の５層掘り下げが終了したため遺構検出を行うが遺構が確認されず。６層の掘り下げに入る。５層からは土師器皿、杯片が多く出土し、わずかに青磁、瓦器が出土する。また、滑石製品も出土している。６層はやや厚みがあるため２回に分けて掘り下げを行う。

2.24　朝から降雨のため事務所にて待機するが、午後からは本降りとなったため作業を中止する。

2.25　６層の掘り下げ。遺構は検出されず。出土遺物は土師器片を主体とし青磁、瓦器片も出土。５層に比べ出土数も減り１つ１つの破片も小さく磨滅している。

2.28　昨日同様６層の掘り下げ。出土遺物も変わらず。

3.1　昨日同様６層掘り下げ実施。

3.2　６層掘り下げを継続。Bf-48Grid にて遺構の可能性のある Grid 周辺の検出を確認。現段階では遺構か否か判断できず。

3.3　天候の回復を待って作業を行うべく事務所に待機するも、雨が降り続き午後からは本降りとなり作業を中止する。

3.4　49 ～ 51 列６層掘り下げ。Bf-48Grid で実施していた遺構検出の結果、形状が一定しないこと、遺物が出土しないことから遺構ではないと判断する。

3.7　調査区全体６層掘り下げを継続。出土遺物は少なく磨滅した土器多し。

3.8　６層掘り下げを行うが、44・45・46 列において７層上面に達する。

3.9　西側 44 列から 48 列まで６層掘り下げ完了。７層上面で遺構検出を実施。遺構は検出されず。出土遺物は小片のみでいずれも磨滅が激しい。

3.10　調査区全体、６層掘り下げ終了。

3.11　午前中降雨のため事務所内で待機する。調査区内の雨水除去を行うが検出面がぬかるんでいるため清掃は行わず。事務所、調査区周辺の草取りを行う。

3.14　２区全体の７層上面での遺構検出を行うも、遺構は検出されず。

3.15　２区調査区 Bc-44 周辺から７層を掘り下げ。

3.16　７層を掘り込み遺構の検出を行うも遺構は確認されない。明日まで継続し調査終了について判断する予定。

3.17　朝から降雨のため祭田下遺跡出土遺物の水洗作業。午後２時過ぎから雨があがったため調査区内の雨水除去作業を行う。

3.18　２区中世面（完掘）写真撮影を実施。今年度の発掘調査を終了する。

3.22　調査区全体の遺構実測作業（委託）。備品等のチェック。

3.24　事務所にて残務整理。

３区調査

4.21　３区の表土剥ぎを開始。

4.22　３区表土剥ぎ、2/3 ほど終了。

4.25　降雨により作業がやや遅れる。

4.26　引き続き表土剥ぎを実施。排水溝を兼ねる南側トレンチの壁面清掃開始。トレンチ内には５ヵ所に青灰色粘土まで掘り下げ。

4.27　３区東側、表土剥ぎ後の清掃。

4.28　３区中央付近の清掃。吉田主任主事は「瀬萩遺跡」の準備。

5.2　連休の中日のため調査は休止。事務所にて祭田下遺跡の図面整理。

5.3　事務所にて遺物整理、祭田下遺跡の図面整理。

5.10　As.At.Au-30Grid ４層掘り下げ。出土遺物は主に磁器片、土師器片、青磁片が出土。

5.11　As.At.Au-30・31 ４層掘り下げ。近世の銅製煙管が出土。

5.12　At ～ Aw-30 ～ 33Grid ４層掘り下げ。

5.13　Av-33・Aw-34 並びに 32 列の清掃。

5.16　34・35 列４層掘り下げ。

5.17　38～40列4層掘り下げ。これまでとは特に変化なし。遺構の検出も見られない。

5.18　終日、降雨のため作業中止。

5.19　40～42列5a層掘り下げ。

5.20　昨日に引き続き、40～42列4層掘り下げ。5a層上面までの掘り下げが終了。遺構検出を試みるも遺構は確認されず。5a層の掘り下げを開始。

5.23　38～41列5a層掘り下げ。4層に比べ遺物の大きさがやや大きくなり磨滅も受けていない。

5.24　37～40列5a層掘り下げ。出土する遺物は土師器片、瓦器椀、青磁片など。

5.25　35～38列5a層掘り下げ。試掘時のトレンチ掘り。

5.26　34～37列5a層掘り下げ及び清掃。

5.27　33～35列5a層掘り下げ。発電機、水中ポンプ搬入。

5.30　32・33列5a層掘り下げ。

5.31　30～32列5a層掘り下げ。本日で5a層掘り下げ終了。

6.1　3区5a層上面全域清掃、遺構検出。この面でも遺構は検出できず。

6.2　降雨のため終日作業中止。

6.3　トレンチ内の清掃及び南側壁面清掃、土層線引き。

6.6　5b層の掘り下げに着手。31、32列掘り下げ。5a層より出土する遺物は破片が大きくなり出土量も増える。出土する器種には変化なし。

6.7　31・32列の5b層掘り下げ。南壁土層分層。二本木遺跡群（春日地区）の予備調査が始まる。

6.8　33・34列5b層掘り下げ継続。南壁土層実測。南側トレンチ内で土坑SK002を検出。7層上面からの掘り込み。

6.9　34列5b層掘り下げ継続。南壁の土層分層の一部手直しあり、終了。

6.10　34～36列5b層掘り下げ。出土する器種構成に変化はない。南側土層注記。

6.13　34～36列5b層掘り下げ。

6.14　35～38列5b層掘り下げ。

6.15　37・38列5b層掘り下げ。

6.16　37・38列5b層掘り下げ。

6.17　37・38列5b層掘り下げ。

6.20　調査区全体の5b層掘り下げ終了。清掃しながら5b層の残りを掘り下げる。

6.21　6層上面での遺構検出を実施。遺物はほとんど出土しなくなり細片が多い。

6.22　30から36列の再清掃、遺構検出後6層掘り下げを実施。

6.23　33～35列6層掘り下げ。

6.24　34～36列6層掘り下げ。6層中から遺構とみられる掘り込みを検出。要検討。

6.27　先週までの6層掘り下げ過程で遺構が見え始めたため掘り下げを止め、6層をわずかに掘り込んだ面で検出作業を開始。

6.28　昨日に引き続き検出を行うも、たびたび降雨による中断で地面がぬかるみ始めたため午後は作業中止。Ba-40で溝状の遺構を検出。

6.29　終日降雨のため作業中止。事務所にて遺物整理を行う。

6.30　終日降雨のため作業中止。

7.1　6層中の遺構検出で土坑SK001・溝SD001・柱穴SP001を確認。検出写真撮影、掘削に入る。また、Az.Ba-39～41で柱穴の並びを検出。掘立柱建物の可能性もあり。

7.4　調査係会議のため調査休止。

7.5　昨日の降雨により調査区水没。午前中に水抜きを行うが、午後降雨のため作業中止。菊水町(現和水町)松坂地区予備調査（午前のみ）実施。

7.6　降雨のため調査は中止。午後から雨があがったため菊水町松坂地区の予備調査は実施。

7.7　40～42列6層掘り下げ。同時に菊水町松坂地区の予備調査も実施。

7.8　40～42列6層掘り下げ。同時に遺構検出も行う。

7.11　週末の大雨のため調査区は水没。終日、水抜き作業。全員で事務所周辺の環境整備。

7.12　降雨により作業中止。

7.13　降雨により作業中止。

7.14　午前中は降雨のため事務所にて待機。午後から作業開始。6層の掘り下げ、清掃、遺構検出を実施。

7.15　Az.Ba-30Gridで6層途中で掘立柱建物SB001を検出。併せて、Ba-40でSK001、Ba-42Gridで柵列SA001を検出。

7.19　3区全域において遺構検出。

7.20　溝SD001・柵列SA001・掘立柱建物SB001完掘（半裁撮影も併せて行う）。

7.21　昨日、掘削した遺構の実測。31～33列、38列6層掘り下げ。

7.22　33・37～39列6層掘り下げ。6層中から出土する遺物はやや破片が大きい。

7.25　6層の遺構検出を終え最終遺構確認面（7層上面）まで掘削を進める。遺物の量は下げるに従い少ない。

7.26　37・38・41列6層掘り下げ。7層上面での遺構が見え始める。Az-37Gridにてトレンチにかかっていた土坑SK002を検出。

7.27　Aw-35・36、Az.Ba-40・41、Bb-41Grid 6層掘り下げ、7層上面を検出。土坑SK002半裁撮影、土層断面実測・注記。

7.28　Ay.Aw-34、Az.Ba-40、Ba.Bb-41、Az.Ba-39に残る6層を掘り下げる。出土遺物は少ない。

7.29　終日降雨のため作業休止。

8.1　朝から水抜きを始めるも、雨が強くなり作業中止。

8.2　朝から水抜き、清掃を実施。33列の6層掘り下げを実施。

8.3　7層上面で遺構検出を実施。調査区東側で遺構を検出するが壁際にトレンチを設置し掘削するも立ち上がり等は確認できなかったため遺構ではないと判断。他にも遺構らしいラインを検出するがいずれも半裁した段階で遺構とは判断できず。土坑SK002完掘（撮影も終了）。

8.4　3区中世面完掘撮影のため、高所作業車を入れる。

【4区】

8.5　調査を開始するにあたりベルトコンベアの設置、土嚢作り、表土剥ぎの残りの除去等を行う。

8.8　調査区南側のトレンチを清掃し土層線引きを行う。トレンチ内からは遺構からの出土とみられる遺物が多数出土する。

8.9　昨日に引き続き、南側トレンチの清掃、線引きを行う。また、調査区内の掘り下げも始める。

8.10　南側トレンチの線引きがほぼ終了したため、実測を開始を開始する。また、調査区東側で層の沈み込みが確認され調査区を横切るように厚く無遺物層が堆積しているのを確認。

8.11　トレンチ内実測及び注記。昨日検出した調査区東側の堆積土の確認作業を進める。トレンチ内から出土する遺物は13世紀末から14世紀の遺物であると考えられる。

8.12　夏休み発掘体験を実施。小学生１２名参加。調査区にて掘り下げ体験、事務所にて遺物の説明をを行う。午後から南側トレンチ土層断面の写真撮影を行う。真夏のため撮影条件悪し。

8.16　調査区西側の掘り下げを開始する。遺物は多く出土し、磨滅したものがなくおそらく遺構内を掘削している模様。遺構ライン見えず。

8.17　昨日に引き続き、西側調査区を掘り下げる。相変わらず大きめの破片が多く出土する。

8.18　西側調査区を掘り下げ中に炭化物を含む焼土が集中して出土してくる。調査区下面を観察すると上部からの掘り込みをみることができる。溝の可能性あり。

8.19　遺物の出土状況が磨滅していない破片が多いこと、安定したほぼ水平堆積をしていることなどから遺物包含層を掘削しているものと判断する。

8.22　調査区西側で溝状の遺構を３条切り合っているのを確認。遺構が多く存在している可能性が高いため調査区の中央に南北方向に幅５０cmのトレンチを設定し２０cmほど掘削する。

8.23　降雨により作業中止。本日から予定していた熊本学園大学学翔会文化財研究会の調査体験も明日からに延期。

8.24　溝SD003・SD006・SD002の溝状遺構検出状況写真撮影。その後、SD003は掘削開始。下端に近いところで石列を検出。

8.25　降雨のため作業中止。

8.26　SD003調査。同遺物出土状況撮影。

8.29　南側トレンチ土層断面一部修正。SD003調査。

8.30・31　月末で業員が少ないため調査は休止。事務所で土器洗いを行う。

9.1　SD003の完掘状況写真撮影を行う。SD002の調査に着手。遺構中位に土層断面観察用ベルトを残し堀進める。

9.2　SD002下端を検出後、両端の立ち上がり部の検出に着手。西側落ち際で遺物・礫が多く出土する。

9.5　台風接近による降雨のため作業中止。文化課から台風対策の指示がでる。

9.6　台風14号通過中！

9.7　午前中は調査区内の水汲みを全員で実施。午後から溝SD006・SD007の調査を行う。

9.8　溝SD006の西側立ち上がり部の調査を実施。埋土最下層から五輪塔の空輪部が単体で出土。稲佐

津留遺跡作業員現場見学。

9.9　Ag-11Grid 掘り下げ。溝 SD006、SD004 調査。南側トレンチ土層修正を行う。

9.12　溝 SD006 完掘、実測。溝 SD007、SD008 掘り下げ及び検出作業。

9.13　溝 SD004、SD005 はほぼ完掘。

9.14　溝 SD002 は土層断面観察用ベルトを残しほぼ完掘。下端が分かりにくかったが調査員で検討した結果、青灰色粘土層の上面までで止まっていると判断。そこから獣骨らしき骨片が出土。残存状況は悪し。同遺構土層断面写真撮影。玉名平野中世板碑拓本作業。

9.15　溝 SD002 の遺構落ち際に細い溝状遺構あり。SD002 と同時に掘削された付属の遺構と判断し調査を行う。

9.16　溝 SD008 で遺構プランが不明瞭であったため全体に 5 cm 掘削し改めて遺構検出を行う。溝状の遺構切りあいが激しく手間取る。

9.20　近世遺構と判断した溝 SD002 の調査が終了したのを受け、トレンチ等で周囲を掘削し無遺物層と判断した黒褐色土を除去するため重機を入れる。

9.21　溝 SD007 は完掘。出土した遺物はすべて埋土中出土として取り上げる。SD008 は写真撮影待ちとして、本日は一旦調査を止める。出土する遺物から中世期の溝状遺構と考えられる。

9.22　重機による掘り下げ後の清掃。溝状遺構、柱穴等、遺構が顔を覗かせ始める。溝 SD009、SD010 の調査も同時に進める。

9.26　重機による掘り下げ後の遺構検出で多くの遺構が検出し始める。溝 SD002 により切られている溝状遺構（のちの道路状遺構 SF001）の上端を確認。

9.27　道路 SF001 に並行して側溝状遺構を検出。道路状遺構に伴う溝か。Aj-15Grid において掘立柱建物 SB001、隣接して墓 ST001 を検出。掘立柱建物については東側へ延びそうである。

9.28　4 区遺構検出状況撮影のため高所作業車を入れる。Ak-19Grid にて新たに墓 ST002 を検出。良好な状態で人骨が残っていそうである。SF001 が東側へ延びそうであるが、地形の落ちもしくは削平によるものか、検出が不明瞭となるため、遺構形状を確認するためのトレンチを Am-20Grid に SF001 に対し直角に入れる。本日でほぼ調査区前面において中世遺構の検出作業を終える。

9.29　道路 SF001 を中心に遺構検出作業を行う。中央の波板状掘り込みの左右に並行に、側溝が並び見られるため慎重に検討・確認を行う。溝 SD008 はほぼ完掘。下層の遺構調査にとりかかる。墓 ST001 ～ ST003 の人骨検出状況の写真撮影。

9.30　溝 SD008 下層遺構としていたものは、マンガン等の沈殿物の広がりと判断し遺構ではないとして取り扱う。溝 SD007・SD009・SD010 もほぼ完掘。

10.1　溝 SD012、道路 SF001 側溝を完掘。

10.3　調査区東壁の土層断面実測。掘立柱建物 SB001 を完掘。道路 SF001 の波板状掘り込みもほぼ完掘。

10.4　溝 SD002 より西側の中世遺構はほぼ完掘。随時完掘した遺構の写真撮影を実施。

10.5　降雨のため午前中事務所にて待機、午後から作業を開始する。道路 SF001 より東側の土坑・溝等を検出、掘り下げ。

10.6　An-19 ～ 21Grid 周辺を中心に掘り残しがないか確認しながら調査を進める。

10.7　隣接して建設されている新幹線菊池川橋梁上から 4 区中世面完掘写真撮影を行う。本日をもって、太郎丸遺跡の発掘調査を終了する。

10.11　調査事務所撤収。次回、調査予定の「二本木遺跡群（春日地区）」へ器材等の搬出を行う。

長谷部善一

B　西屋敷遺跡

4.19　1区マウンド状箇所の調査。上部平坦面五輪塔周辺の遺構検出。同時に西側崖面にトレンチを設定。五輪塔残欠の出土状況等撮影。

4.20　終日降雨のため作業休止。

4.21　1区マウンド状平坦面遺構検出、マウンド傾斜面にトレンチ設定。

4.22　作業休止

4.25　朝から降雨のため作業休止。1・2区地形測量。

4.27　2区の墓石実測を開始。

5.10　2区墓石実測、墓石拓本取り作業

5.11　2区墓石実測、墓石拓本取り作業

5.12　2区墓石実測、墓石拓本取り作業

5.13　2区墓石実測、墓石拓本終了

5.16　2区墓石実測終了、本日をもって西屋敷遺跡の調査を終了する。

長谷部善一

C　瀬萩遺跡

5.10　本日より調査開始。1/3の面積を調査予定の東側（1区）から表土剥ぎをする。

5.11　表土剥ぎ後の調査員のみで清掃、遺構検出を行う。時期不明の溝状の遺構が3条検出される。

5.12　遺構検出をするも成果はない。地形は全体に北側（現水田面）に向かい傾斜している模様。

5.13　調査は休止し太郎丸遺跡事務所にて打ち合わせを行う。

5.16　作業員、本日より作業開始。関係書類の記入、オリエンテーションが終了後、水中ポンプ等の設置と調査を開始するにあたっての環境整備を全員で行う。

5.17　調査区前面、清掃を開始する。

5.18　降雨のため作業中止。

5.19　調査区全体の水揚げ、清掃。排水路等の掘削作業。調査区内に4級基準点設置。

5.20　調査区東・北壁の土層断面写真撮影。メッシュ杭設置。

5.23　本日迄、メッシュ杭設置。旧耕作土面の上面までの遺構の検出写真を行う。

5.24　東側で検出した遺構の写真撮影を行う。層位から判断し、近・現代の遺構と判断される。

5.25　溝状遺構周辺の掘り下げを開始。

5.26　S004の調査。

5.27　遺構検出作業。

5.30　S004完掘。下層の遺構検出にとりかかる。

5.31　褐灰色層の掘り下げ。

6.1　S004の掘り下げを行うも遺構の性格をつかめず。再度、掘り下げを行い検討が必要。遺物は調査区全体から出土するが遺構は検出されず。

6.2　降雨のため作業中止。

6.3　褐灰色土掘り下げ。

6.6　褐灰色土掘り下げ。S009、S005、S010を検出し掘削するも、地形のくぼみと判断する。

6.7　褐灰色土掘り下げ。

6.8　A-10、A-13Gridで褐灰色土掘り下げ。

6.9　1区中世面掘り下げ完了。写真撮影を行う。

6.10　調査2区（約900㎡）の表土剥ぎ開始。

6.13　週末の降雨と周辺の水田より調査区内に排水が浸水し作業を中止し排水作業を行う。表土剥ぎは北側の排水溝が滞水しているため南側より順次剥いでいった。

6.14　中世水田面を掘り下げ、黄褐色土及び黒褐色土より古墳時代の遺物が多数出土し始める。

6.15　にぶい黄褐色土層の掘り下げ。地形に傾斜があり、南側でやや高くなっているようである。

6.16～20　黄褐色土層の掘り下げ及び遺構検出。

6.21　1区掘り下げ終了。2区の調査準備。

6.22　2区壁面清掃。溝状遺構を検出するが調査の結果、遺構とは認定できず。

6.23　北側トレンチで土層断面の線引きを行う。2区の東側で遺構の検出作業を行う。

6.24　2区K-14Gridにて褐灰色土の掘り下げを行う。

6.27　K-14・15・J-14Gridで遺構検出を行う。特に所見はなし。

6.28　K-15、J-14Grid遺構検出。遺物は細片が多い。

6.29～30　作業員が満期のため、調査は休止。

7.1　K-13・J-13・14・I-14Gridで褐灰色土の掘り下げを行う。

7.4　午前中、調査係会議のため調査は中止。

7.5　降雨のため作業中止。

7.6　午前中降雨のため、午後から作業を始める。I-13・14・J-12・13・K-12Gridの掘り下げ及び遺構検出。

7.7　I-13・J-13Grid掘り下げ。磨滅した土器片が多いため掘り下げを急ぐ。

7.8　J~H-10・11掘り下げ。2区遺構略図作成。調査区東側（市道の東側）で家屋の移転が終了したため確認調査を実施する。遺構・遺物とも確認されず。

7.11　降雨のため作業中止。

7.12　I-10、J-10Grid掘り下げ。遺物は依然として磨滅した破片が多い。

7.13　降雨のため作業中止。

7.14　G~I-9Grid掘り下げ。本日より、太郎丸遺跡調査担当長谷部と瀬萩遺跡調査担当吉田は、植木バイパス工事に伴う試掘調査に入る。

7.15　G~I-9及びH・I-8Grid褐灰色土掘り下げ。褐灰色土は厚く、約60cmを測るところもある。

7.19　F・G・H-7・8Grid褐灰色土掘り下げ。

7.20　H~L-8~14Gridにて遺構検出を行う。

7.21　褐灰色土の下面において等高線の取り込みを行う。黄褐色からは古墳時代から古代にかけての遺物が多数出土する。

7.22　I~K-12~15Gridでにぶい黄褐色土を掘り下げる。遺物多数出土するが、遺構は見えず。

7.25　K・L-14Gridにぶい黄褐色土から黒褐色土（砂質）まで掘り下げ。

7.26~28　K・L-14Gridにぶい黄褐色土から黒褐色土（砂質）まで掘り下げ。

7.29　事務処理のため調査は中止。

8.1　2区調査区内排水滞水のため調査は中止。

8.2　排水作業及び現場復旧作業。午後から掘り下げの続きを再開。

8.4　気温35℃、酷暑のため作業中止。1区埋め戻し開始。

8.5　にぶい黄褐色土黒褐色土（砂質）まで掘り下げ。

8.8　3区表土剥ぎ開始。にぶい黄褐色土黒褐色土（砂質）まで掘り下げ。1区埋め戻し完了。

8.9　H-10・I-8~10・J-11・13・K-12~15Gridまでにぶい黄褐色土～黒褐色土（砂質）まで掘り下げ。

8.10　I~K-12Gridで土師器完形品が出土し始める。遺構の確認を急ぐ。

8.11　3区表土剥ぎ終了。I~K-12Gridでの遺構検出作業を行う。

8.12　I~K-12Gridに隣接するGridでも遺物出土範囲が広がる可能性があるため、掘り下げを進める。

8.15　お盆のため調査を中止する。

8.16　午前中、周辺の水田からの浸水のため排水作業を行う。午後から掘り下げを再開する。

8.17　I・J-12Gridから土師器壺、高杯、小型丸底壺等が多数出土する。写真撮影後、遺構の精査に入る。

8.18・19　調査は終始し、26日開催予定の「夏休み現場公開会」の準備を行う。

8.22　古墳時代遺物包含層掘り下げ。

8.23　降雨のため作業中止。本日より予定していた熊本学園大学学翔会文化財研究会の調査体験も明日からに延期。

8.24　灰色土層まで掘り下げを行う。

8.25　調査区全体の様子がほぼ分かり始める。南側から平野へ張り出す低丘陵の先端部に位置する。にぶい黄褐色土が形成される土壌は背後から延びる丘陵の基底部にあたることが判明。よって、遺構の広がりはかなり限定された範囲に留まりそうである。

8.26　「夏休み遺跡発掘体験・見学会」開催。幼稚

園児１名、小学生 20 名、中学生１名、保護者３名、文化課小谷主任主事も参加し開催。事務所にてパワーポイントを用いて説明し、その後発掘体験を行う。熊本学園大学学翔会文化財研究会調査参加、本日まで。

8.29 ～ 31　月末で作業員が少数のため事務所で遺物洗浄作業を行う。

9.1　K･L-13･14Grid 黒褐色土～灰色粘質土の掘り下げ。

9.2　灰色粘質土を掘り下げ。台風接近のため午後から対策を施す。

9.5　台風 14 号接近のため作業は中止。

9.6　台風 14 号、九州に上陸、横断のため作業は中止。

9.7　台風通過による降雨で調査区水没。終日、排水作業を実施。

9.8　昨日に引き続き、現場復旧作業を継続。土砂の流入が多く手間取る。午後からは調査を再開。

9.9　昨日の作業を引き続き行う。

9.12　調査区北側の流路落ち際部分及び竪穴住居 SI001・SI002 を J-11･12Grid にて検出。

9.13　竪穴住居 SI001・SI002 の調査を実施。

9.14　土坑 SK001 を検出。焼土が見られるため詳細に調査を実施するも用途等の限定には至らず。

9.15　２区遺構検出。調査区内において水田面検出確認のためプラントオパール分析（資料採取）を行う。

9.16　３区清掃、最終遺構検出作業。

9.20　３区褐色土面での遺構検出作業。

9.21　出勤調整のため少人数で遺物洗浄。

9.22　昨日に引き続き遺物洗浄。

9.26　古墳時代面完掘写真に向けた環境整備を行う。

9.27　土坑 SK001 の調査及び調査区周辺の環境整備を行う。

9.28　古墳時代面調査完了及び完掘写真撮影を実施。高所作業車を用い撮影。午後から器材洗浄・整理。本日をもって、調査を終了する。

9.29　調査事務所内の器材整理、出土遺物の選別。

9.30　器材撤収。調査班は太郎丸遺跡へ合流。

吉田徹也

※ S 番で表記したものについては、調査の段階で検出したが、遺構と認定できなかった。

梅林天満宮鳥居と楼門

梅林天満宮楼門　仁王像

第３章　各遺跡の報告

1　太郎丸遺跡
　A　遺跡（１区から４区の概要）
　B　出土遺物
　C　まとめ（主に道路状遺構 SF001 を中心に）
2　西屋敷遺跡
　A　調査に至る経緯
　B　調査の手法
　C　１区の概要
　D　２区の概要（近世墓の石塔調査）
　E　総括
3　瀬萩遺跡
　A　遺跡の概要
　B　遺物
　C　附編

瀬萩遺跡より見た木葉山

標高 268m、古くから「石灰の山」として知られ、現在まで山容を変えながら採掘が続いている。木葉山の語源として、山並が虎の歯のように切り立っていたため、昔、虎歯（このは）と称されていたとされる。

『熊本県大百科事典』1982 年 4 月 熊本日日新聞より抜粋

1　太郎丸遺跡

A　遺跡（1区から4区の概要）

（1）1区の概要

本調査区は太郎丸遺跡全体に設定した調査区中では最も東に位置し、小河川を挟んで「祭田下遺跡」と向き合う調査区である。本調査区の面積は上端で1,523㎡、下端で1,364㎡を測る。調査面は5層上面で近世、6層上面で中世（Fig. 4）の遺構を検出している。

近世遺構の調査（Fig. 4）

溝SD001　水田直下から検出した遺構。昭和39年に実施された菊池川白石堰整備に伴う玉名平野4,500haの圃場整備前まで使用されていた溝で、通称「三間溝」と呼ばれていた溝である。幅5.4 mから7 mほどあり、廃絶時には両方の上端が崩れかかっていたものと考えられる。出土遺物は近・現代の遺物が混在した状態で多数出土している。

溝SD002　本遺構も溝SD001同様に表土剥ぎ時から見えていた遺構で、調査区を斜めに横切る状態で検出している。調査区外を東へ伸ばすと溝SD001と直交するものと思われる。土層は2箇所で観察し、3時期の利用過程を見てとることができた。最初の掘り方は、第1時期とし土層中の5・6層にあたり、やや土壌化を感じさせる暗オリーブ褐色系シルトで、緩く上部に向かって開くU字状の底部を成す時期。第2時期には粘質～砂質を主体とし、2・3・4層の堆積する時期、第3時期として溝1層としている真砂土を主体とする埋土が堆積している時期。主に遺物は第2時期としている層から出土しており、近世染付磁器（Fig.26）などがある。1層中には圃場整備段階の廃棄物と見られる現代の廃棄物も含まれていた。いずれの層からも遺構年代を示す遺物は出土していない。

中世の遺構の調査（Fig. 4）

溝SD003　溝SD001の東側にほぼ平行に検出された遺構。検出時には後に報告する溝SD004と同一遺構かとも考えられたが調査が進むにつれ、主軸のわずかなブレなどから別遺構であると判断した。西側の上端はSD004と共有する。検出長は3.45 m、幅38cm（C-C'）、最大深度は12cmを測る。土層は黒褐色土を主体とし磨滅した土師器片をわずかに含む。

溝SD004　71列のGrid内に展開し調査区を横断する溝。部分的には上端、下端とも一定せず不定形をなす部分もある。最大幅（D-D'）は3.5mを測る。埋土には黒褐色砂質系の土を持ち、磨滅した土師器片をわずかに含む。

土坑SK001　Bp-61Gridにて検出した遺構。トレンチにより遺構の一部が失われ全体形状は不明であるが、残りは径65cmである。断面は逆台形状で底面はフラットである。埋土には5層の褐色系の土が主に入る。出土遺物はない。

土坑SK002　Bp-60Gridにて検出した遺構。一部はトレンチにより削平したがほぼ円形を呈する。長径96cm、最深度36cmを測る。断面形は逆台形である。土層は単層で5層の土を主体に含む。出土遺物は古代の須恵器蓋（Fig.27）、土師器片がある。

土坑SK003　Bv-68Gridにて検出した遺構。検出した面は中世面より下層の7層上面であるが、埋土の状況から、本来は他の遺構同様に6層上面で検出すべき遺構であったと判断し報告する。上端、下端とも検出時には方形とみられたが、掘り進むとやや不定形な形状を呈する。遺物は土師器皿（Fig.27）が埋土中より出土している。

柱穴SP001　Bq-64Gridの土坑SK001西側で検出した遺構。径15cm、最大深度15cmを測る。掘り方はほぼ垂直で、遺構の埋土は単層であると判断した。埋土は5層の土を主体に含む。

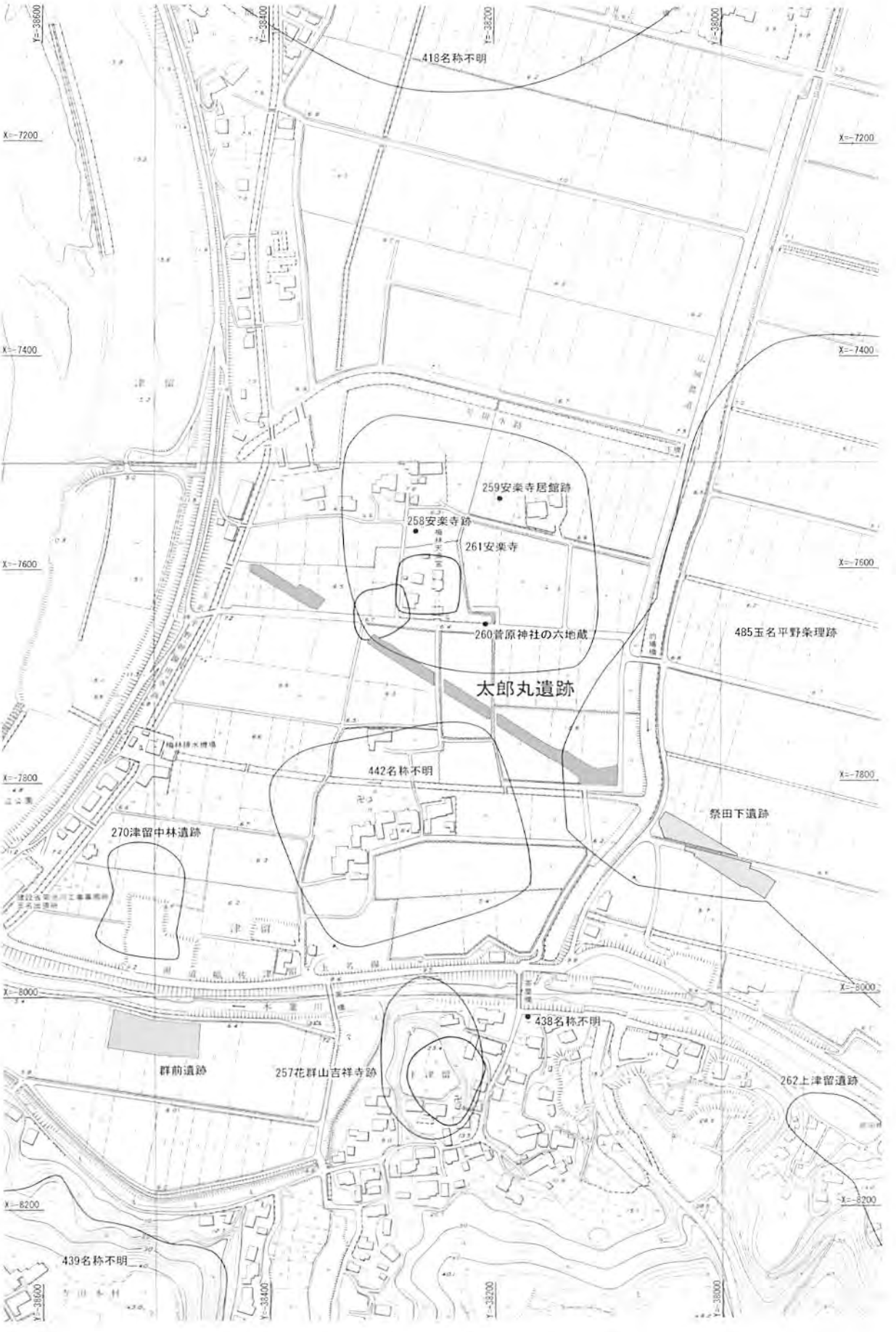


Fig.3　太郎丸遺跡周辺遺跡分布図（S=1/5,000）

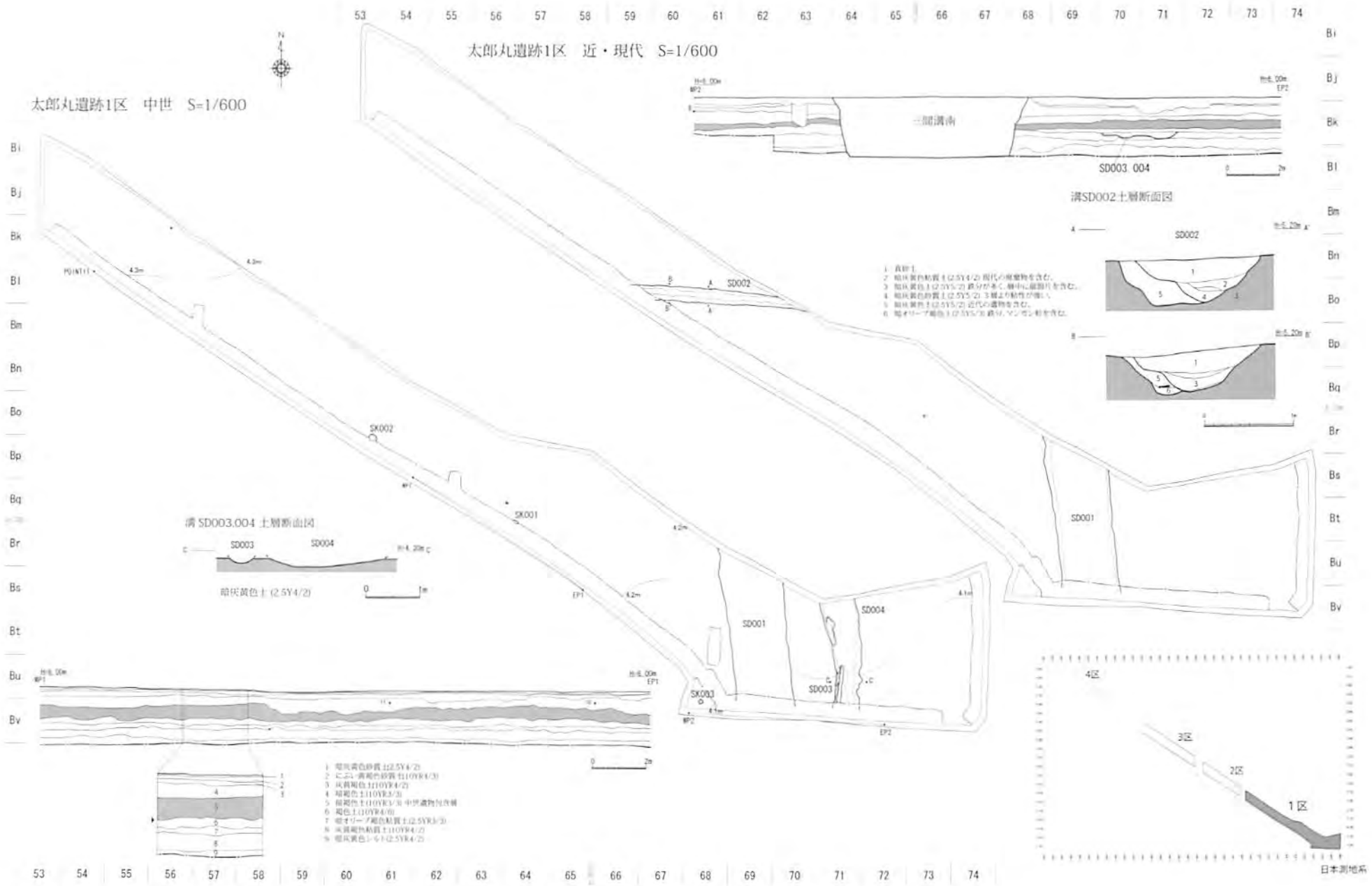


Fig.4　太郎丸遺跡１区遺構配置図（右上，近世代面・左下，中世面）

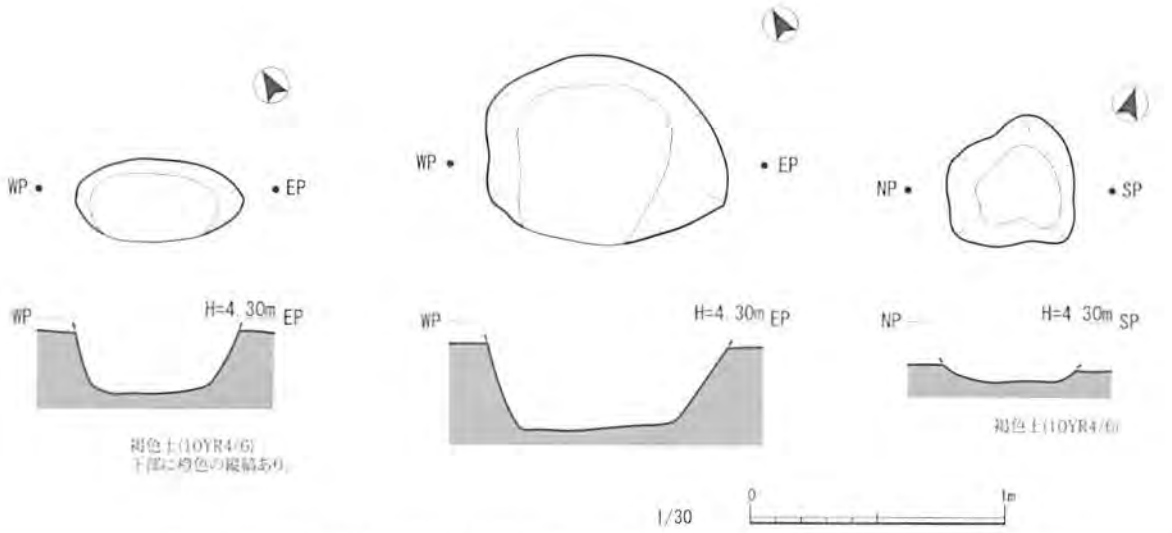


Fig.5 1区土坑SK001（左）・土坑SK002（中央）・土坑SK003（右）平面図と断面図

（2）2区の概要（Fig. 6）

1区の西側に当たる調査区である。本調査区の面積は上端で510㎡、下端で452㎡を測る。調査は1区同様、近世遺構検出面としている5層上面、中世相当層の包含層である6層、中世遺構検出面としている7層上面で行った。

5層上面を近世遺構検出面とし精査したが、遺構を確認することはできなかった。6層中からは中世の遺物をわずかに出土したが、いずれも端部が磨滅した土師器皿・杯、やや大ぶりの青磁椀片、土師器同様に端部が磨滅した瓦器椀等が出土した。出土した遺物は、出土状態が一定せずまとまりがなかったことから、現位置を保っていない流れ込みの資料と判断した。

また、6層中からの遺構の検出はできなかったため、一部で7層上面まで掘り下げ、遺構の確認を行ったが検出には至っていない。

その結果、5・6層からの出土遺物は包含層遺物として取り上げ、ここで図示できたのは4点（Fig.30）で、いずれも6層からの出土であった。

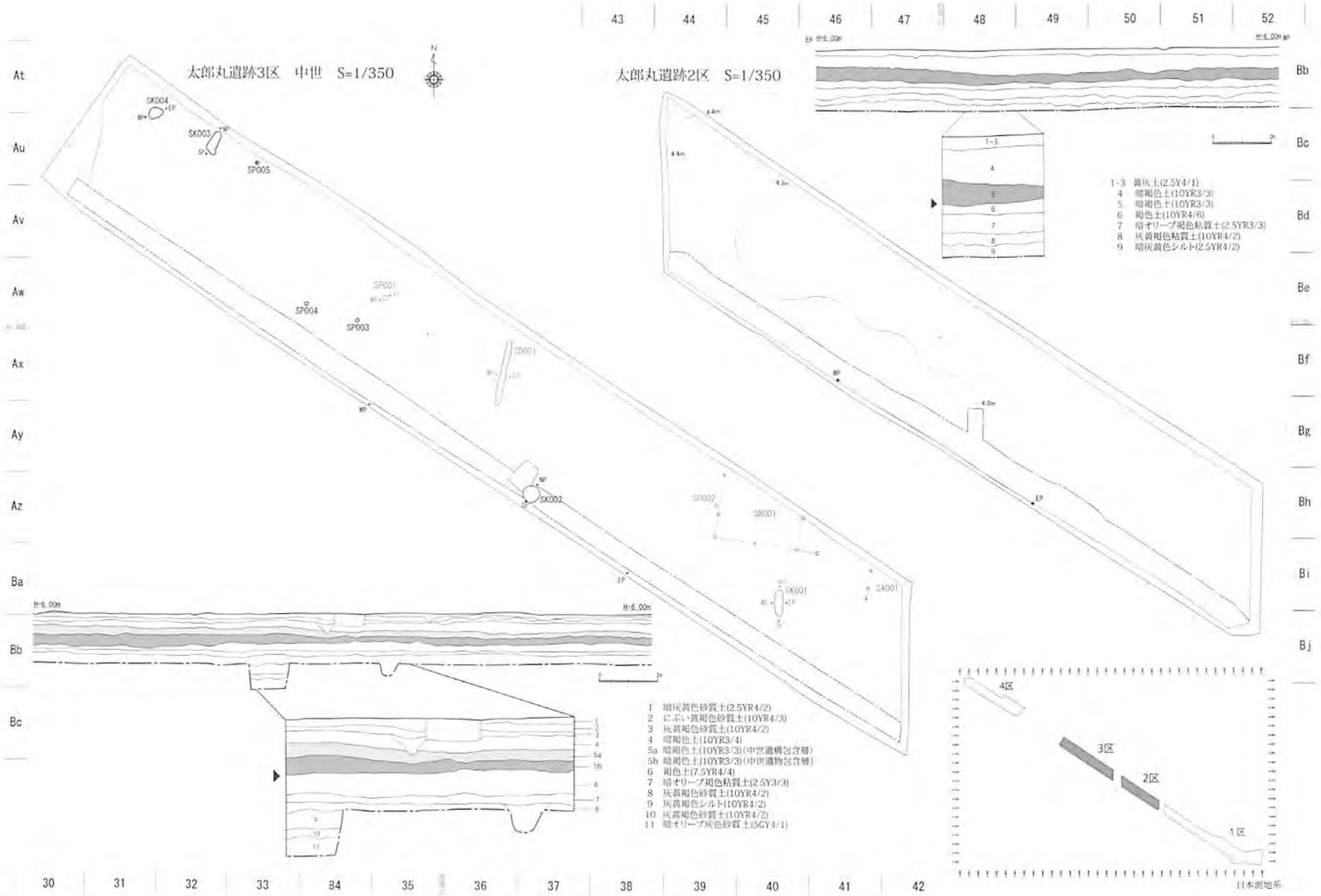


Fig.6　2・3区中世面遺構配置図（右上 ,2 区・左下 ,3 区）

（3）３区の概要

中世遺構の調査（Fig. 6）

３区は２区の西側、梅林天満宮の南に延びる参道と門前に広がる馬場に挟まれた場所に設定した調査区。調査区の面積は上端で738㎡、下端で648㎡を測る。

遺構検出作業は表土剥ぎ後、５層上面から行ったが、遺構が確認できなかったため１区で中世相当層とした５層を掘削後、６層上面・７層上面の２面で遺構を検出、確認した。

６層上面検出遺構

柵列 SA001（Fig. 7） Ba-42Grid で検出した３個の柱穴で２間からなる遺構。掘立柱建物 SB001 と主軸をほぼ同じくし、柱穴径、深度とも類似するが、P1-P2 間は 1.25m、P2-P3 間は 0.75m と柱穴間は一定しない。埋土中からの出土遺物はない。

掘立柱建物 SB001（Fig. 8） Az・Ba-39・40・41Grid にて検出した遺構。調査区北側に延びており、検出できた範囲では長軸方向で３間、小口方向で３間、小口方向延長線上で柱間違いで１間の掘立柱建物跡１棟を確認した。柱穴は側柱のみで、内部での柱痕は認められていない。先に報告した柵列 SA001 とは主軸をほぼ同一としていることから付属する遺構と捉えることができよう。建物としての広がりの可能性は、間に空間を有することから連続性はないものと考える。

溝 SD001（Fig. 9） ６層上面、Ax-36Grid において検出した遺構。最大長は 4.64 m、断面を作成した部分で幅 42cm、最大深度は 16.5cm を測る。断面形は逆台形（WP-EP）を呈する。土層は単層で、５層の暗褐色土（10YR3/3）を主体とする埋土を有する。出土遺物は磨滅した土師器片がわずかに入る。

土坑 SK001（Fig. 9） 掘立柱建物 SB001 の南側、Ba-40Grid で検出した遺構。長径 1.88m、断面実測部で 70cm、最大深度 22.5cm を測る。埋土には暗褐色土（10YR3/3）を単層で有する。遺構中心より北に寄った下端近くで礫を含む。加工痕はない。埋土中からは磨滅した土師器片が数点出土している。

柱穴 SP001（Fig.13） Aw-35Grid で検出した柱穴状遺構。平面形は隅丸方形を呈する。長径 38cm、深度 10cm を測る。埋土は単層で黒褐色土（10YR2/2）を含む。出土遺物は磨滅した土師器片が出土している。

柱穴 SP002（Fig.13） 掘立柱建物 SB001P-2 西側に位置する遺構。当初は掘立柱建物に伴う柱穴とも考えられたが、最終的には別遺構で報告する。遺構は掘立柱建物 SB001 を構成する柱穴と大きさ深度とも大きな違いはなく、埋土の特徴も酷似する。

７層上面検出遺構

土坑 SK002（Fig.10） Az-37Grid で検出した遺構。トレンチと調査区南壁に一部かかる状態で検出した。土層断面は自然堆積層と比較させるため、調査区南壁に直行し設定した。長径は中心部の最大径部で東西方向に 1.28m、深度は 42cm を測る。遺構内堆積土は２層に分層でき自然堆積による土層を確認した。出土遺物は磨滅した土師器片が４点出土している。

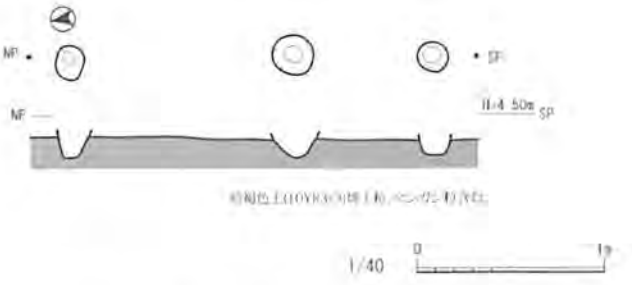


Fig.7 ３区柵列 SA001 平面図と断面図

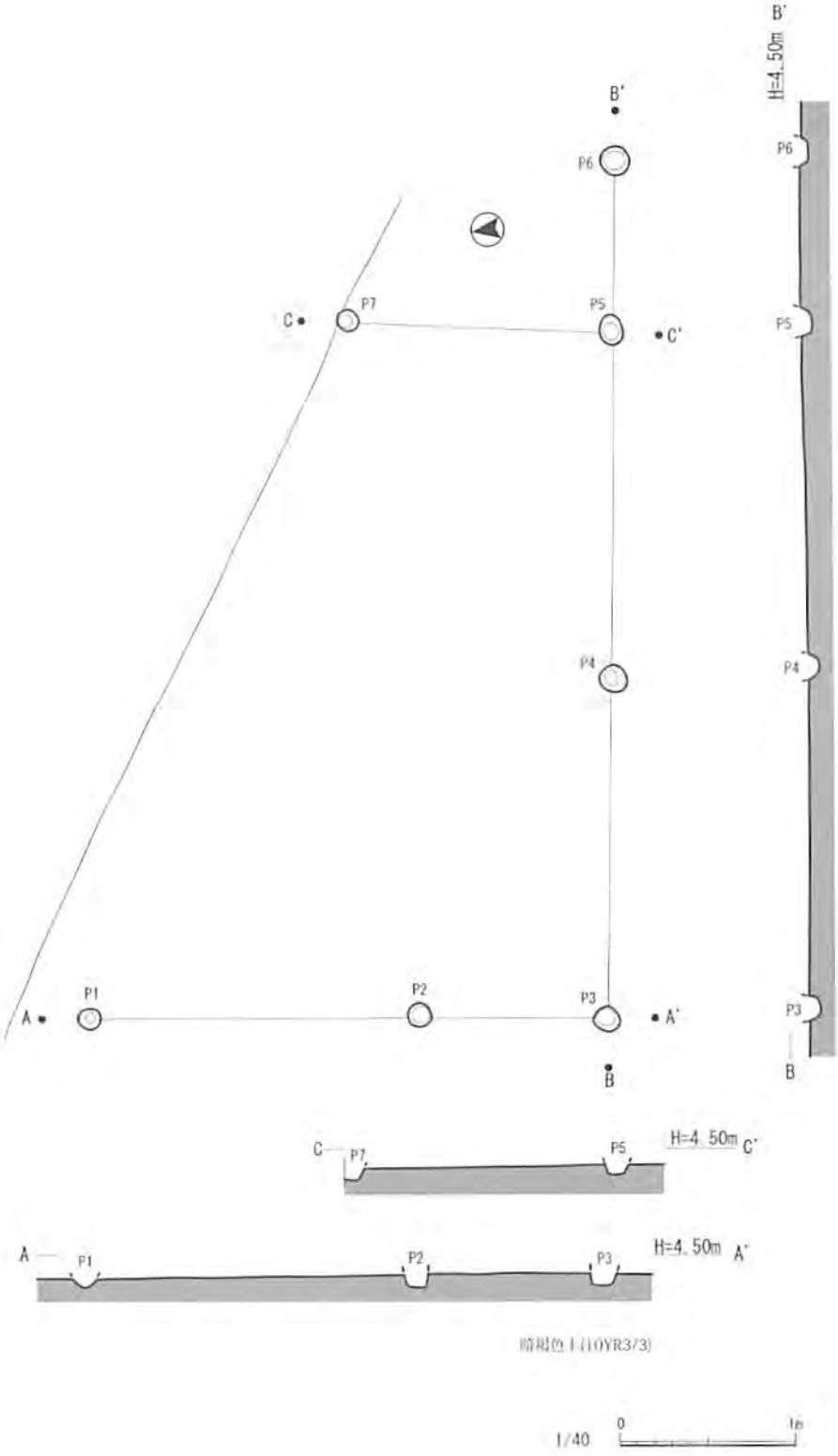


Fig.8　3区掘立柱建物 SB001 平面図と断面図

土坑 SK003（Fig.11） Au-32Grid で検出した遺構。平面形は長楕円で一部崩れ張り出す。埋土は分層できず単層、暗オリーブ色（2.5YR3/3）の粘性の強い土が入る。出土遺物はない。遺構規格は長径 1.56 m、深度 10.5cm、底面はフラットで、掘り方は緩やかである。

土坑 SK004（Fig.12） 本調査区で最も西側の Au-31Grid で検出した遺構。遺構平面は不定形であり浅い掘り方を有する。埋土にはにぶい黄褐色土(10YR4/3)を有する。遺構底面はフラットで掘り方も緩やかである。出土遺物はない。

柱穴 SP003（Fig. 6） Aw-43Grid にて検出した遺構。埋土ににぶい黄褐色土（10YR4/3）を持ち、粘性が強いためか硬く締まる。7層から8層に近い土の状況を呈している。長径約 30cm で楕円形を呈する。

柱穴 SP004（Fig. 6） SP003 と同じ Grid に位置し、不定形な平面形を呈する遺構。最大径 28cm を測る。埋土の状況は SP003 と同様である。

柱穴 SP005（Fig.13） Au-33Grid にて検出した遺構。検出段階では約 8cm 程度の柱痕を検出するが断面では明瞭には見えていない。埋土に暗褐色土（10YR3/3）を主体に炭、焼土粒を多く含む。基本土層の 5b 層に近い埋土を有し、径 24cm の円形を呈する。底面では柱痕としていた部分のみ、やや下がる。

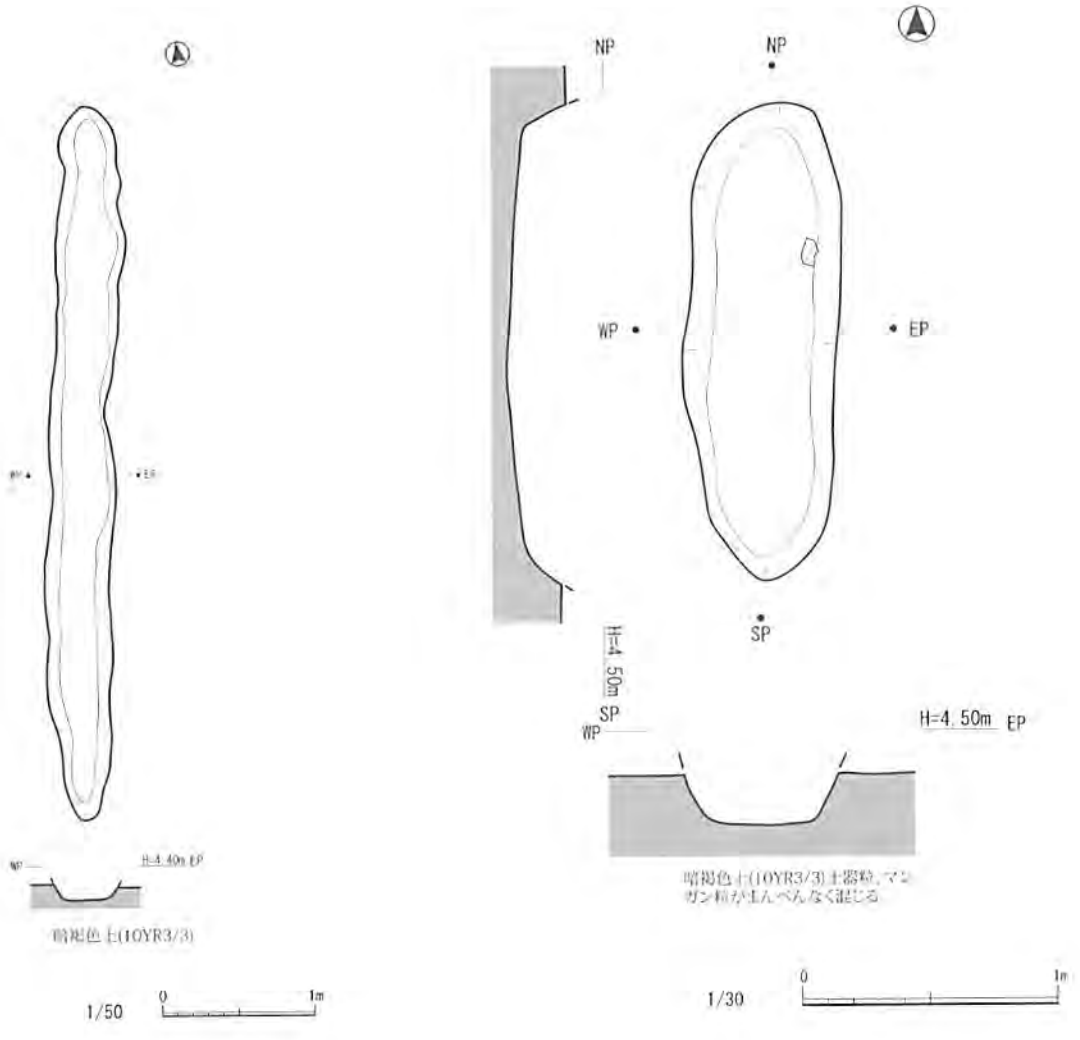


Fig.9 3区溝 SD001（左）・土坑 SK001（右）平面図と断面図

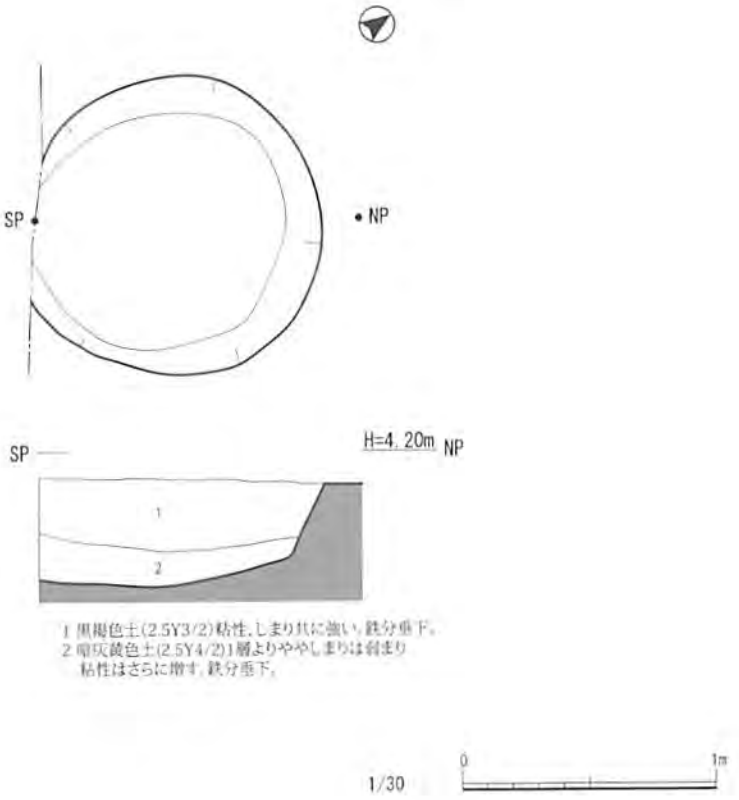


Fig.10　3区土坑 SK002 平面図と土層断面図

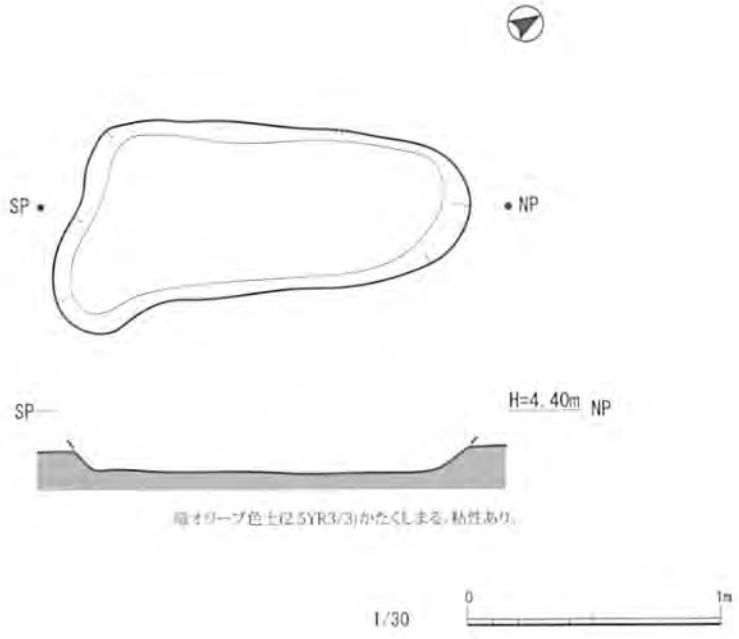


Fig.11　3区土坑 SK003 平面図と断面図

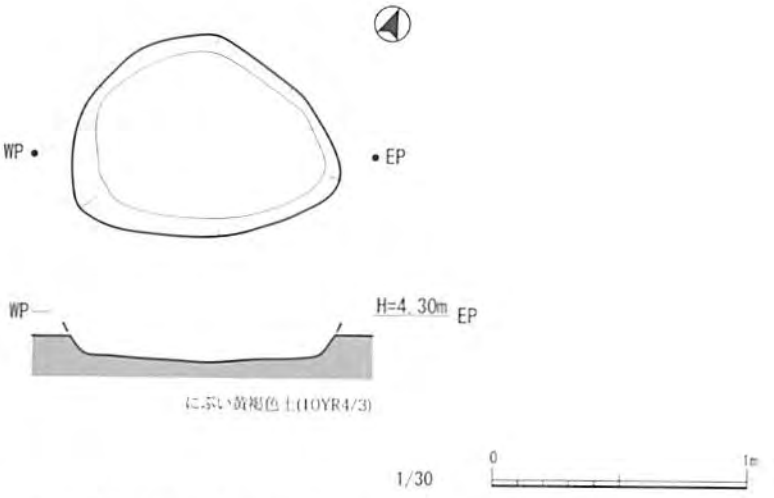


Fig.12　土坑 SK004 平面図と断面図

Fig.13　柱穴 SP001・柱穴 SP002・柱穴 SP005 平面図と断面図

'09 年 9 月の太郎丸遺跡 3 区（常夜灯先の橋脚 4 本建設箇所、右奥は梅林天満宮楼門）

（4） 4区の概要

4区は本調査において最西端に位置し、もっとも菊池川に近い調査区である。調査区東側は梅林天満宮に隣接し、東西に走る馬場の一部にも接する。調査区の面積は上端で814㎡、下端で716㎡を測る。

遺構検出作業は、近世遺構検出面となる6層上面、中世遺物包含層相当層とする6層、中世遺構検出面とする7層上面を遺物包含層・遺構検出面と認定し発掘調査を実施した。

主な遺構は、調査区のほぼ中央を東西に横断している道路状遺構（SF001）、掘立柱建物跡（SB001）、土坑墓（ST001～003）、柱穴、調査区の西にあたり最も菊池川に近い場所に位置し、重複し検出された幾筋もの南北に走る溝状遺構などがある。(Fig.15)

近世遺構の調査

溝 SD001（Fig.14） 6層上面を検出面として検出した遺構。主軸をほぼ南北にとり掘削されている溝状の遺構。断面は逆台形状を呈し、底面はほぼ水平である。

溝 SD002（Fig.16） 溝 SD001 と同検出面で検出した遺構。断面形は両側に浅く広がる掘削部を有し、中央がU字状に掘り込まれる溝状の遺構。西側の落ち際には、並行に掘削された小規模な溝状遺構が検出された。

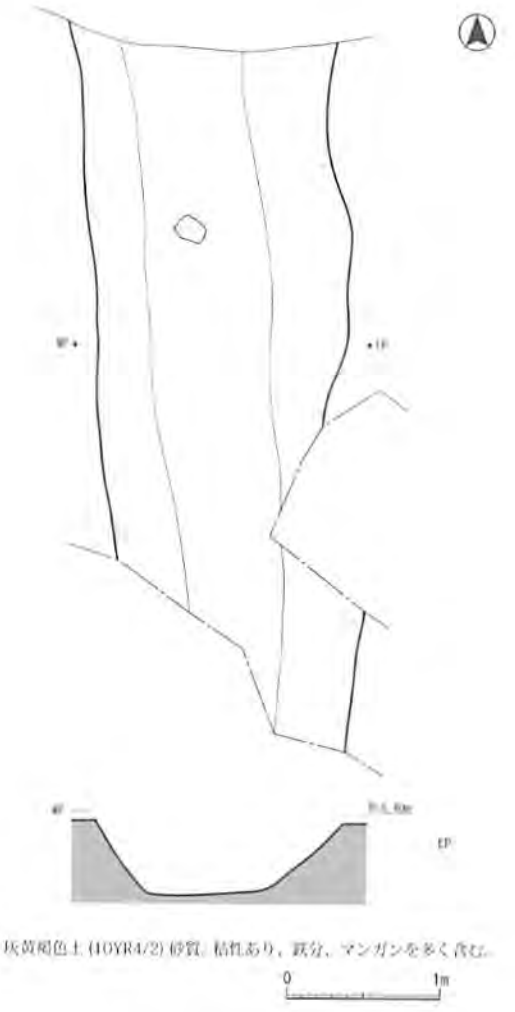


Fig.14 4区溝 SD001 平面図と断面図

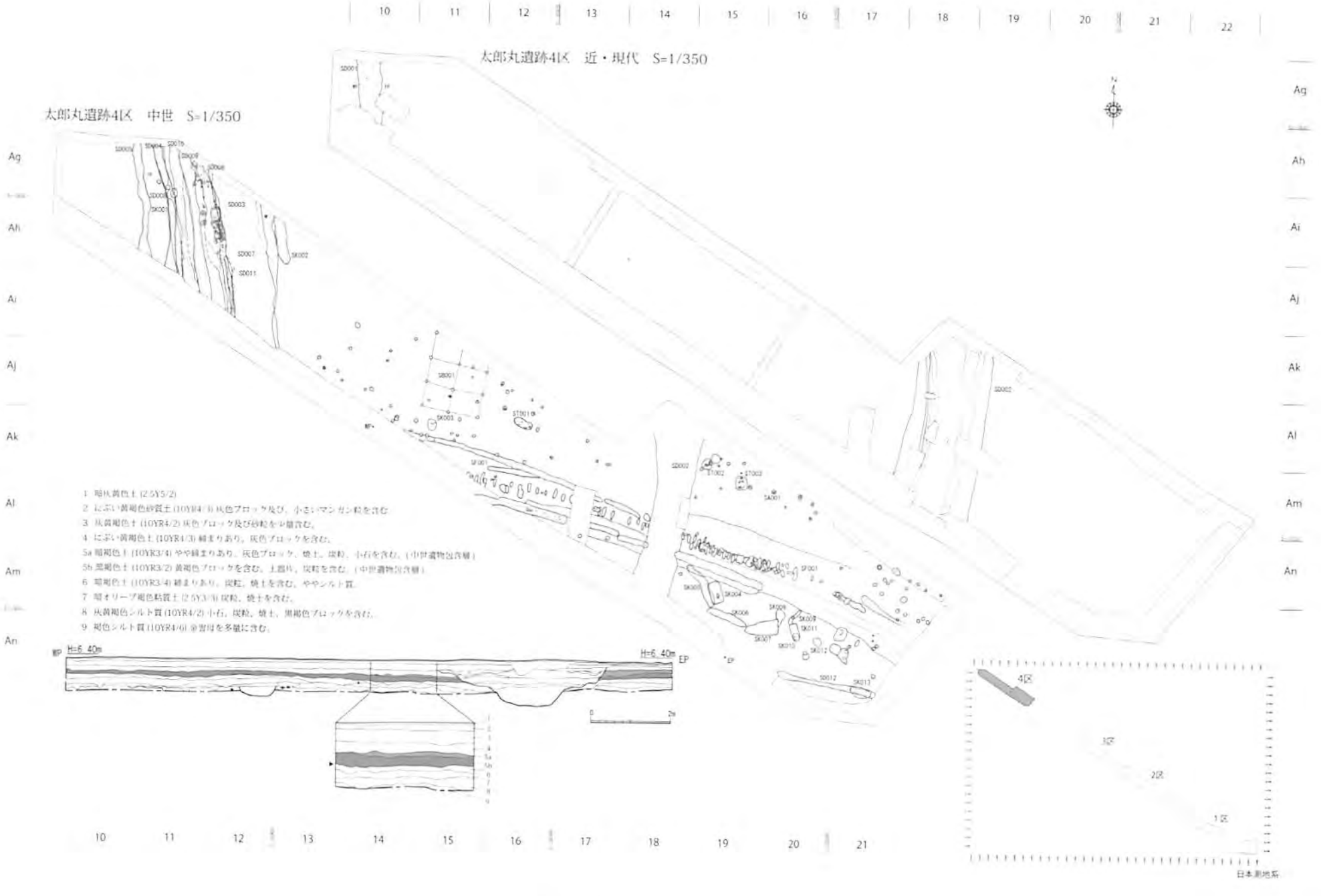
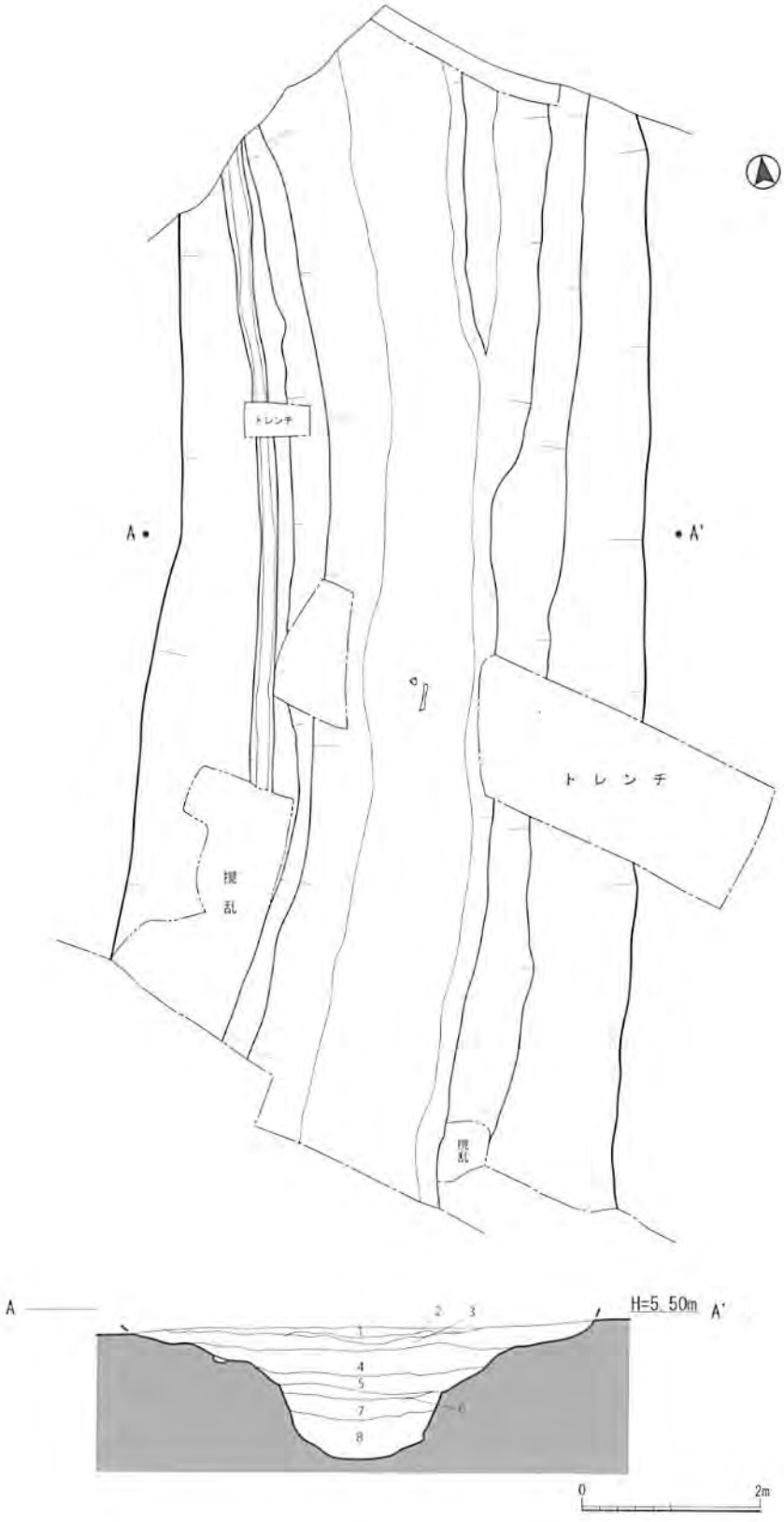


Fig.15　4区遺構配置図



※1層～7層の土色は「にぶい黄褐色土(10YR4/3)」で基本的に同一。土質はシルト質を主体とする。
1層　5㎝前後の砂粒をわずかに含む。
2層　1層よりやや締まり粘性を帯びる。1層に含まれる砂粒の割合が多い。
3層　焼土を粒状に少量含む。
4層　3層よりやや粘性が強い。磨滅した土器片を含む。
5層　上層に比べ締まりが弱い。
6層　砂粒の混入が増え土器片、軽石などの混入物も見られる。
7層　砂粒の混入が多く、上層に比べマンガン粒が増える。
8層　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　磨滅した土器片が多く出土。

Fig.16　4区溝 SD002 平面図と土層断面図

中世遺構の調査

柵列 SA001（Fig.17） Al・Am-19・20Grid にかかる範囲に位置する遺構である。今回の調査では柵列として報告するが、調査区北側並びに東側へ広がりを持つ掘立柱建物である可能性もある。柱穴掘り方は大きく削平を受け遺構の下端に近い部分であるが、いずれも長径約 30cm を測り、断面には幅約 10cm の柱痕を残す。柱間は 1.9m で２軒間ともほぼ同距離である。

掘立柱建物 SB001 Aj-15・16Grid で検出した遺構。直径 20cm 前後の柱穴が 1.8m ～ 1.95m の間隔で２間×３間の総柱建物として検出した。北側は調査区外に出るため現段階では総間数は不明である。柱穴の深度は浅く、埋土に上層（６層）の土を主体とする土を有していることから、本来の遺構は６層中から掘り込まれたものであろう。遺構土層断面では柱痕等の痕跡は確認できていない。

溝 SD003 調査区西側の重複した遺構の中で検出した溝状の遺構。断面は浅い。

溝 SD004・溝 SD005 ２本の溝とも検出面上ではやや湾曲し検出された遺構。断面形は逆台形を呈するがしっかりした下端を呈する。

溝 SD006 溝 SD003 に切られ検出した遺構。遺構は浅いが、シルト質を中心とした土の堆積した土層をみることができる。

溝 SD007 溝 SD006 の直下で検出した遺構。ほぼ主軸を同じくしているが、SD006 とは土層の観察からも別遺構として認識し調査を実施した。

溝 SD008 SD007 の西側に位置し、同遺構に切られた状態で検出した遺構。本遺構も下端がはっきりせず緩やかな断面形を呈する。

溝 SD009 SD008 の直下で検出した遺構。断面形は逆台形を呈する。

溝 SD010 SD008 の直下で SD009 に切られた遺構。断面形は不定形で明確な遺構としての掘り込みかどうか判断に迷うが、埋土に焼土を含むため遺構と認識した。

溝 SD011 SD007・SD008 の直下で検出した断面 U 字状の遺構。平面では遺構の途中で途切れる。

溝 SD012 土坑 SK013 を切るように検出した遺構。遺構は東西に伸びており、東側では調査区外に伸び、西側では調査区端から約 7m 伸びた部分で丸く終わる。道路 SF001 とほぼ平行に検出できたが、同時に存在していたかは埋土の状況からは判断できなかった。溝断面は逆台形を呈する。

道路状遺構 SF001（Fig.20） Am・An-10~16Grid にて検出した遺構。不定形楕円遺構が連続する範囲とそれを挟む溝状遺構から構成されると判断し、中心を通る不定形楕円遺構を他の報告・研究事例から、道路状遺構と判断した。中心の不定形楕円遺構を「波板状凸凹面」、それを挟み検出した溝を「側溝」と呼称する。
検出面長約 26m、両側溝間幅 3.35 m、中心で検出した波板状凸凹面１基あたりの幅は小さいもので約 60cm、大きなもので幅約 1.2m、深度は 10 ～ 15cm である。また、遺構の間隔は均等ではないが約 40cm から 60cm を測る。

土坑 SK001 Am-19Grid に位置し溝 SD004 を切り、掘り込まれる遺構である。平面は楕円形をなし断面は緩やかなU字を呈する。下端は明確な平面を有せず掘り込まれる。埋土の特徴から中世期の遺構と判断される。

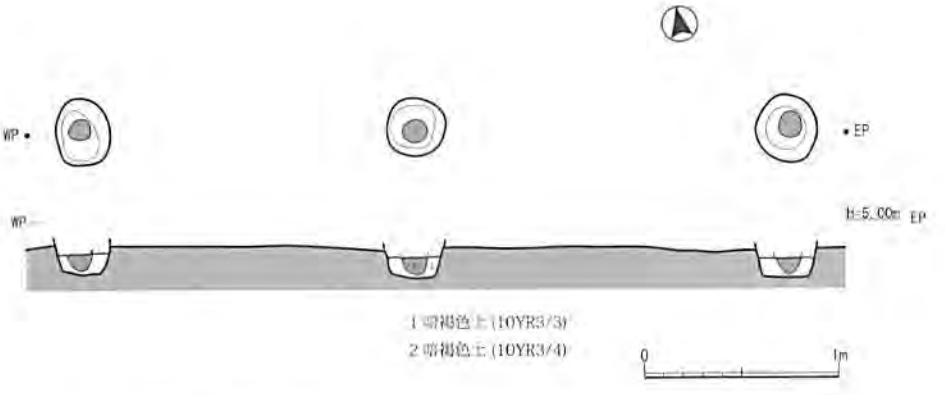


Fig.17 4 区柵列 SA001 平面図と土層断面図（中心の塗りつぶしは柱痕）

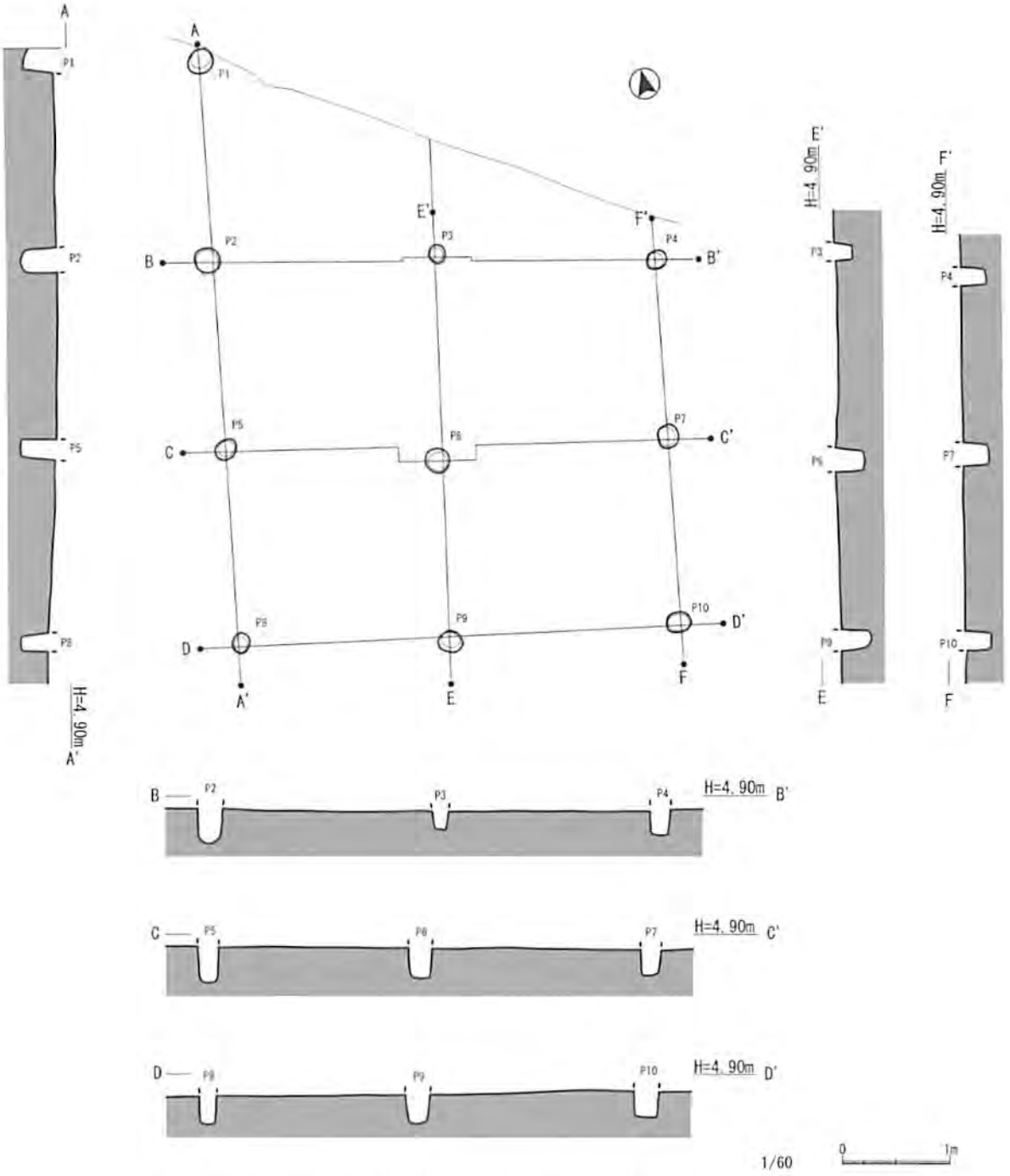
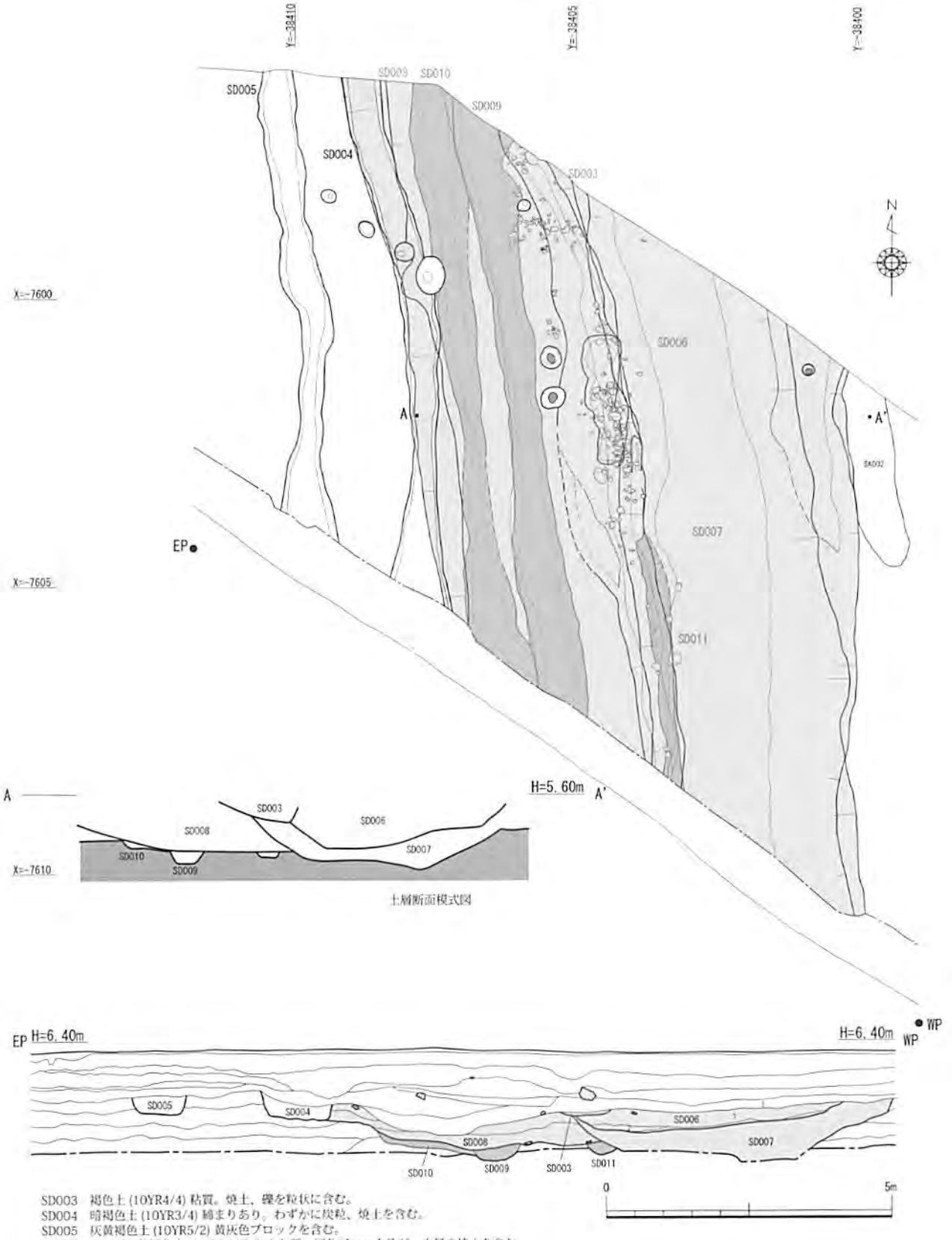


Fig.18　4区掘立柱建物 SB001 平面図と柱穴断面図

土坑 SK002　Ah-12・13Grid に位置する遺構。平面形状から溝状遺構と考えられたが、空間を区画していることや、溝として認定した遺構のように連続し伸びるという事が観察されず、溝としての機能が検証できなかったことから土坑として報告する。遺構は6層中から掘り込まれていたと考えられるが、7層上面で検出し調査をしている。検出段階での全長は 3.18m、最大幅 90cm、最深部での深さは 33.5cm を測る。一部北側へ延伸するが、平面形状が最大径部を中心に南側同様に狭くなりつつあるため、遺構完結部も近いと考えられる。土層断面は3層からなる自然堆積による堆積層が見られた。

土坑 SK003　Ak-15Grid で検出された遺構。平面形は楕円形を呈するが、底面で明瞭な下端は確認できていない。埋土は単層で、基本土層6層をベースとし形成されている。埋土中からは土師器片が4点出土しており、それらはすべて接合され、Fig.36 に図示している。



SD003　褐色土 (10YR4/4) 粘質。焼土、礫を粒状に含む。
SD004　暗褐色土 (10YR3/4) 締まりあり。わずかに炭粒、焼土を含む。
SD005　灰黄褐色土 (10YR5/2) 黄灰色ブロックを含む。
SD006　1.にぶい黄褐色土 (10YR4/3) シルト質。灰色ブロック及び、少量の焼土を含む。
　　2.にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 上層に比べ、やや粘性。
　　3.灰黄褐色土 (10YR5/2) 粘土>シルト質。鉄分を含む。
SD007　にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりあり。灰色粘土ブロック、軽石、マンガンを含む。
SD008　にぶい黄褐色土 (10YR4/3) やや粘性。マンガン、炭粒、焼土をわずかに含む。
SD009　灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 褐色の砂質土を含む。
SD010　にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 硬質。小粒のマンガンが混じり、焼土を粒状に含む。
SD011　にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 硬質。炭、焼土、マンガン粒が混じる。

Fig.19　4 区溝 SD003 から溝 SD011 平面図と土層断面図

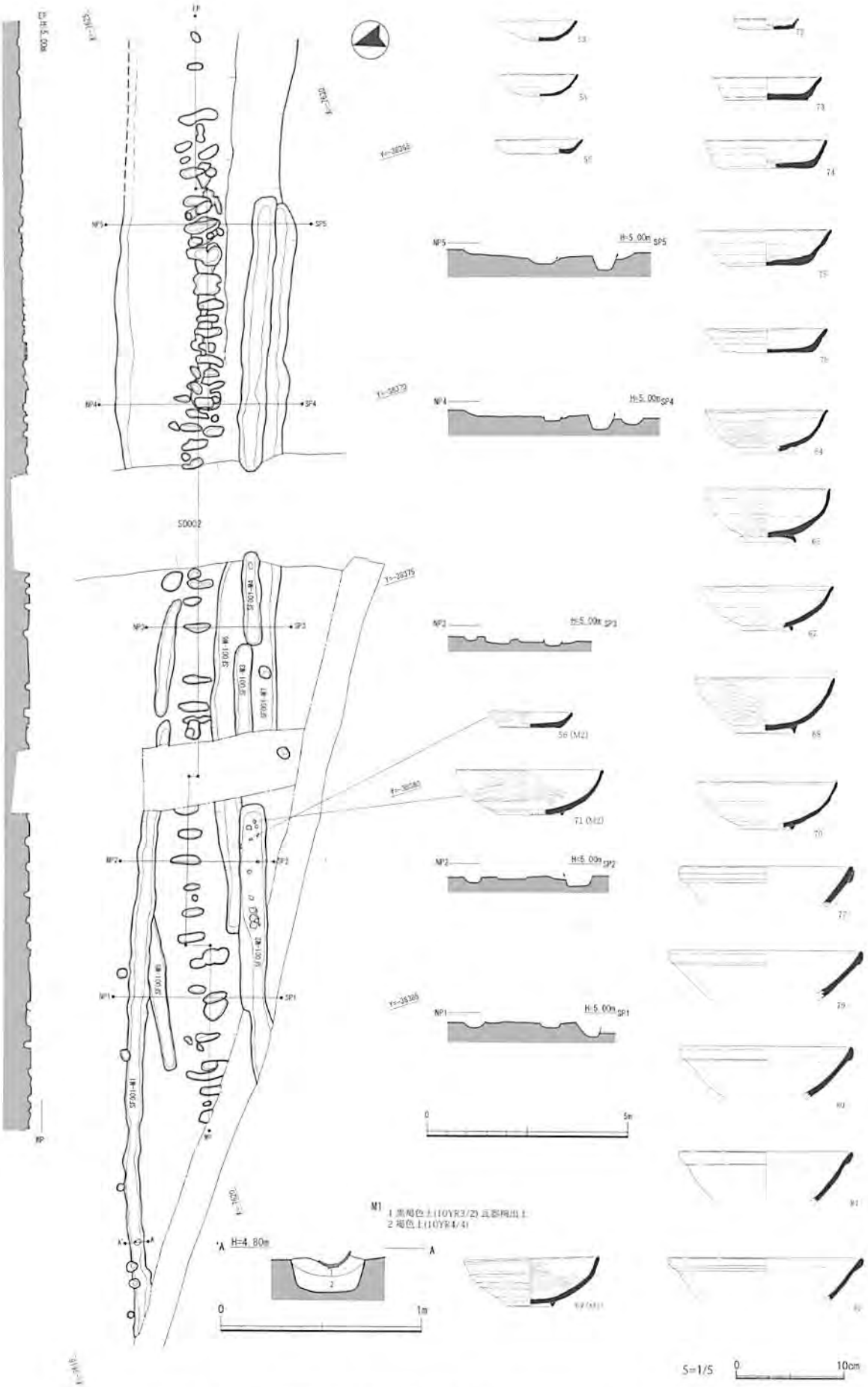


Fig.20　4 区道路状遺構 SF001 平面図と断面図及び出土遺物

土坑SK004　Am-19Gridに位置し、土坑SK005を切る状態で検出された遺構。平面形は長方形で長径1.61mを測る。遺構下端も長方形を呈するが、中心より西に寄った位置に楕円形の掘り込みがあり、その掘り込み埋土中から獣骨の大腿骨が1点出土している。獣骨は検出した段階で非常に脆弱であり、取り上げる際に崩れてしまったため分析等は実施していない。埋土はほぼ水平堆積の状態で、遺構が削平されていることを勘案しても埋め戻された可能性は低く、自然堆積による埋没と考えられる。

土坑SK005　Am-19Gridで検出した遺構。全長3.48 m、幅約60cm、遺構最深部で16.5cmを測る。遺構は土坑SK004及び道路状遺構SF001に伴う溝に切られている。また、同様の形状をした遺構(土坑SK006)が東に位置する。平面形は溝状の遺構であるが、溝としての機能等の検証ができていないため土坑として報告する。

土坑SK006　Am・An-19Gridで検出した遺構で土坑SK007の西に位置する。全長3.1m、幅約60cm、遺構最深度19.5cmを測る。土坑SK005同様に溝状遺構を呈するが溝としての機能を検証できないので土坑として報告する。

土坑SK007　An-19・20Gridにまたがり検出された遺構。西側で土坑SK008に切られている。平面形は不定形ではあるが一部において方形状を呈する。検出面からの掘り込みが浅いため、遺構からその性格を探ることはできない。底面東側が一段落ちるが比高差は少ない。

土坑SK008　Am-20Gridに位置し土坑SK007を西側で切る状態で検出された遺構。平面形はやや不定形であるが長径は1.17 mを測る。土層は3層に分層され、遺構底面において遺構内で形成されたとみられる焼土の広がりを確認した。焼土の厚さは表面にわずかに残る程度で、焼土の堆積及び灰の掻きだされた痕跡は確認できなかった。遺構半裁の際に半分を掘りすぎたため、焼土の広がる下端ラインは記録できていない。

土坑SK009　土坑SK010に切られ、Am・An-20Gridにまたがり伸びる遺構。蛇行する溝状の遺構とも見て取れるが、調査の結果、遺構の性格が判断できなかったため土坑として報告している。

土坑SK010　An-20Gridで検出した遺構。平面形は隅丸方形を呈する。断面での観察では柱痕等の柱穴遺構としての確認が取れなかったため土坑として報告する。下端はやや南に寄った位置で方形状を呈する。

土坑SK011　土坑SK010に切られる状態で検出した遺構。平面形は方形で下端も同様にほぼ方形を呈している。土層は上下2層に分層され、黒褐色から暗褐色の埋土を有し、焼土粒・炭化物などを両層とも含む。

土坑SK012　土坑SK010の東に隣接する遺構。平面形は楕円形を呈する。土層断面は自然堆積によると考えられる層が3層に分層されており、そのうち1・2層には焼土粒の混入が見られ、土坑SK010と類似する胎土が確認された。

土坑SK013　4区調査区東端、An-21Gridに位置する。溝SD001に長軸方向を切られ、下端付近がわずかに残る。平面形は長楕円で上端、下端ともやや不整形である。

土坑SK014　An-21Gridにて検出した遺構。平面形は方形であるがやや歪む。土層断面から柱穴掘り方であると考えられるが、周囲に関連する遺構が見られないことから土坑として報告する。埋土には4層の暗褐色系の土が入り、柱痕痕跡部のみ周囲より暗い黒褐色を呈している。遺構最下部には柱座になると考えられる部分に粘性の強い粘土が敷かれている。

土坑墓ST001　Ak-16Gridで検出した遺構。長径1.41m、最大幅1.29m、最深度10.1cmを測る。長楕円形を呈する土坑であるが、内部から人骨が出土したため土坑墓として報告する。遺構検出の段階で遺構上部は削平されていた。内部からは人骨が顔面をやや北に向けた伸展葬の状態で出土した。人骨は水分が多く脆弱で、取り上げるまでには至っていない。共伴遺物は出土していない。

土坑墓ST002　Ak-19Gridで検出した遺構。長径80.5cm、最深度18.5cmを測る楕円形を呈する土坑墓である。本遺構も検出時には人骨頭部が輪切りの状態で検出されているが、残存具合は悪い。人骨の出土状況を観察すると、顔面を西に向け腕、脚とも折り曲げた屈葬の状態で出土している。人骨末端の小骨は消滅しており上腕骨、大腿骨など太く丈夫な部位のみ出土した。人骨本体は水分が多く脆弱で、取り上げるまでには至らなかった。共伴する遺物はない。

土坑墓ST003　ST002と同じGridで検出した遺構。長径1.07m、最深度5cmを測る隅丸方形の土坑墓である。主軸は頭部をほぼ真北におき西向きに顔面をおく。人骨はST001・ST002同様に残存状況が悪く、取り上げるまでには至っていない。共伴遺物の出土はなかった。

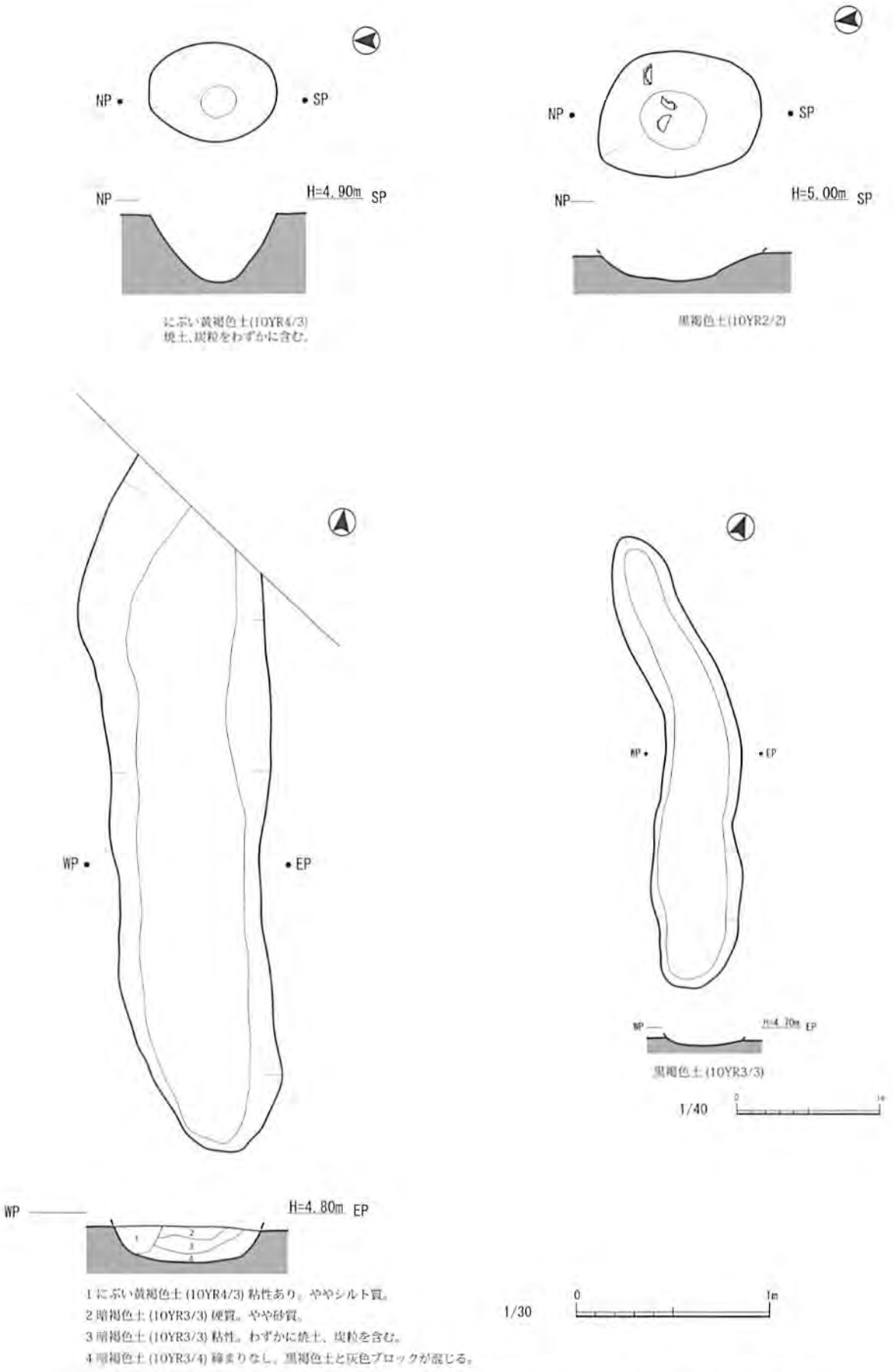


Fig.21　4区土坑SK001（左上）・土坑SK003（右上）・土坑SK002（左下）・土坑SK005（右下）平面図と断面図

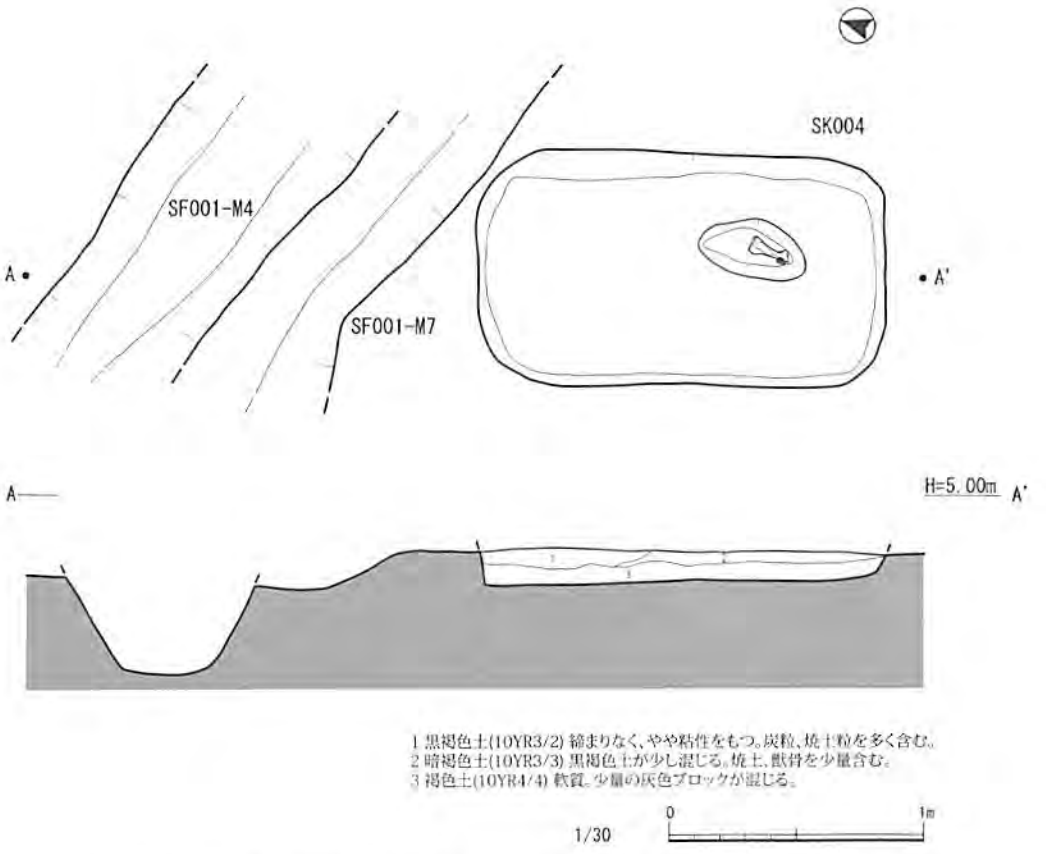


Fig.22　4 区土坑 SK004 と道路状遺構 SF001 の隣接状況、平面図と断面図

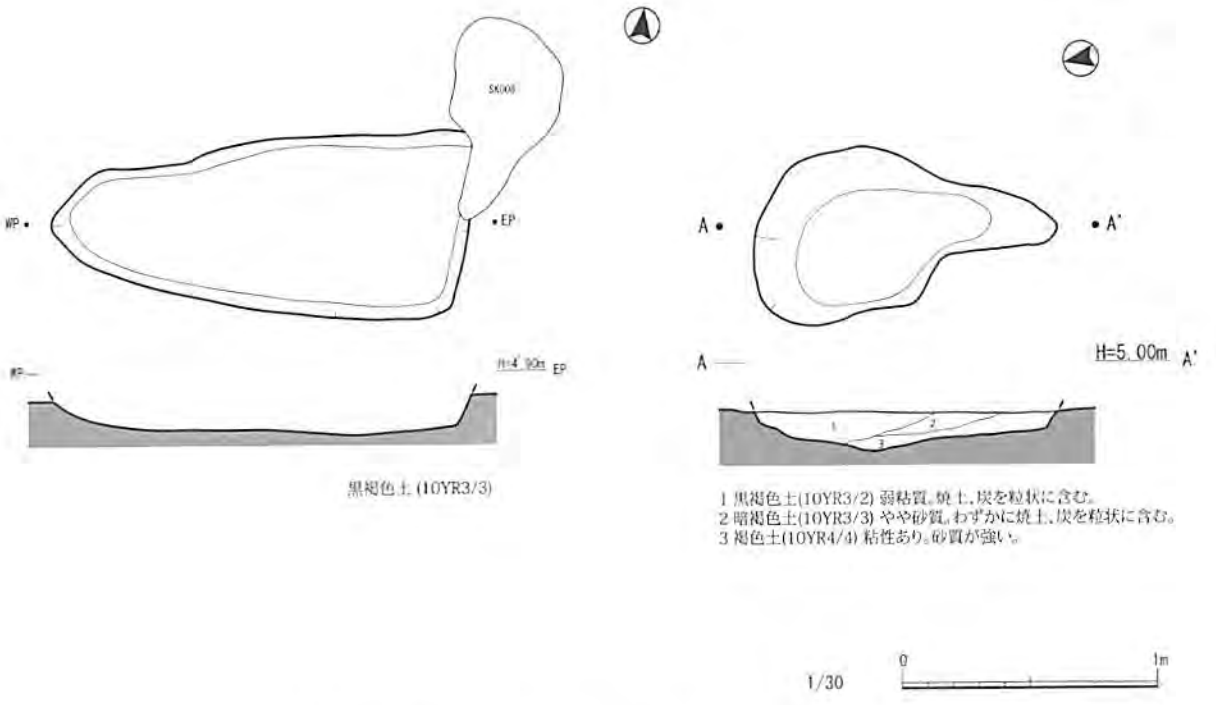


Fig.23　4 区土坑 SK007・土坑 SK008 平面図と断面図

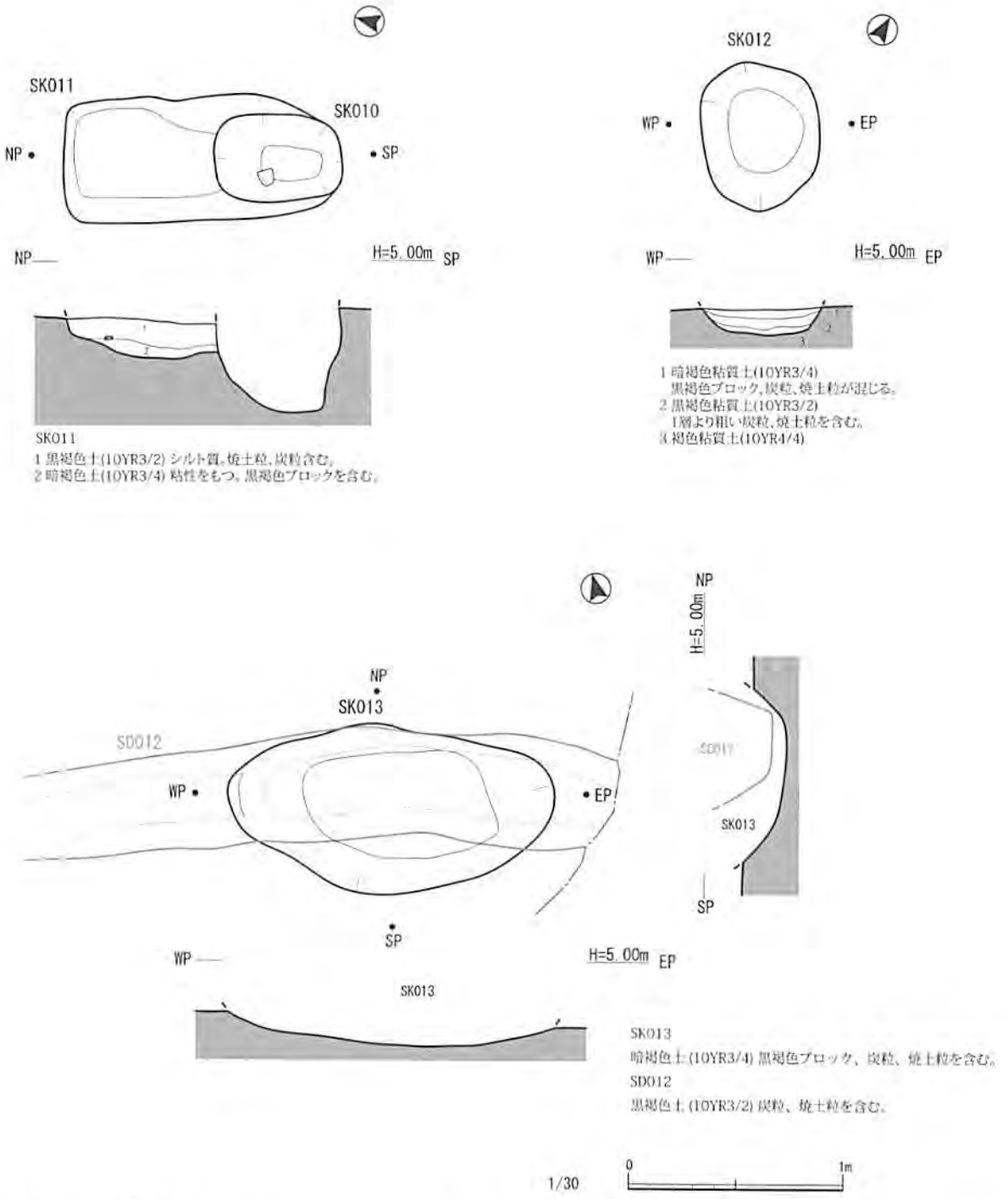


Fig.24　4区土坑SK010と土坑SK011切り合い状況（左上）・土坑SK012（右上）・溝SD012と土坑SK013切り合い状況、平面図と断面図（一部土層断面図を含む）

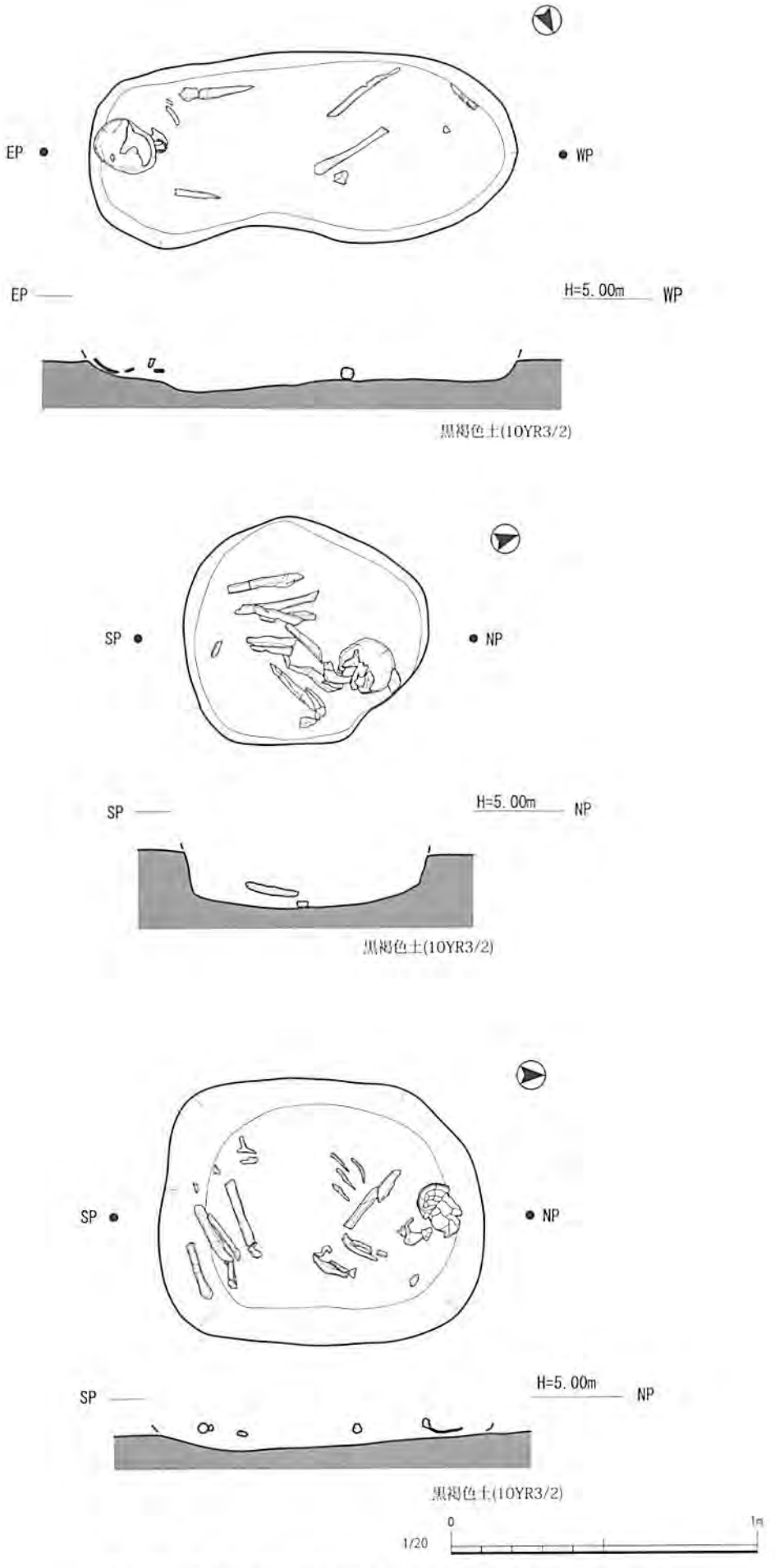


Fig.25　4 区墓 ST001・墓 ST002・墓 ST003 平面図と断面図

B　出土遺物

1区出土遺物 (1~32)

1　染付椀　見込みに染付の文様あり。底部と体部境界付近に圏線が巡る。また、高台は高く垂直に立つ。肥前系の広東椀か。1840年代の遺物と考えられる。

2　染付椀　外器面及び見込みに染付による文様が施されるが、文様の主題は不明。体部から底部にかけて肥厚する。高台は短く、断面形は四角を呈する。見込みに重ね焼き痕跡の目跡を残す。

3　染付（二次加工品）　本来は染付の椀及び皿であったことが想定されるが、周囲を打ち欠き平板状に成形しているため本来の形状は残していない。

4　陶器甕　口縁部から体部にかけての部位。口縁部はT字状を呈し、外側で丸みを帯び肥厚する。内器面では短部付近が強い横ナデにより押し込まれ、やや尖り気味の形状をなす。

5　滑石製品　棒状に成形され、周囲は細かく擦られる。両端とも折れた形状は見られず、角を整形した痕跡が残る。

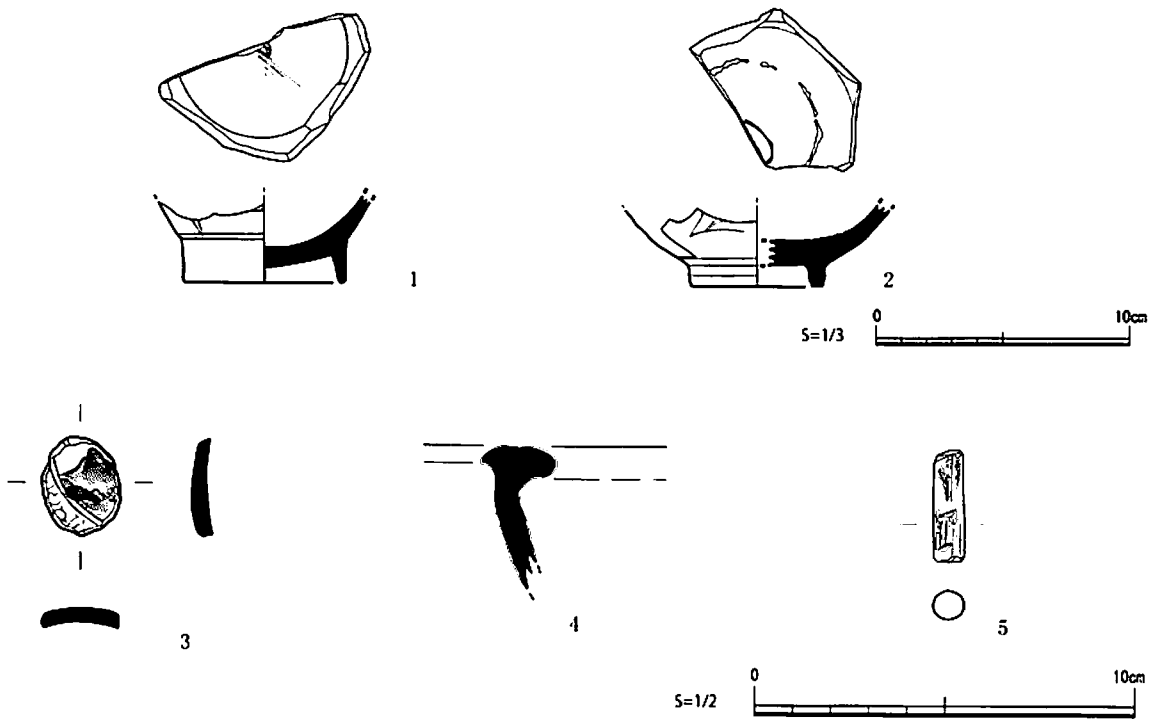


Fig.26　1区溝SD002（1～5）出土遺物実測図

6　杯蓋（須恵器）　体部に比較的高さのある体部を呈する。短部は短く、ほぼ垂直に折れ丸みを帯びる。つまみは逆台形状を呈し、上面は押え窪む。外器面に肌色の色調が入ることから、荒尾産須恵器で8世紀後半頃の遺物と考えられる。

7　皿（土師器）　体高の低い皿で、底面には糸切り痕が明瞭に残る。体部は短く開き立ち上がり先端は尖る。

Fig.27　1区土坑SK002（6）・土坑SK003（7）出土遺物実測図

包含層出土遺物（8～32）

8　皿（土師器）　体高の低い皿で、体部は短く開きながら立ち上がり、短部は丸く収まる。底部は糸切りで見込みは丁寧にナデる。

9　皿（土師器）　短くほぼ垂直に立ち上がる形状を呈する。底部から体部にかけて肥厚し、先端は短く尖る。底面は糸切り後に板目痕を残す。

10　皿（土師器）　体部の高さは低いが、底部付近で横ナデを施すため高さを感じさせる形状を呈する。口縁部は3段から成る細かな横ナデが観察され、やや内湾気味に立つ。底部は糸切り、板目を残す。

11　皿（土師器）　短く肥厚する立ち上がりが特徴的な形状を呈する。口縁は短く、先端は丸く収める。外器面底部は粘土のはみ出しが認められ、底部と体部の境でややせり出す。底部は糸切り後にナデを施し、糸切り痕を消すしぐさが認められる。

12　皿（土師器）短く立ち上がる体部は横ナデにより内器面側が強く押され、口縁短部に行く程内湾気味に丸みを帯びる。短部は小さく丸く収まる。底部は糸切り後、板目を残す。

13　皿（土師器）　底部、体部ともに他の同規模の皿に比べ厚みを持つ皿である。外器面には底部と体部の境に糸切り時の粘土はみ出しを残す。底部には糸切り後、板目を残す。

14　皿（土師器）　短く立ち上がる体部は弱い横ナデにより丸みを帯び、口縁短部に至る。短部付近は横ナデによる稜線が見られ、やや尖る。底面には糸切り痕が明瞭に残る。（拓本あり）

15　皿（土師器）　短く立ち上がる体部はほぼ垂直に立ち上がり、短部が丸く収められる。短部付近では横ナデにより稜線が見られ、やや尖る。底面には糸切り後に板目が残る。

16　杯（土師器）　高い体高を有する杯である。体部は横ナデにより整形され、底部から口縁短部にかけ緩やかに外反し立ち上がる。短部は丸く収まる。底部はヘラ切り後にナデが施される。中世後期頃の遺物と考えられる。

17　杯（土師器）　全体に緩い横ナデにより整形されているためか丸みを感じさせる器形を呈する。底部と体部の間に明瞭な変化点（稜）が見られない。わずかに口縁部で稜を示し短部整形をなす。粘土の厚みは底部は均一であるが、体部では短部下付近でやや肥厚する。中世の遺物と考えられる。

18　杯（土師器）　やや外反する体部は横ナデにより薄く整形される。短部付近でわずかだが更に開く。底部は厚みのある粘土を残し、中心部に行くに従い厚くなる。外底面はヘラ切り後板目を残す。中世の遺物と考えられる。

19　杯（土師器）　全体に丸みを帯びる形状を呈し、体部における立ち上がりもやや内湾する。短部は丸く収まり、短部外面にわずかに稜線を見ることができる。内外面共に横方向に磨き痕が観察される。外底面は回転ヘラ切り。全面に赤彩が施される。8世紀後半から9世紀前半頃の遺物と考えられる。

20　椀（黒色土器）　直線的に伸びる体部は丁寧な回転ナデが施される。短部付近で更に緩く外反し、短部は丸く収まる。体部と底部付近で粘土は最も厚くなる。高台は貼り付けで直立し、内器面のみ黒色を呈するいわゆる内黒である（A類）。9世紀中期の遺物と考えられる。

21　杯（須恵器）直線的に伸びる体部と丸みを帯びる底部を特徴とする杯である。口縁短部は丸く収まり、わずかに外面に稜を有する。8世紀代の遺物と考えられる。

22　杯（須恵器）　底部から体部にかけて直線的に伸びる形状が特徴的な遺物である。底部と体部の変化点付近には内面にわずかに屈折する稜線が認められる。底部は断面でやや粘土が肥厚する傾向がある。高台は貼り付けで、短くやや開く。

23　椀(青磁）厚みがあり、きめの細かな土で整形されている器である。残存部は底部のみであるが椀である。高台は削り出し高台で垂直に立つ。外底面に焼台の土が残る。龍泉窯ⅡC期。

24　椀（青磁）　厚みがあり、きめ細やかな土で整形されている器である。残存部は23同様に底部のみである。見込みには中心にスタンプが残り体部と底部の境付近に二重圏線が巡る。龍泉窯ⅡC期。

25　椀（青磁）　24と類似する胎土を有し、見込みにスタンプを有する器である。短く直立する高台は丁寧に削りだされる。龍泉窯ⅡC期。

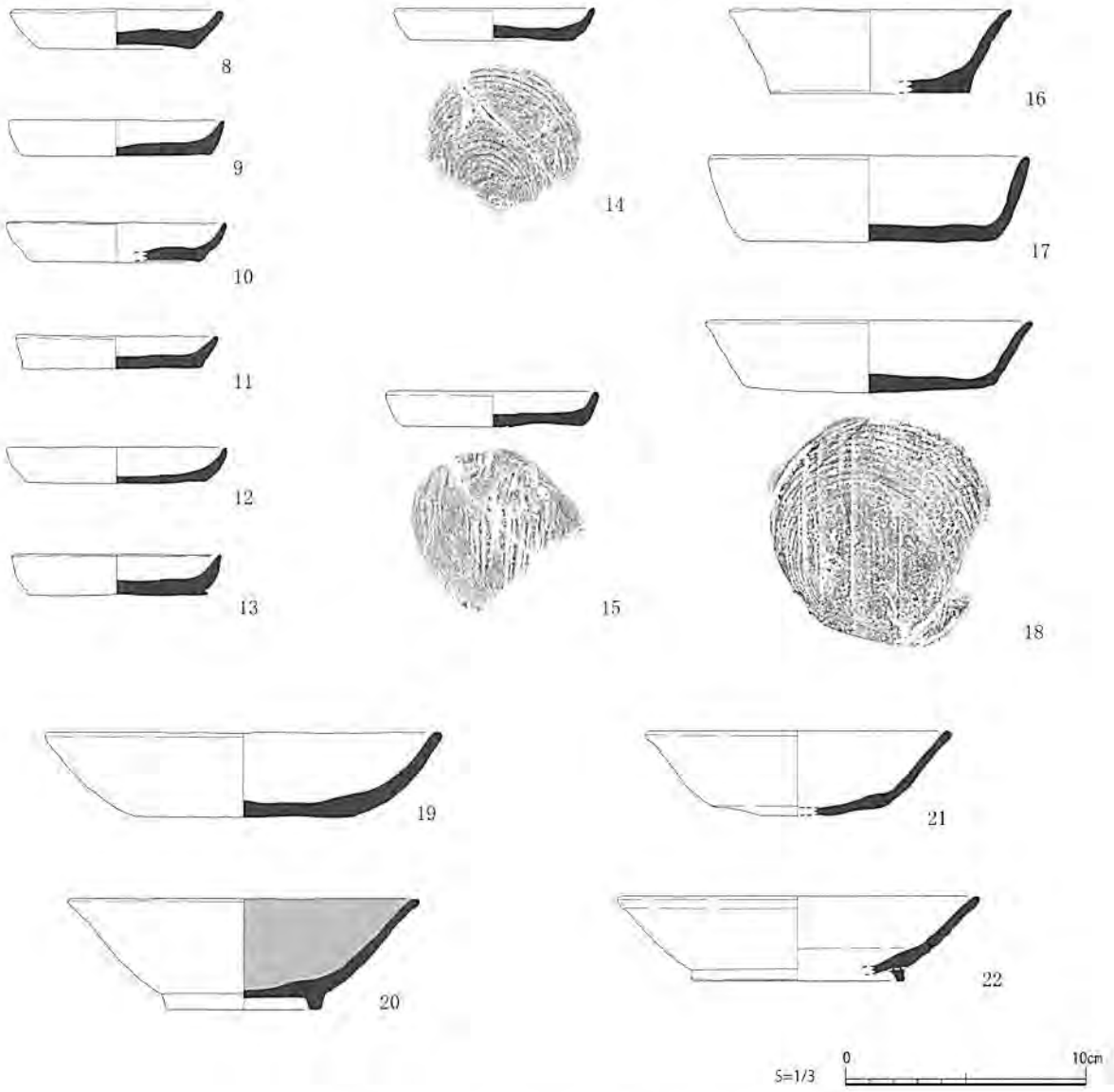


Fig.28　1区包含層（8～22）出土遺物実測図－①

26　椀（青磁）底部から体部の下半分まで残る部位。鎬連弁であったと考えられる縦方向の浅い削りが高台近くまで残る。見込みには重ね焼きの跡が釉薬が剝がれた状態で残る。また、外底部にも焼台の土が残る。龍泉窯Ⅱ C 期。

27　椀（白磁）　口縁から体部にかけて残存する。口縁外面部に厚く盛り上がる玉縁を有する。白磁Ⅳ類。

28　椀（白磁）　口縁のみ残存する部位。玉縁部は外面に粘土を張り付けた痕跡が残る。玉縁下近くでやや厚みを帯びる。白磁Ⅳ類。

29　椀（白磁）　口縁から体部上半が残る部位。口縁短部から体部にかけてほぼ直線的に伸び、口縁短部に小さく玉縁を施す。白磁Ⅳ類。

30　椀（青花）　口縁短部から体部に至る部位である。器壁は薄くほぼ同一の厚さを保っている。外器面には円文からなる細やかな文様が施されるが、その内部に大きな空間を占有した別の文様空間が現れる。文様の意味は不明。

31　滑石製品　短く両端を切られ整形された管玉状の本品は、やや大きめの玉類を思わせる遺物である。

32　滑石製品　横置き使用目的を想像させる棒状の製品である。横置きの用途を想定し観察すると、上辺が直線的で下辺が緩やかな円弧を描く状態を残す。両辺ともその中心・稜上に筋状の小規模な溝を有する。重心の掛かり方が円弧を示す下辺に位置するため、用途は重心を下に置く必要のある道具の一つと考えられる。

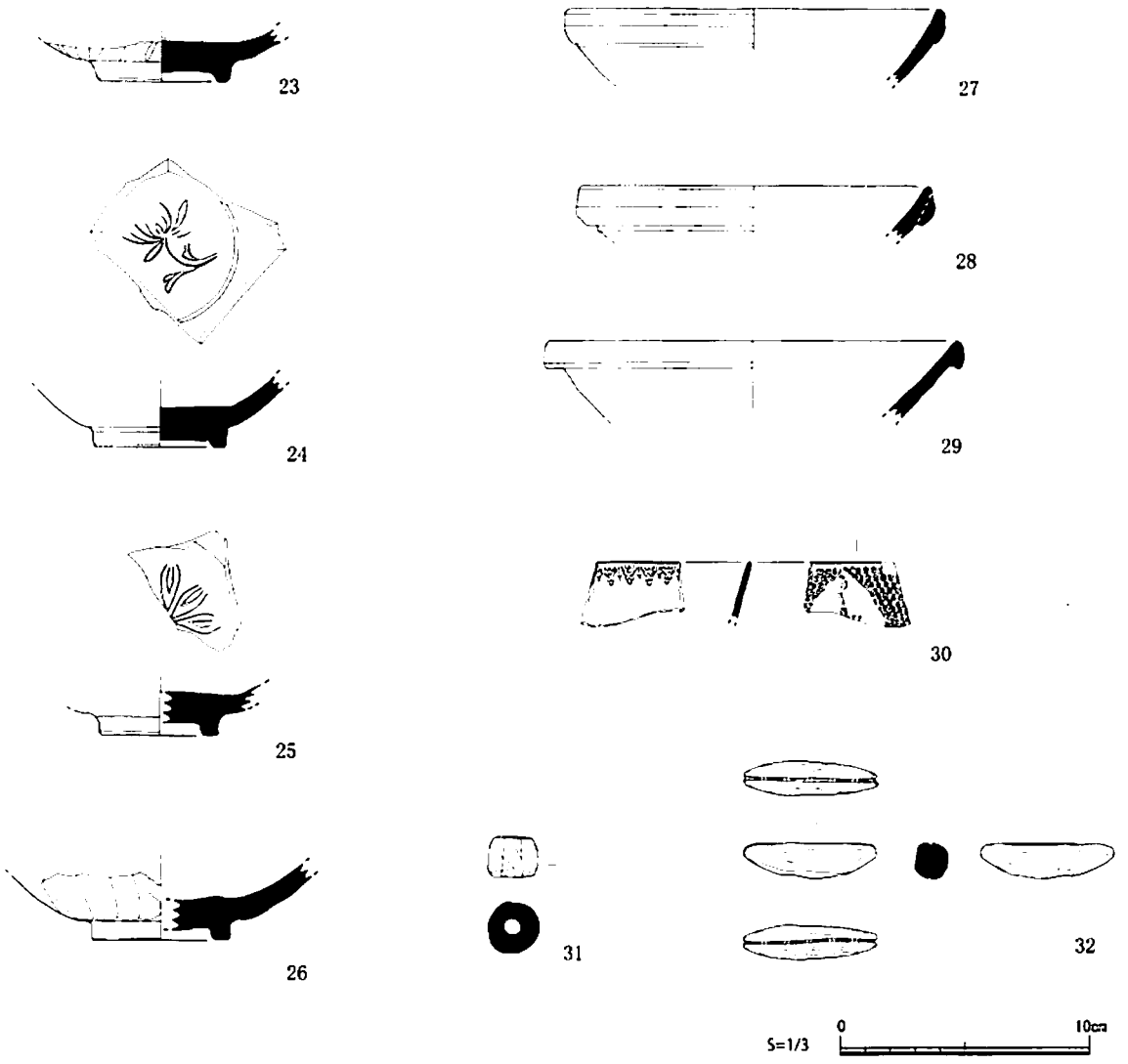


Fig.29　1区包含層（23～32）出土遺物実測図－②

2区出土遺物 (33~36)

33　鉢（中世須恵器）　口縁から体部にかかる部位である。口縁部断面は三角を呈し、体部は直線的に伸びる。口縁短部は回転ナデにより整形され丁寧に作り込まれる。東播系中世須恵器。

34　鉢（中世須恵器）　口縁から体部に伸びる部位である。33同様に口縁断面は三角を呈する。ただ、短部下内面において強い横ナデがあり、内に向く短部がやや尖り気味に立つ。口縁外面に重ね焼き痕を残す。東播系中世須恵器。

35　椀（青磁）　薄く整形された器で、椀として記すが他の器種である可能性も高い。緩やかに内湾する器壁は口縁直下で短くそして緩く外反する。短部は丸く収まるが丁寧に施釉されており、先端まで釉薬がかかる。上田編年D-Ⅱ。

36　皿（青磁）　平板状に残る底部のみの部位である。わずかに体部に向い立ち上がるのを見てとれる。見込みには櫛描文が大胆に描かれ、厚く施釉される。同安窯Ⅰ-3b。

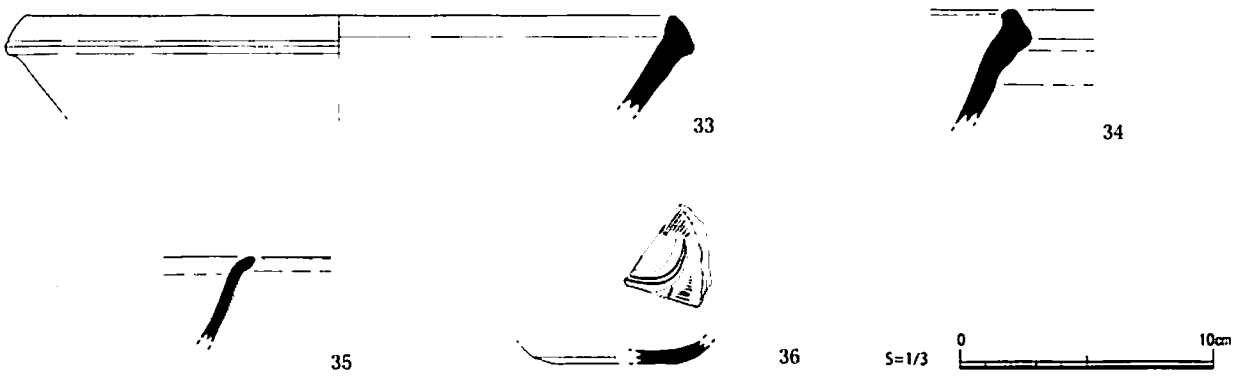


Fig.30　2区（33～36）出土遺物実測図

3区出土遺物（37～43）

37　杯蓋（須恵器）一見して大きな輪状のつまみに特徴を有する蓋である。体部には大きく2条からなる横ナデ整形が施され、凸縁短部で短く折れる。緩やかな円弧をなす天井部のやや先端付近に強いナデを有した結果、尖った貼り付け粘土帯が大きく巡る。外器面の一部に赤褐色を呈する部位が残り、須恵器産地の特徴の一つを残している。荒尾産とみられ、8世紀後半から9世紀初頭。

38　杯（土師器）　平底を呈し、体部は直線的に開き立ち上がる。短部付近で稜を有する以外は、横ナデによる稜線は丁寧にナデ消される。わずかに横ナデ跡に盛り上がりを感じるが、稜で表現するには至らない。全体に赤彩され、日常雑器としての用途とは感じられない資料である。8世紀後半と考えられる。

39　皿（中世須恵器）　土器の表面を観察する限り、焼きの良い土師器と見まがうばかりの須恵器である。当初、土師器として整理していたが、本器種の形状が県内において土師器にはないことから、還元が不十分な須恵器であると判断し報告する。整形は横ナデを基本とし、底部に糸切り痕を残す。平底で体部から口縁にかけては強く開き、短部近くで更に反る。糸切りを施すことから中世期の遺物と想定する。

40　杯（土師器）　平底で直線的に伸びる体部を有し、体部中位から口縁にかけてやや反る。短部は丸く収まり、内外面ともわずかに稜線を認める。底面には糸切り痕が残る。

41　椀（青磁）　底部に向けてやや厚みを増す体部下半から口縁部に至る部位である。外器面には鎬連弁を口縁下まで大胆に施す。体部中位まで緩やかに丸みを帯びるが、中位から向きを変え口縁に向けて直線的に伸びる。釉薬は厚く、丁寧な作りをなしている。龍泉窯Ⅱ C。

42　皿（青磁）　外底部にやや上げ底気味に空間を持ち、わずかに円周にのみ接地面を有する。器壁は厚くきめ細やかな土を有する。見込みには乱雑にも見てとれる短い櫛描文を幾筋も施す。同安窯Ⅰ -3b。

43　皿（白磁）　体部の立ち上がりが緩やかなことから高台を有する皿と報告する。見込みには蛇の目状に釉剝ぎが施され、重ね焼きの痕跡を見てとれる。高台は削り出しにて整形され、短部は面取りし丁寧な仕上げがなされる。釉は薄い。白磁Ⅲ類 -1。

4区出土遺物（44～95）

44　椀（土師器）　球体をなす体部には内部から外に向かって押し出したコテあて痕跡が残る。外器面には削りは見られず、内器面にも磨き等は確認できない。外器面の底部と体部の境には押し出しによる境とみられる粘土のひび割れによる開きが見られる。底部には糸切り後、板目が残りその上から高台が貼り付けられる。

45　椀（青磁）　厚みを帯びる器壁を有し、短く垂直に直立する高台を有する。高台は削り出し整形による。比較的体部の開きと立ち上がりが早いため、小ぶりな椀である可能性が高い。龍泉窯Ⅰ。

46　椀(白磁)　玉縁部を含み体部の一部まで及ぶ部位。口縁内面には横ナデ及び指押えがありやや内湾する。白磁Ⅳ類。

47　椀（白磁）　46同様に玉縁部を含み体部上半まで及ぶ部位。46に比べやや器壁が薄く復元径も大きい。白磁Ⅳ類。

48　椀(青磁)　ほぼ1個体(2/3以上)残存する遺物。外器面には鎬連弁が口縁直下から高台際まで施される。

見込みには底部に及び位置に１条からなる圏線が巡り、中心には印刻文による花紋が描かれる。高台は削り出し高台。龍泉窯Ⅱｂ類。

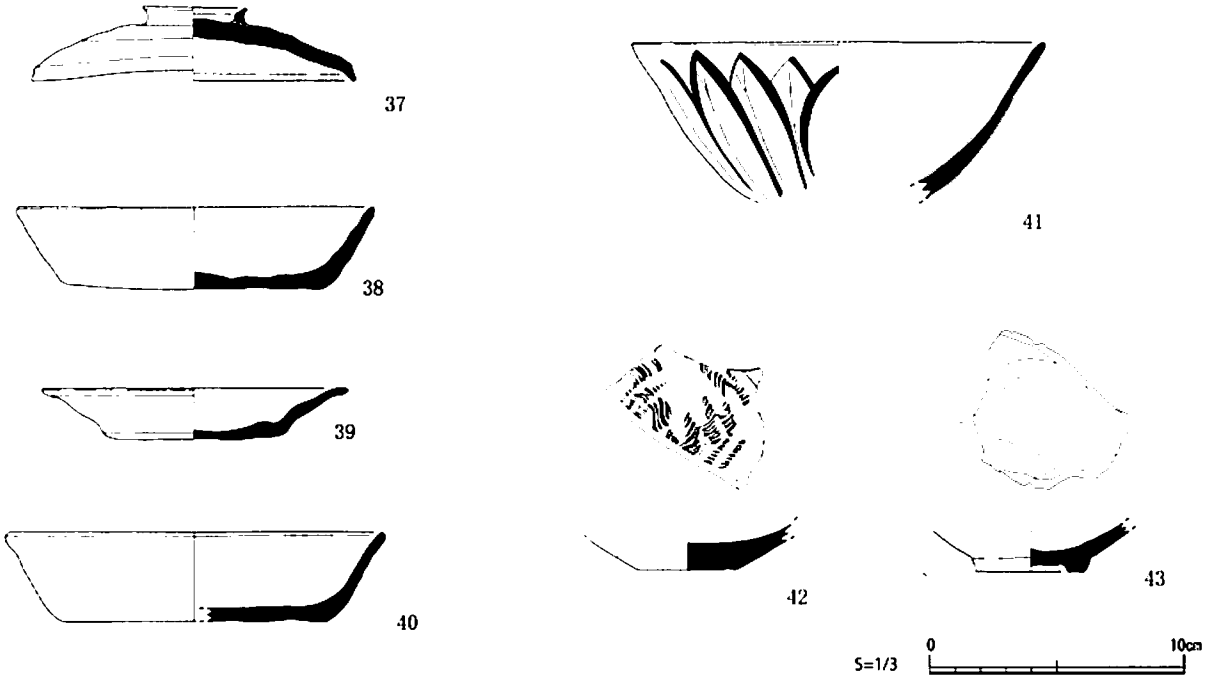


Fig.31　３区（37～43）出土遺物実測図

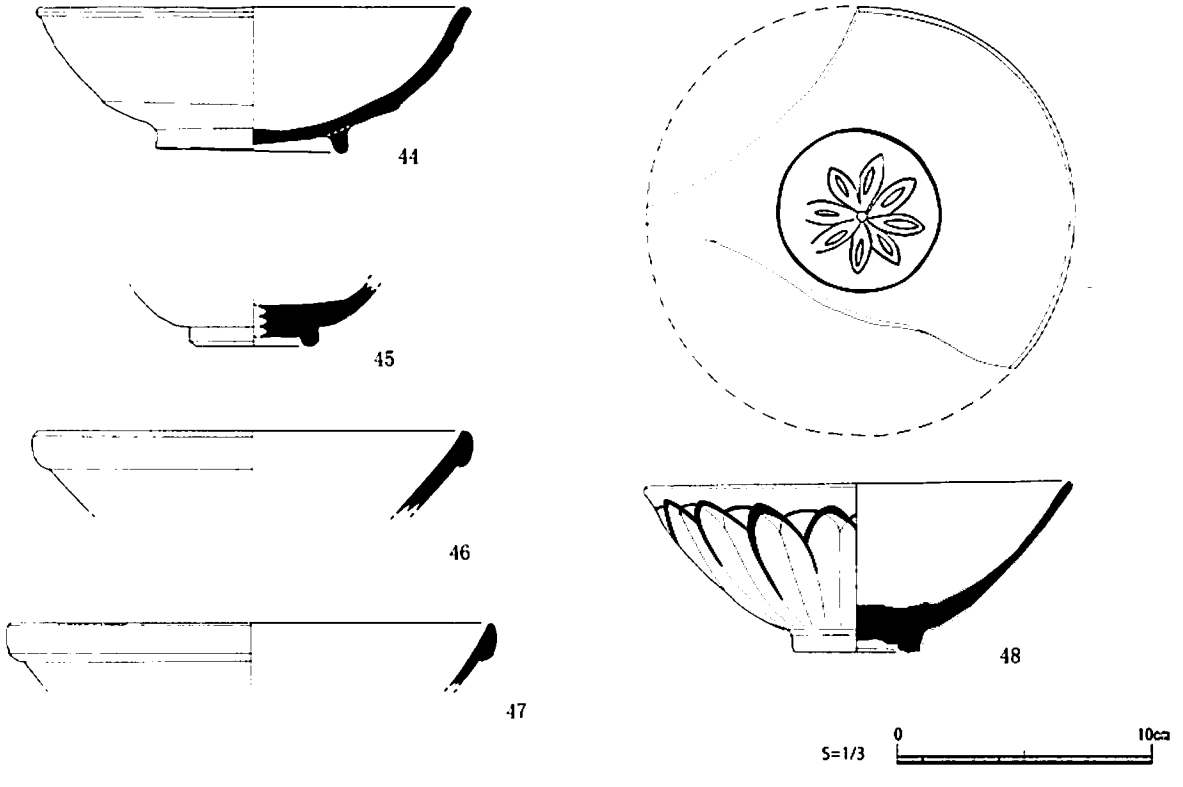


Fig.32　４区溝 SD004（44・48）・溝 SD007（45～47）出土遺物実測図

49　火鉢（瓦質土器）　ほぼ垂直に直立する口縁から体部に及ぶ部位。体部には３条からなる突帯が巡り、１段目にスタンプ文が、２段目にランダムに縦線が、３段目に横方向に１単位が３重からなる波状線が施文される。16 世紀から 17 世紀と考えられる。

50　鍋（瓦質土器）　外器面は指押さえ後にナデ、底部から底部に至る範囲にヘラ削りを施す。外底面は未調整でありやや上げ底を呈する。平面形状の取っ手が２箇所に張り付けられる。九州北部域（肥前・筑後）に多くみられるタイプで、熊本（肥後）地域で普遍的に分布する形状ではない。

51　擂鉢（瓦質土器）　直線的に伸びる体部は中位よりやや上部で肥厚し、やや内湾する。内器面に擂目が残るが、同一方向に擂目は入らない。外器面には指押さえ後に刷毛目による器面調整が施される。熊本でも県北部域に多く分布することが知られている器種である。

52　壺（陶器）　短く直立する口縁は短部で外に折り曲げられ肥厚する。体部は球体状に外に開いていく。体部上部には４条かならなる回転刷毛目が３段にわたり巡る。備前の壺で 15 世紀頃か。

53　丸底皿（瓦器）　外器面に指押さえ後、手持ちナデを施す。内器面には体部整形時のコテあて痕が残り、顕著な磨きを見ることができる。丸底を帯びる底部はわずかに残る糸切り痕の同心円状の跡を残し、押し出しによる技法を用いて整形される。

54　丸底皿（瓦器）　外器面指押さえ後ナデ、内器面には磨きあり。底部は糸切り後ナデを施す。体部中位に押し出したことで粘土の開きを見ることができる。また、外器面中位下に指押さえ痕あり。

55　皿（瓦器）　底部は糸切り後磨き、体部はやや外に開き短部は丸く収める。内外器面は丁寧に磨きを施す。

56　皿（瓦器）　内外面ともに磨きを施し、外底面は糸切り。一部にナデの方向を示す痕跡が残る。12 世紀末から 13 世紀頃。

57　椀（黒色土器）　外器面ヘラ削りをみてとれるが摩耗しているので磨きは不明。内面ヘラ磨き。整形及び調整は瓦器椀かと見まがうが、瓦器椀とは焼成の状態・色調・胎土（石英を多く含む）に違いを見てとれ、黒色土器と判断した。なお、内面が外面に比べ黒色を呈するため A 類と報告する。

58　椀（黒色土器）　本資料も製作技法は瓦器椀と同じ手法をとる。内面に押し出しの痕跡を有し内外面ともにヘラ磨きを施す。内外面ともに黒色を呈することから B 類。

59　椀（瓦器）　外器面の回転ヘラ削りを高台近くまで施し、その上からヘラ磨きをなす。内器面はヘラ磨きを前面に施すが、わずかだが重ね焼きのくぼみを観察することができる。肥後型瓦器椀。

60　椀（瓦器）　外面には整形し押し出す前の土器底部痕がわずかに残る。ヘラ削りは施さず、指押さえによる調整痕を明瞭に残す。高台は短く、丁寧な貼り付け調整が施される。

61　椀（瓦器）　外面には押し出す前の旧体底の底部境が残る。体部中位から下位にかけてはヘラ削りは見受けられないが、指押さえ痕も観察されない。底部付近には内面から押し出した際に縦方向にひび割れた粘土痕が残る。内器面には一方向に細かな磨きが施される。

62　椀（瓦器）　外面は非ヘラ削りでその部位には指押さえ痕が残る。体部中位には磨きが施される。内面にはコテ当て痕があり、それが消えるように荒い磨きが施される。

63　椀（瓦器）　外面には指押さえ調整後に、体部中位より下位にかけてヘラ削りが施される。内面にはコテ当て痕がわずかに残りその上部から磨きが行われる。外底面中央部にはヘラ書きによる「×」印が残る。

64　椀（研磨土師器）　体部は押し出しているがその痕跡は不明。外面はナデ後に磨きを施す。口縁短部はやや外反し短部を丸く収める。

65　椀（研磨土師器）　内面に指押し出し後に磨きあり。底部付近に指押さえの凸凹が明瞭に残る。製作技法は黒色土器、瓦器椀等と同じで同安窯系の器形に類似する。

66　椀（瓦器）　外面には体部中位より底部にかけてヘラ削りを施し、調整とは言えないほどの指痕が残る。凹部はヘラ削りが及ばないことから指痕が残るが、明瞭なヘラ削りから肥後型瓦器椀と言えよう。

67　椀（瓦器）　外面に指押さえ痕がわずかに残るが、回転ヘラ削りの技法で作成される。内面はコテ当て痕が残る。器表面に小さく胎土の一部が剥げた凸凹が残る。

68　椀（瓦器）　外面は非ヘラ削りで最終的に指押さえ後に磨きを施す。内面は荒れているが磨きあり。

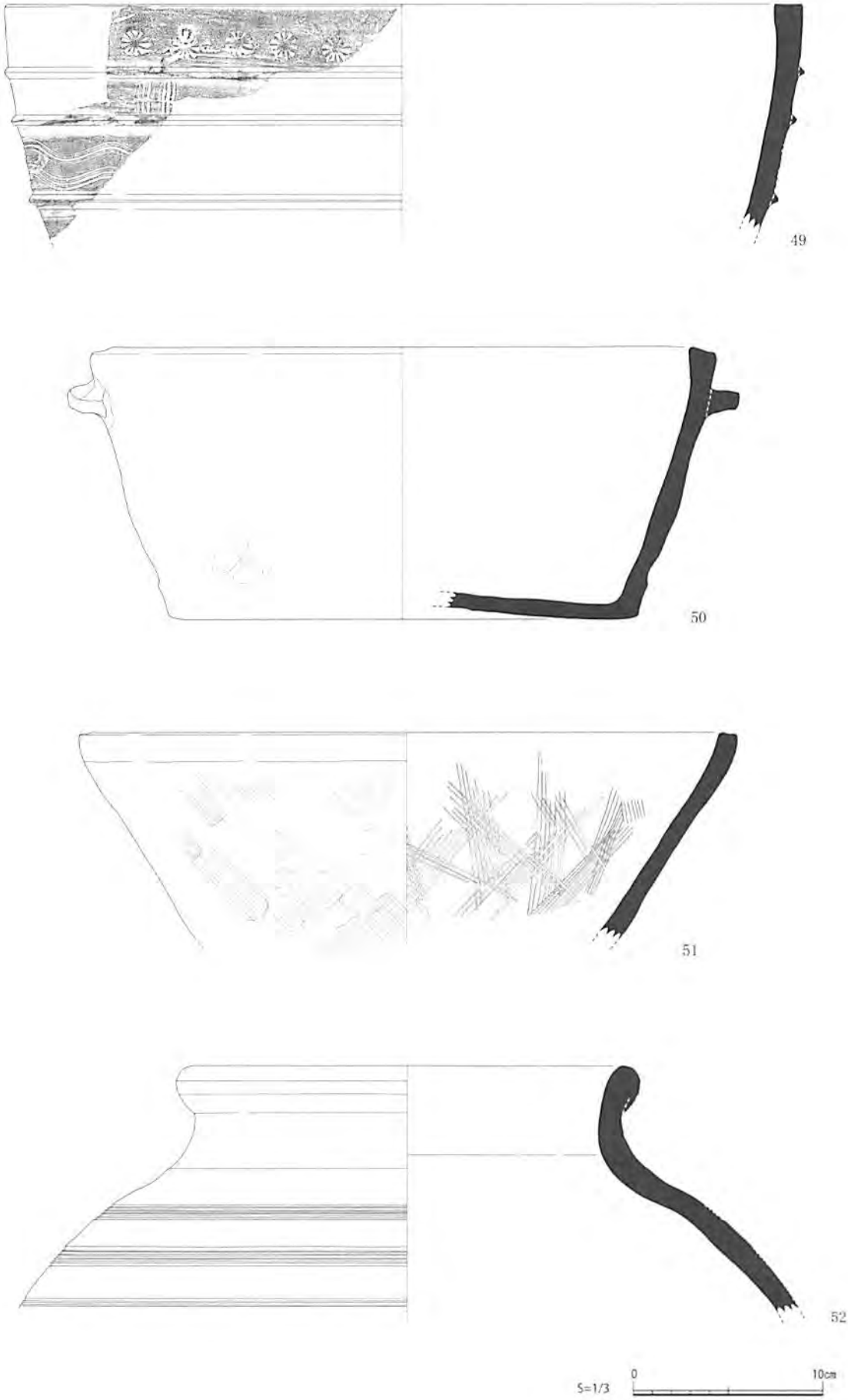


Fig.33　4 区溝 SD006（49・50）・溝 SD007（51）・溝 SD008（52）出土遺物実測図

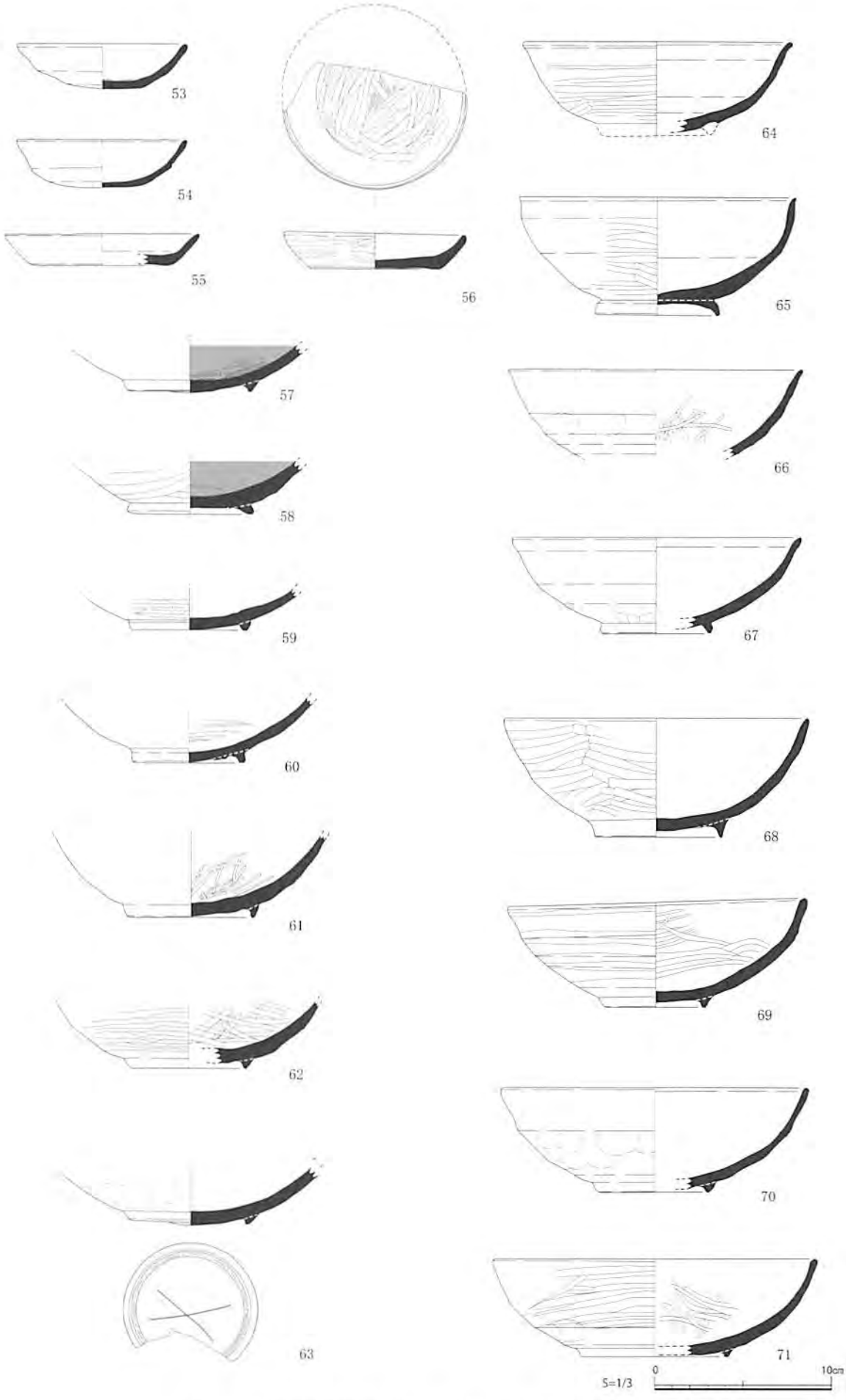


Fig.34　4 区道路状遺構 SF001（53 ～ 71）出土遺物実測図－①

69　椀（瓦器）　外面は体部の高いところから回転ヘラ削りが顕著に施され、内部はコテ当て痕が残り、重ね焼き痕が明瞭に残る。重ね焼き痕はやや斜めに重ねられ、重なり部にあたる灰白色と焼成時に外部に当たる暗灰色部とに明瞭に色分けされる。4区道路状遺構SF001より出土。

70　椀（瓦器）　外面指押さえ後回転ヘラ削り、磨きは不明瞭。内面はやや荒れているが磨き痕がわずかに残る。

71　椀（瓦器）　外面指押し出し後に回転ヘラ削り。その後更に回転ヘラ磨きを施す。内面は磨きあり。

72　皿（土師器）小型の皿。緩やかに直線的に伸びる器壁は端部付近でやや外反する。底部は糸切り痕を明瞭に残す。

73　皿（土師器）　底部に糸切り痕を残す直線的に伸びる体部は直線的に外反し、短部付近でやや肥厚し丸く収まる。体部には横ナデによる成型を窺わせる凹凸を残し、底部付近で強く押さえる。

74　皿（土師器）　外底面に糸切り痕を残し、肥厚する底部を呈する。中央部に向かいやや横ナデによる押えが強く薄くなる。体部は直線的で、端部は丸く収める。

75　杯（土師器）　同時に出土している土師器資料に比べ体部に深みを有することから杯と報告する。体部は直線的で横ナデによる痕跡を断面に明瞭に残す。底部外側はやや肥厚し中心部は薄い。

76　皿（土師器）　底部に明瞭に糸切り痕、板目を残す資料。体部にはやや幅の狭い横ナデ痕を残す。底部は断面においてやや薄く、体部から口縁にかけてやや肥厚する。

77　椀（白磁）　太宰府編年Ⅳ類、山本C期。玉縁付近が厚く丸みを帯びる。11世紀後半から12世紀前半。

78　椀（白磁）　太宰府編年Ⅳ類、山本C期。11世紀後半から12世紀前半。

79　椀（白磁）　太宰府編年Ⅳ類、山本C期。11世紀後半から12世紀前半。

80　椀（白磁）　太宰府編年Ⅳ類、山本C期。11世紀後半から12世紀前半。

81　椀（白磁）　太宰府編年Ⅳ類、山本C期。11世紀後半から12世紀前半。

82　椀（白磁）　太宰府編年Ⅳ類、山本C期。11世紀後半から12世紀前半。

83　椀（白磁）　太宰府編年Ⅳ類、山本C期。11世紀後半から12世紀前半。玉縁口縁を有する椀の底部にあたる。

84　椀（白磁）　太宰府編年Ⅳ類、山本C、D期。削り出し高台を有する。福建産の可能性あり。

85　皿（青磁）　同安窯系、太宰府編年Ⅰ-2b期。

86　瓶（須恵質陶器）　器種については確定できたものではないが、おそらく長胴の瓶と考えられる。断面の丸みから、最大径を有する肩部付近の部位と想定した。外面並行たたき後にヘラ書きにより文字が記される。文字の判読意味不明。

87　不明石製品（滑石）　方柱状の石材に2箇所穿孔する。外面は丁寧に面をとり磨かれる。用途等は不明。

88　不明土製品（土師質）　一見勾玉状の遺物と見えるがおそらく三足土器の脚部である可能性が高い。

89　杯（土師器）土坑SK003より出土している杯である。底部は糸切りされたのちに粗くナデられている。一見高台のようにも見えるが糸切り後の粘土のはみ出しを残す。

90　杯（滑石）　きめ細やかな岩質を呈する滑石を杯状に削り込み成形される。口縁部に見られる欠損した部分が一部磨かれているが意図的ではなさそうである。

91　皿（土師器）　図面上では片口のように図示し表現をしているが、粘土紐の継ぎ目が落ちている可能性が高い。

92　椀（青白磁）　高台径は小さく、底部にはわずかに高台削り出しを認める。見込みの文様は型押し、陽刻による。外面底部は糸切り。中央部に板目痕が残る。

93　椀（白磁）　太宰府編年Ⅴ類。

94　椀（瓦器）　底部高台直上に指押しによる痕跡を残すが、体部中位より回転ヘラ削りを施しているためいわゆる肥後型と呼称される瓦器椀である。外面は指押し出し後、回転ヘラ削り後、回転ナデ。

95　鉢（東播系須恵質陶器）　外面口縁部直下付近で重ね焼きの痕跡が残る。体部は重ねの内部に当たることから、やや灰白に発色する。

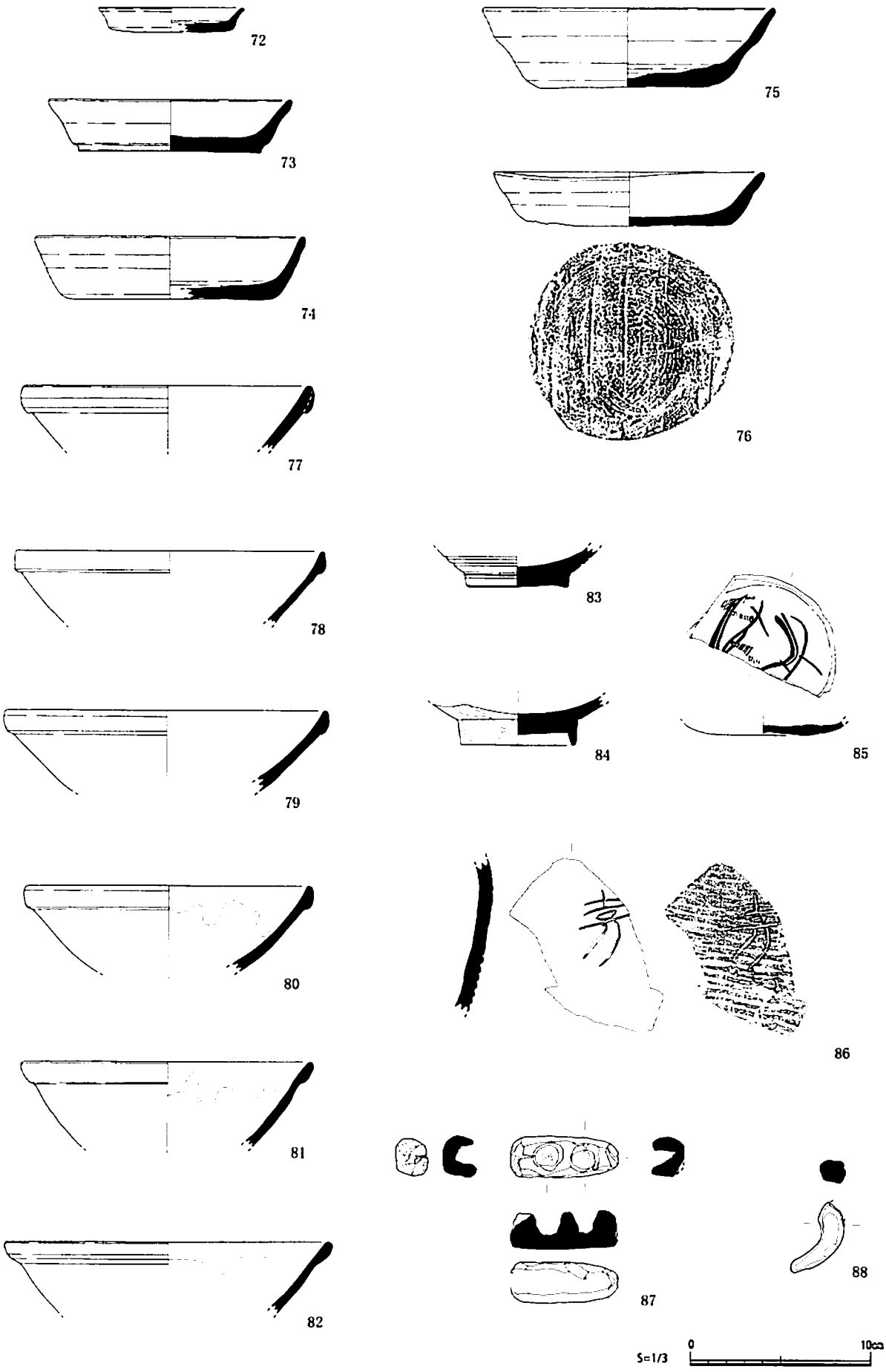


Fig.35　4 区道路状遺構 SF001（72～88）出土遺物実測図－②

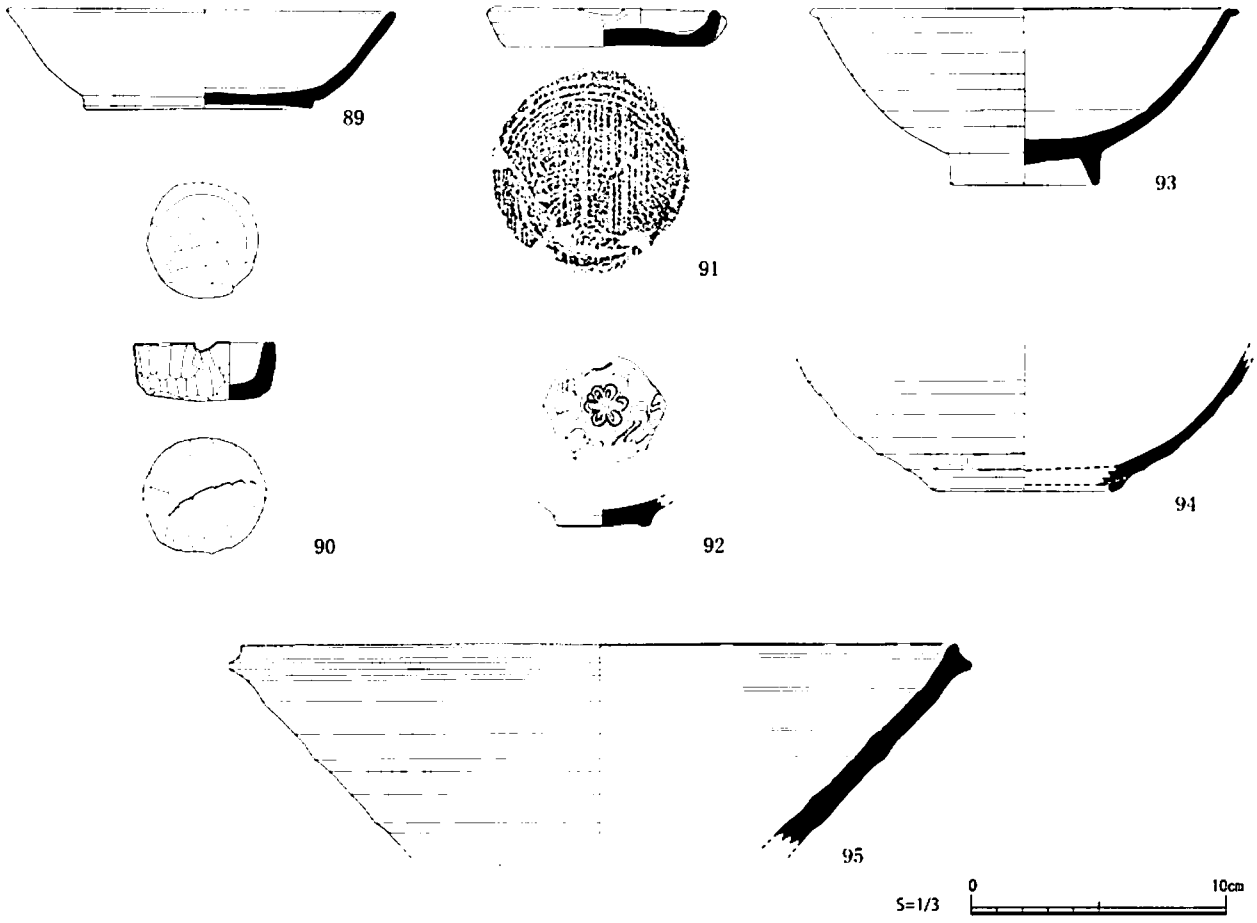


Fig.36　4区土坑SK003（89）・土坑SK017（90）・調査区（91～95）出土遺物実測図

遺物番号	Fig.No.	PL.No.	遺構番号	種別	器種	出土地点		法量（cm）				色調	
						層	注記	口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面
1	26		SD002	染付	椀	2	Bn-59	－	(6.3)	－	3.4	light greenisn giay3G7.5/1.0	light greenisn giay3G7.5/1.0
2			SD002	染付	椀	3	Bn-59	－	(5.2)	－	3.2	yellowish gray 5Y7.5/1.0	yellowish gray 5Y7.5/1.0
3			SD002	染付	－	2	Bn-59	－	横2.1	－	縦2.6	grayish whiteN8.5	grayish whiteN8.5
4			SD002	陶器	甕	2	Bn-61	(34.8)	－	－	3.8	－	－
5			SD002	石製品	不明	2	Bn-61	－	0.9	0.85	2.9	褐灰7.5YR5/1	－
6	27		SK002	須恵器	蓋	6	Bl-57.58	(14.8)	－	－	3.3	灰褐7.5YR6/2	灰褐7.5YR6/2
7			SK003	土師器	皿	－	Bt-67	(8.8)	(7.1)	－	1.4	橙7.5YR6/6	橙7.5YR7/6
8	28	34	－	土師器	皿	4	Bo-61	(8.6)	(6.6)	－	1.6	橙7.5RY6/6	橙7.5YR6/6
9			－	土師器	皿	4・5	Bl-57. 58	(9.0)	(7.8)	－	1.5	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4
10			－	土師器	皿	5・6	Bl-57	(9.0)	(7.0)	－	1.7	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/3
11			－	土師器	皿	5.6	Bm-58	8.2	7.5	－	1.4	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
12			－	土師器	皿	5	Bl-57	(9.2)	(7.6)	－	1.5	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6
13			－	土師器	皿	5	Bl-67	(8.8)	(7.2)	－	1.7	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2
14			－	土師器	皿	5	Bp-65	8.4	6.9	－	1.3	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3
15			－	土師器	皿	5	Bl-57	(8.7)	(7.6)	－	1.5	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR6/3
16			－	土師器	杯	5	Bi-54	(11.6)	(8.2)	－	3.5	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
17			－	土師器	杯	5	Bl-57	(13.1)	(10.5)	－	3.6	にぶい橙7.5YR6/4 灰褐7.5YR5/2	にぶい橙7.5YR6/4 灰褐7.5YR5/2
18			－	土師器	杯	5	Bn-59.61	(13.5)	(10.5)	－	3.0	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
19			－	土師器	杯	6	Bm-59	(16.4)	9.0	－	3.5	明赤褐2.5YR5/6 にぶい黄橙10YR7/2	明赤褐2.5YR5/6 にぶい黄橙10YR7/2
20			－	黒色土器	杯	5・6	Bj-55. 56 Bk-57	(14.2)	(5.3)	－	4.7	にぶい褐7.5YR5/4	黒10YR2/1
21			－	須恵器	杯	6	Bk-56	(12.4)	(7.4)	－	3.5	灰10YR5/1 にぶい黄褐10YR4/3	灰10YR5/1 にぶい黄褐10YR4/3
22			－	須恵器	杯	5・6	Bl-57 Bl-58	(15.1)	(8.8)	－	3.6	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4
23	29		－	青磁	椀	4	Bl-58	－	5.3	－	2.2	灰緑C-217	すずかけの樹の色 C-216
24			－	青磁	椀	5	Bm-59	－	(5.2)	－	2.9	すずかけの樹の色 C-216	すずかけの樹の色 C-216
25			－	青磁	椀	6	Bt-73	－	(4.8)	－	(2.1)	すずかけの樹の色 C-216	すずかけの樹の色 C-216
26			－	青磁	椀	床上	Bl-57	－	(5.5)	－	3.1	焦茶色C-217	焦茶色C-217
27			－	白磁	椀	4	Bo-61	(15.2)	－	－	3.0	灰白C-144	灰白C-144
28			－	白磁	椀	5	Bk-55	(14.2)	－	－	2.1	灰白C-144	灰白C-144
29			－	白磁	椀	5	Bp-64	(16.6)	－	－	(3.2)	白茶C-135	白茶C-135
30			表土	染付	椀	－	－	－	－	－	2.3	light grayN7.5	light grayN7.5
31			－	石製品	石錘	6	Bo-61	－	－	2.05	1.7	明褐灰7.5YR7/2	－
32			－	石製品	石錘	5	Bo-62	－	－	1.35	5.4	褐灰10YR6/1	－

実測番号	Fig.No.	PL.No.	遺構番号	種別	器種	出土地点		法量（cm）				色調	
						層	注記	口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面
33	30		－	東播系	鉢	6	Bb-43	(21)	－	－	4.0	灰5Y5/1	灰5Y5/1
34			表土	東播系	鉢	－	－	－	－	－	4.5	灰5Y5/1	灰5Y5/1
35			－	青磁	椀	5	Bb-43	－	－	－	3.4	すずかけの樹の色 C-216	すずかけの樹の色 C-216
36			－	青磁	皿	6	Be-48	－	(4)	－	0.9	白茶C-107	白茶C-107

Tab. 5　太郎丸遺跡１区出土遺物観察表

胎土	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
yellowish gray 5Y7.5/1.0	染付. 施釉	染付. 施釉	削りだし高台	染付. 施釉	全面施釉。削りだし高台	1
yellowish gray 5Y7.5/1.0	染付. 施釉	染付. 施釉	削りだし高台	目痕	内底面に目痕	2
grayish whiteN8.5	染付. 施釉	染付. 施釉	-	-	メンコ状に欠いてある。	3
light grayish green4YR6.0/2.0	-	-	-	-		4
-	研磨	-	-	-	全体に摩擦あり。刃物でつけた様な傷がある。	5
石英. 輝石	回転ヘラ削り 横ナデ	横ナデ	-	-		6
角閃石を多く含む。長石. 雲母	横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ		7
石英. 雲母. 赤色酸化粒	横ナデ	ナデ	糸切り	ナデ		8
石英. 赤色酸化粒	横ナデ	ナデ	糸切り 後板状圧痕	ナデ		9
雲母. 赤色酸化粒	横ナデ	ナデ	糸切り 板状圧痕	ナデ		10
雲母. 赤色酸化粒	横ナデ	ナデ	糸切り後ナデ	ナデ		11
石英. 赤色酸化粒	横ナデ	ナデ	糸切り 板状圧痕	ナデ		12
石英. 赤色酸化粒	横ナデ	横ナデ	糸切り 後板状圧痕	ナデ		13
長石. 角閃石. 雲母 赤色酸化粒	ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ		14
石英. 雲母. 赤色酸化粒	横ナデ	横ナデ	糸切り後ナデ 板状圧痕	ナデ		15
長石. 石英	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		16
石英. 雲母. 赤色酸化粒	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		17
長石. 石英. 雲母. 赤色酸化粒	横ナデ	横ナデ	糸切り 後板状圧痕	ハケ目後ナデ	拓本あり	18
石英. 角閃石	横ナデ.磨き	横ナデ.磨き	回転ヘラ切り	横ナデ	全面赤彩	19
石英. 雲母	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内黒、高台付き	20
石英. 雲母	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		21
長石. 角閃石. 雲母	横ナデ	ナデ	-	ナデ	高台貼り付けの痕跡を残す。	22
yellowish gray 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	削りだし高台	施釉	削りだし高台 外底部に焼き台の土が残る。	23
yellowish gray 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	削りだし高台	花紋	内面にスタンプ文様あり	24
light grayN7.5	施釉	施釉	削りだし高台	花紋	削りだし高台	25
yellowish gray 5Y7.5/1.0	連弁文後施釉	施釉	削りだし高台	施釉	高台付き.外底部に焼き台の土が残る。	26
yellowish gray 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	-	-	玉縁の椀	27
yellowish gray 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	-	-	玉縁の椀	28
pale yellow 5Y9.0/2.0	施釉	施釉	-	-	玉縁の椀	29
light grayN7.5	染付. 施釉	染付. 施釉	-	-		30
滑石	削り	-	-	-		31
滑石	削り	-	-	-		32

Tab. 6　太郎丸遺跡２区出土遺物観察表

胎土	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
長石. 石英. 雲母	ナデ	ナデ	-	-		33
長石. 石英	横ナデ	横ナデ	-	-	口縁部灰かぶり	34
beige ghay 8YR7.5/1.0	施釉	施釉	-	-		35
yellowish gray 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	横ナデ	櫛描紋後施釉		36

実測番号	Fig.No.	PL.No.	遺構番号	種別	器種	出土地点		法量（cm）				色調	
						層	注記	口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面
37	31	35	－	須恵器	蓋	7	Ay37	13	－	－	2.9	褐灰10YR6/1	にぶい黄橙10YR7/4
38			－	土師器	杯	6　7	Az-38 Ba-38	(14)	10	－	3.2	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙7.5YR7/4
39			－	須恵器	皿	5	Aw-35	(12)	(7.3)	－	2.0	浅黄2.5Y7/4	灰黄2.5Y7/2
40			－	土師器	杯	6	Aw-33	(15)	(10.5)	－	3.5	にぶい橙7.5YR6/4	橙7.5YR7/6
41		35	－	青磁	椀	－	一括	(16)	－	－	6.1	すずかけの樹の色C-216	すずかけの樹の色C-216
42			－	青磁	皿	－	一括	－	3.8	－	1.8	白茶C-135	白茶C-135
43			－	白磁	皿	－	一括	－	4	－	(2.0)	ベージュC-218	ベージュC-218

遺物番号	Fig.No.	PL.No.	遺構番号	種別	器種	出土地点		法量（cm）				色調	
						層	注記	口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面
44	32	35	SD004	土師器	椀	－	－	(16.9)	7	－	5.7	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3
45			SD007	青磁	椀	－	－	－	(5)	－	2.5	鉄緑C-230	鉄緑C-230
46			SD007	白磁	椀	－	－	(17.0)	－	－	3.2	白茶C-144	白茶C-144
47			SD007	白磁	椀	－	－	(19.0)	－	－	2.5	灰白C-144	灰白C-144
48		35	SD004	青磁	椀	－	－	16.7	5	－	6.7	焦茶色C-228	焦茶色C-228
49	33		SD006	瓦質土器	火鉢	1	－	(42.4)	－	－	12.2	橙5YR6/6	橙5YR6/6
50			SD006	瓦質土器	鍋	－	－	(33.2)	(25)	－	14.5	灰7.5Y6/1	灰7.5Y6/1
51		35	SD007	瓦質土器	すり鉢	－	－	(35.0)	－	－	11.0	灰5YR5/1	灰5YR5/1
52			SD008	陶器	壺	－	－	(23.4)	－	－	13.2	褐7.5YR4/3	褐7.5YR4/3 暗灰黄2.5Y4/2
53	34	36	SF001	瓦器	丸底皿	－	－	9.6	4	－	2.5	黒褐2.5YR3/1	灰黄2.5YR6/2
54			SF001	瓦器	丸底皿	－	－	9.6	5	－	2.7	灰白5Y7/1	灰5Y6/1
55			SF001	瓦器	皿	－	－	(11.0)	(4)	－	1.8	灰N5/	灰N6/
56			SF001	瓦器	皿	－	M-2 No3	(10.6)	(7)	－	2.1	黄灰2.5Y6/1	灰白10YR8/1
57			SF001	黒色土器	椀	－	－	－	7	－	2.8	褐灰7.5YR6/1 灰褐7.5YR6/2	黒褐10YR2/2
58			SF001	黒色土器	椀	－	－	－	7	－	3.0	黄灰2.5Y4/1 浅黄橙10YR8/3	褐灰10YR4/1
59			SF001	瓦器	椀	－	－	－	(6)	－	2.4	黄灰2.5Y5/1	黄灰2.5YR5/1
60			SF001	瓦器	椀	－	－	－	(6)	－	3.7	灰5Y6/1	灰白10YR7/1
61			SF001	瓦器	椀	－	－	－	(7)	－	4.6	灰白2.5YR7/1	灰白2.5YR7/1
62			SF001	瓦器	椀	－	－	－	(7)	－	3.9	灰白2.5Y7/1	灰N5/
63			SF001	瓦器	椀	－	－	－	7	－	3.3	灰N4/	灰N4/
64		36	SF001	研磨土師器	椀	－	－	(15.2)	－	－	5.1	灰褐5YR6/2	明褐灰7.5YR7/2
65			SF001	研磨土師器	椀	－	－	(15.6)	(7)	－	6.7	灰白7.5YR8/1	灰白7.5YR8/1
66			SF001	瓦器	椀	－	－	(16.6)	－	－	4.9	灰白2.5Y7/1	灰白2.5Y7/1
67			SF001	瓦器	椀	－	－	(16.3)	(6)	－	5.5	灰白N7/ 灰白7.5YR8/1	灰白7.5YR8/1
68		36	SF001	瓦器	椀	－	－	17.2	9	－	6.8	浅黄橙10YR8/3	灰白8/1 浅黄橙10YR8/4

Tab. 7　太郎丸遺跡３区出土遺物観察表

胎土	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
長石. 石英 角閃石. 雲母	回転ヘラ削り 横ナデ	横ナデ.　ナデ	-	-	焼歪み. 焼ムラ	37
角閃石　長石. 雲母 赤色酸化粒	横ナデ	横ナデ	-	ナデ	赤色顔料	38
長石. 雲母 赤色酸化粒	横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ		39
長石. 石英.　雲母. 角閃石　赤色酸化粒	ナデ	ナデ	糸切り	ナデ		40
yellowish gray 5Y7.5/1.0	連弁文. 施釉	施釉	-	-	連弁文あり	41
yellowish gray 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	横ナデ	櫛描文後施釉	櫛描文あり	42
yellowish gray 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	削りだし高台	蛇の目釉剥ぎ	蛇の目釉剥ぎ	43

Tab. 8　太郎丸遺跡４区出土遺物観察表－①

胎土	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
長石. 雲母. 石英	横ナデ. ナデ	ナデ. コテあて	ナデ 板目圧痕	ナデ	高台貼り付け. 板目圧痕あり	44
yellowish grey 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	削りだし高台	施釉	削りだし高台	45
yellowish grey 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	-	-	玉縁の椀	46
yellowish grey 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	-	-	玉縁の椀	47
yellowish grey 5Y7.5/1.0	縞連弁文	施釉	削りだし高台	花文	削りだし高台.内低部は陰印文	48
石英. 角閃石. 雲母. 長石	ナデ後スタンプ 突帯. 波状文	ナデ	-	-	拓本あり	49
長石. 雲母	横ナデ. ヘラ削り. 指頭圧痕	ナデ	ナデ	横ナデ.　ナデ	指頭圧痕あり	50
石英. 長石 角閃石. 雲母	ナデ	ナデ後すり目	-	-		51
長石. 砂粒	横ナデ. 沈線. 施釉	回転ヘラ削り	-	-	外面. 胴部に施釉	52
雲母	指押え.ナデ	コテあて.ナデ 磨き	糸切り後押し出し	ナデ		53
長石. 雲母.	指押え.ナデ	横ナデ. ヘラ磨き	糸切り後ナデ	横ナデ	押し出したことにより粘土が開いている。	54
雲母	ナデ.ヘラ磨き	ナデ.ヘラ磨き	糸切り後磨き	ナデ		55
長石	ナデ.ヘラ磨き	ナデ.ヘラ磨き	糸切り痕アリ	ヘラ磨き		56
石英. 雲母. 小石	ヘラ削り	ヘラ磨き	ナデ　貼り付け 高台	ヘラ磨き	内器面内黒. 指頭圧痕あり	57
石英. 雲母	押し出し後ナデ. ヘラ磨き	横ナデ.ヘラ磨き	貼り付け高台 回転ヘラ切り	横ナデ ヘラ磨き	かすかに指頭圧痕残る	58
長石. 石英.　雲母	横ナデ後 ヘラ磨き .回転ヘラ削り	横ナデ後 ヘラ磨き	削りだし高台	ヘラ磨き	削りだし高台. 指頭圧痕あり 重ね焼きのくぼみあり	59
長石. 石英	指押え.後ナデ	ナデ	貼り付け高台	ナデ	底部は押し出し技法. かすかに指頭圧痕残る	60
長石. 雲母.　角閃石	回転ヘラ削り ヘラ磨き	ヘラ磨き	横ナデ 貼り付け高台	ヘラ磨き	貼り付け高台. 指頭圧痕あり	61
長石	指押え.横ナデ ヘラ磨き	コテあて. ヘラ磨き	横ナデ 貼り付け高台	ヘラ磨き	貼り付け高台. 指頭圧痕あり	62
長石. 雲母	指押え.ナデ後ヘラ削り.ヘラ磨き	コテあて.ナデ後 ヘラ磨き	ナデ ヘラ記号	ヘラ磨き	ヘラ記号あり. 内器面内黒. 指頭圧痕あり	63
雲母	ナデ ヘラ磨き	ナデ	-	-	貼り付け高台が接合面より剥離 かすかに指頭圧痕残る	64
雲母	指押し出し後 ヘラ磨き	ナデ後ヘラ磨き	貼り付け高台	ヘラ磨き	貼り付け高台. かすかに指頭圧痕残る	65
長石. 雲母	横ナデ 回転ヘラ削り	コテあて.横ナデ. ヘラ磨き	-	-	焼成時の重ね痕アリ. 指頭圧痕あり	66
小白石	ナデ後ヘラ磨き	ナデ後ヘラ磨き	貼り付け高台	ナデ後ヘラ磨き	貼り付け高台. 指頭圧痕あり	67
長石. 雲母	指押え後ナデ ヘラ磨き	ナデ. ヘラ磨き	ナデ 貼り付け高台	ナデ	貼り付け高台. かすかに指頭圧痕残る	68

遺物番号	Fig.No.	PL.No.	遺構番号	種別	器種	出土地点		法量（cm）				色調	
						層	注記	口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面
69			SF001	瓦器	椀	-	M-1	16.9	6	-	6.2	灰白10YR7/1 灰白2.5Y8/1	褐灰10YR5/1 灰白2.5Y8/1
70	34		SF001	瓦器	椀	-	-	(17.3)	(6)	-	5.9	にぶい黄橙10YR7/3	明褐灰7.5YR7/2
71			SF001	瓦器	椀	-	M-2 No1	(18.3)	(8)	-	5.6	黄灰2.5Y6/1	灰白10YR8/1
72		36	SF001	土師器	小皿	-	-	(8.0)	(7)	-	1.4	橙2.5YR7/6	橙2.5YR7/6
73			SF001	土師器	皿	-	-	(13.4)	(10)	-	2.9	褐7.5YR4/3	黒褐7.5YR3/1 にぶい褐7.5YR5/4
74			SF001	土師器	皿	-	-	(15.0)	(12)	-	3.5	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
75			SF001	土師器	杯	-	-	(16.2)	10	-	4.4	にぶい褐7.5YR5/3	にぶい橙7.5YR7/3
76			SF001	土師器	皿	-	-	15.0	11	-	3.0	淡橙5YR8/4	淡橙5YR8/4
77			SF001	白磁	椀	-	-	(15.6)	-	-	3.5	灰白C-144	灰白C-144
78			SF001	白磁	椀	-	-	(17.0)	-	-	4.0	灰白C-144	灰白C-144
79	35		SF001	白磁	椀	-	-	(17.6)	-	-	4.5	銀灰色C-143	銀灰色C-143
80			SF001	白磁	椀	-	-	(15.8)	-	-	4.7	灰白C-144	灰白C-144
81			SF001	白磁	椀	-	-	(16.2)	-	-	4.7	灰白C-144	灰白C-144
82			SF001	白磁	椀	-	-	(18.0)	-	-	4.0	灰白C-144	灰白C-144
83			SF001	白磁	椀	-	-	-	(6)	-	2.2	銀灰色C-143	銀灰色C-143
84			SF001	白磁	椀	-	-	-	(6)	-	2.7	白茶C-141	白茶C-141
85			SF001	青磁	皿	-	-	-	-	-	0.8	鉄緑C-230	鉄緑C-230
86			SF001	須恵質陶器	瓶	-	-	-	-	-	8.4	黄灰2.5Y5/1	褐灰10YR5/1
87			SF001	石製品	不明	-	-	-	-	2	6.0	灰白10YR7/1 灰黄2.5Y7/2	灰白10YR7/1 灰黄2.5Y7/2
88			SF001	土師質土器	不明	-	-	-	-	1	3.9	にぶい橙7.5YR7/4	-
89		37	SK003	土師器	杯	-	-	14.9	9	-	4.0	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
90			SK017	石製品	杯	-	-	5.6	5	-	2.3	灰N6/	灰N6/
91			東トレンチ	土師器	皿	-	-	9.2	8	-	1.6	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい黄橙10YR7/4
92	36		南北トレンチ	青白磁	椀	-	-	-	4	-	1.1	雲の灰色C-241	雲の灰色C-241
93			表土	白磁	椀	-	-	(16.8)	6	-	7.0	銀灰色C-143	銀灰色C-143
94				瓦器	椀	-	-	-	(7)	-	5.5	黄灰2.5Y5/1	黄灰2.5Y5/1
95			東表土	東播系	鉢	-	-	(28.2)	-	-	7.9	黄灰2.5Y5/1	灰N6/1

Tab. 9　太郎丸遺跡４区出土遺物観察表－②

胎土	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
雲母	横ナデ後 回転ヘラ	コテあて.ナデ ヘラ磨き	ナデ 貼り付け高台	ナデ	体部. 下半は押し出し技法. 指頭圧痕あり	69
長石. 石英. 雲母	指押え.ナデ 回転ヘラ削り	横ナデ.ヘラ磨き	横ナデ 貼り付け高台	ナデ	貼り付け高台. 指頭圧痕あり	70
長石	押し出し後ヘラ 削り.ヘラ磨き	ヘラ磨き	回転ナデ 貼り付け高台	ヘラ磨き	指頭圧痕あり	71
砂粒	横ナデ	横ナデ	糸切り痕あり	横ナデ		72
長石. 雲母. 砂粒	ナデ	ナデ	糸切り痕あり	ナデ		73
雲母	ナデ	ナデ	糸切り痕あり	ナデ		74
雲母	ナデ	ナデ	糸切り痕あり	ナデ		75
長石. 雲母	ナデ	横ナデ	ヘラ切り 板目痕あり	横ナデ	拓本あり	76
yellowish grey 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	-	-	玉縁の椀	77
yellowish grey 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	-	-	玉縁の椀	78
yellowish grey 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	-	-	玉縁の椀	79
yellowish grey 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	-	-	内器面に釉溜りあり　玉縁の椀	80
yellowish grey 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	-	-	内器面に釉溜りあり 玉縁の椀	81
yellowish grey 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	-	-	内器面に釉溜りあり　玉縁の椀	82
light grayN7.5	横ナデ	施釉	削りだし高台	施釉	内面のみ施釉　玉縁椀の底部	83
yellowish grey 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	削りだし高台	施釉		84
yellowish grey 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	中心を除いて 施釉	櫛描 ヘラ描		85
長石. 石英	平行たたき ヘラ書き	ナデ	-	-	拓本あり	86
滑石	削り	-	-	-		87
雲母	ナデ	-	-	-		88
雲母	ナデ	ナデ	糸切り痕あり	ナデ		89
滑石	削り	削り	削り	削り	口縁2ケ所にくぼみあり	90
長石. 雲母	ナデ	ナデ	糸切り 板目痕あり	ナデ		91
grayish whiteN8.5	施釉	施釉	削りだし高台	花紋		92
yellowish grey 5Y7.5/1.0	施釉	施釉	削りだし高台	施釉		93
長石. 石英. 雲母	押し出し後回転 ヘラ削り後 回転ヘラ磨き	回転ナデ ヘラ磨き	ナデ 貼り付け高台	ヘラ磨き	指頭圧痕あり	94
長石. 石英	回転ナデ	回転ナデ	-	-		95

C まとめ（主に道路状遺構 SF001 を中心に）

遺 構

（1）1区 当該調査区では、近現代の遺構が明瞭に残り、その遺構の意味するものが現在も隣接している小河川並びに排水路と同様の成果のものと判断される。溝 SD001 としているものは昭和 40 年代に圃場整備が行われる前まで「三間溝」と呼称されていたことが調査中の聞き取りで判明している。木葉川に最も近いことも勘案すると周辺の排水を河川に排出する場所、いわゆる当該地周辺では最も低い土地であったことが窺えよう。そのためか、調査区内における中世遺物を含む層からの出土遺物の大半が磨滅していること、出土遺物にまとまりがないこと、また、わずかに検出した遺構が小規模な土坑のみであることから本地域まで生活範囲が及んでいなかったことを調査の結果として裏付けることができた。

（2）2区 本調査区でも、1区同様、中世遺物を含む層からの出土遺物の大半が磨滅していること、出土遺物にまとまりがないこと、さらに、遺構が検出されていないことから生活範囲の外にあたる場所であったことが窺える。

（3）3区 本調査区は、1・2区に比べると中世遺物包含層からの出土遺物の破片が大きく磨滅が少ないことなど、のちに検出した遺構等の性格を考えるうえで、土地が1・2区に比べると安定していることが当初から窺えた。

近世に成立した梅林天満宮参道に隣接する Ay･Az-39･40Grid で、南北に主軸を有する掘立柱建物（SB001）を検出するとともに、その東側にあたる Ba-41Grid で柵列（SA001）を検出した。柱穴が小規模なものであるため、上部規模がどの程度かは分からないが、遺構の性格は明らかに1区でみられる小規模な土坑とは違いが出ている。同様に土坑 SK001・溝 SD001 など主軸を掘立柱建物と同じくする遺構も見られ、土地利用の方向性が窺えよう。梅林天満宮の成立期より古い時期の遺構であるため比べようもないが、神社仏閣を建立する場所の意味を考えると、以前から当遺構に関連する遺構の存在が想定される。

（4）4区 太郎丸遺跡内で最も遺物・遺構ともに多く検出した調査区である。遺構の性格は大きく南北に数条検出された溝状遺構、東西に検出した道路状遺構（SF001）に関連する遺構群とに分けられる。

溝状遺構は、西側で調査区を最短で横切る溝群と、調査区のほぼ中央を横切るものとがある。調査区西側の溝は、最も古いもので中世から掘削が始まり近世まで新規で掘削するもの、古い溝を改修して使用するものなどが重なり、検出状態が不明瞭なものが多かった。よって、Fig.19 中に模式的に溝の掘削ラインを示している。

●道路状遺構 SF001 について[1]

平野のほぼ中央部に位置する本遺跡で、幅約 3.5m（側溝まで含む）、全長約 26m の規模を確認することができた。SF001 は、中央部のいわゆる「波板状凸凹面」を中心に、両側に断続する溝を配する。ここでは、大まかに波板状凸凹面の考察をするため、Fig.20 で示している図面の溝 SD002 を境に東側（図面上）と西側（図面下）とに分けて説明する。

当遺跡では、波板状凸凹は平面形が不定形長楕円形が主体で幅は平均 60cm 程度で大小ある。西側ではほぼこれら凹凸の間には切りあいが少ないが、東側ではおそらく2時期に分けられ掘られた凹凸面が検出されている。主軸はわずかに左右に振れる部分もあり、掘削単位を示すものと考えられる。また、波板状凸凹面の両側に配される溝状遺構も、M1 とした 14.8m に及ぶものから 3m ～ 7m 弱のものまでが主軸を同一としながら切り合っており、波板状凸凹面同様に掘削単位を示しているものと考えられる。

遺 物

すべての調査区で中世から近世にかけての遺物が出土している。最も多く出土した4区を中心に述べたい。「1 遺構」でも述べたが、道路状遺構 SF001 からの出土遺物はほぼ一括資料として値する資料と考えられる。SF001M-1（溝）A-A' 断面実測図で示す瓦器椀を始めとして、波板状凸凹面の周辺から多くの瓦器椀、皿が出土している。ここで出土した瓦器椀は内面に、整形時にコテを使用し押し出しされた際に残された工具の

1 『古代国家と道路』 近江俊英 青木書店 2006

当痕がわずかだが残ること、外面体部に回転削りが明瞭に施されていることから「肥後型瓦器椀[2-3]」の特徴を有する一群であることが想定される。

2 『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995
3 熊本市教育委員会　美濃口雅朗氏に助言・指導を頂いた。

梅林天満宮と馬場　2009 夏

梅林天満宮例大祭（毎年 11 月 25 日）
流鏑馬（武士の狩り装束の姿をした馬の乗り手・
馬の手綱を引く仲間）

2　西屋敷遺跡

A　調査に至る経緯

本調査区は、九州新幹線建設に伴い、大坊トンネル玉名側坑口の法面にかかり掘削される計画が示された。

当該地は１・２区とも、雑木が林立し雑草が生い茂っていたため地形の観察ができなかったが、平成17年に工事に先立ち、樹木等の伐採が終了したのを受け予備調査を実施した。その結果、小規模なマウンドを確認し頂部に五輪塔残欠が認められたことから（１区）、中世期の墳墓である可能性が考えられたこと、また当該地から東へ約100mに国指定史跡「大坊古墳」（装飾古墳）があることから、小円墳の可能性もあったため要発掘調査と判断し、平成17年4月19日に調査に着手した。（１区）

同時に、同尾根の上段に近世墓があり（２区）、江戸時代後期からの墓石が確認されたことから、課内で調査が必要か否かを検討した結果、地域の墓制を知る上で重要であると判断し、墓石の実測と地形測量を含む墓石配置の調査を行った。

B　調査の手法

小規模なマウンドを確認した１区では、中心部に置かれていた五輪塔付近を中心に、トレンチを設定し表土を剥ぎ、地山面を出し遺構の確認を行った。

近世墓が存在する２区は、現況の地形測量を実施し、倒れている墓石の関係を把握しつつ、1/5にて実測図作成を行った。２区については地形測量、墓石実測とも委託業務で実施した。

新幹線橋脚完成後の西屋敷遺跡遠景　（線路奥側トンネル坑口右側が調査区）

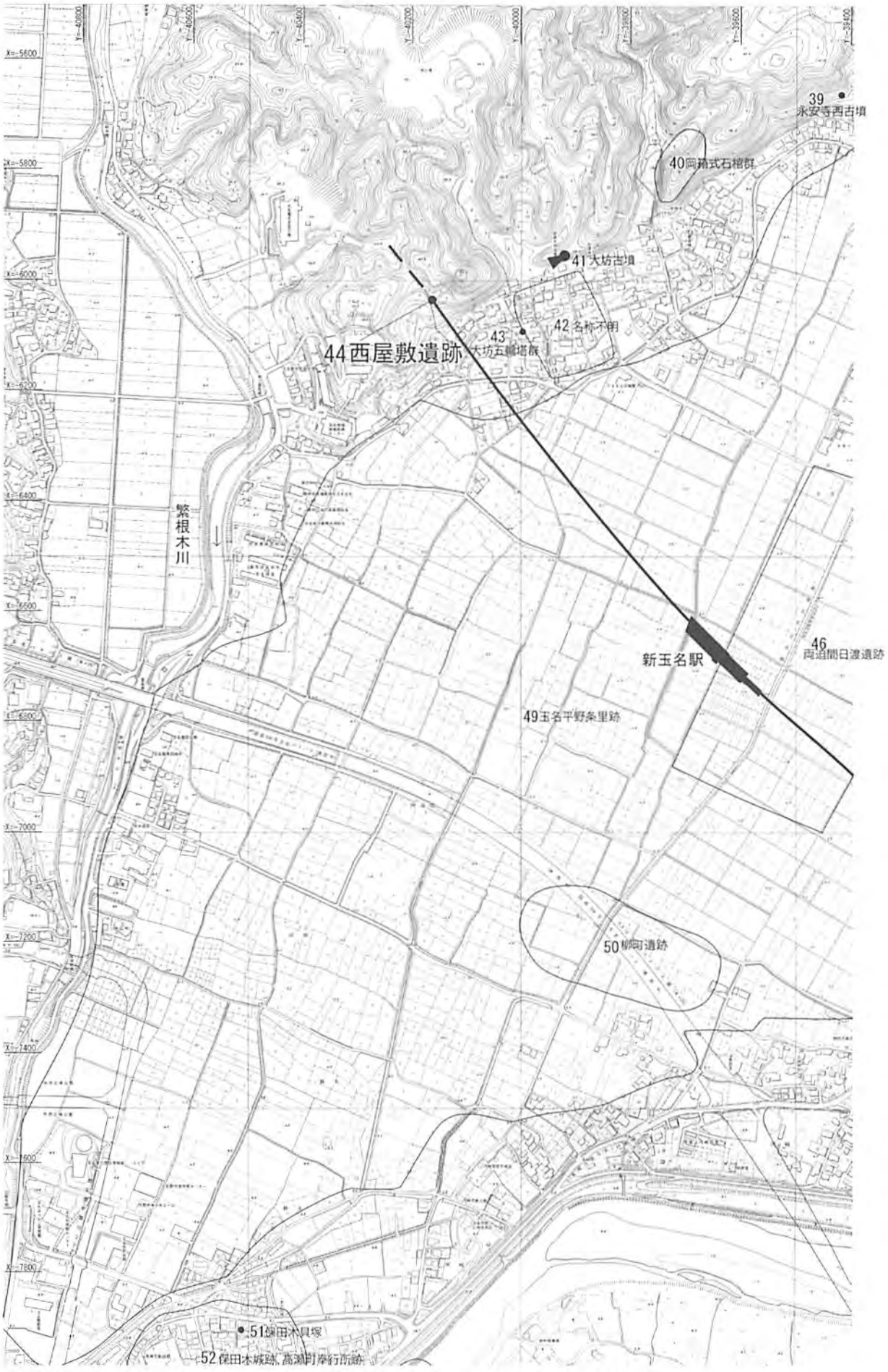


Fig.37　西屋敷遺跡周辺遺跡地図（1/10,000）

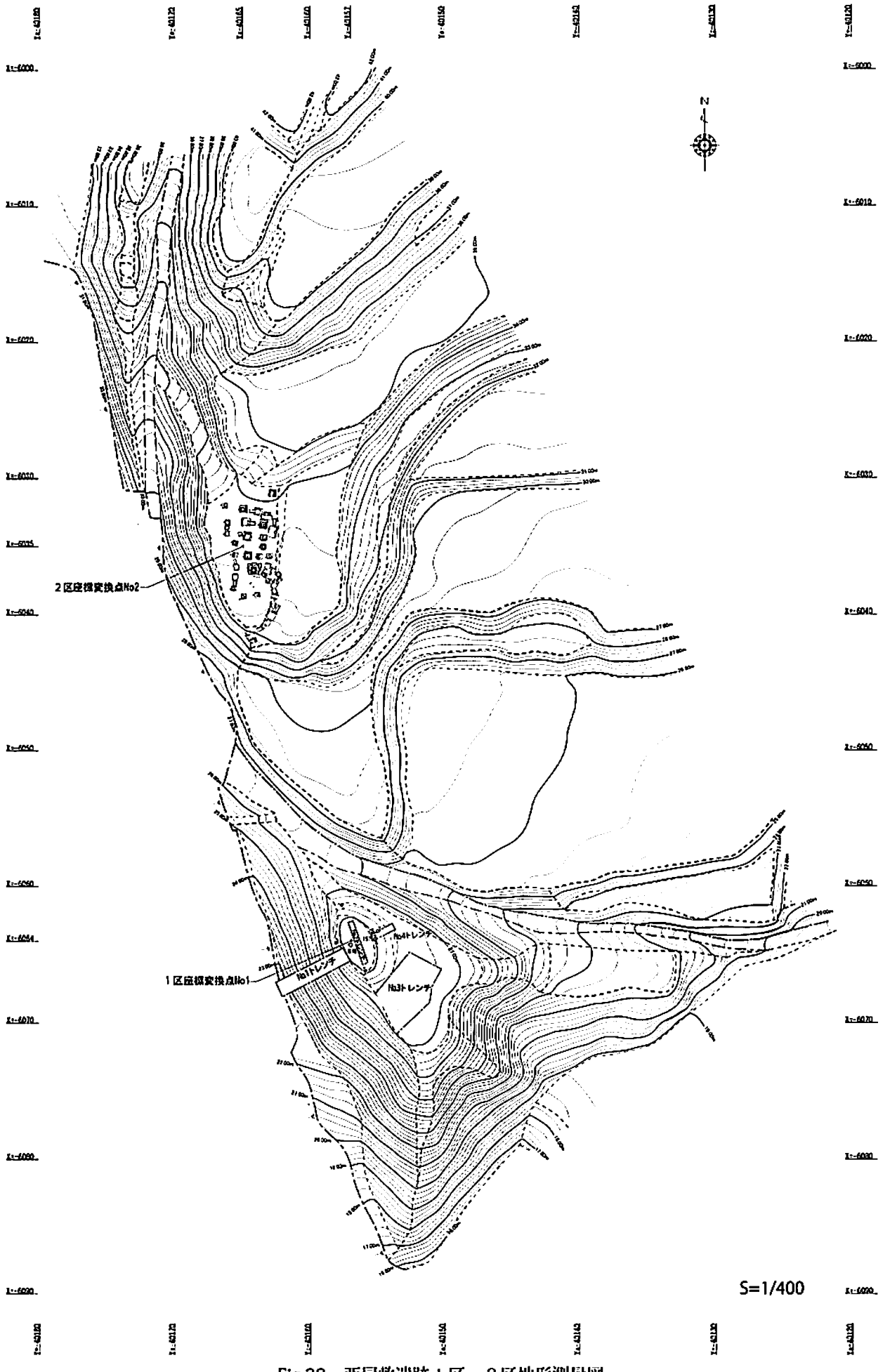


Fig.38　西屋敷遺跡１区・２区地形測量図

C　1区の概要（五輪塔の所在する高まり周辺の調査）

当該調査予定地は、予備調査で五輪塔残欠が残る小マウンドが確認されたため、発掘調査を実施した調査区である。

調査にあたっては、事前に地形測量を行い、小マウンドの中心点を導き出し、トレンチを設定した。各トレンチは人力により地山まで掘削し、盛り土の有無、削り出しの有無を確認した。また、五輪塔残欠下部の地下遺構の有無も併せて確認した。

（1）各トレンチ及び五輪塔残欠の状況について

マウンド状地形について（各トレンチ調査結果をもとに）（Fig.39）

№1トレンチ　本トレンチは、急傾斜面に設置し、重機を用いて崩落土、樹痕を除去しながら調査を実施した。トレンチの目的は、マウンド西側の地形が自然地形か人為的なものであるか否かを確認するものである。

調査の結果、表面を覆っていた崩落土、樹痕等の下から地山である真砂土に近い、花崗岩風化層を検出した。よって、本斜面上は調査では自然地形か、人為的なものかは分からなかった。いずれにせよ、急傾斜面であるため遺構があったとしても、地山の脆さから崩落して遺構は消滅していると判断された。また、トレンチ北側の斜面上を清掃したところ、約40cmの礫が樹痕に引っ掛かった状態で出土した。のちに報告するが平場北側でも同様の石材の礫があったため、古墳石室の一部かとも考えられたが、加工痕、積み重ねた際に生じる擦痕等は確認できなかった。

№2トレンチ　本トレンチは、マウンド状の頂上部、平場を形成している場所に設定した。平場は長軸で約3.5mあり、その中心に幅50cmのトレンチを掘削した。調査の結果、地表面から山砂が始まり、樹痕による撹乱層を外しても硬く締まった山砂が検出したため、地山と判断し掘削を中止した。トレンチ中より西側斜面地で出土していた石を検出した。大きさはほぼ同規模であり古墳石室石材としても想定されたが、石室構築の際の掘り込み等も検出されなかったため、確認するには至っていない。長軸方向（南北）にSP-NP土層断面、それに直行しWP-EP土層断面を作成した。

№3トレンチについて　本トレンチはマウンド平場の南側、一段落ちた平場にやや不定形だが平場全体を覆うように設定した。（Fig.38 西屋敷遺跡地形測量図（S=1/400）参照）

ここでも№1・2トレンチ同様、腐食土、樹痕による撹乱層を除去すると粗い山砂面を検出した。遺構等土地を改変した跡も見られないことから調査を終了した。

五輪塔残欠について

予備調査段階から確認していた五輪塔の一部は「水輪」単体であることが確認できた。周辺に埋没していないか確認したが、探し出すことはできなかった。水輪を動かした結果、腐食土の上に載っており、最近まで動かされていたことが確認できた。腐食土をはずし、地山で遺構の検出をおこなったが、五輪塔設置のための平場を含む地下遺構は見られなかった。よって、五輪塔水輪と当地形との関連を確認するには至っていない。

（2）調査の結果

（1）各トレンチの状況を受け、以下の通り判断し調査を終了した。

- マウンド状地形上には中世の墳墓、古墳時代の円墳であるとの痕跡は認められず、本地形が遺構であることは確認できなかった。
- 五輪塔水輪は風化が著しく本来の形状を保っていないこと、他の部材が近隣において認められないことから持ち込まれた可能性もあること。

以上のことから、マウンド状の地形は自然地形であることを確認した。

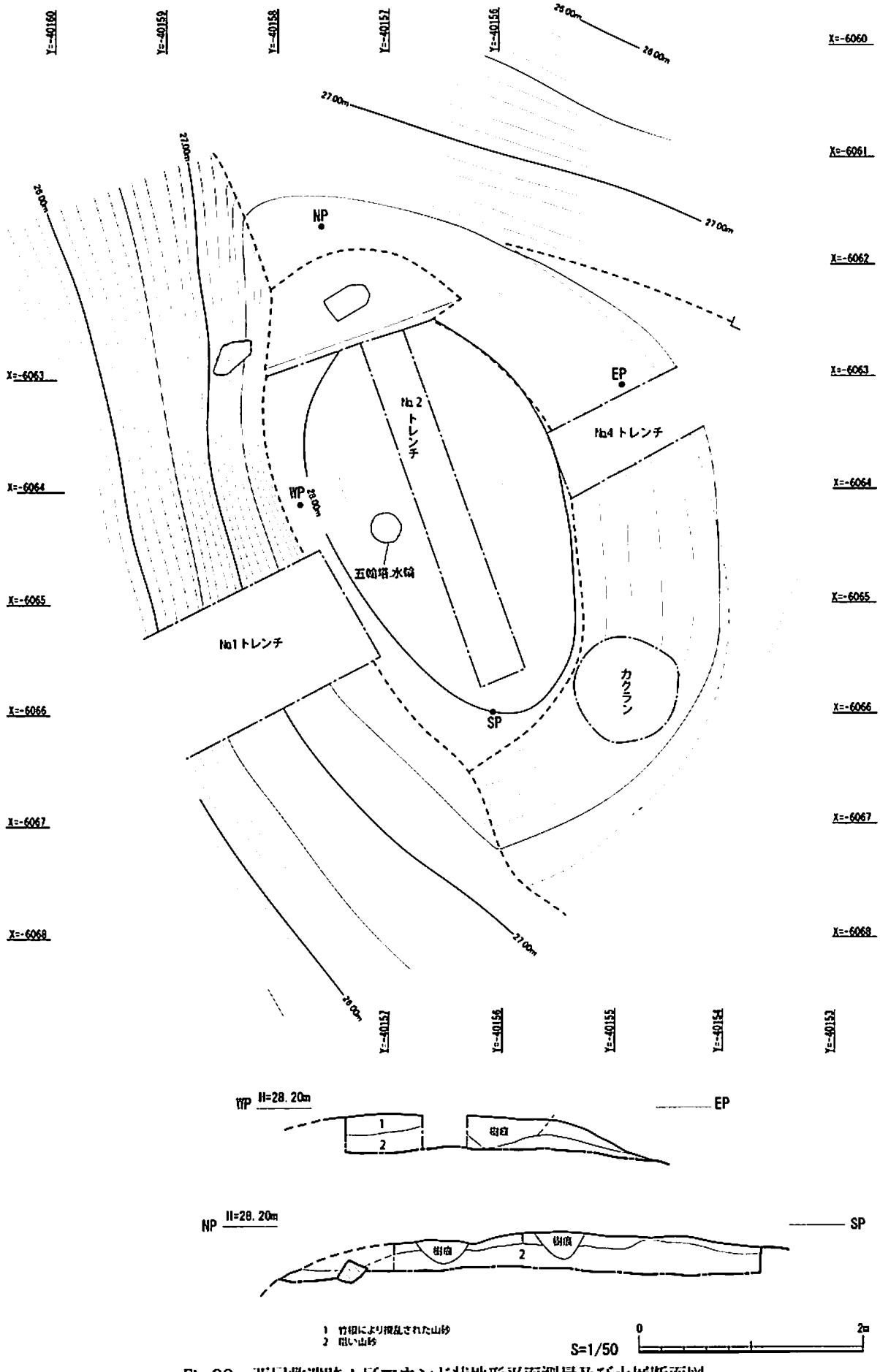


Fig.39　西屋敷遺跡Ⅰ区マウンド状地形平面測量及び土層断面図

D　2区の概要（近世墓の石塔調査）

凡　例

本稿で使用する墓石に関する用語については以下の通りである。墓石は法名（注：浄土真宗では戒名を法名という。）と年紀が刻字された上部の方柱を本体とし、下部の石を台石とする。本体と台石をあわせて墓石とする。

また、本体の展開も下記のとおり呼称し、本体正面の法名を書くために彫り窪めた部分を花燈形と称する。

本報告は、墓石実測業務を受託した株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店 上高原　聡主任調査員により、考古学手法を用いた詳細な墓石の分類と観察が行われていたため、それを基本として原稿を作成した。よって、本原稿は長谷部と上高原主任調査員の現地における、調査段階での業務委託（実測）協議をもとに、実測委託の一環として上高原主任調査員が執筆した。

しかし、本稿が熊本県教育委員会発行であるため文責は長谷部にある。

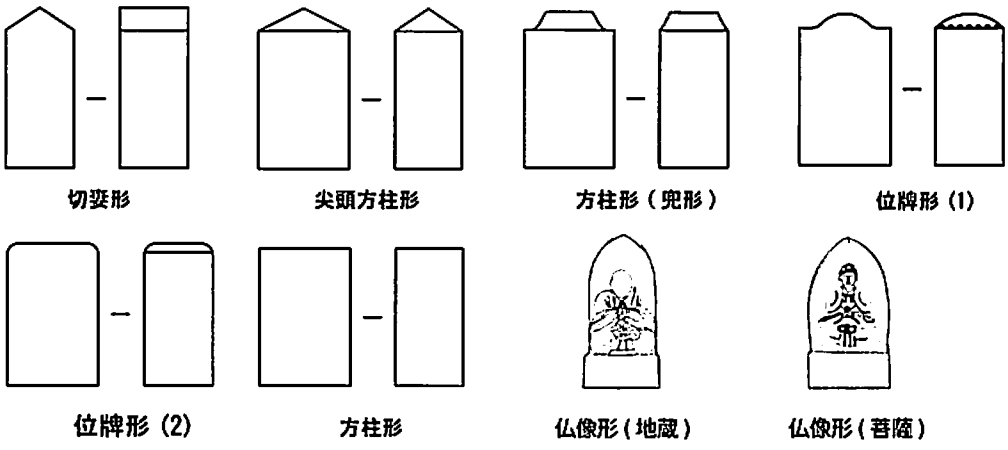


Fig.40　墓石本体分類一覧

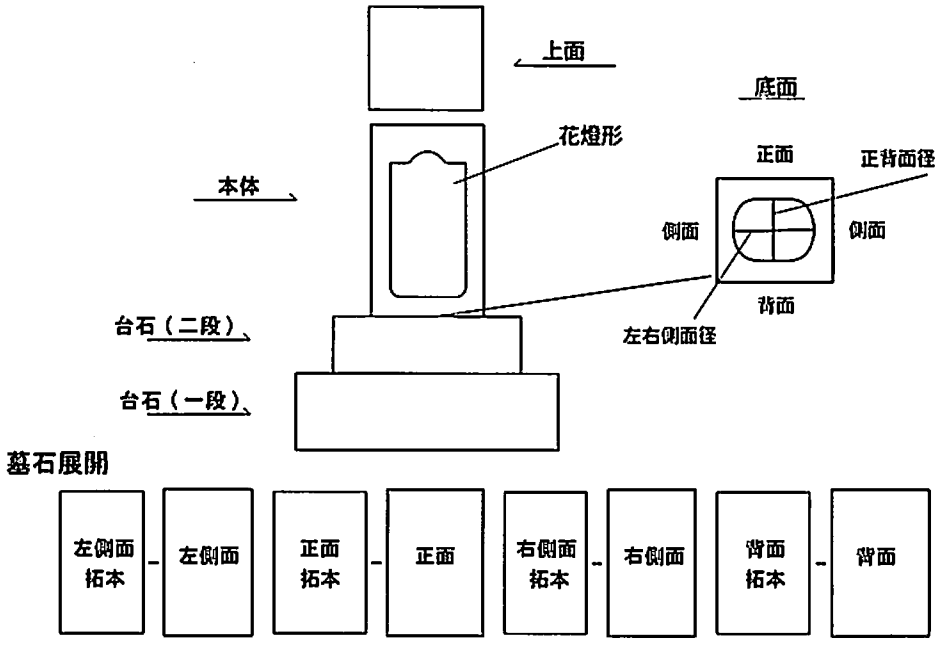


Fig.41　墓石名称及び展開図凡例

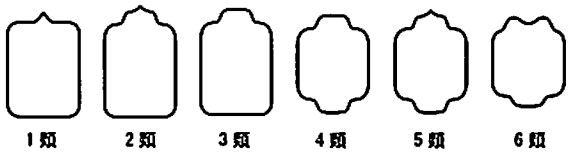


Fig.42　花燈形分類一覧

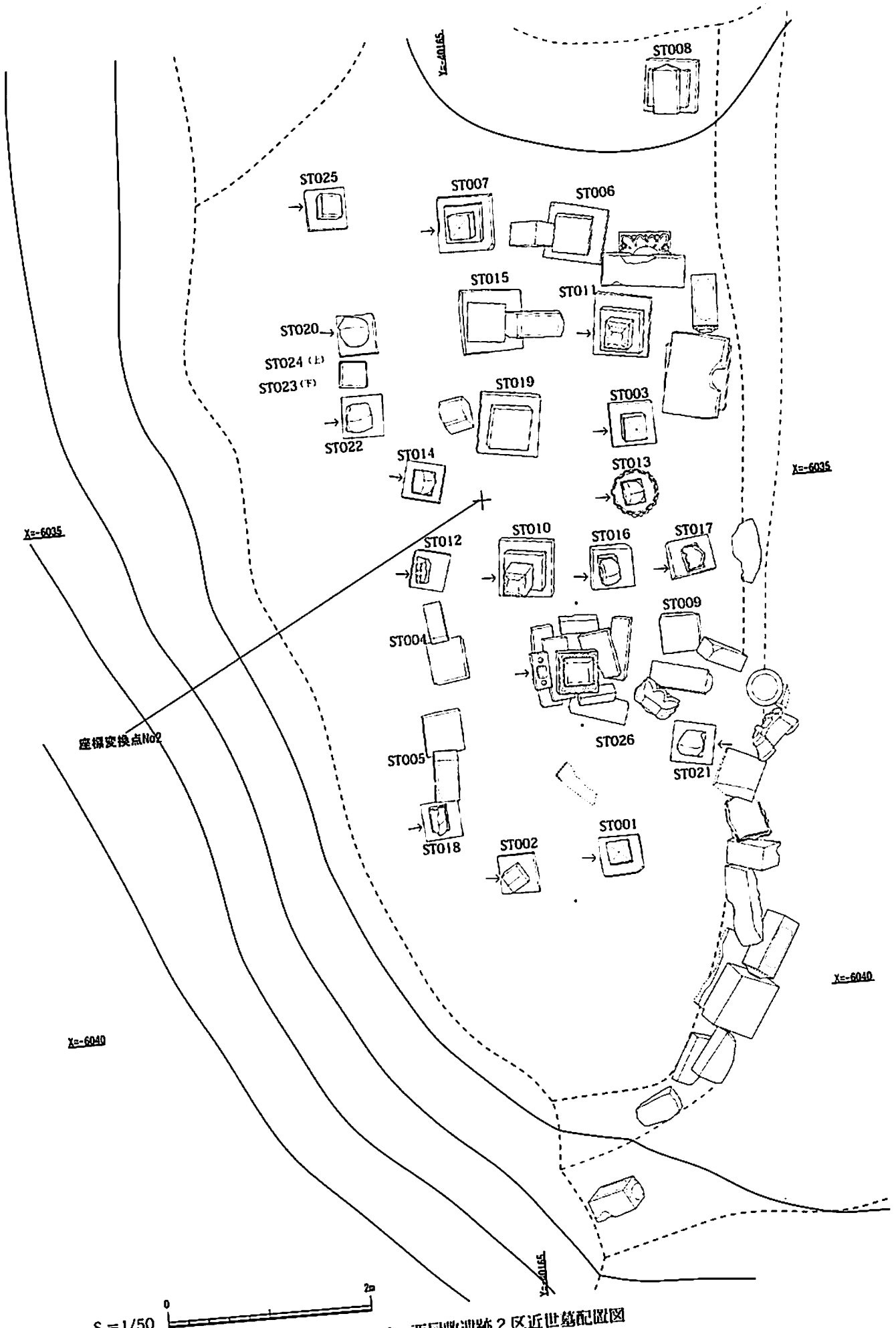


Fig.43　西屋敷遺跡２区近世墓配置図

概　要

本調査で取り扱った西屋敷遺跡２区に存在する墓地は、現在も子孫の方が管理されており、工事に先立ち改葬が計画されていることから墓石の調査に留めた。墓石は、本体が倒置されているものについて墓石建立時の状態を重視し、組み合わせ等を検討し復元を行った後実測作業を行った。(Fig.43)

本遺跡は背後の低丘陵性台地から延びる小丘陵の尾根上にあたり、段々に整形された平坦面の下から３段目、標高約 33 mの地点に立地する。(Fig.38)

調査開始時には既に多くの墓石が倒壊しており、多くは調査区南東部斜面に放置されていたが、比較的残存状況の良好な 26 基の墓石の調査を行うことが出来た。

墓石について

墓 ST001　1767（明和四年二月七日）没成人男性墓（Fig.44）

墓域南端に位置し、墓石は西面する。本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 51.5cmで本体の高さは 39.5cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。

本体形は尖頭方柱形で、花燈形は１類である。本体には正面のみ粗い磨きが施され、僅かに工具痕を残し、他面は全体に工具痕が残る。底面の中央部は正背面径約 18 cm、左右側面径約 19cm、深さ２mmの隅丸方形に粗い工具痕を残して彫り窪められ、底面全体も粗く削った工具痕を残す。

花燈形は周囲より 0.5cm彫り窪められ、正面のみを文字面とする一観面の本体である。花燈形内右側に「明和四亥天」、中央に「釈了逝」、左側に「二月七日」の文字が薬研彫りで刻字されている。台石は全体に工具痕を残す。

墓 ST002　1778（安永七年十月二十二日）没成人女性墓（Fig.44）

墓域南端に位置し、本体は南西を向いているが、台石が西を向いていることから、本来墓石は西を向いていたと考え、元の場所に戻して実測を行った。

本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 45cmで本体の高さは 40cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。本体形は切妻形で、花燈形は２類である。本体には正面のみ粗い磨きが施され、僅かに工具痕を残し、他面は全体に工具痕が残る。底面全体は平坦で、幅５～７mmの工具痕を残す。

花燈形は周囲より 0.8cm彫り窪められ、正面のみを文字面とする一観面の本体である。花燈形内右側に「安永七戌天」、中央に「釈尼妙意」、左側に「十月二十二日」の文字が薬研彫りで刻字されている。台石は全体に工具痕を残す。

墓 ST003　1779（安永八年九月一日）没成人男性墓（Fig.44）

墓域中央に位置し、墓石は西に正面を向いている。本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 58.8 cmで本体の高さは 40cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。

本体形は尖頭方柱形で、花燈形は３類である。本体には正面のみ丁寧に磨きが施され、他面は全体に工具痕が残る。底面の中央部は正背面径約 18cm、左右側面径約 18cm、深さ２～６mmの円形の窪みが，粗い工具痕を残して彫られている。花燈形は周囲より１cm彫り窪められ、正面のみを文字面とする一観面の本体である。花燈形内右側に「安永八亥年」、中央に「釈妙念」、左側に「九月朔日」の文字が薬研彫りで刻字されている。台石は全体に工具痕を残す。

墓 ST004　1783（天明三年四月十五日）没成人女性墓（Fig.45）

調査開始時、本体は西を向いて倒置されていたが、その倒置状況から本来は西を向いていたと考え、元の場所に戻して実測を行った。墓域中央西端に位置し、本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 51.5cmで本体の高さは 40.5cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。

本体形は切妻形で、花燈形は２類である。本体には正面のみ粗い磨きが施され、僅かに工具痕を残し、他面は全体に工具痕が残る。底面の中央部は正背面径約 15 cm、左右側面径約 17cm、深さ２～５mmの隅丸方形に粗い工具痕を残して彫り窪められ、底面全体も粗く削った工具痕を残す。また、両側面は平坦ではなく、

特に右側面は顕著である。花燈形は周囲より 0.5cm彫り窪められ、正面のみを文字面とする一観面の本体である。花燈形内右側に「天明三卯天」、中央に「釈尼妙智」、左側に「四月十五日」の文字が薬研彫りで刻字されている。台石は全体に工具痕を残す。

墓 ST005　1794（寛政六年十月十六日）・1802（享和二年九月三日）・1806（文化三年五月三十日）没成人女性墓（Fig.45）

調査開始時、本体は②面を上方に西を向いて倒置されていたが、その倒置状況から本来は①面が西を向いていたと判断し、台石の上に戻して実測を行った。墓域南西端に位置する。本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 64cmで本体の高さは 49cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。

本体形は尖頭方柱形で、花燈形は①面が３類、②面が５類、③面が３類である。本体には底面を除き、丁寧な磨きが施され、上面に僅かに工具痕を残し、他面は全体に工具痕が残る。底面全体は平坦で、粗い工具痕が僅かに残る。花燈形は周囲より 1.3cm彫り窪められ、正面（①面）、左側面（②面）、背面（③面）を文字面とする多観面の本体である。①面は花燈形内右側に「寛□六寅天」、中央に「釈尼妙西」、左側に「十月十六日」の文字が薬研彫りで刻字されている。②面は花燈形内右側に「享和二戌天」、中央に「釈尼妙見」、左側に「九月三日」の文字が薬研彫りで刻字されている。③面は花燈形内右側に「文化三寅天」、中央に「釈尼妙心」、左側に「五月三十日」の文字が薬研彫りで刻字されている。また、①面花燈形内右側の欠損部は寅年であることから「寛政」と考える。台石は全体に工具痕を残す。本墓域では花燈形を三面にもつ唯一の墓石であり、合祀用である。

墓 ST006　1804（文化元年四月十八日）没成人男性墓（Fig.45）

調査開始時、本体は西を向いて倒置されていたが、その倒置状況から本来は西を向いていたと考え、元の場所に戻して実測を行った。墓域北側に位置し、本体１石、台石２段の計３石からなり、墓石の総高は 75cm と推定され、本体の高さは 43cmを測る。３石全て凝灰岩製である。

本体形は尖頭方柱形で、花燈形は４類である。本体には正面のみ丁寧な磨きが施され、他面は全体に工具痕が残る。底面の中央部は正背面径約 18 cm、左右側面径約 20cm、深さ５㎜の隅丸方形に粗い工具痕を残して彫り窪められ、底面全体も粗く削った工具痕を残す。

花燈形は周囲より１cm彫り窪められ、正面のみを文字面とする一観面の本体である。花燈形内右側に「文和元子年」、中央に「釈教閑」、左側に「四月十八日」の文字が薬研彫りで刻字されている。刻字は全て赤色顔料で彩色されており、残存状況は良好である。

ここで、花燈形内側に刻字されている「文和」であるが、本来「文和」は南北朝時代の元号で北朝方によって使用されており、1352 年から 1355 年までの期間を指す。しかし、本墓石は文和年間の所産とは考え難い。「子年」と刻字されていることから、文化元年と考える。そこで文化元年（1804）に着目する。文化元年は前元号である享和との移行年である。よって、文化年間の「文」、享和年間の「和」の文字が混同した結果であると考える。台石は２石ともに全体に工具痕を残す。

墓 ST007　1810（文化七年七月十二日）没成人女性墓（Fig.46）

墓域北側に位置し、墓石は西に正面を向いている。本体１石、台石２段の計３石からなり、墓石の総高は 69.4cmで本体の高さは 42.6cmを測る。３石全て凝灰岩製である。

本体形は尖頭方柱形で、花燈形は４類である。本体には正面のみ丁寧な磨きが施され、他面は全体に工具痕が残る。底面の中央部は正背面径約 16.5cm、左右側面径約 19cm、深さ１cmの隅丸方形に幅３㎜の棒状の工具痕を残して彫り窪められている。花燈形は周囲より 1.3cm彫り窪められ、正面、左側面を文字面とする多観面の墓石である。正面の花燈形内右側に「文化七午天」、中央に「釋尼了壽」、左側に「七月十二日」、左側面に「勲七　母」の文字が薬研彫りで刻字されている。正面の刻字には赤色顔料による彩色が良好に残存し、刻字の一部の縁には刻字前の下書きと考えられる墨書が僅かに確認される。台石は２石ともに工具痕を残す。

墓 ST008　1826（文政九年四月四日）没成人男性墓（Fig.46）

墓域最北端に位置し、調査開始時には本体は西を向いて倒置されていた。本体の倒置状況から本来は西を向いていたと考え、元の場所に戻して実測を行った。

本体１石、台石２段の計３石からなり、墓石の総高は 77cmで本体の高さは 48cmを測る。３石全て凝灰岩製である。本体形は尖頭方柱形で、花燈形は５類である。本体には正面のみ丁寧な磨きが施され、他面は全体に工具痕が残る。底面の中央部には、幅７㎜程の棒状の工具痕が残り、底面全体も粗く削った工具痕を残す。

花燈形は周囲より 1.5cm彫り窪められ、正面のみを文字面とする一観面の本体である。花燈形内右側に「文政九戌天」、中央に「釈教信」、左側に「四月四日」の文字が薬研彫りで刻字されている。また、花燈形内は赤色顔料による彩色の痕跡を僅かに残し、刻字内、花燈形内右上部及び右下部にも同様の彩色が良好に確認された。台石は２石ともに工具痕を残す。

墓 ST009　1836（天保七年七月七日）没成人男性墓（Fig.46）

調査開始時には本体は南を向いて倒置されていたが、その倒置状況から本来は西を向いていたと考え、元の場所に戻して実測を行った。墓域中央東端に位置し、本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 51cmで本体の高さは 40cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。

本体形は方柱形で、花燈形は４類である。本体は底面を除き、丁寧な磨きが施される。底面の中央部は正背面径約 13cm、左右側面径約 20cm、深さ２㎜の不定形に幅５㎜の棒状の工具痕と幅３cmの工具痕を残して彫り窪められている。上面は工具痕が残り、中央部のみ苔が付着せず上部に石が置かれていた痕跡が認められることから、本来は方柱形ではなく、上部石と組み合わせて本体が形成されていたものと考える。

花燈形は周囲より 1.5cm彫り窪められ、正面のみを文字面とする一観面の本体である。花燈形内右側に「□保七申天」、中央に「釈白心」、左側に「七月七日」の文字が薬研彫りで刻字されている。元号部分が一部欠損しているが、「申年」であることから、「天保」と考える。台石全体の磨きは粗く、工具痕が僅かに確認される。

墓 ST010　1837（天保八年八月十八日）没成人女性墓（Fig.47）

墓域中央に位置し、墓石は西に正面を向いている。本体１石、台石２段の計３石からなり、墓石の総高は 87.5cmで本体の高さは 54cmを測る。３石全て凝灰岩製である。

本体形は方柱形（兜形）で、花燈形は６類である。本体には底面を除き、丁寧な磨きが施されている。底面の中央部は正背面径約 20cm、左右側面径約 22cm、深さ２～３㎜の隅丸方形に粗い工具痕を残して彫り窪められ、底面全体も粗く削った工具痕を残す。

花燈形は周囲より 1.8cm彫り窪められ、正面のみを文字面とする一観面の本体である。花燈形内右側に「天保八酉天」、中央に「釈尼妙栖」、左側に「八月十八日」の文字が薬研彫りで刻字されている。刻字の縁全体には、刻字前の下書きと考えられる墨書の痕跡が僅かに観察される。１段目の台石は全体に工具痕を残し、２段目の台石は上面のみ工具痕を残し、残りの面には丁寧な磨きが施されている。

墓 ST011　1838（天保九年一月十四日）没成人男性墓（Fig.47）

墓域北側に位置し、墓石は西に正面を向いている。本体１石、台石２段の計３石からなり、墓石の総高は 92.1cmで現存する墓石中最大である。本体の高さは 57.5cmを測る。３石全て凝灰岩製である。

本体形は方柱形（兜形）で、花燈形は６類である。本体には底面を除き、丁寧な磨きが施され、背面には僅かに工具痕を残す。底面の中央部は正背面径約 22cm、左右側面径約 46cm、深さ５～ 15㎜の隅丸方形に粗い工具痕を残して彫り窪められ、底面全体も粗く削った工具痕を残す。

花燈形は周囲より１cm彫り窪められ、正面のみを文字面とする一観面の本体である。花燈形内右側に「天保九戌天」、中央に「釈教運」、左側に「正月十四日」の文字が薬研彫りで刻字されている。１段目の台石は全体に工具痕を残すが、２段目の台石は全体に磨きが施されている。

墓 ST012　1846（弘化三年二月十五日）没幼児男性墓（Fig.48）

墓域中央西端に位置し、墓石は西に正面を向いている。本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 48.5cmで本体の高さは 35.5cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。

本体形は仏像形で、袈裟を纏い、宝珠を両手で持つ頭部が欠損した地蔵菩薩立像が丸彫りされている。本体には丁寧な磨きが施され、底面全体は平坦で、磨耗して滑らかである。背面のみが文字面で、右側に「弘化三午年」、中央に「釈周向」、左側に「二月十五日」の文字が薬研彫りで刻字されている。

台石は全体に工具痕を残す。頭部の欠損は、風化によるものと考える。

墓 ST013　1848（弘化五年三月一日）没幼児女性墓（Fig.48）

墓域中央東端に位置し、墓石は西に正面を向いている。本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 85.6cmで本体の高さは 60.6cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。

本体形は仏像形で、宝冠を戴冠した菩薩坐像が半肉彫りされている。いわゆる舟形光背をもち、その全面は磨きが施され、舟底部に稜線が認められる。本体には丁寧な磨きが施されているが、本体下部背面には工具痕を僅かに残す。また、底面全体は平坦で幅１～２cmの工具痕を残すが、滑らかである。

本体下部に文字面があり、右側に「弘化五申年」、中央に「釈妙淳尼」、左側に「三月朔日」の文字が薬研彫りで刻字されている。また、台石は蓮華を半肉彫りで表現した三重複連弁の蓮華座が用いられ、丁寧に磨きが施されている。

墓 ST014　1850（嘉永三年五月八日）没幼児女性墓（Fig.48）

墓域中央西端に位置し、墓石はほぼ西に正面を向いている。本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 76cmで本体の高さは 64cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。

本体形は仏像形で、宝冠が欠損した菩薩坐像が半肉彫りされ、菩薩坐像頭部上には光輪が浮き彫りされている。いわゆる舟形光背をもち、その全面は磨きが施され、舟底部に稜線が認められる。本体には丁寧な磨きが施されているが、本体下部背面には工具痕を僅かに残す。底面全体は平坦で幅１～２cmの粗い工具痕を残す。本体下部に文字面があり、右側に「嘉永三□」、中央に「釈尼妙受」、左側に「戌五月八日」の文字が薬研彫りで刻字されている。台石は全体に工具痕を残す。

墓 ST015　1852（嘉永五年五月十三日）没成人男性墓（Fig.50）

調査開始時、本体は上を向いて倒置されていたが、その倒置状況から本来は西を向いていたと考え、元の場所に戻して実測を行った。墓域北側に位置し、本体１石、台石２段の計３石からなり、墓石の総高は 88.1cmで本体の高さは 51.5cmを測る。３石全て凝灰岩製である。

本体形は位牌形（1）で、花燈形は３類である。本体は正面、両側面に丁寧な磨きが施されるが、背面には工具痕を残す。底面の中央部は正背面径約 21cm、左右側面径約 21.5cm、深さ２～３mmの菱形に粗い工具痕を残して彫り窪められている。

花燈形は周囲より 1.5cm彫り窪められ、正面、右側面、左側面を文字面とする多観面の本体である。花燈形内に「釋應称」、右側面中央に「嘉永三子年」、左側に「五月十三日」、左側面に「金助兄」の文字が薬研彫りで刻字されている。１段目の台石は全体に工具痕を残すが、２段目の台石は全体的に磨きが施されている。

墓 ST016　1852（嘉永五年十一月十三日）没幼児女性墓（Fig.49）

墓域中央に位置し、墓石は西に正面を向いている。本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 61.5cmで本体の高さは 49.5cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。

本体形は仏像形で、宝冠を戴冠した菩薩坐像が半肉彫りされている。いわゆる舟形光背をもち、その全面は磨きが施され、舟底部に稜線が認められる。本体には粗い磨きが施されており、工具痕を僅かに残すが、本体下部背面には工具痕が明瞭に観察される。底面の中央部は正背面径約 35cm、左右側面径約 50cm、深さ２～３mmの楕円形に幅２mmの工具痕を残して彫り窪められている。本体下部に文字面があり、右側に「嘉永五子年」、中央に「釈尼妙西」、左側に「十一月十三日」の文字が薬研彫りで刻字されている。台石は全体に工具痕を残す。

墓 ST017　1854（嘉永七年十月）没幼児男性墓（Fig.49）

墓域中央東端に位置し、墓石はほぼ西に正面を向いている。本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 60.6cmで本体の高さは 46.8cmを測る。

本体形は仏像形で、袈裟を纏い、念珠をかけて合掌する地蔵菩薩坐像が半肉彫りされている。

いわゆる舟形光背をもち、その全面は磨きが施され、舟底部に稜線が認められる。本体には丁寧な磨きが施されているが、本体下部背面には工具痕を僅かに残す。底面全体は平坦で幅１．５～３cmの粗い工具痕を残す。風化により一部刻字が欠損しているが、本体下部に文字面があり、右側に「嘉永七年」、中央に「釈淨方」、

左側に「寅十月□」の文字が薬研彫りで刻字されている。台石には工具痕が認められる。地蔵菩薩の顔面の欠損は、風化によるものと考える。

墓 ST018　1857（安政四年□月十日か）　没幼児男性墓（Fig.49）

墓域南西端に位置し、墓石は西に正面を向いている。本体１石、大部分が埋没した台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 52.5cmで本体の高さは 50.5cmを測る。

本体形は仏像形で、袈裟を纏い、念珠をかけて合掌する地蔵菩薩坐像が半肉彫りされている。いわゆる舟形光背をもち、その全面は磨きが施され、舟底部に稜線が認められる。本体には丁寧な磨きが施されているが、本体下部背面には工具痕を僅かに残す。底面全体は平坦で幅１～1.5cmの粗い工具痕を残す。

本体下部及び舟形光背正面に文字面があり、本体下部中央に「釈弘正」の文字が薬研彫りで刻字されている。また、舟形光背正面右側には「□巳年」、左側に「□月十日」と刻字されているが、風化による欠損のため判読不能であった。

ここで墓 ST018 の舟形光背側面の厚みや、地蔵菩薩坐像の意匠等が ST017 と類似することから、本墓石は墓 ST017 に近い時期の所産と考える。また ST018 のように法名と年紀が別の場所に刻字されるのは、墓 ST015・ST019 の例から嘉永以降と推定する。よって、「嘉永」に近接する巳年は安政四年（1857）に求められることから、本墓石の年紀は安政四年と考える。台石は全体に工具痕を残す。地蔵菩薩の顔面の欠損は、風化によるものと考える。

墓 ST019　1858（安政五年六月六日）没成人男性墓（Fig.50）

調査開始時、本体は台石から外れ地表に西を向いて立っており、その状況から本来は西を向いていたと考え、元の場所に戻して実測を行った。墓域中央北側に位置し、本体１石、台石２段の計３石からなり、墓石の総高は 86.3cmで本体の高さは 48.5cmを測る。３石全て凝灰岩製である。

本体形は位牌形（1）で、花燈形は３類である。本体には正面のみ丁寧な磨きが施され、他面は僅かに工具痕を残す。底面の中央部は正背面径約 18cm、左右側面径約 21cm、深さ２mmの隅丸方形の窪みが、工具痕を残して彫り窪められている。

花燈形は周囲より 1.6cm彫り窪められ、正面、右側面、左側面を文字面とする多観面の本体である。花燈形内に「釋寶乗」、右側面中央に「安政五午年」、左側に「六月六日」、左側面中央下部に「俗名宗四良」の文字が薬研彫りで刻字されている。１段目の台石は全体に工具痕を残すが、２段目の台石は底面を除き、全体的に磨きが施されている。

墓 ST020　年号不明（Fig.51）

墓域北東に位置し、墓石は西に正面を向いている。本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 68.8cmで本体の高さは 58cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。

本体形は仏像形で、袈裟を纏い、合掌する地蔵菩薩立像が半肉彫りされているが、袈裟の意匠は簡略化している。いわゆる舟形光背をもち、その全面は丁寧に磨かれており、丸みを帯びる。本体にも丁寧な磨きが施されている。また底面全体には粗い工具痕を残すが、平坦である。本体に文字面はなく、法名、年号は不明である。台石は全体に工具痕を残す。

墓 ST021　年号不明（Fig.51）

墓域南東に位置し、墓石は東に正面を向いている。本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は 65.4cmで本体の高さは 54cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。

本体形は仏像形で、袈裟を纏い、合掌する地蔵菩薩立像が半肉彫りされている。いわゆる舟形光背をもち、その全面は丁寧に磨かれており、丸みを帯びる。本体にも丁寧な磨きが施されている。底面の中央部は正背面径約 16.5cm、左右側面径約 44cm、深さ１～３mmの隅丸方形に幅１cmの工具痕を残して彫り窪められ、底面全体も粗く削った工具痕を残す。本体に文字面はなく、法名、年号は不明である。台石は全体に工具痕を残す。

墓 ST022　年号不明（Fig.51）

墓域中央東端に位置し、墓石は西に正面を向いている。本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総

高は65cmで本体の高さは53cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。

本体形は仏像形で、袈裟を纏い、合掌する地蔵菩薩立像が半肉彫りされている。いわゆる舟形光背をもち、その全面は丁寧に磨かれており、丸みを帯びている。本体にも丁寧な磨きが施されている。また底面全体には工具痕が部分的に散見されるが、平坦で滑らかである。本体下部は、二重複連弁の蓮華文が半肉彫りで表現されている。本体に文字面はなく、法名、年号は不明である。台石は全体に工具痕を残す。

墓ST023　1860（安政七年七月一日）没成人男性墓（Fig52）

墓石は墓ST020とST022の間に位置し、墓ST024を上に積載した状態で凝灰岩製の本体のみが確認された。よって、本来の位置から移動している可能性が高い。

本体は一辺26cmの正方形、奥行き20cmの扁平な直方体を呈する。本体形は方柱形で上・底面を除き、丁寧な磨きが施される。上面は中央部のみ粗い工具痕を残すことから、本来は上部石を置いていたと推察される。また、底面全体は粗い工具痕を残し、特に中央部は正背面径約17cm、左右側面径約21cm、深さ２～３㎜の楕円形に工具痕を残して彫り窪められている。

正面のみが文字面で、右側に「安政七庚申年」、中央に「釋道瑞」、左側に「七月朔日」の文字が薬研彫りで刻字されている。刻字の縁には、刻字前の下書きと考えられる墨書の痕跡が観察される。

墓ST024　1860（安政七年七月十日）没成人男性墓（Fig.52

墓石は墓ST020とST022の間に位置し、墓ST023の上に積載された状態で凝灰岩製の本体のみが確認された。よって、本来の位置から移動している可能性が高い。

本体は26.5×24cmの長方形、奥行き22cmの扁平な直方体を呈する。本体形は方柱形で上・底面を除き、丁寧な磨きが施される。上面は中央部のみ粗い工具痕を残すことから、本来は上部石を置いていたと推察される。また、底面全体は幅５～10㎜の工具痕を残し、特に中央部は正背面径約10cm、左右側面径約16cm、深さ２～４㎜の楕円形に工具痕を残して彫り窪められている。

正面のみが文字面で、右側に「安正攵七庚申年」、中央に「釋道隆」、左側に「七月十日」の文字が薬研彫りで刻字されている。刻字の縁には、刻字前の下書きと考えられる墨書の痕跡が観察される。年号の刻字は「安政」が「安正攵」と異体字で表現されている。

墓ST025　1891（明治二十四年十一月二十一日）没成人男性墓（Fig.52）

墓域北東端に位置し、本体１石、台石１段の計２石からなり、墓石の総高は65.5cmで本体の高さは49.5cmを測る。２石ともに凝灰岩製である。

本体形は位牌形（２）で、花燈形は３類である。本体には底面を除き、丁寧な磨きが施されている。また、底面全体は幅３㎜程の工具痕を残し、特に中央部は正背面径約19cm、左右側面径約21cm、深さ５㎜の楕円形に工具痕を残して彫り窪められている。

花燈形は周囲より1.2cm彫り窪められ、正面、右側面、左側面を文字面とする多観面の本体である。正面の花燈形内に「釋道隆」、右側面中央に「明治廿四年」、左側に「卯十一月廿一日」、左側面中央右下部に「前田金平」、中央下部に「二男直平」の文字が薬研彫りで刻字されている。刻字の縁の一部には、墨書の痕跡が観察される。台石は全体に工具痕を残す。

法名「釋道隆」はST024の法名と同一であるが、左側面では「前田金平二男直平」と名乗り、ST024の安政七年から31年経過していることから、別人であると推測する。

墓ST026　1898（明治三十一年）没成人女性墓（Fig.53）

墓域南側中央に位置し、調査開始時は本体及び一段目の台石は墓石より崩落倒置され、二段目以降の台石も崩壊していた。これは、本墓石が改葬された後、そのまま放置された状態にあると考える。

調査は本体の実測と台石の実測を別々に行った。墓石は、現地の状況から本体１石、１～３段目台石１石、４段目台石３石、５段目台石４石と、左右対称に花立を配置した水鉢１石の計12石からなると推測され、本墓域で唯一複数の石を組み合わせて、台石を形成している。墓石の総高は約130cm、本体の高さは63.6cmを測り、本墓域最大の墓石である。本体と４段目以降の台石は花崗岩、１～３段目台石までは凝灰岩で作成され、本墓石群で唯一異なった石材を組み合わせている。本体形は方柱形（兜形）で、花燈形は５類である。

本体には丁寧な磨きが施されており、底面全体には粗く削った工具痕を残す。特に中央部は正背面径約21cm、左右側面径約23cm、深さ2cmの隅丸方形に工具痕を残して彫り窪められている。

花燈形は周囲より1.5cm彫り窪められ、正面、右側面、左側面を文字面とする多観面の本体である。正面の花燈形内に「前田美波之墓」、右側面中央に「明治三十一年」、左側に「三月二十日没」、左側面中央右下部に「前田初平」、中央下部に「祖母享年八十七歳」の文字が薬研彫りで刻字されている。

一段目台石は本体と共に崩落倒置されていたが、蓮華文の上弁（複弁）のみが半肉彫りで表現され、三段目台石は蓮華文の下弁（複弁）のみが半肉彫りで表現されている。また、2段目の台石には工具痕を残すが、残りの台石には丁寧な磨きが施されている。

本墓石は台石の形態、法名及び年号の表記方法など、本墓域の他の墓石とは一線を画し、現代に繋がる新しい様相を示している。

E 総 括

本遺跡では、26基の墓石の調査を行った。その内、墓ST020・ST021・ST022を除く23基から、刻字が確認された。刻字の内容から被葬者名には全て「釈」を冠する法名が使用されており、本遺跡は浄土真宗の墓地であることが分かる。また、大半の墓石が西向きに建立されている点から、阿弥陀仏が住むという西方浄土に往生することを願う当時の死生観の一端を確認することができた。

ここでは調査された26基の墓石についてその属性を抽出し、本遺跡の墓石の変遷について考察を行う。

なお、各墓石の建立年代と位置から、墓域の埋葬や葬送儀礼についての空間構成や墓道に代表される動線の検討を試みたが、墓石は本墓域全体に不作為に建立されており、最古の墓石である1・2号墓が最南端に建立されていたこと以外、規則性を見出すことは出来なかった。

1 石材について

西屋敷遺跡で確認された墓石は、一部に花崗岩が用いられた墓ST026を除き、全て凝灰岩で製作されている。本遺跡が立地する大坊の丘陵から凝灰岩の露頭は確認されないが、当遺跡の所在する玉名は凝灰岩が容易に採取できる石材環境にあり、古くから凝灰岩を利用した遺跡も数多く存在する。また、本遺跡から西方約740mの地点には、近代まで凝灰岩が採取されていた「富尾石切り場」も存在することから、本遺跡の墓石は全て墓域周辺の在地石材を用いたものと考える。

2 本体の分類について

本体の分類は先学の研究成果[1]を参照して、次のように分類を行った。(Fig.42、Tab.11)

本体の形状から切妻形、尖頭方柱形、方柱形、方柱形（兜形）、位牌形（1）、位牌形（2）、仏像形（地蔵）、仏像形（菩薩）に8分類し、花燈形を6分類した。

なお、上部石材と組み合わせて本体をなす可能性がある方柱形墓ST009・ST023・ST024については、他に比較対象する本体がなく、検討対象として除外し、合祀用と推定される墓ST005は補足資料としてのみ使用した。

2－(1) 成人墓について（Tab.11）

a 本体形

本体形は、幼児墓と推定される仏像形を除く成人墓について考察を行う。本遺跡の成人墓は、墓ST001（明和四年）から墓ST026（明治三十一年）まで14基が確認された。

墓ST001から墓ST004までは尖頭方柱形と切妻形が併用して用いられているが、その法名から男性には尖頭方柱形、女性には切妻形が用いられている。のちに建立された墓ST005は女性であるにも関わらず、尖頭方柱形が用いられていることから、本遺跡ではST004が建立された天明三年（1783）までは、被葬者の性別によって本体を使い分けていたと推察される。

1 大分県教育委員会「中尾近世墓地」－国道10号線日の原交差点拡幅に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－ 1999年3月・「女狐近世墓地」九州横断自動車道関係調査－報告書5－ 1996年

また、ST005から女性も尖頭方柱形が用いられ、尖頭方柱形は文政九年（1826）の墓ST008まで継続していた。この段階以降、本体による性差は認められず、男女ともに同じ本体を使用するようになったと考える。

そして、墓ST010・ST011が建立された天保八・九年は方柱形（兜形）が用いられ、墓ST015が建立された嘉永五年（1852）以降、本体形は位牌形が明治まで続き、ST026段階（明治三十一年：1898）で再び方柱形（兜形）に変化することが分かる。

つまり、本体形は、尖頭方柱形・切妻形→尖頭方柱形→方柱形（兜形）→位牌形→方柱形（兜形）の順に変化することが分かる。

b　花燈形

花燈形の変化を概観すると、1類は本遺跡最古の1号墓のみに認められることから、墓ST001は明和四年（1767）以前の古い花燈形の様式を残していると考える。また、2類は墓ST002とST004の成人女性墓にのみ認められ、墓石形状で性差が分かれていた段階、即ち切妻形の本体形のみ用いられたものと考える。さらに、3類はST003のみに認められ、4・5類は男女ともに同じ本体を使用するようになったST006以降の尖頭方柱形に認められ、4→5類へと変化する。そして、方柱形（兜形）で6類になり、位牌形では再び3類へと変化し、ST026の尖頭方柱形では5類になる。

すなわち、花燈形は1類→2・3類→4類→5類→6類→3類→5類の順に変化することが分かる。

ここでST005の②面に着目すると、5類の花燈形が認められることから、刻字された年紀（享和二年：1802）より新しい時期に建立された可能性が推察される。

c　観面と刻字

ここでは合祀用と考えられるST005を除く、13基で検討する。観面は1号墓からST011、すなわち明和四年（1767）～天保九年（1838）まではST007（二観面）を除き、一観面である。そして、嘉永五年（1852）のST015以降、多観面（三観面）へと変化したことが分かる。

ここでまず、ST007に着目すると、ST007の被葬者は女性である。そのことから、本体形による性差が認められくなった尖頭方柱形では観面によって性差を使い分けていたと推察されるが、類例が1例であるため、推測の域を出ない。また、多観面の左側面に着目すると、ST007の「勲七母」、ST015の「金助兄」といった建立者と被葬者の関係が推察される文言の刻字から、ST019の「俗名宗四良」、ST025の「前田金平次男直平」等と被葬者個人名への刻字へと変化している点は興味深い。

刻字は7号墓で赤色顔料および墨書、ST006・008で赤色顔料、ST010・025で墨書の痕跡が確認された。墨書は刻字の縁、赤色顔料は刻字内に認められる。墨書と薬研彫りの関係から、墨による下書きの後、刻字されたと推定する。また、刻字内に赤色顔料が認められることから、刻字後、赤色顔料による彩色が行われたと考える。つまり墨書による下書きの後刻字、そして赤色顔料による彩色が行われたと考える。

刻字の墨書、赤色顔料の残る墓石は上記の4基と少なく、本来は他の墓石でも見られた可能性はあるが、風化による退色によって、現在は肉眼観察では認められなかった。よって、墨書や赤色顔料の使用された期間や本体形・花燈形との関係性を見出すことは出来なかった。しかし、ST025から墨書が確認されていることから、少なくとも明治二十四年までは墨書が施されていたことは明らかである。

また、組み合わせ式と推定されるST023・024の刻字の縁にも墨書の痕跡が確認されている。

d　本体調整

本体の調整は、正面のみ粗い磨き、正面のみ丁寧な磨き、底面を除く全面丁寧な磨きの3つに大別される。

正面のみ粗い磨きはST001・002・004に認められ、切妻形と花燈形1類の尖頭方柱形にのみ施されている。正面のみ丁寧な磨きはST003・005・006・007・008に認められ、花燈形3類の尖頭方柱形に施された調整方法であることが分かる。そして、底面を除く全面丁寧な磨きはST010・011・025に認められ、方柱形（兜形）及び位牌形（2）に施される。全面に磨きが施されるが、特に正面が丁寧に磨かれるのはST015・019、すなわち位牌形（1）に認められる。つまり、本体調整は本体形と花燈形に密接に結びついていることが明らかである。

また、本遺跡で確認された墓石の底面は粗い調整痕を残し、その大半は中心に楕円形や隅丸方形の浅い窪

みを持つ。これは、台石に据えられた後、本体の「ズレ」を防ぐための措置であると考える。

e．法量（Tab.10）

本体正面高を概観すると、本体形毎に一定のまとまりを持っていることが明らかとなった。すなわち、花燈形１類の尖頭方柱形・切妻形（墓 ST001・ST002・ST004）が平均 40cm、尖頭方柱形（墓 ST003・ST006 ～ ST008）が平均 44.35cm、方柱形（兜形）（墓 ST010・ST011）が平均 55.75cm、位牌形（墓 ST015・ST019）が 50cm、墓 ST026 が 63.3cmである。そして、本体形では方柱形（兜形）が最大であることが分かる。

年紀	明和四	安永七	天明三	安永八	文化元	文化七	文政九	天保八	天保九	嘉永五	安政五	明二四	明三一
墓石名	1	2	4	3	6	7	8	10	11	15	19	25	26
本体形	尖頭方柱形	切妻形	切妻形	尖頭方柱形	尖頭方柱形	尖頭方柱形	尖頭方柱形	方柱形（兜形）	方柱形（兜形）	位牌形（1）	位牌形（1）	位牌形（2）	方柱形（兜形）
正面高	39.5	40	40.5	43.8	43	42.6	48	54	57.5	51.5	48.5	49.5	63.6
墓石高	(51.5)	(45)	51.5	58.8	(75)	69.4	77	87.5	(92.1)	88.1	86.3	65.5	不明

Tab.10　本体形及び法量一覧（墓石高の（　）は推定）

f．台石

台石の数は墓 ST026 を除くと、１段を有するものと２段を有するものの２つに分かれる。

１段を有する墓石は墓 ST001 ～ ST004・ST025、２段を有する墓石は墓 ST006 ～ ST008、ST010・ST011・ST015・ST019 である。つまり、切妻形・尖頭方柱形併用段階のみ１段を有し、それ以降は概ね２段を有することが分かる。

また、台石の調整に着目すると、１段目は全ての台石が工具痕を残す。そして、２段目は尖頭方柱形は工具痕を残し、方柱形（兜形）以降は丁寧な磨きが認められることが分かる。ここで、１段目が工具痕を残す理由としては、上部に積載される本体との関係性が考えられる。本体底面もその全てに粗い工具痕を残し、互いの工具痕による摩擦を利用し、本体の「ズレ」を防ぐ実用的な方法が選択されたと考える。対して、二段目の台石は、尖頭方柱形段階では１段目と同様の意識が認められるが、方柱形（兜形）以降、仕上がりに重点が置かれているようである。同じ台石でありながら、方柱形（兜形）以降は機能面を重視する１段目と、造形面を重視する２段目と意匠が異なり、その在り方に明確な差異が認められる。

２－(2)　幼児墓

先行研究[2]により、仏像形は幼児用の墓石として用いられることが全国的に明らかにされていることから、本稿もそれに従い、分類を行った。

仏像形は地蔵菩薩と観音菩薩の二種類があり、その法名から地蔵菩薩が男児用、観音菩薩が女児用であることが明らかになった。仏像形（地蔵）墓石は墓 ST012・ST017・ST018、ST020 ～ ST022 の６基が確認され、その内、墓 ST012・ST017・ST018 には年紀が刻字されていた。この３基の墓石を概観すると、最初に建立された ST012 は丸彫りの地蔵菩薩が彫刻され、その後建立された墓 ST017・ST018 では半肉彫りで彫刻されることから、製作技術の簡略化が認められる。また、墓 ST017・ST018 を観察すると、ST017 は本体下部に法名・年紀が刻字されているのに対して、ST018 は本体下部には法名のみが刻字され、年紀は光背正面に刻字されている。このように法名と年紀が別の場所に刻字されるのは、本遺跡成人墓では ST015 の嘉永五年以降であり、年代も矛盾しない。よって成人墓で区分した「位牌形墓石」段階以降の刻字が別々の場所に記されることは、幼児墓でも共通すると考える。

仏像形（菩薩）墓石は墓 ST013・ST014・ST016 の３基が確認された。その３基を改めて概観すると、ST013 は蓮華座に乗り、ST014 は舟形光背正面に光輪を負う観音菩薩像が彫刻されているが、ST016 は工具痕を残す台座の上に光輪を負わない観音菩薩像が彫刻されている。つまり、時代が新しくなるにつれて、仏像形（地蔵）墓石と同様、製作技術の簡略化が認められる。

ところで、法名及び年紀が刻字されていない墓 ST020 ～ ST022 であるが、地蔵菩薩が半肉彫りされている点から、少なくとも１２号墓よりは新しい時期に製作されたと考える。また、その意匠を観察すると、墓

2　谷川章雄「近世墓標の類型」「考古学ジャーナル」288　1988　ニューサイエンス社

ST022 → ST021 → ST020 の順に地蔵菩薩の衣紋が簡略化する傾向が認められる。上述のように、仏像形墓石が時代が新しくなると製作技術が簡略化する傾向を墓 ST020 ～ ST022 号墓に当てはめた場合、墓石の時期は不明であるが、墓 ST022 → ST021 → ST020 の順番で製作された可能性が推察される。

3　墓石の考察

ここでは１石で本体をなす切妻形、尖頭方柱形、方柱形（兜形）、位牌形（１）、位牌形（２）の成人墓石について考察する。なお、「2　本体の分類について」と同様の理由で墓 ST005・ST009・ST023・ST024 と５段の台石を有し、現在の墓石に連なる要素を持つ墓 ST026 は検討対象として除外する。

「2　本体の分類について」では本体形、花燈形、観面と刻字、本体調整、法量、そして台石について比較検討してきた。その結果、抽出したそれぞれの属性は、本体の形状と強く結びつくことがわかった。そこで改めてその結びつきを「切妻形墓石」、「尖頭方柱形墓石」、「方柱形（兜形）墓石」、「位牌形墓石」として墓石毎に整理する。

「切妻形墓石」は墓 ST002・ST004 の成人女性墓に限られ、花燈形が２類で正面のみ荒い磨きを施す一観面の本体と、粗い工具痕を残す１段の台石で構成される。

尖頭方柱形は、花燈形・本体調整・正面高・台石の数及び調整から、３つに細分（以後、尖頭方柱形（a）・（b）・（c）とする）できる。

「尖頭方柱形（a）墓石」は墓 ST001 を指し、花燈形が１類で正面のみ荒い磨きを施す一観面の本体と、粗い工具痕を残す１段の台石で構成される。特に花燈形が１類であるものは本遺跡では類例がなく、明和四年以前の古い形状を残す墓石と考える。

「尖頭方柱形（b）墓石」は墓 ST003 を指し、花燈形が３類で正面のみ荒い磨きを施す一観面の本体と、粗い工具痕を残す１段の台石で構成される。「尖頭方柱形（b）墓石」は「尖頭方柱形（a）墓石」と類似するが、花燈形が３類に変化し、本体正面高が「尖頭方柱形（a）墓石」と比べて大きくなる点で異なる。また、本体正面高の変化に着目すると、その正面高は後に続く「尖頭方柱形（c）墓石」に類似する法量を測る。よって、「尖頭方柱形（b）墓石」は「尖頭方柱形（a）から（c）墓石へ」の過渡期的な段階にある墓石と考える。

「尖頭方柱形（c）墓石」は６～８号墓を指し、花燈形が４・５類で正面のみ丁寧な磨きを施す本体と、粗い工具痕を残す２段の台石で構成される。本墓石から正面の調整が丁寧になり、２段の台石を有する。また「尖頭方柱形（c）墓石」は男性は一観面、女性は多観面で刻字されており、観面によって性別が使い分けられていた可能性が考えられる。

このように３分類された「尖頭方柱形墓石」は年紀から、（a）→（b）→（c）の順に変化することが分かる。そして、「切妻形墓石」との関係から、「尖頭方柱形（a）・（b）墓石」は男性用の墓石であり、「切妻形墓石」と併用された段階を経て、観面による性別の使い分けが行われた「尖頭方柱形（c）墓石」段階へ移行したと考える。

「方柱形（兜形）墓石」は墓 ST010・ST011 を指し、花燈形が６類で底面を除く全面に丁寧な磨きを施す一観面の本体と、２段の台石で構成され、大形化する。１段目の台石は工具痕を残し、２段目の台石は丁寧な磨きが施される。本墓石以降は丁寧な磨きによる仕上げが施され、意匠重視へと移行すると考える。また、本墓石では男女の墓石が確認されたにも関わらず、その違いが認められないことから、性別による使い分けが無くなった段階と推察される。

「位牌形墓石」は本体形から「位牌形（1）墓石」と「位牌形（2）墓石」の２つに細分される。

「位牌形墓石（１）」は墓 ST015・ST019 を指し、花燈形が３類で底面を除く全面に磨きが施されるが、特に正面のみが丁寧に施される多観面の本体と、２段の台石で構成される。１段目の台石は工具痕を残し、２段目の台石は丁寧な磨きが施される。本墓石以降は、正面に法名、右側面に年紀、左側面に俗名が刻字される多観面の墓石となる。また、花燈形が「尖頭方柱形（b）墓石」と同じ３類になり、本体正面高も「方柱形（兜形）墓石」と比べて小形化する。

「位牌形墓石（２）」は墓 ST025 を指し、花燈形が３類で底面を除く全面に丁寧な磨きを施す多観面の本体

と、粗い工具痕を残す1段の台石で構成される。本体形及び台石数に「位牌形墓石（1）」との差異が認められるが、その他は「位牌形墓石（1）」を踏襲する。

西暦		1767	1778	1779	1783	1804	1810	1826	1837	1838	1852	1858	1891	1898
年紀		明和四	安永七	安永八	天明三	文化元	文化七	文政九	天保八	天保九	嘉永五	安政五	明二十四	明三十一
墓石名		1	2	3	4	6	7	8	10	11	15	19	25	26
性別		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	男性	男性	男性	女性
本体	本体形	尖頭方柱形（a）	切妻形	尖頭方柱形（b）	切妻形	尖頭方柱形（c）	尖頭方柱形（c）	尖頭方柱形（c）	方柱形（兜形）	方柱形（兜形）	位牌形（1）	位牌形（1）	位牌形（2）	方柱形（兜形）
本体	花燈形	1	2	3	2	4		5	6		3			5
本体	観面	1					2	1			3			
本体	調整	正面のみ粗い磨き		正面のみ丁寧な磨き	正面のみ粗い磨き	正面のみ丁寧な磨き			底面を除く全面に丁寧な磨き		底面を除く全面（特に正面）に磨き		底面を除く全面に丁寧な磨き	
台石	段数	1				2							1	5
台石	1段目調整	工具痕残す												蓮華座
台石	2段目調整	－				工具痕残す			丁寧な磨き				－	工具痕残す
墓石		尖頭方柱形(a)墓石	切妻形墓石	尖頭方柱形(b)墓石	切妻形墓石	尖頭方柱形（c）墓石			方柱形（兜形）墓石		位牌形（1）墓石		位牌形(2)墓石	

Tab.11 成人墓属性表

以上のように、本遺跡では墓石の形状から、「尖頭方柱形（a）墓石」段階（明和）→「切妻形・尖頭方柱形（b）墓石」併用段階（安永～天明）→「尖頭方柱形（c）墓石」段階（文化）→「方柱形（兜形）墓石」段階（天保）→「位牌形墓石」段階（嘉永以降）へと移行することが明らかになった。そして、各墓石は本体形・花燈形・観面数・正面高・本体調整・台石数、そして台石調整の各属性と密接に結びついて製作されたことが分かった。また、「切妻形・尖頭方柱形（b）墓石」併用段階では本体形及び花燈形に性差が認められ、「尖頭方柱形（c）墓石」段階ではその差は観面数に表され、「方柱形（兜形）墓石」段階以降、性差による使い分けがなくなることが推察された。但し、この使い分けについては資料数が絶対的に不足しており、あくまでも本遺跡の現状からの推察である。

○まとめ

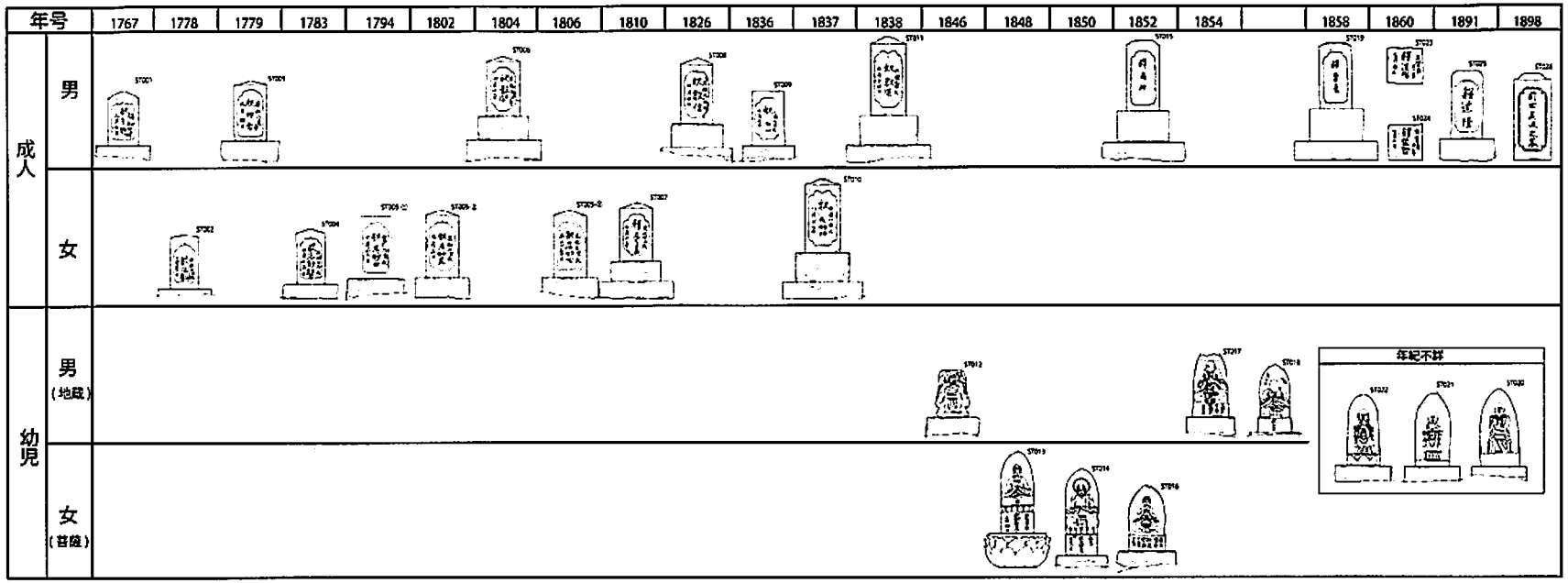
本遺跡で確認された26基の墓石の中で、単体で本体をなす成人墓12基、幼児墓6基の都合18基をもとに属性分析を中心に考察を行った。

その結果、明和四年（1767）～明治二十四年（1891）の124年間に成人墓では、5段階7型式の型式変化が確認された。そして、成人墓は墓石毎に強い規範性が認められることが明らかになり、幼児墓では製作技術の簡略化が明らかになった。また、成人墓、幼児墓それぞれに男女の使い分けの様子も推察された。しかし、本遺跡で比較検討できたは類例は18基と少なく、あくまでも推測の域を出ない点は否めない。

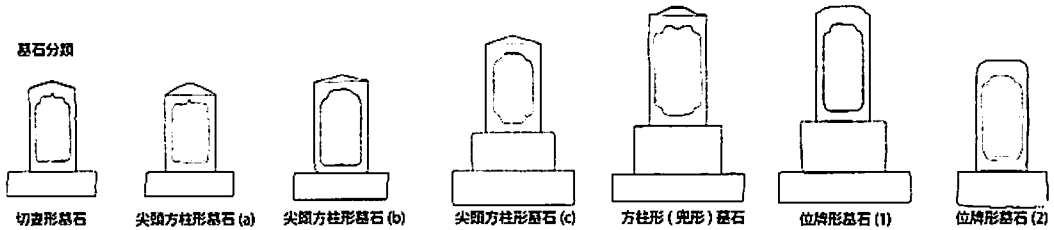
調査番号	西暦	元号	干支	銘	月日	本体 本体形	花瓶形 分類	花瓶形 刻字深度	刻字 面数	刻字 正面	刻字 右側面	刻字 左側面	刻字 背面	本体調整（○:磨き、◎:工具痕） 正面	右側面	左側面	背面	上面	底面	舟形光背	台石 台石数	台石調整（○ 磨き、◎:工具痕） 1段目	2段目	全体(cm)	本体(cm)	台石(一段)	台石(二段)	石材	備考
1	1767	明和四年	亥	釈 了西	2・7	尖頭方柱形	1	0.5	1	年名月日	-	-	-	○◎	◎	◎	◎	◎	楕円形	-	1	◎	-	51.5	39.5	12		凝灰岩	
2	1778	安永七年	戌	釈 尼妙意	10・22	切妻形	2	0.8	1	年名月日	-	-	-	○◎	◎	◎	◎	◎	工具痕あり	-	1	◎	-	(45～)	40	(5～)	-	凝灰岩	
3	1779	安永八年	亥	釈 妙玄	9・1	尖頭方柱形	3	1	1	年名月日	-	-	-	○	◎	◎	◎	◎	円形	-	1	◎	-	58.8	43.8	(15)	-	凝灰岩	
4	1783	天明三年	卯	釈 尼妙智	4・15	切妻形	2	0.5	1	年名月日	-	-	-	○◎	◎	◎	◎	◎	楕円形	-	1	◎	-	51.5	40.5	11	-	凝灰岩	
5	1794	寛政六年	寅	釈 尼妙西	10・16	尖頭方柱形	3	1.3	3	年名月日	-	年名月日	年名月日	○	○	○	○	○◎	僅かに工具痕	-	1	◎	-	(64)	49	15	-	凝灰岩	7-①②③は同一個体
	1802	享和二年	戌	釈 尼妙見	9・3	尖頭方柱形	5															◎		(64)	49	15	-		7-①②③は同一個体
	1806	文化三年	寅	釈 尼妙心	5・30	尖頭方柱形	3															◎		(64)	49	15	-		7-①②③は同一個体
6	1804	文和（文化） 元年	子	釈 教閑	4・18	尖頭方柱形	4	1	1	年名月日	-	-	-	○	◎	◎	◎	◎	不定形	-	2	◎	◎	(75)	43	(15)	17	凝灰岩	台石には「文和」と刻字
7	1810	文化七年	午	釈 尼了意	7・12	尖頭方柱形	4	1.3	2	年名月日	-	勘七母	-	○	◎	◎	◎	◎	隅丸方形	-	2	◎	◎	69.4	42.6	12	14.8	凝灰岩	
8	1826	文政九年	戌	釈 教徳	4・4	尖頭方柱形	5	1.5	1	年名月日	-	-	-	○	◎	◎	◎	◎	工具痕あり	-	2	◎	◎	77	48	12	17	凝灰岩	
9	1836	天保七年	申	釈 自心	7・7	方柱形	4	1.5	1	年名月日	-	-	-	○	○	○	○	◎	不定形	-	1	○◎	-	(51)	40	(11)	-	凝灰岩	上部積載石材の可能性あり。
10	1837	天保八年	酉	釈 尼妙信	8・18	方柱形（兜形）	6	1.8	1	年名月日	-	-	-	○	○	○	○	○	隅丸方形	-	2	◎	○（上◎）	87.5	54	12	21.5	凝灰岩	
11	1838	天保九年	戌	釈 教運	1・14	方柱形（兜形）	6	1	1	年名月日	-	-	-	○	○	○	○	○	隅丸方形	-	2	◎	○	(92.1)	57.5	(12.8)	21.8	凝灰岩	
12	1846	弘化三年	午	釈 円寿	2・15	仏像形（地蔵）	-	-	1	-	-	-	年名月日	○	○	○	○	○	平坦（滑）	-	1	◎	-	(48.5)	35.5	(13)	-	凝灰岩	
13	1848	弘化五年	申	釈 妙浄尼	3・1	仏像形（菩薩）	-	-	1	年名月日	-	-	-	○	○	○	○◎	○	平坦（滑）	磨き仕	1 蓮華座	○	-	85.6	60.6	25	-	凝灰岩	舟形光背 台石は蓮華加工
14	1850	嘉永三年	戌	釈 尼妙受	5・8	仏像形（菩薩）	-	-	1	年名月日	-	-	-	○	○	○	○◎	○	平坦（粗）	磨き仕	1	◎	-	76	64	12	-	凝灰岩	舟形光背
15	1852	嘉永五年	子	釋 慈評	5・13	位牌形（1）	3	1.5	3	名	年月	俗勘兄	-	○	○	○	○◎	○	鼓形	-	2	◎	○	88.1	51.5	14	22.6	凝灰岩	
16	1852	嘉永五年	子	釈 尼妙西	11・13	仏像形（菩薩）	-	-	1	年名月日	-	-	-	○◎	○◎	○◎	◎	○◎	楕円形	磨き仕	1	◎	-	(61.5)	49.5	(12)	-	凝灰岩	舟形光背
17	1854	嘉永七年	寅	釈 浄方	10・□	仏像形（地蔵）	-	-	1	年名月	-	-	-	○	○	○	○◎	○	平坦（粗）	磨き仕	1	◎	-	(60.6)	46.8	(13.8)	-		舟形光背
18	1857	安政四年	巳	釈 弘正	□・10	仏像形（地蔵）	-	-	1	年名月日	-	-	-	○	○	○	○◎	○	平坦（粗）	磨き仕	1	◎	-	(52.5～)	50.5	(2～)	-		舟形光背 安政4年
19	1858	安政五年	午	釋 貫乗	6・6	位牌形（1）	3	1.6	3	名	年月日	俗名宗四良	-	○	○◎	○◎	○◎	○◎	隅丸方形	-	2	◎	○	86.3	48.5	14	23.8	凝灰岩	
20	-	-	-	-	-	仏像形（地蔵）	-			-	-	-	-	○	○	○	○	○	平坦（粗）	磨き仕上	1	◎	-	(68.8)	(58)	(10.8)	-	凝灰岩	舟形光背
21	-	-	-	-	-	仏像形（地蔵）	-			-	-	-	-	○	○	○	○	○	隅丸方形	磨き仕上	1	◎	-	(65.4)	54	(11.4)	-	凝灰岩	舟形光背
22	-	-	-	-	-	仏像形（地蔵）	-			-	-	-	-	○	○	○	○	○	平坦（滑）	磨き仕上	1	◎	-	(65)	53	(12.0)	-	凝灰岩	舟形光背
23	1860	安政七年	庚申	釋 道照	7・1	方柱形	-		1	年名月日	-	-	-	○	○	○	○	○◎	楕円形	-	-	-	-	（厚）20	26×26	-	-	凝灰岩	上部積載石材の可能性あり。
24	1860	安政七年	庚申	釋 道證	7・10	方柱形	-		1	年名月日	-	-	-	○	○	○	○	○◎	楕円形	-	-	-	-	（厚）22	26.5×24	-	-	凝灰岩	上部積載石材の可能性あり。
25	1891	明治二十四年	卯	釋 道隆	11・21	位牌形（2）	3	1.2	3	名	年月日	前田金平二男直平	-	○	○	○	○	○	楕円形	-	1	◎	-	65.5	49.5	16	-	凝灰岩	
26	1898	明治三十一年	-	前田美波之墓	3・20	方柱形（兜形）	5	1.5	3	姓名	年月日	前田初平祖母享年八十七歳	-	○	○	○	○	○	隅丸方形	-	5	○	◎	(128.6)	63.6	(12.0)	8.0	凝灰岩 花崗岩	台石は五段からなる。一段目（蓮華座）三段目（蓮華座）四段目 12cm 五段目 12cm

（ ）は推定測値

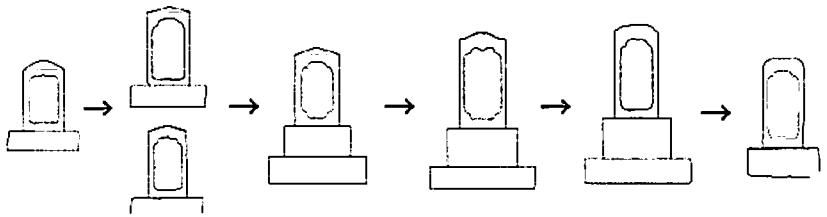
Tab.12 墓石観察表



墓石分類



成人墓石変遷図

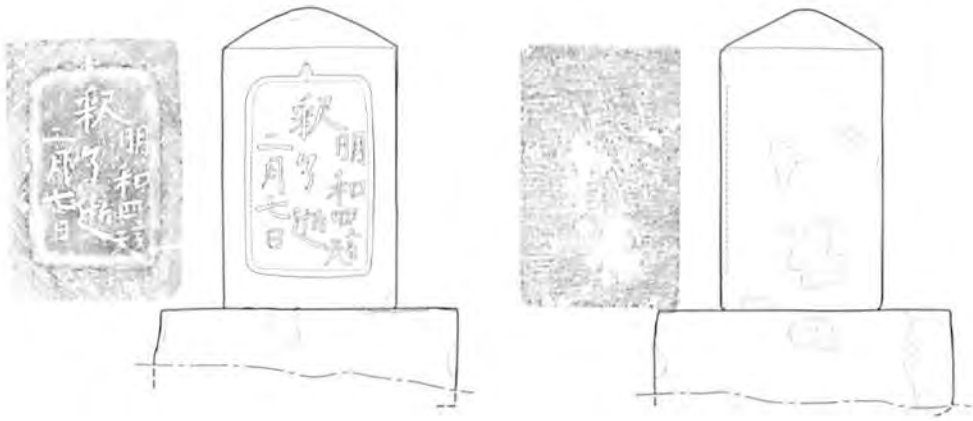


Tab.13　墓石編年表

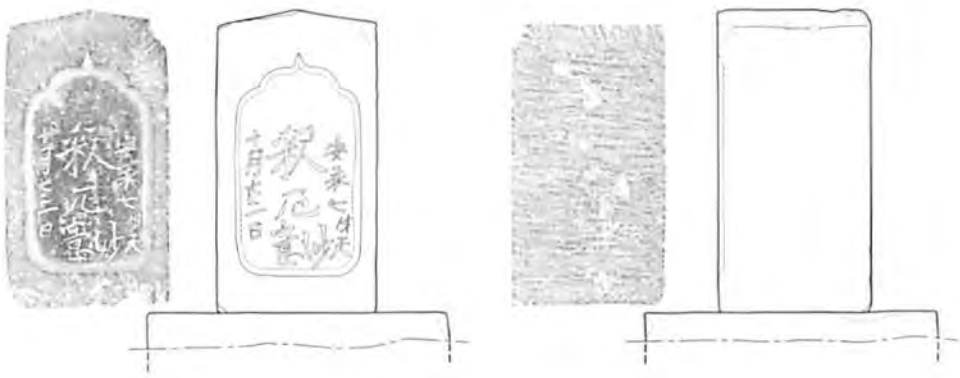
西屋敷遺跡（中央竹藪の中が２区）
大坊トンネル着工前風景

西屋敷遺跡・大坊トンネル完成後風景

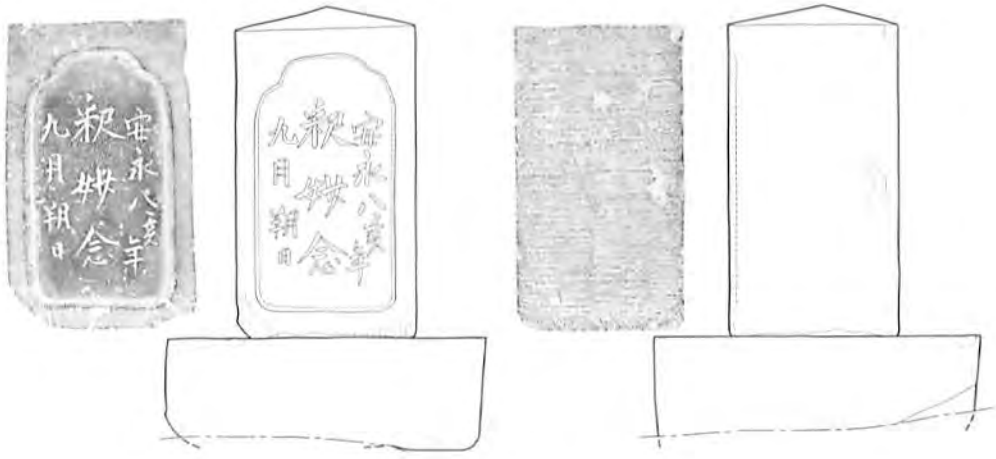
ST001



ST002



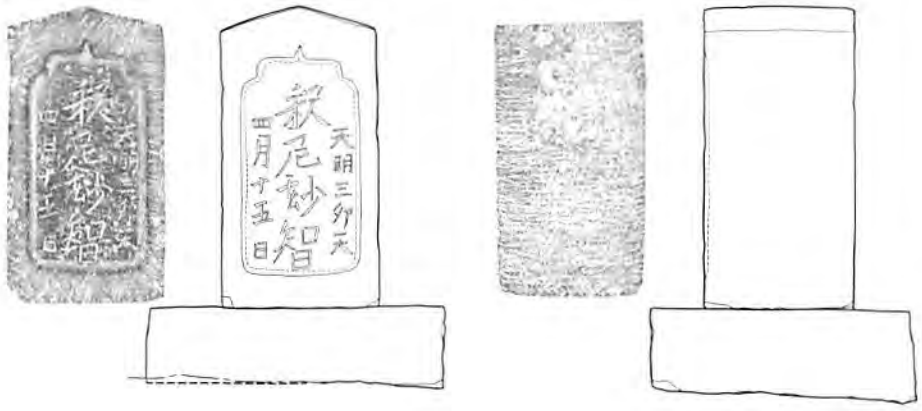
ST003



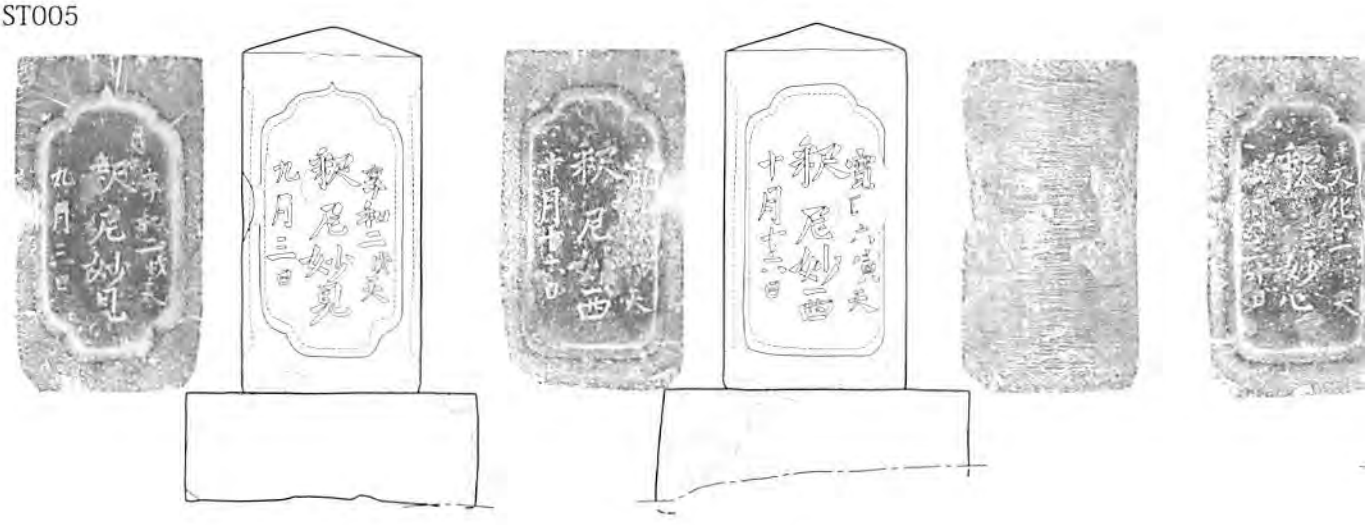
1:10 0 20cm

Fig.44　墓 ST001 ～墓 ST003 立面実測図及び拓本

ST004

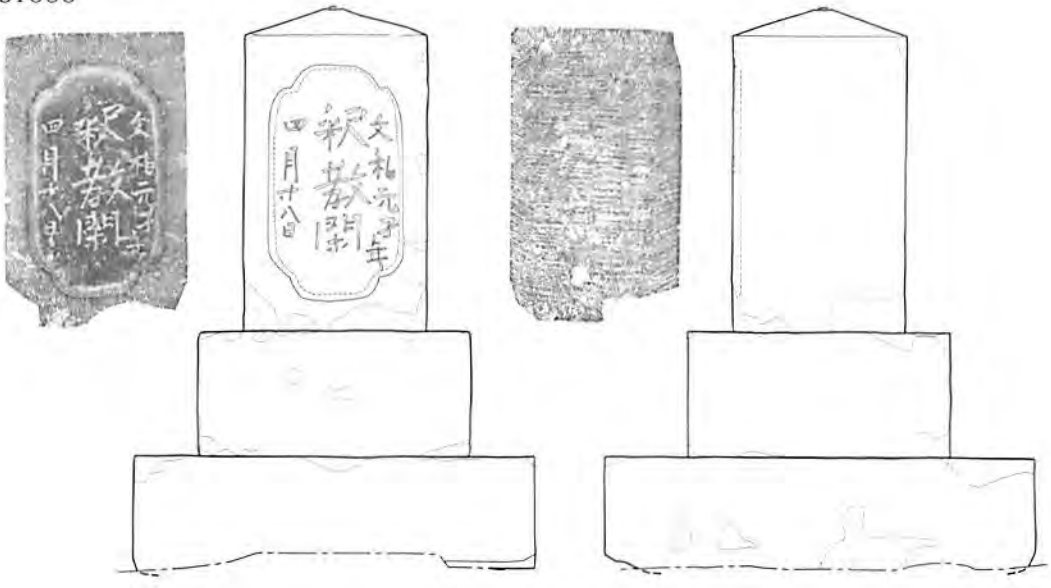


ST005



②　　①

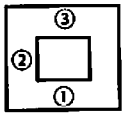
ST006



1:10

Fig.45　墓 ST004 ～墓 ST006 立面実測図及び

③

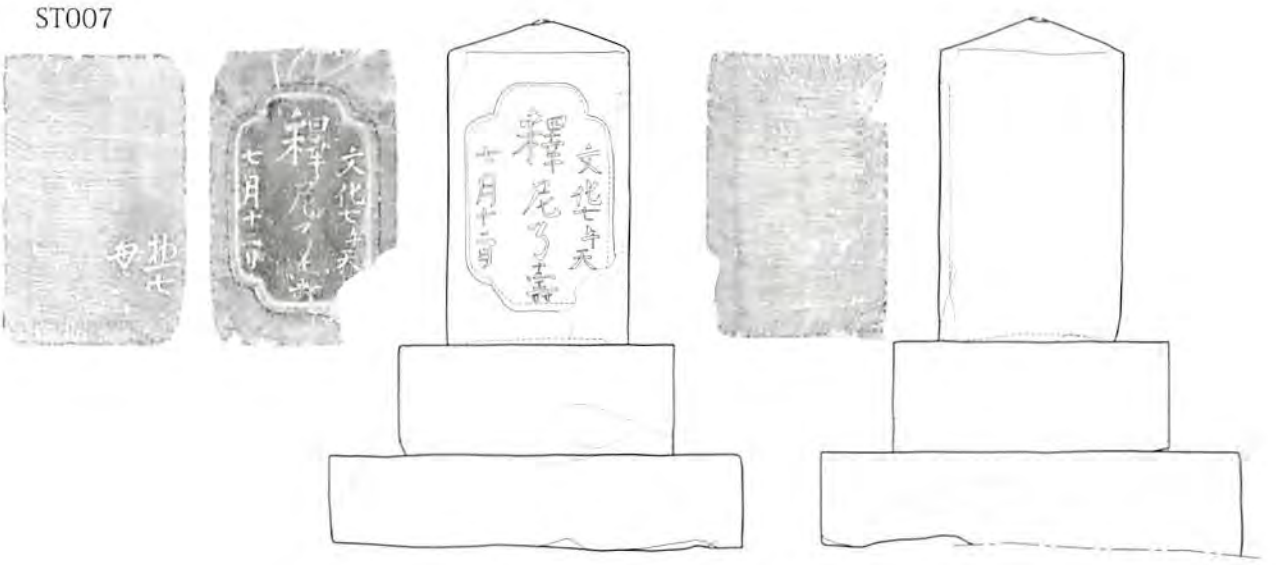


正面

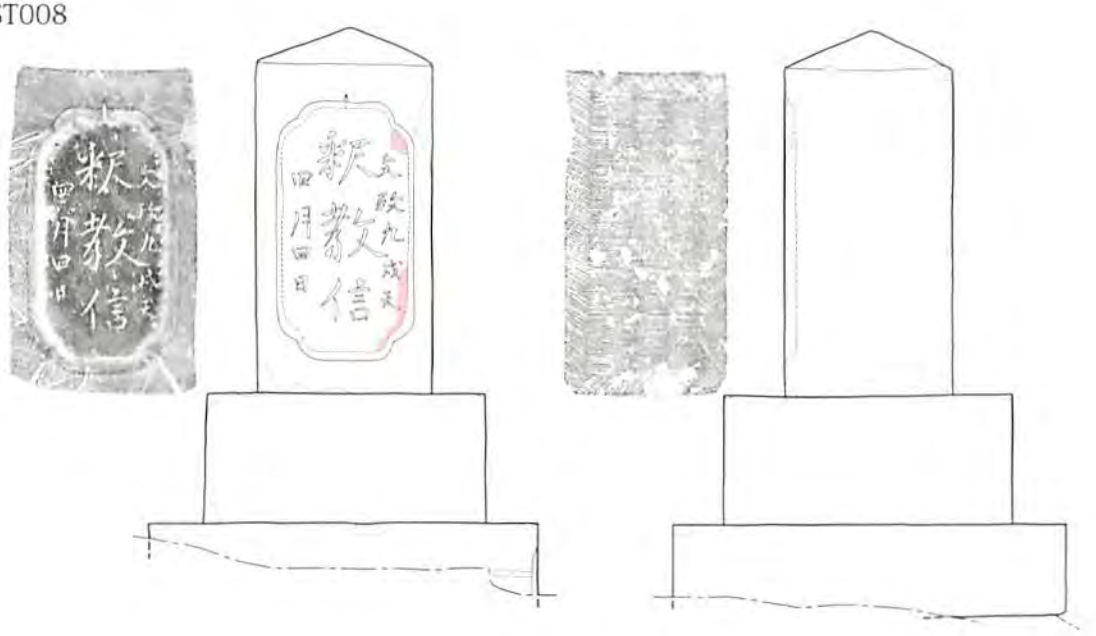
20cm

拓本

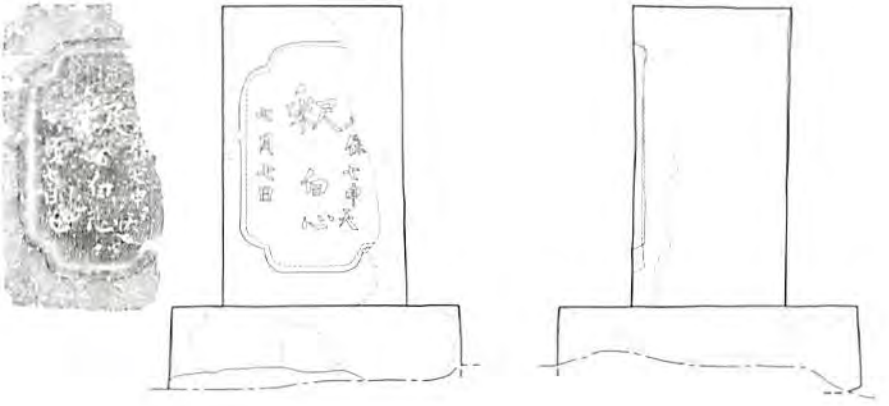
ST007



ST008



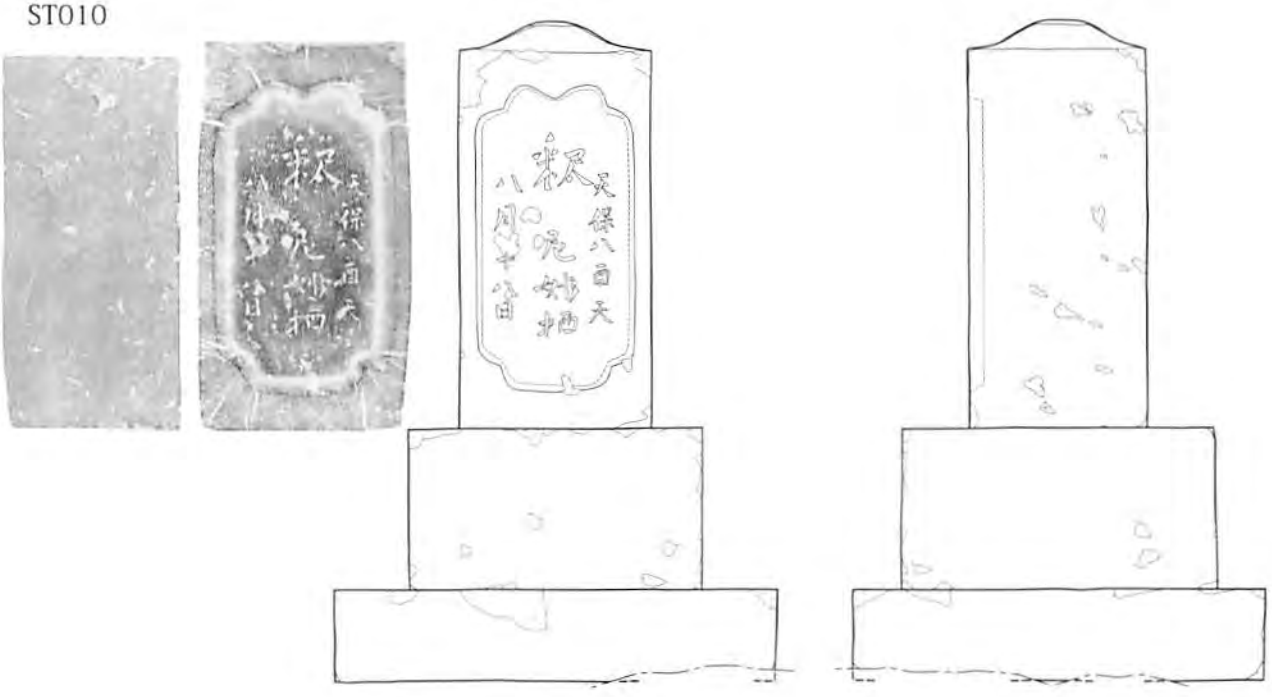
ST009



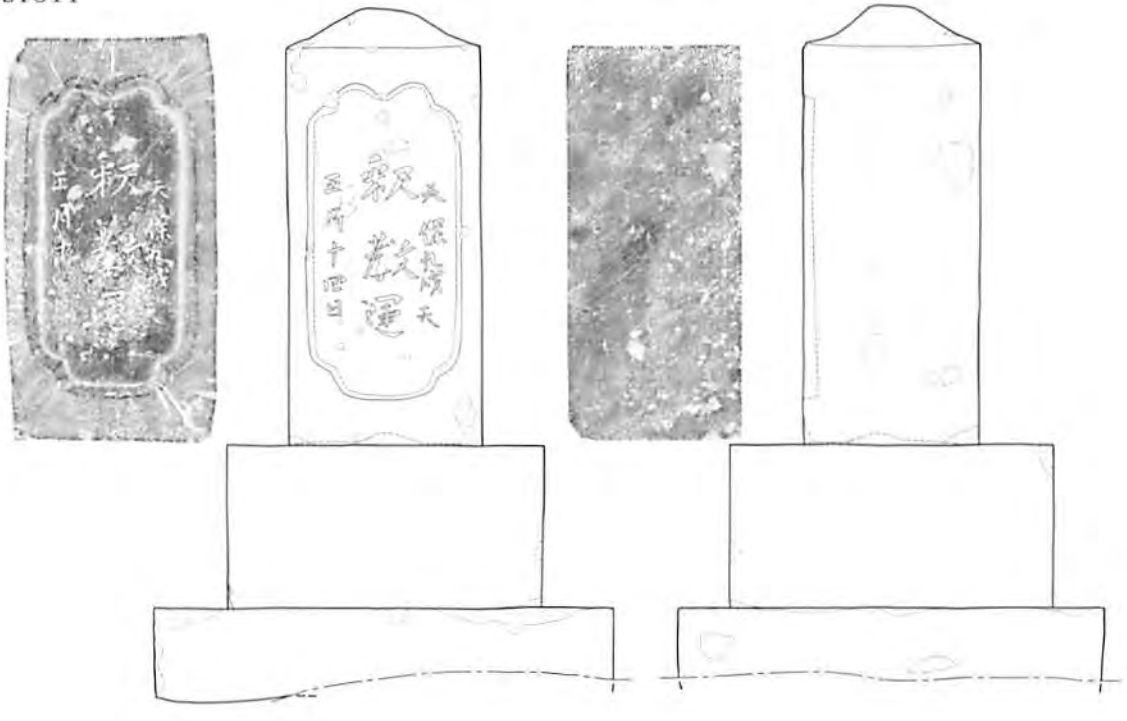
1:10 0 20cm

Fig.46　墓 ST007 ～墓 ST009 立面実測図及び拓本

ST010



ST011



1:10 0 20cm

Fig.47　墓 ST010・墓 ST011 立面実測図及び拓本

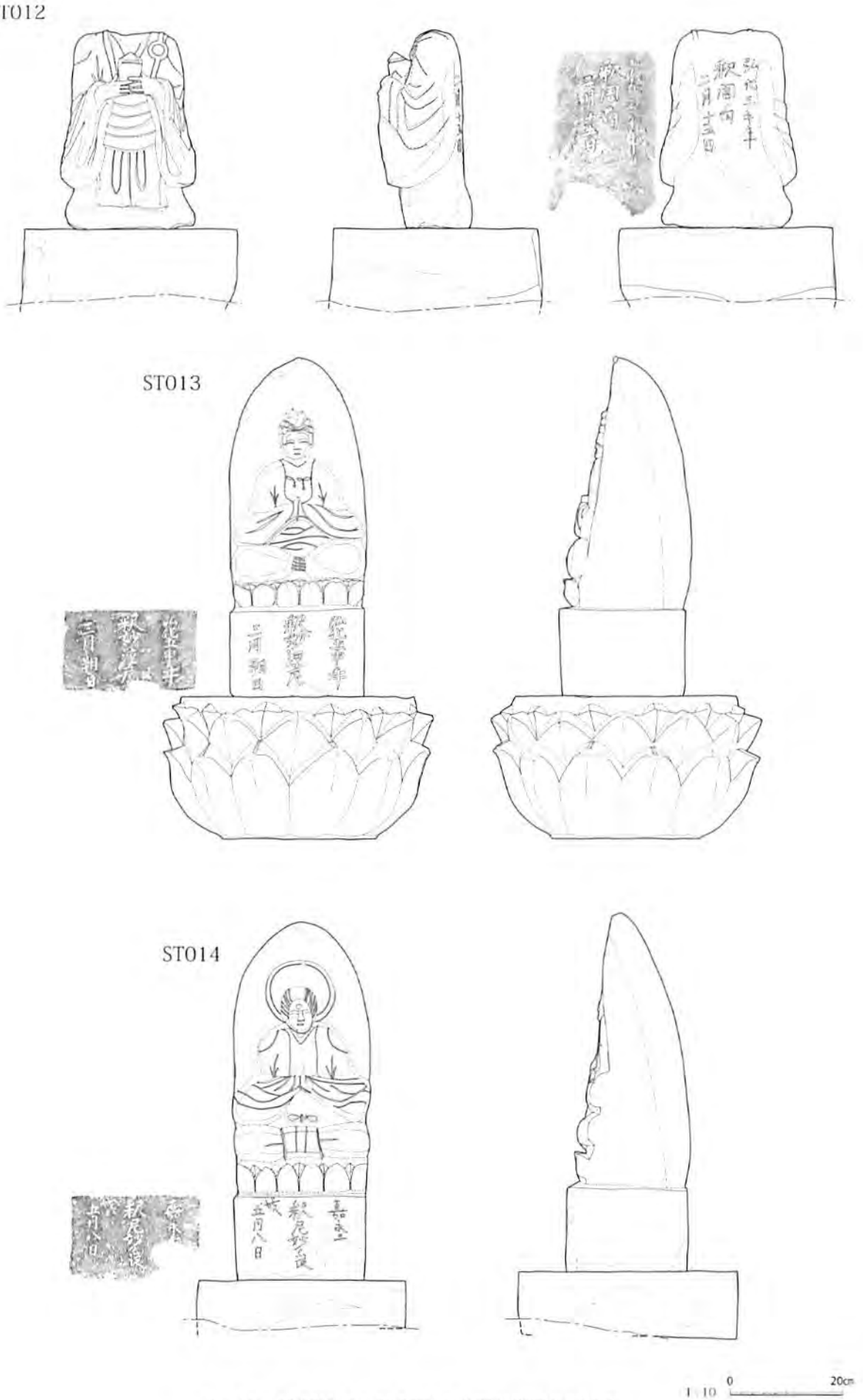


Fig.48　墓 ST012 ～墓 ST014 立面実測図及び拓本

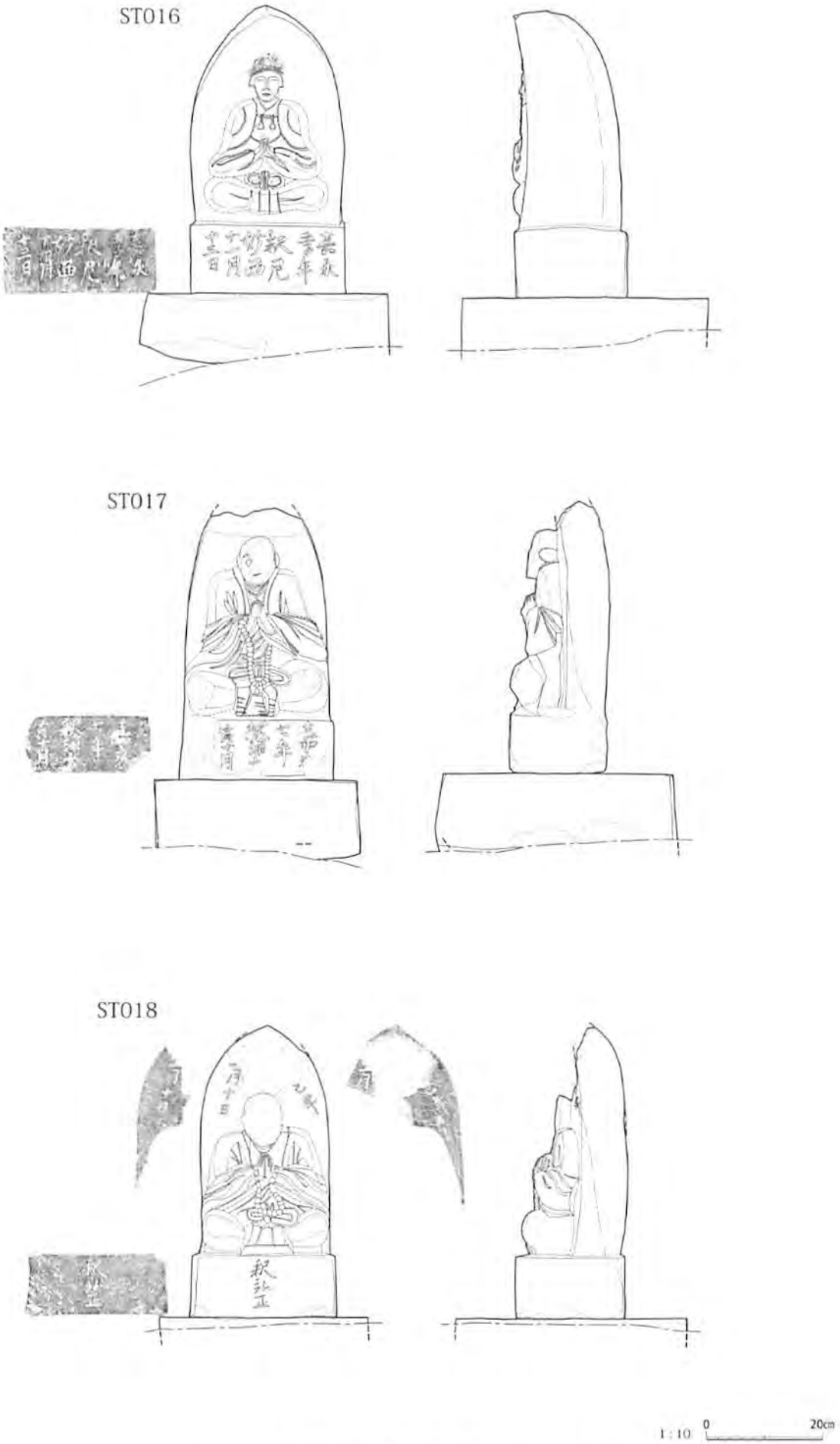
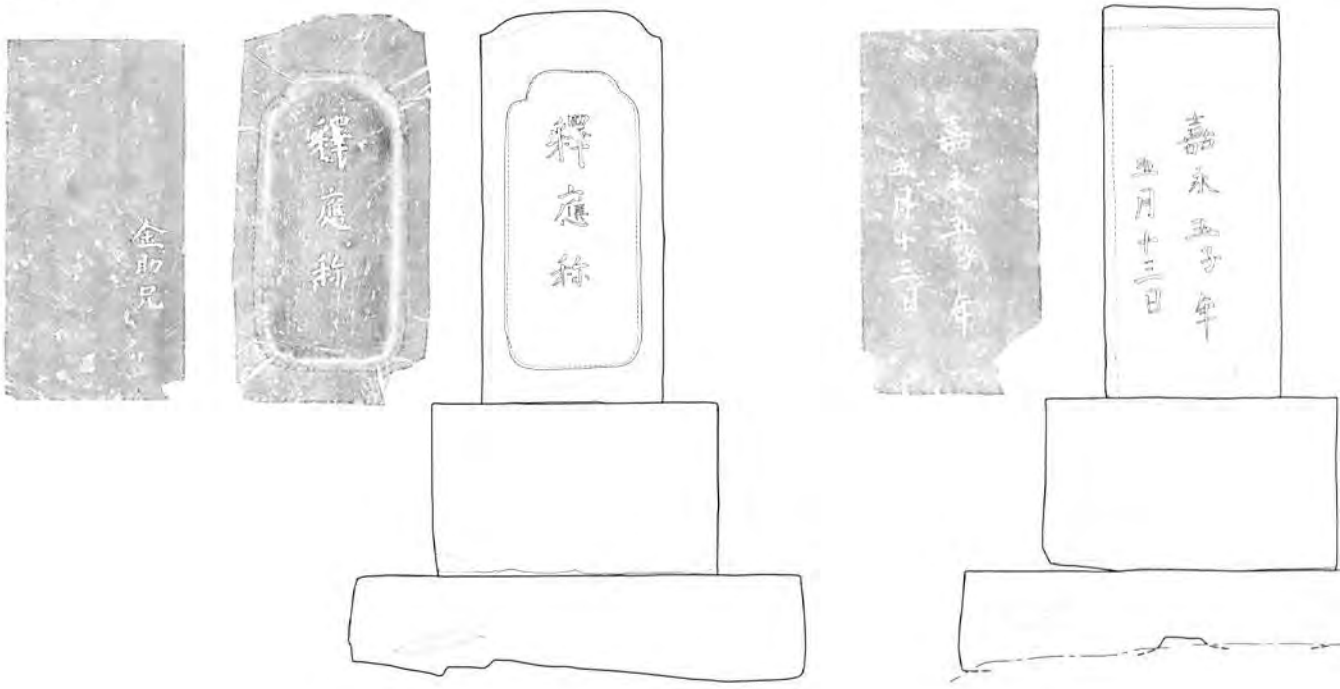


Fig.49　墓 ST016 ～墓 ST018 立面実測図及び拓本

ST015



ST019

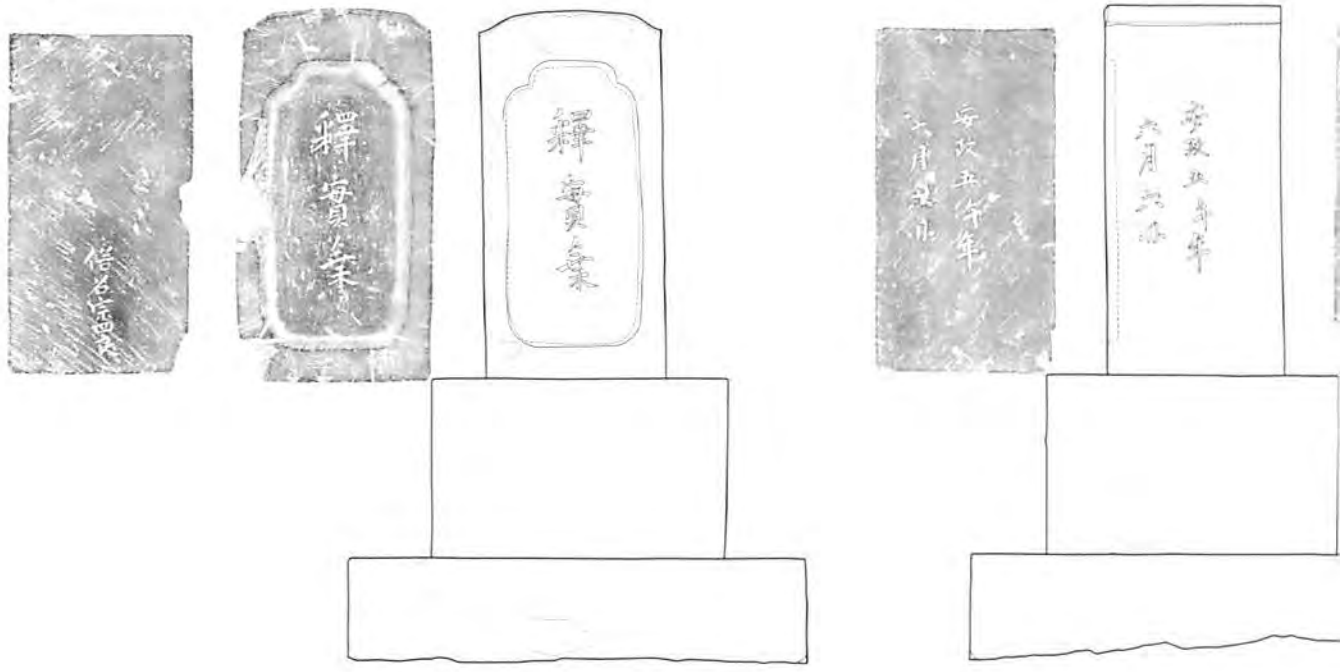


Fig.50　墓 ST015・墓 ST019 立面実測図及び拓本

20cm

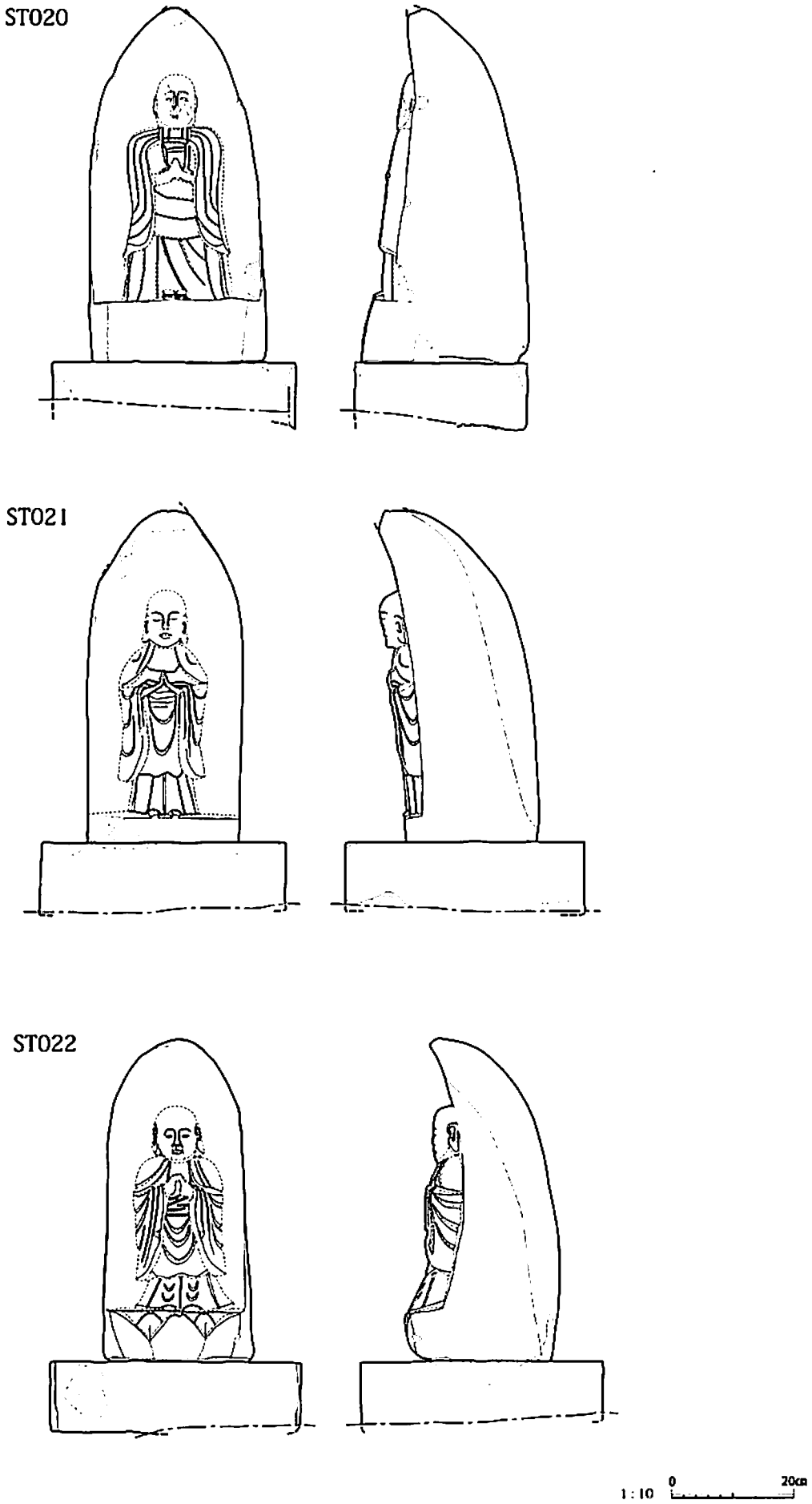
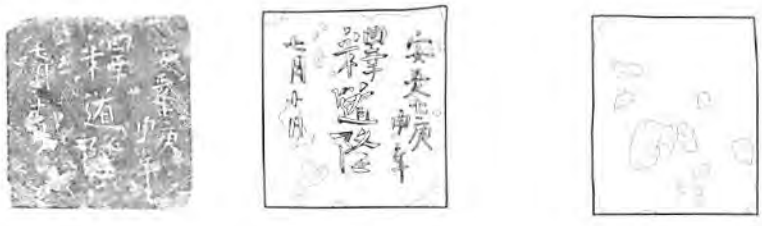


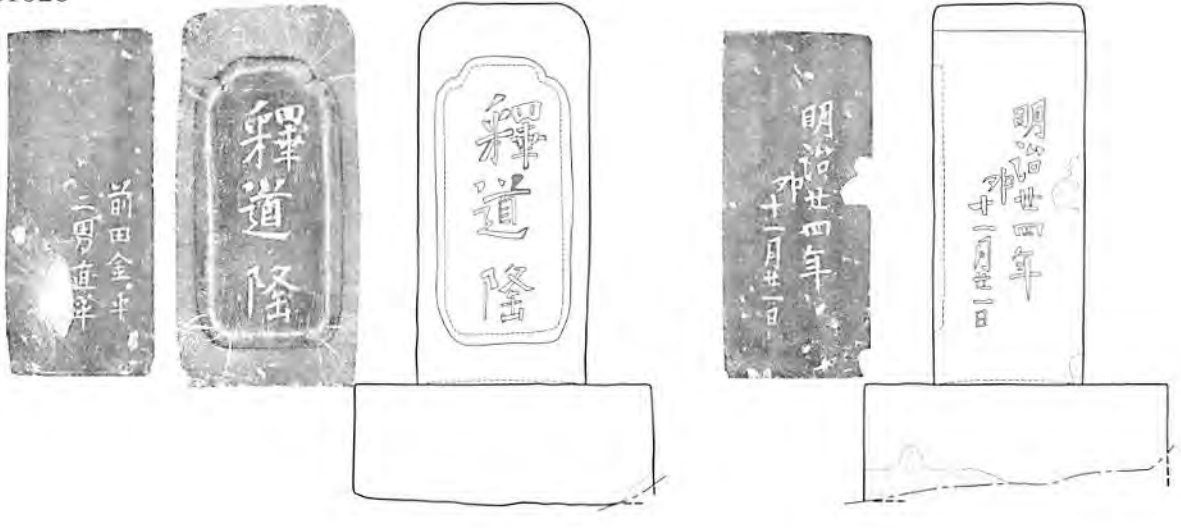
Fig.51　墓 ST020 ～墓 ST022 立面実測図及び拓本

ST023

ST024



ST025



1 : 10 0 20cm

Fig.52　墓 ST023 ～墓 ST025 立面実測図及び拓本

ST026

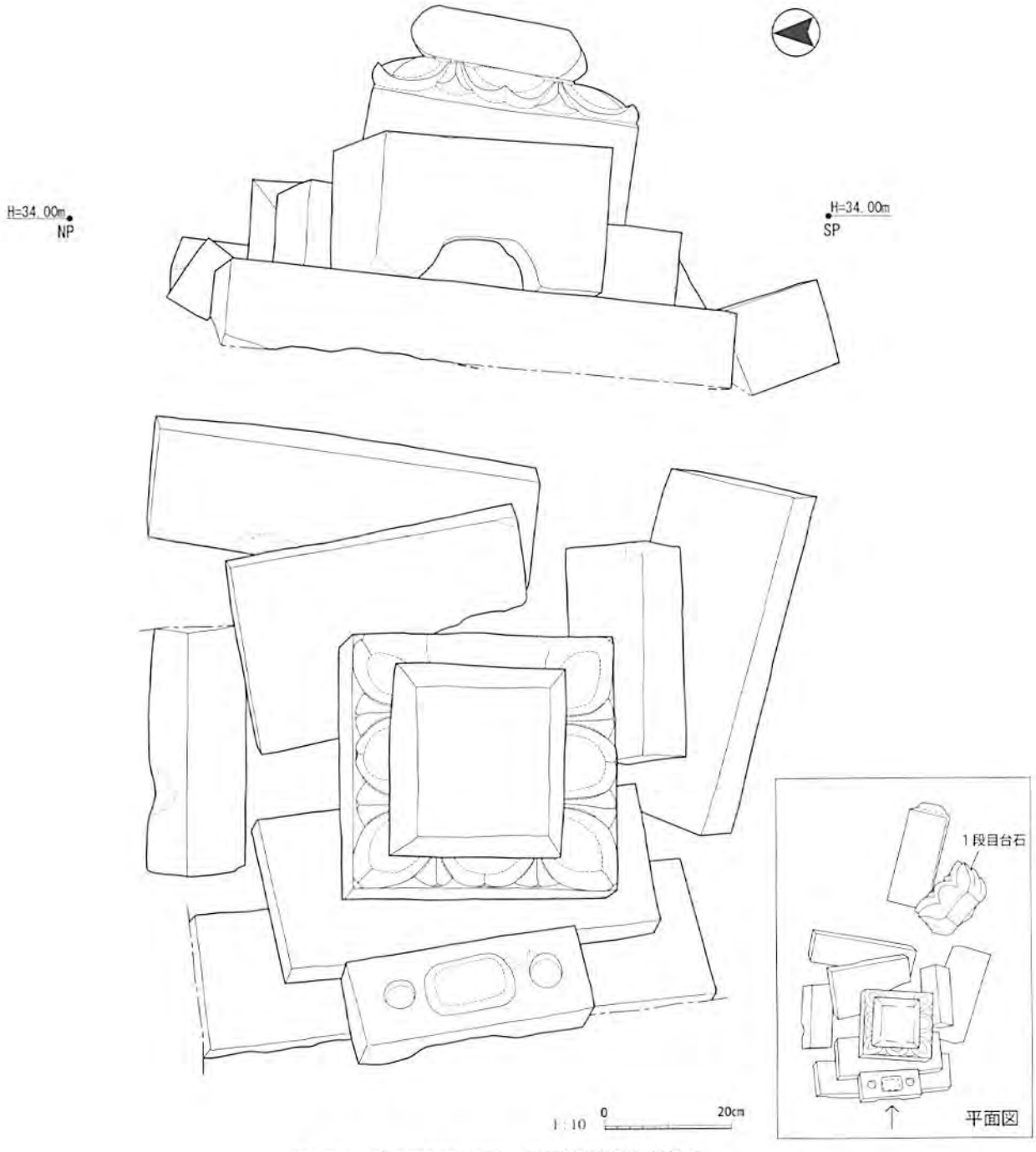


Fig.53　墓 ST026 立面、平面実測図及び拓本

3　瀬萩遺跡

A　遺跡の概要

当初、本遺跡は調査区を３区に分けて調査を実施していたが、調査の結果遺構が検出できなかった調査区も出てきたため、整理段階で調査区すべてを同一の調査区として報告する。よって、範囲を示すものとしてはGrid表記で場所を特定し記述する。

調査面は５層上面で近世、７層上面で古墳時代（Fig.55）の遺構を検出している。

各遺構について

竪穴住居跡SI001（Fig.56）　J-12Gridにて検出した遺構。遺構西約1/4を土層確認用トレンチで掘削した。遺構は一部不定形な部分もあるが隅丸方形を呈していたと考えられる。住居南側では住居掘り込みを8cm確認できたが、南東隅を過ぎたあたりから柵平が激しく下端線は推測による。

検出した主柱穴は１本。上端は長径49cmである。下端はやや掘りすぎた感があり、図示しているが推測の域を出ない部分も含む。住居内中央に焼土、炭化物の粒及びシミ状の広がりを認めたが、掘り込みは確認できず範囲の記録のみで留めた。硬化面は確認できていない。

住居床直上からは、土師器椀(1.2)、高杯(3)、黒曜石製の使用痕のある剥片(4)、安山岩製のスクレイパー(5)が出土している。

竪穴住居跡SI002（Fig.57）　J.K-11Gridで検出した遺構。調査区南辺に接し検出した竪穴住居跡。SI001と比べ上端線はほぼ明瞭に検出することができた。住居形はほぼ正方形で４本柱を有する。

竈が住居北辺近くで検出されたが炉体は住居廃棄時に破壊されたと考えられ、構成していた粘土等を確認することはできなかった。硬化面は確認していない。床に焼土と粘土の一部がシミ状に検出されたことから竈の存在を推測できた。遺物は竈に向かって右側に甕（Fig.59.6）が１点直立した状態で出土している。

土坑SK001（Fig.58）　J-13Gridで検出した遺構。２軒の住居跡より東側に位置する。当初、不定形な形で焦土の広がりが見られたが精査するにしたがい、中央部とその周辺において柱穴状の竪穴を検出した。断面を確認しながら調査を進めた結果、隣接する２基の竪穴は地下で連結することとなる。壁面は中央の竪穴状遺構（長径約50cm）の下端付近から焼けており、連結部へとそれは広がっていった。連結する掘り込み部は燃焼面とは違い、赤く焼けると言うより焼き締まる感がみられた。この２つの掘り込みの中間となる掘削されていない部分も焼けていることから、本遺構は連結した状態で炉として使用されていたことが窺える。出土遺物が無いため時期を特定するのは不可能であるが、小規模な連結土坑（炉穴）であると考えられる。

本遺構群を検出した地形について

Fig.55で示す瀬萩遺跡遺構配置図中で図示している地形図をもとに検証する。調査区は東南（熊本方面）から北西（博多方面）へ直線で細長く設定した。地形図中に調査最終段階の等高線を入れてみたところ、ほぼ南側からの低丘陵の先端部というべき地形上に位置していることが確認された。Gridで言うと西側ではH-6Grid付近から4.2 mの線が出て、遺構を囲むようにN-18Grid付近で南に抜けている。

このことを踏まえ調査時の土層断面の記録を再読すると、北辺の土層注記には遺構が検出された面の記録がないこと、調査区を横断する土層の記録では、沖積地を示す土が途中から始まることなどから沖積地への落ち際であると想定される。

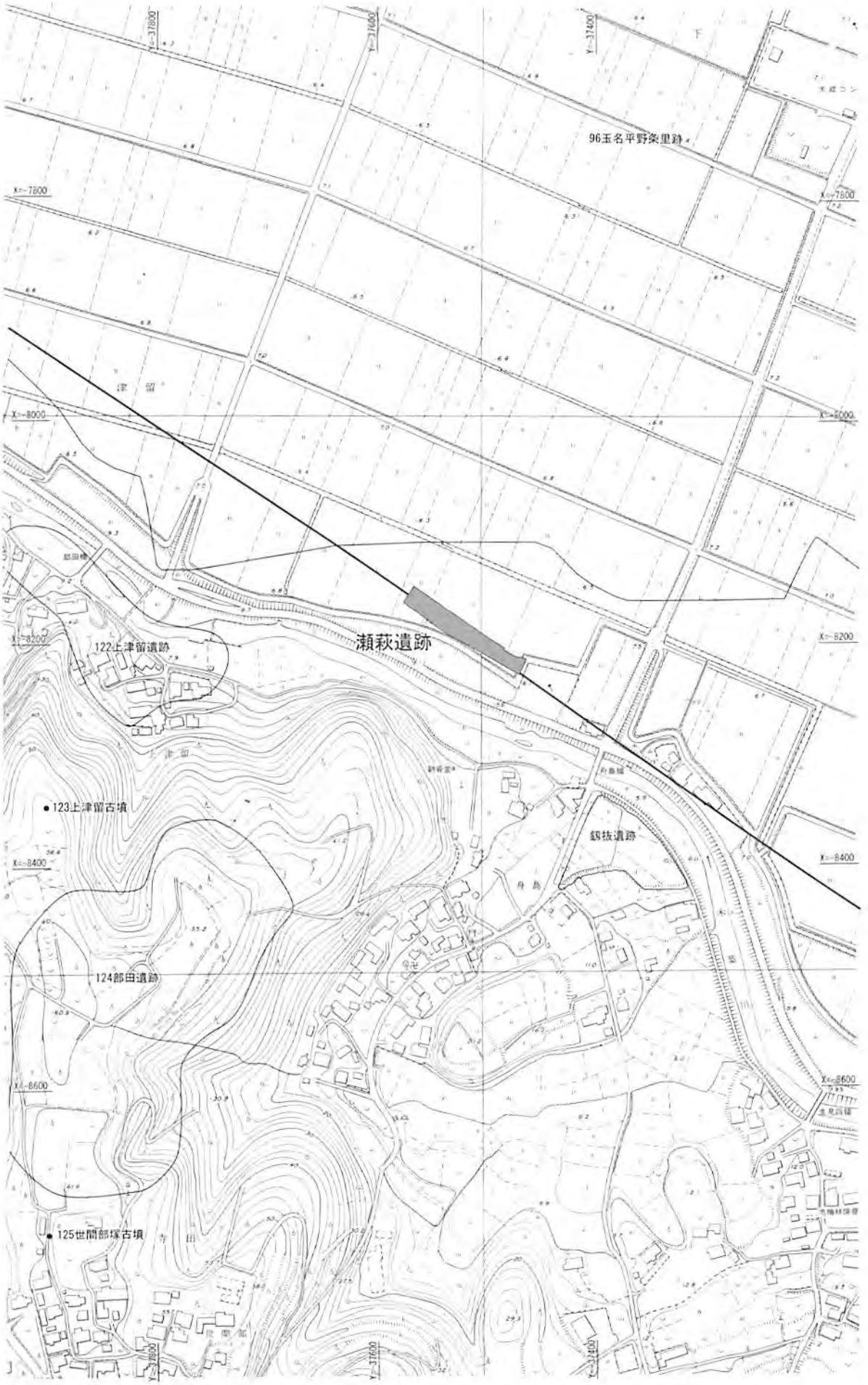


Fig.54　瀬萩遺跡周辺遺跡分布図（1/5,000）

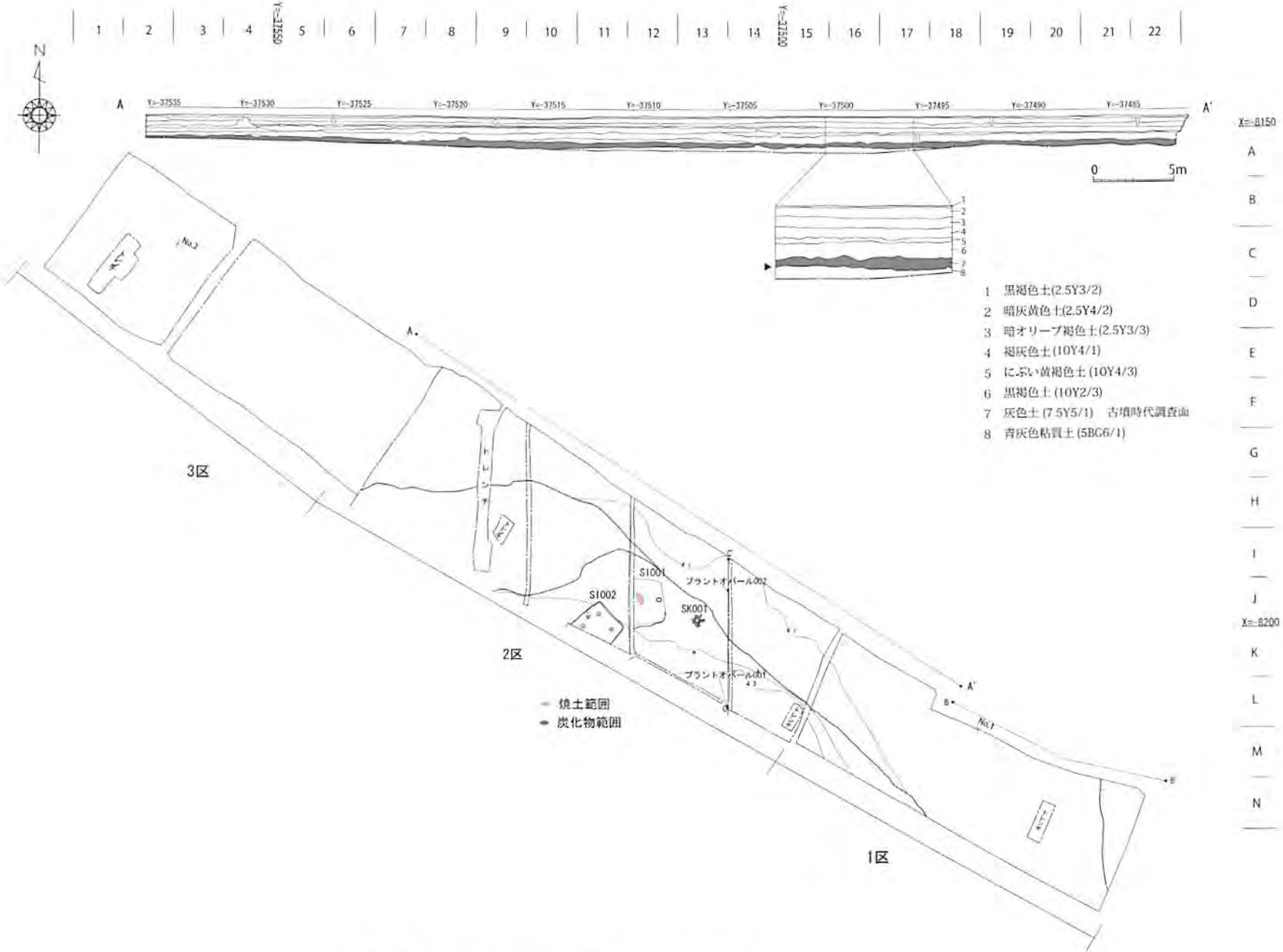


Fig.55 瀬萩遺跡古墳時代遺構配置図及び地形図（1/600）

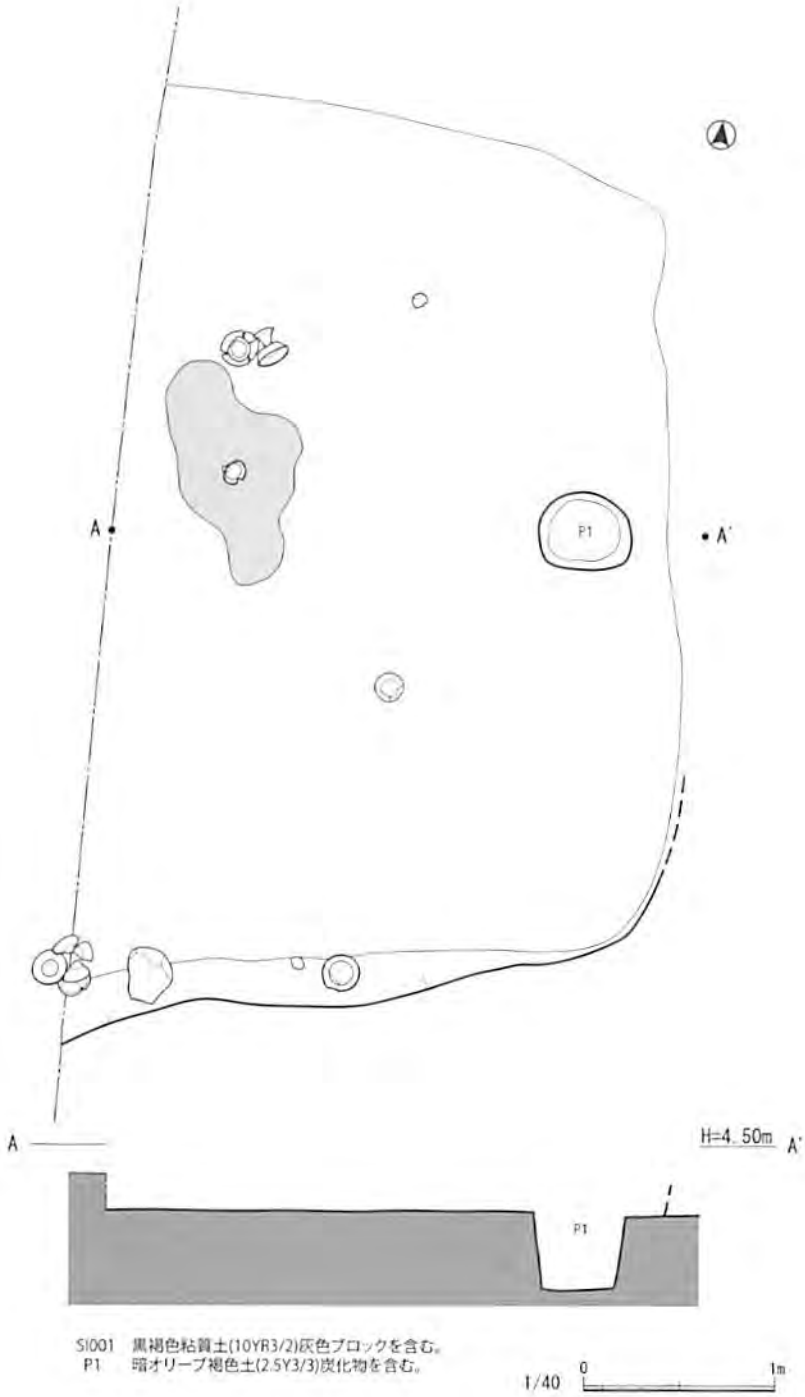


Fig.56　竪穴住居跡 SI001 平面図と断面図

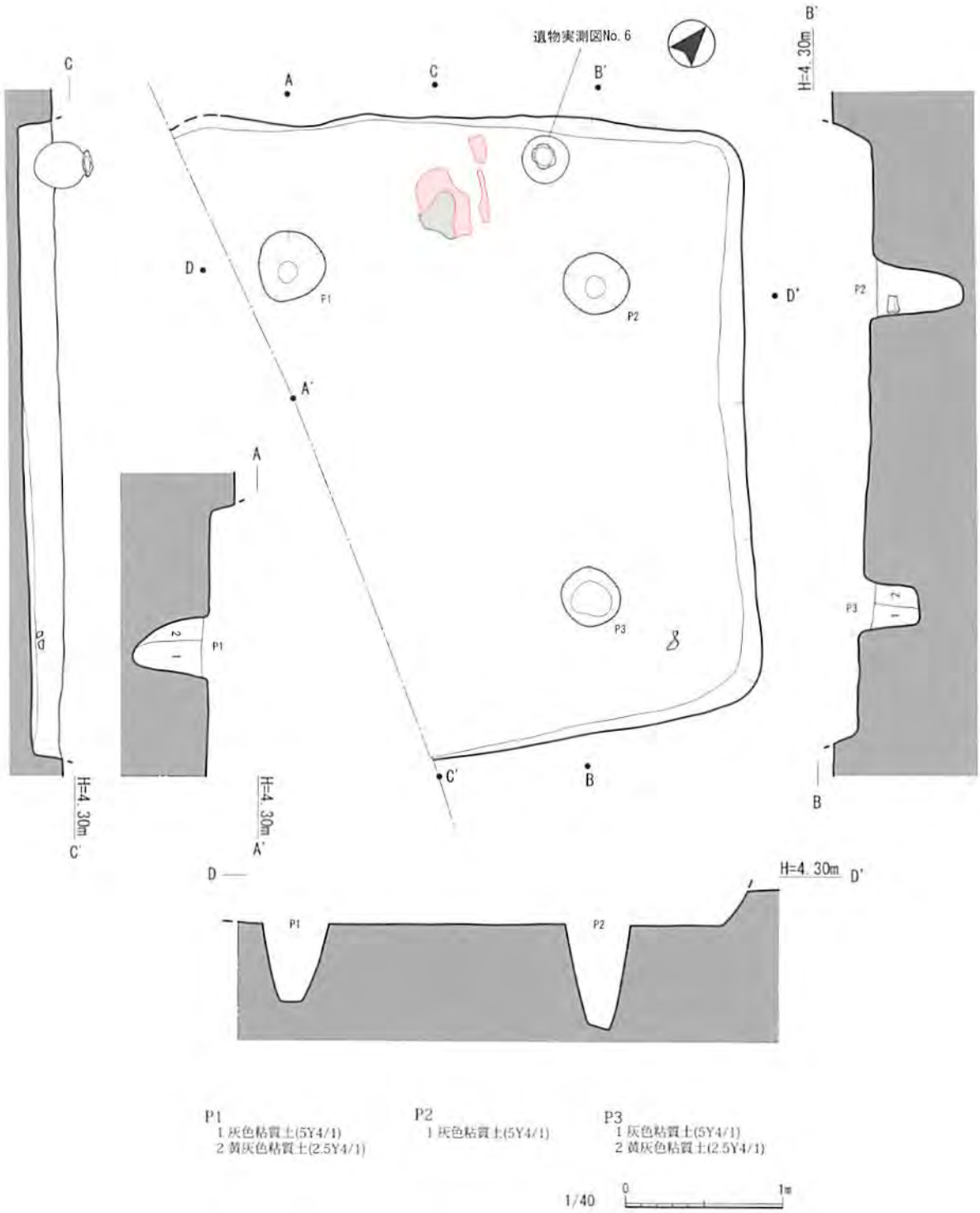


Fig.57　竪穴住居跡 SI002 平面図と断面図

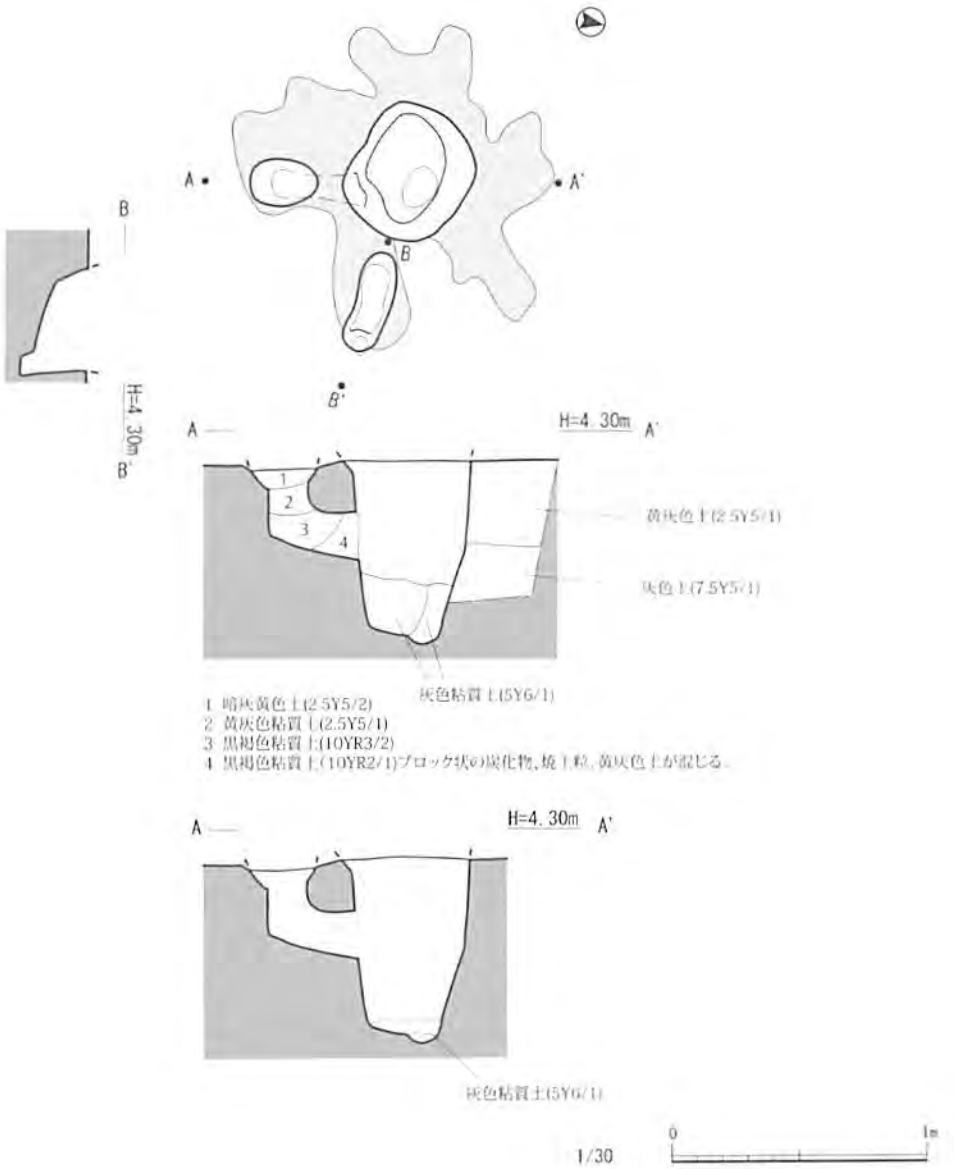


Fig.58　土坑 SK001 平面図と土層断面図

B 遺 物

竪穴住居跡 SI001（1～5）（Fig.59）

1　杯（土師器）小型で丸底を呈する。口縁部付近は直立し端部は丸い。内外面とも底部には整形時の削り痕を残す。

2　杯（土師器）器種全体に特徴を示す。口縁部は体部から伸び強く外反する。体部は直線的に立ち上がる部分と急速に底部に向かいすぼまる部分とに分かれる。底部は平底ではないが意識して平底化している。外面に口縁短部から体部下部まで丁寧にハケ目調整が施される。

3　高杯（土師器）杯部と脚部に分かれて出土した。直接の接点はないが他の類例から同一個体と判断し掲載している。杯部は肥厚する底部と直線的に伸びる体部とに分けられる。外面にわずかにハケ目調整が認められる。脚部は内面に整形時の縦方向のヘラ削り痕を残す。脚端部は欠損して不明。

4　二次加工のある石器（黒曜石）縦長剥片の一部を利用した剥片。使用痕の残る範囲は狭い。

5　削器（安山岩）剥片の縁辺部に連続した刃部作り出しの加工を施して作られた石器。

竪穴住居跡 SI002（6）（Fig.59）

6　甕（土師器）長胴でいわゆる倒卵形に近い形状をなす。口縁端部付近の外反が強く頸部付近では直立する。外面の調整は荒く、主に縦方向のハケ目が入る。内面の調整は体部上部付近にのみ幅の狭い削りを施す。しかし、なによりも特徴的なのは底部近くに外面より穿孔が2箇所施されていることである。

調査区内の4層を中心とした遺物包含層から出土した遺物（7～42）（Fig.60～Fig.63）

7　甕（土師器）　器形は体部上半に最大径を有し、いわゆる倒卵形をなす。口縁短部はやや肥厚し短く外反する。体部の器壁は厚い。外面は荒いハケ目調整が見られ、内面は中位より上位にかけて幅の狭いヘラ削り痕を残す。

8　甕（土師器）　体部中位までの部位である。口縁は頸部でやや肥厚し端部にかけて強く外反する。器壁は厚い。外面調整は主に縦方向の粗いハケ目が中心で隙間なく埋められる。内面は幅の狭いヘラ削り痕が残る。

9　甕（土師器）20cm をわずかに切る体高をなす。口縁は体部との接点付近から直線的に伸び、端部付近で上辺をわずかに押える。体部は球形で器壁は厚い。外面の調整は縦方向を中心としたハケ目である。

10　甕（土師器）体部外面に緩やかな沈線による波状文を施す。器壁は薄い。

11　甑(土師器)把手付きで底部は筒抜けである。桟を張り付けていた痕跡は認められない。体部には2個セットとなる外部からの穿孔とみられる穴が計14か所に残る。

12～17　手捏土器（土師質）基本的には杯を模倣して作られているが、15から17など深みを持つ杯形を有するものもある。いずれも指ナデもしくは指痕が器面に残る。

18　土製勾玉（土師質）穿孔を施す部分が最も厚みを有する。先端部は緩やかに伸び端部付近で強く曲がる。

19　高杯（土師器）短く立ち上がる脚部から杯底部にかけての部位にあたる。底端部付近では器壁がやや肥厚し、わずかに内湾する。

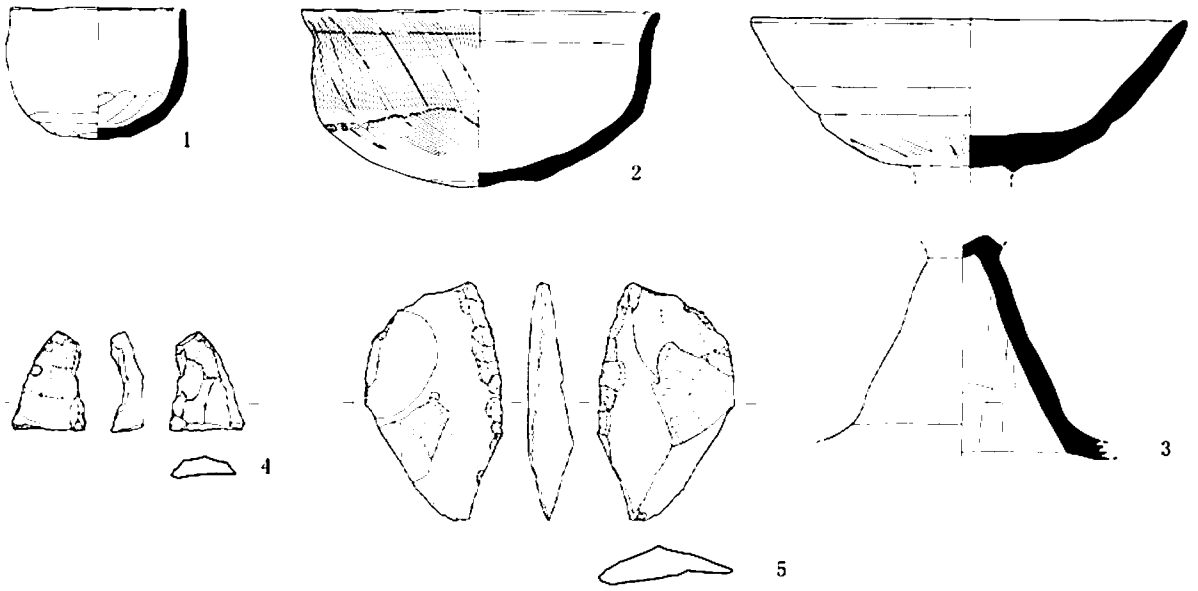
20・21・31～34　杯（土師器）20・21は平底気味で、体部は短く立ち上がる。口縁短部は薄く尖り気味に仕上げる。32は口縁近くで強く短く外反する。33・34は球体に近い底部をなし、体部は口縁短部近くで直線的に伸び、端部で短く反る。

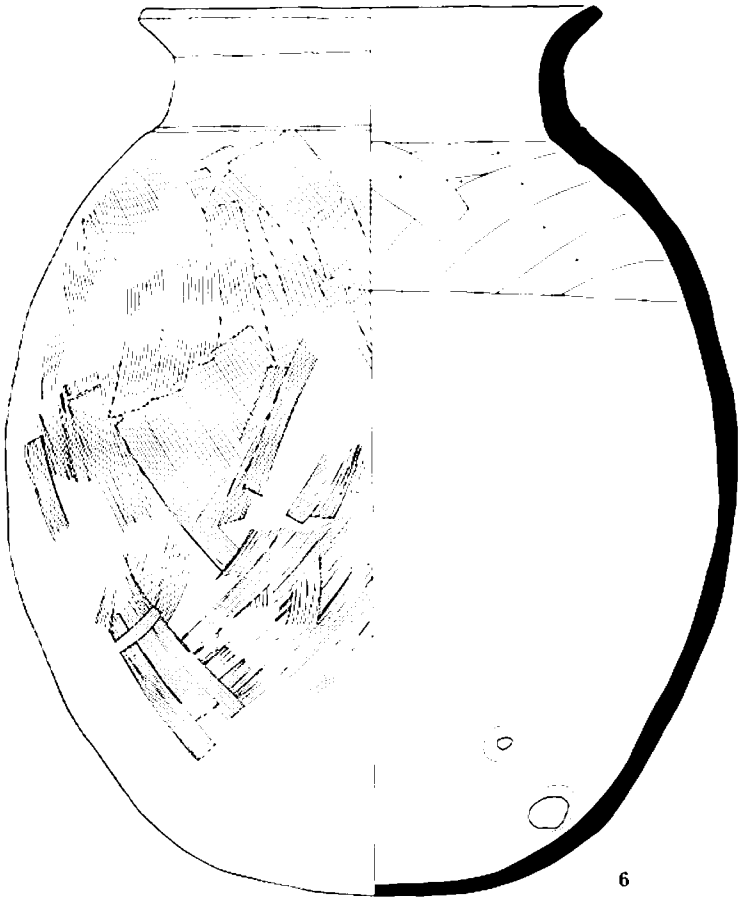
22～30　小型丸底壺（土師器）22～25は広口で口縁は短く、緩く外反する。26・28・29は口縁が短く体部が球体を呈する。27・30は体部に比べ、口縁が広くまた長く伸びる。

35～38　蓋杯（須恵器）

35（蓋）天井部はわずかに平らな部分があるが、全体には丸みを有し、口縁との境に稜を認めずなだらかに下がる。口縁短部は丸く、器壁は全体にやや厚い。天井部には回転ヘラ削り調整を行う。その他の各部分には回転ナデ調整が施される。

36（身）　立ち上がりは低く肥厚し、わずかに内傾し上方へのび、端部はやや尖り気味に仕上がる。受部は短く斜めに伸び端部は丸い。底部は浅く丸い。底部外面には回転ヘラ削りが行われ、その他の部位は回転ナ





S=1/3 0 10cm

Fig.59　竪穴住居跡 SI001(1 ～ 5)・竪穴住居跡 SI002（6）出土遺物実測図

Fig.60　包含層（7 ～ 11）出土遺物実測図－①

デ調整が行われる。

37（身）立ち上がりは低く、わずかに内傾して上方に伸び、端部は丸く仕上げられている。受部はほぼ水平に伸び、端部はわずかに尖る。底部は浅く丸みを帯び、外面に回転ヘラ削りが行われ、その他の部位には回転ナデ調整が行われる。

38（身）立ち上がりは他の資料に比べると薄く高く、端部は丸い。受部は断面三角を呈し、口縁部の処理は端正な感がある。底部は丸身を帯び深い。外面底部は回転ヘラ削りが行われ、その他の部位には回転ナデ調整が行われる。

39　壺　口頸は基部から失われ、球体を呈する体部のみ残る。体部に残る口頸基部は細い。体部の最大径は中位にあり、上方に向かう屈曲部には２条の沈線が巡る。さらにその上部に波状文を配する。沈線が施される体部上位に径 1.2cm の円孔を穿つ。体部下半から底部にかけて回転ヘラ削り調整を行っている。

40　高杯　杯部が失われ脚部のみの出土であるが、基部にあたる部分は比較的細く、端部に行くにしたがい外反する脚を貼りつける。脚外面には、縦方向に１段の透かしを４方向に穿つ。脚中央に沈線２本を巡らせる。

41　提瓶　破片による出土で全体形を示すことができない。口縁部は口頸基部が太く、外反して上方に伸び、端部に至る。口縁短部は上下に稜を認める。体部は扁球体をなし、側面には回転カキ目調整が認められる。器壁は薄く精巧な作りを感じさせる。

42　横瓶　口頸部は基部が太く直線的に伸び、口縁短部付近で強く外反する。端部は沈線を巡らせることで２本の稜を作り出す。体部は横に長い球体をなし、外面全体に格子目叩きを施し、内部は同心円文の当具痕が明瞭に残る。実測図向かって右側、断面図を図示している部位が体部を整形する際の土部にあたり、側部にて粘土を貼り付け蓋をしているのを観察することができる。

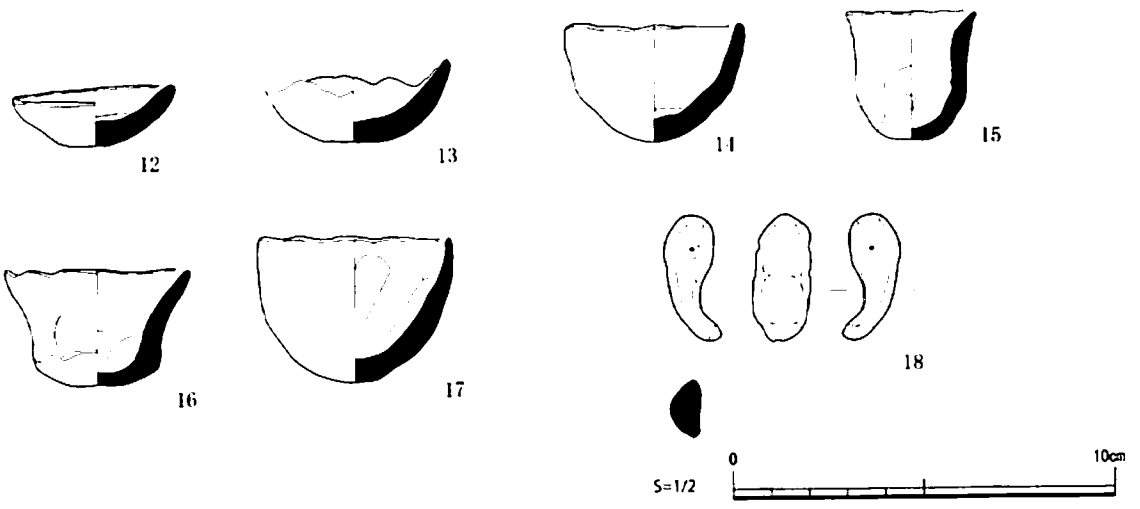


Fig.61　包含層（12 ～ 18）出土遺物実測図－②

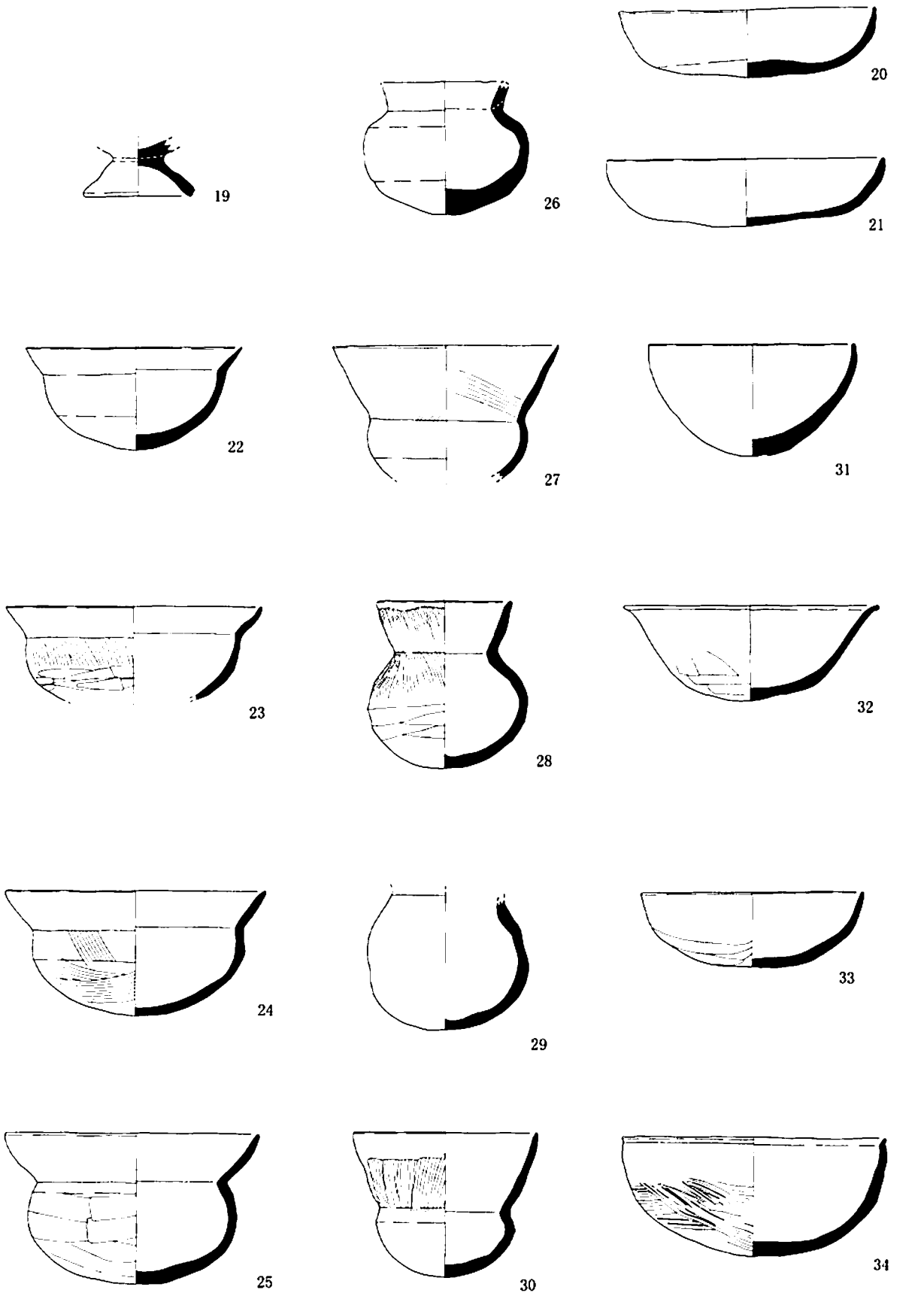
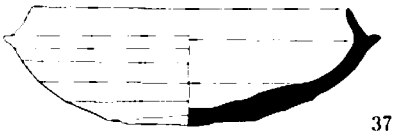
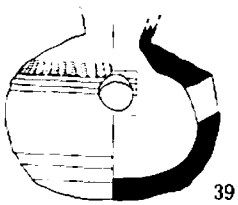
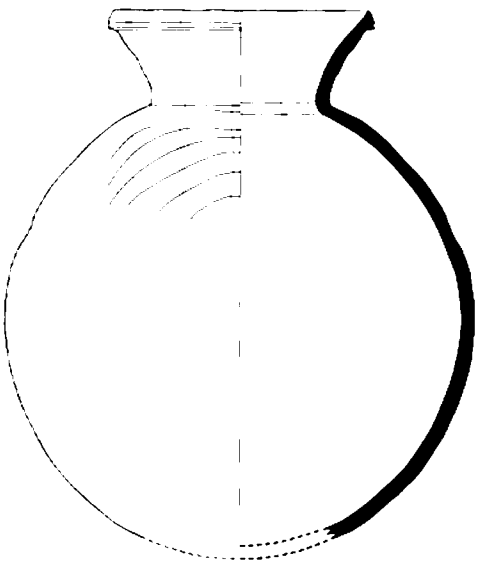
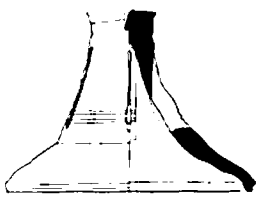


Fig.62　包含層（19～34）出土遺物実測図－③









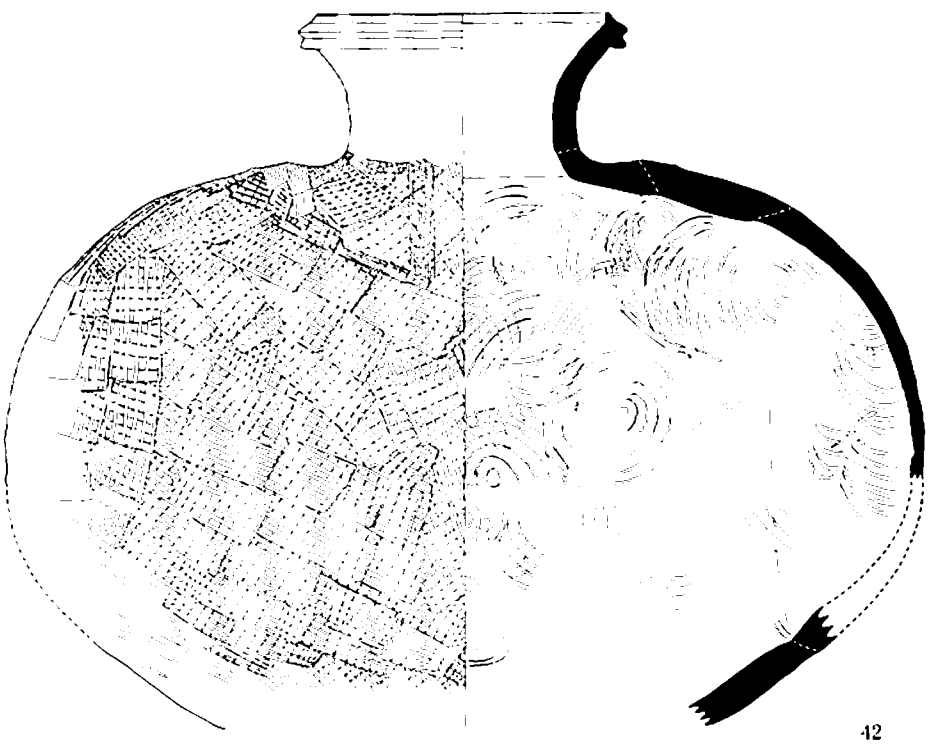


Fig.63　包含層（35 ～ 42）出土遺物実測図－④

遺物番号	FigNo.	PLNo.	遺構番号	b	器種	出土地点		法量（cm）				色調	
						層	注記	口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面
1	59	38	SI001	土師器	鉢	－	(P40)	6.9	－	－	5.2	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3
2			SI001	土師器	杯	－	(P34)	14.1	－	－	6.9	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3
3			SI001	土師器	高杯(杯部)	－	(P33)	17.0	－	－	6.0	橙5YR6/6	橙7.5YR6/6
			SI001	土師器	高杯(脚部)	3層	J-12	－	－	－	8.3	橙5YR6/6	橙5YR6/6
4		38	SI001	石製品	剥片	直下	J-11	－	(器厚)1.25	(幅)3.0	3.9	－	－
5			SI001	石製品	スクレイパー	直下	J-12	－	(器厚)1.8	(幅)5.4	9.3	－	－
6		39	SI002	土師器	甕	床面	－	17.9	－	28.9	35.9	にぶい黄橙10YR7/4 明赤褐5YR5/8	浅黄2.5Y7/4
7	60	38		土師器	甕	2層	I-11	(16.0)	－	(24.0)	25.6	にぶい橙7.5YR7/3	にぶい橙7.5YR7/3
8				土師器	甕	2層	J-13	17.9	－	(26.8)	19.9	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3
9		38		土師器	甕	3層	M-16	13.8	－	18.8	19.6	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2
10				土師器	壺	3層	K-15	－	－	－	5.0	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい黄橙10YR7/3
11		38		土師器	甑	2層	K-12 M-16(P9)	(30.0)	－	－	26.3	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4
12	61			土師器	手捏土器	2層	J-13	4.3	－	－	1.6	灰白10YR8/1	にぶい黄橙10YR7/3
13		40		土師器	手捏土器	2層	J-13	－	－	－	3.9	灰白2.5Y8/2	灰白2.5Y8/2
14				土師器	手捏土器	2層	J-13	(4.6)	－	－	3.1	灰黄2.5Y7/2	灰白2.5Y7/1
15				土師器	手捏土器	2層	K-14	(3.4)	－	－	3.4	灰黄2.5Y7/2	浅黄2.5Y7/3
16				土師器	手捏土器	3層	K-14	(4.8)	(3.2)	－	3.0	橙5YR6/6	橙5YR6/6
17				土師器	手捏土器	3層	J-11	5.0	－	－	3.8	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4
18		40		土製品	勾玉	3層	I-10	－	－	(幅)1.5	3.3	橙7.5YR6/6	－
19	62			土師器	高杯(脚)	3層	K-14	－	－	－	5.9	灰白2.5Y8/2	灰黄2.5Y7/2
20				土師器	杯	2層	L-16	13.5	9.8	－	3.6	にぶい橙7.5YR7/4	灰白7.5YR8/2
21				土師器	杯	－	M-16(P11)	(14.6)	(11.6)	－	3.6	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
22		40		土師器	小型丸底鉢	2層	L-15	11.4	－	－	5.4	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2
23				土師器	小型丸底鉢	2層	L-15	13.4	－	－	4.9	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4
24				土師器	小型丸底鉢	－	M-15(P26)	13.6	－	－	6.5	橙5YR7/6	橙5YR7/6
25				土師器	小型丸底壺	－	L-16(P30)	(13.3)	－	－	8.0	橙5YR7/6 灰白10YR8/1	灰白10YR8/2
26				土師器	小型丸底壺	2層	L-14	－	－	－	6.7	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2
27				土師器	小型丸底鉢	2層	I-11	12.0	－	－	7.0	にぶい黄橙10YR7/3 にぶい橙7.5YR7/4	にぶい黄橙10YR7/3
28				土師器	小型丸底壺	3層	J-12	7.2	－	－	8.7	浅黄橙7.5YR8/4	浅黄橙7.5YR8/4
29				土師器	小型丸底壺	3層	J-12	－	－	－	7.2	灰黄2.5Y6/2	黄灰2.5Y4/1
30				土師器	小型丸底壺	－	M-16(P18)	(9.8)	－	－	7.6	橙7.5YR6/6	にぶい黄橙10YR7/2
31				土師器	杯	－	J-13	10.8	－	－	5.8	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2
32				土師器	杯	－	L-16(P29)	13.5	－	－	5.0	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
33		40		土師器	杯	2層	L-15	11.6	－	－	3.9	にぶい黄橙10YR7/2	灰白2.5Y7/1
34				土師器	杯	3層	K-13	13.8	－	－	6.3	にぶい橙7.5YR7/3 橙5YR6/6	橙7.5YR7/6
35	63	40		須恵器	蓋	1層	K-12	14.4	－	－	4.6	緑灰10GY5/1	灰N4/0
36				須恵器	杯身	2層	M-16	12.4	－	－	4.1	灰白5Y8/1	灰白5Y7/1
37				須恵器	杯身	3層	K-15	12.5	－	－	4.6	灰N6/0	灰N6/0
38				須恵器	杯身	－	M-16(P27)	(13.0)	－	－	5.2	灰N6/0	灰N6/0
39				須恵器	甕	2層	J-13	－	6.2	－	7.3	灰10Y5/1	灰10Y5/1
40				須恵器	高杯	3層	J-13	－	9.9	－	7.0	灰N4/1	暗灰N3/1
41				須恵器	提瓶		一括	(10.1)	－	－	20.7	灰5Y5/1	灰5Y5/1
42				須恵器	横瓶	4層	西トレ	(13.0)	－	(38.2)	28.0	灰10Y4/1 黒10Y2/1	灰10Y5/1

Tab.14　瀬萩遺跡出土遺物観察表

胎土	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
雲母、角閃石	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		1
長石、雲母、赤色酸化粒	横ナデ、ハケ目	ナデ	ナデ	ナデ		2
長石、雲母、石英、角閃石、赤色酸化粒	横ナデ ハケ目後ナデ	横ナデ	－	ナデ	高杯の杯部	3
長石、雲母、赤色酸化粒	ナデ	ヘラ削り後ナデ	－	－	高杯の脚部	
黒曜石	－	－	－	－	重量 9.0g	4
－	ナデ	－	－	－	重量 64g	5
長石、雲母、角閃石 赤色酸化粒	横ナデ、ハケ目	横ナデ ヘラ削り	ナデ	ナデ	胴部外面に黒煤付着 穿孔2穴あり	6
長石、雲母、石英、角閃石 輝石、赤色酸化粒	横ナデ、ナデ、ハケ目	横ナデ ヘラ削り			外面に黒斑あり	7
長石、雲母、石英 赤色酸化粒	横ナデ、ハケ目	横ナデ ヘラ削り			外面に煤付着	8
雲母、石英、角閃石	横ナデ、ハケ目	横ナデ、ナデ	ナデ	ナデ	外面に煤付着	9
長石、雲母、石英、 角閃石　赤色酸化粒	ナデ	ナデ			波状の線あり	10
長石、雲母、石英、 角閃石　赤色酸化粒	ハケ目、指頭圧痕 ナデ	ヘラ削り、ナデ	－	－	外面に黒斑あり 補修孔14箇所	11
長石、雲母、角閃石 赤色酸化粒	指頭圧痕、ナデ	ナデ			手捏土器(杯)	12
長石、雲母、角閃石	指頭圧痕、ナデ	ナデ			手捏土器(鉢形)	13
長石、雲母、角閃石	指頭圧痕、ナデ	ナデ			手捏土器(鉢形)	14
雲母	ナデ	ナデ	ナデ	指頭圧痕	手捏土器(鉢形)	15
石英、赤色酸化粒	ナデ、指ナデ	ナデ	ナデ	指ナデ	手捏土器(鉢形)	16
長石、雲母、角閃石 赤色酸化粒	ナデ	指ナデ			手捏土器(鉢形)	17
－	ナデ	－	－	－	重量 5.0g	18
長石、雲母、角閃石	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		19
長石	横ナデ、ヘラ磨き ヘラ削り後ナデ	ヘラ磨き			内、外面に赤色顔料	20
雲母、石英、角閃石 赤色酸化粒	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		21
雲母、石英、角閃石、輝石	横ナデ、ヘラ削り後ナデ	横ナデ、ナデ			外面に黒斑あり	22
長石、雲母、石英	ナデ、ハケ目後ナデ ヘラ削り、横ナデ	ハケ目後ナデ、 ナデ	－	－		23
長石、雲母、角閃石 赤色酸化粒	横ナデ、ハケ目、	横ナデ	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	外面に黒斑あり	24
長石、雲母、石英、輝石	横ナデ、 ヘラ削り後ナデ	横ナデ、ナデ				25
長石、雲母	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ		ナデ	胴部外面に黒斑あり	26
長石、雲母、角閃石 赤色酸化粒	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目				27
石英、赤色酸化粒	横ナデヘラ削り ナデ、はけ目	横ナデ、ナデ			外底部に黒斑あり 赤色顔料あり	28
石英	ナデ	横ナデ、指ナデ			外低部に黒斑あり	29
長石、雲母、石英、角閃石	横ナデ、ハケ目	ハケ目、ナデ			内面底部に黒斑あり	30
石英、角閃石、輝石	ナデ	横ナデ		ナデ	脚部透かし4箇所あり	31
長石、雲母、石英 赤色酸化粒	横ナデ、ヘラ削り	横ナデ、ナデ			内.外面の一部に黒斑あり	32
長石、雲母、角閃石	横ナデ、ヘラ削り	ナデ	－	ナデ		33
長石、雲母、石英	横ナデ、ナデ	横ナデ	－	－	内底部に使用痕あり	34
長石、石英	回転ヘラ削り 横ナデ、沈線	横ナデ、ナデ	－	－		35
長石	横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ	－	－		36
長石、石英	ナデ、回転ヘラ削り 横ナデ	横ナデ、ナデ				37
長石	横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ	－	－		38
長石	横ナデ、回転ヘラ削り 櫛状工具による施文	ナデ、ヘラ工具 によるナデ	回転ヘラ削り			39
長石	横ナデ、沈線	横ナデ			高杯の脚部。	40
長石、雲母、石英	回転ヘラ削り後かき目 回転ヘラ削り	横ナデ	－	－		41
長石	格子目たたき	同心円文				42

C 附編

瀬萩遺跡発掘調査に係る植物珪酸体分析について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

熊本県玉名市に所在する「瀬萩遺跡」は、有明海に注ぐ菊池川左岸に位置し、菊池川支流の現木葉川を挟んだ南側の丘陵末端部から低地の境界付近に立地する。そのため、調査区内は北側に緩く傾斜する。

発掘調査では古墳時代の住居、および古墳時代以降の遺物が検出されている。今回の分析調査では、瀬萩遺跡における稲作の消長および古植生に関する情報を得ることを目的として、現地野外調査を実施し植物珪酸体分析を実施する。

1　試料

当社技師による現地調査時に協議のうえ、調査地点として設定したのは、2区ベルト1壁面である。その基本土層は、基本的に6つの層に分層される。最下層では無遺物層の灰色粘土で、地山とされる。その上位は、古墳時代（5世紀代）とされる暗灰色シルトが不整合で累重する。この上位では灰褐色シルトが見られ、炭化物を含む。なお、本層位は南側で古代（8～9世紀）と古代～中世に分けられるが、北側では明瞭に区分できない。さらに上位には、酸化鉄が顕著である。なお、ベルト1の中央部には河道堆積物が認められる。この壁面の南端と北端で、土壌試料計8点を採取した。南側では地山－中世の5層から各層1点ずつで5点(試料番号1－5)、北側では古墳－中世の3層から各層1点ずつで3点（試料番号6－8）である。

このうち、分析対象とした試料は、南側上位より中世の灰褐色シルト（試料番号1）、古代の灰褐色シルト（試料番号3）、古墳時代の暗褐色シルト（試料番号4）、無遺物層（地山）の灰色粘土（試料番号5）、および北側上位より古墳の灰褐色シルト（試料番号7）、古墳時代の暗灰色シルト（試料番号8）の計6点である。

2　分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈底法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理をおこない、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、「短細胞珪酸体」と呼ぶ）及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、「機動細胞珪酸体」と呼ぶ）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計算する。

なお、周辺遺跡での分析調査例から土層中での微化石の含有量が少ないことが予想されたことから今回は、植物珪酸体含有の測定を試みた。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数の一覧表、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

3　結果

検鏡結果をTab. 1、各試料の植物珪酸体含量をTab. 2とFig. 1に示す。各試料からは、保存状態の比較的良好な植物珪酸体が検出されるが、概して検出個数が少ない。

南側と北側のいずれの試料からも、栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が認められる。南側では、短細胞珪酸体で顕著でないものの、機動細胞珪酸体では下位から上位にかけて、検出個数の増加する傾向が見られる。北側では、試料番号7で少ないものの、下位の試料番号8では増加し機動細胞珪酸体

の検出個数が最も多い。イネ属の植物珪酸体含量にも同様な層位的な変化が見られる。南側側では下位から上位にかけて、短細胞珪酸体が約120-70個/g、機動細胞珪酸体が約340-20個/gの範囲で含量が増加する。北側では逆に、試料番号7で短細胞珪酸体が25個/g、機動細胞珪酸体が177個/gであったものが、下位の試料番号8では短細胞珪酸体が66個/g、機動細胞珪酸体が641個/gに増加する。

また、同じ層位から採取された資料でも、北側と南側で含量が異なる。古墳時代とされる暗灰色シルトでは、南側の試料番号4よりも北側の試料番号8で機動細胞珪酸体が多い。上位の古代とされる灰褐色シルトでは、南側の試料番号3よりも北側の試料番号7がやや少ない。

この他には、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。しかし、含量は100個/g未満の種類が多い。また、樹木起源珪酸体第Ⅲグループや第Ⅳグループ（近藤・ピアスン，1981）も検出される。第Ⅲグループは「Y」あるいは「く」の字状の形態を呈し、第Ⅳグループは網目文様の付いた紡錘形を呈する。

4　考　察

2区ベルト1壁面に見られた基本土層では、いずれの層からも栽培植物であるイネ属に由来する植物珪酸体が検出された。このことから、各層位が形成される頃の調査区内あるいは周辺にイネ属が生育していたことが窺える。昨年度分析調査を実施した菊池川右岸に立地する「両迫間日渡遺跡」では、古代や中世の遺物包含層からイネ属の花粉化石が検出され、遺跡内あるいはその周辺での稲作の可能性が指摘されている[1]。よって、今回のイネ属珪酸体の産出は、古墳時代から中世にかけて本遺跡の周辺でも稲作がおこなわれていたことを反映すると推測される。

ところで、過去に稲作がおこなわれた水田跡の土壌では、イネ属の機動細胞珪酸体が5,000個/g程度検出されることが多く、その場合安定した水田稲作がおこなわれたと推定される（杉山2000）。ただし、畦畔など水田に関連する遺構が検出されている場合でも、機動細胞珪酸体含量が1,000個/g程度の事例もある（パリノ・サーヴェイ㈱，2001,2002など）。

今回のイネ属の含量は約200-600個/g程度であり、これらの調査例と比較すると極めて低い。調査地が菊池川の沖積低地に位置することを考慮すれば、各層位が形成される過程で菊池川や木葉川の氾濫の影響を受けていたと思われる。また、丘陵末端に立地しており樹木起源の植物珪酸体が比較的豊富に検出されていることから、後背の丘陵からの堆積物の流入し、植物珪酸体が流亡して土層中に土地込まれにくかったことや、耕作土の更新が比較的頻繁であり、相対的に耕作期間が短かったことなどが考えられる。また、ベルト1壁面の南側と北側でイネ属の含量が異なっていた点は、微地形による土地利用状況や工作期間の相違に由来する可能性もある。

なお、イネ属以外の種類の産出から、調査区内や周辺では、古墳時代から中世にかけて、ネザサ節やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などの生育が窺える。また、樹木起源の植物珪酸体の産出から、周辺での樹木の生育も考えられる。

引用文献

近藤錬三，2004 植物ケイ酸体研究．ペドロジスト ,48,46-64

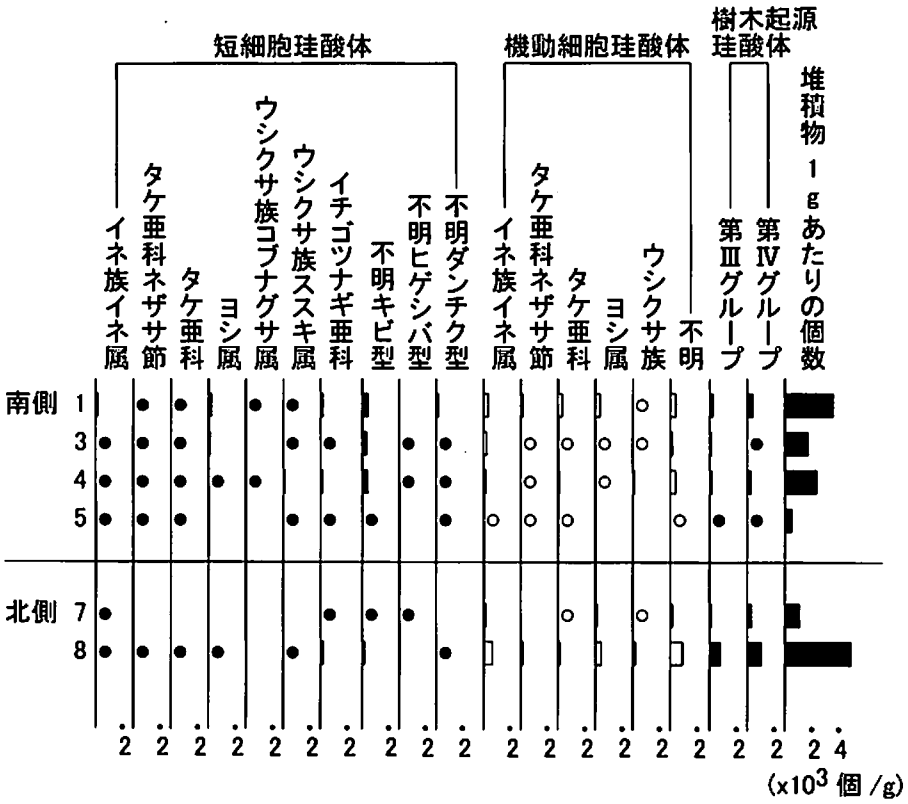
近藤錬三・ピアスン友子，1981，樹木のケイ酸体に関する研究（第2報）双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について．帯広畜産大学研究報告 ,12,217-229

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2001,「亀里平塚遺跡の自然科学分析」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 報告第280集『亀里平塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査団 343-353

パリノ・サーヴェイ株式会社 2002「横手南川・横手湯田遺跡の自然科学分析」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第292集『横手南川・横手湯田遺跡』第11集（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

杉山真二 2000 植物珪酸体（プラント・オパール）．辻誠一郎著　考古学と自然科学3　考古学と植物学　同成社

1　パリノ・サーヴェイ㈱，未公表



堆積物1gあたりに換算した個数を示す。●○は100個/g未満の種類を示す。

Tab.15　植物珪酸体含量の層位的変化

2区ベルト1						
種　　類	南側				北側	
試料番号	1	3	4	5	7	8
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属	5	3	3	4	1	3
タケ亜科ネザサ節	4	2	2	1	-	4
タケ亜科	2	2	2	2	-	3
ヨシ属	9	5	3	-	-	1
ウシクサ族コブナグサ属	1	-	2	-	-	-
ウシクサ族ススキ属	3	3	5	3	-	2
イチゴツナギ亜科	7	4	7	2	2	10
不明キビ型	18	13	18	3	1	8
不明ヒゲシバ型	-	2	1	-	1	-
不明ダンチク型	7	4	4	1	-	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	14	9	8	1	7	29
タケ亜科ネザサ節	6	1	2	1	-	7
タケ亜科	12	3	5	1	3	5
ヨシ属	14	3	3	-	4	20
ウシクサ族	2	1	5	-	1	9
不明	17	6	18	2	6	40
樹木起源珪酸体						
第Ⅲグループ	10	5	7	2	4	35
第Ⅳグループ	17	3	12	1	12	46
合　　計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	56	38	47	16	5	32
イネ科葉身機動細胞珪酸体	65	23	41	5	21	110
樹木起源珪酸体	27	8	19	3	16	81
総　計	148	69	107	24	42	223

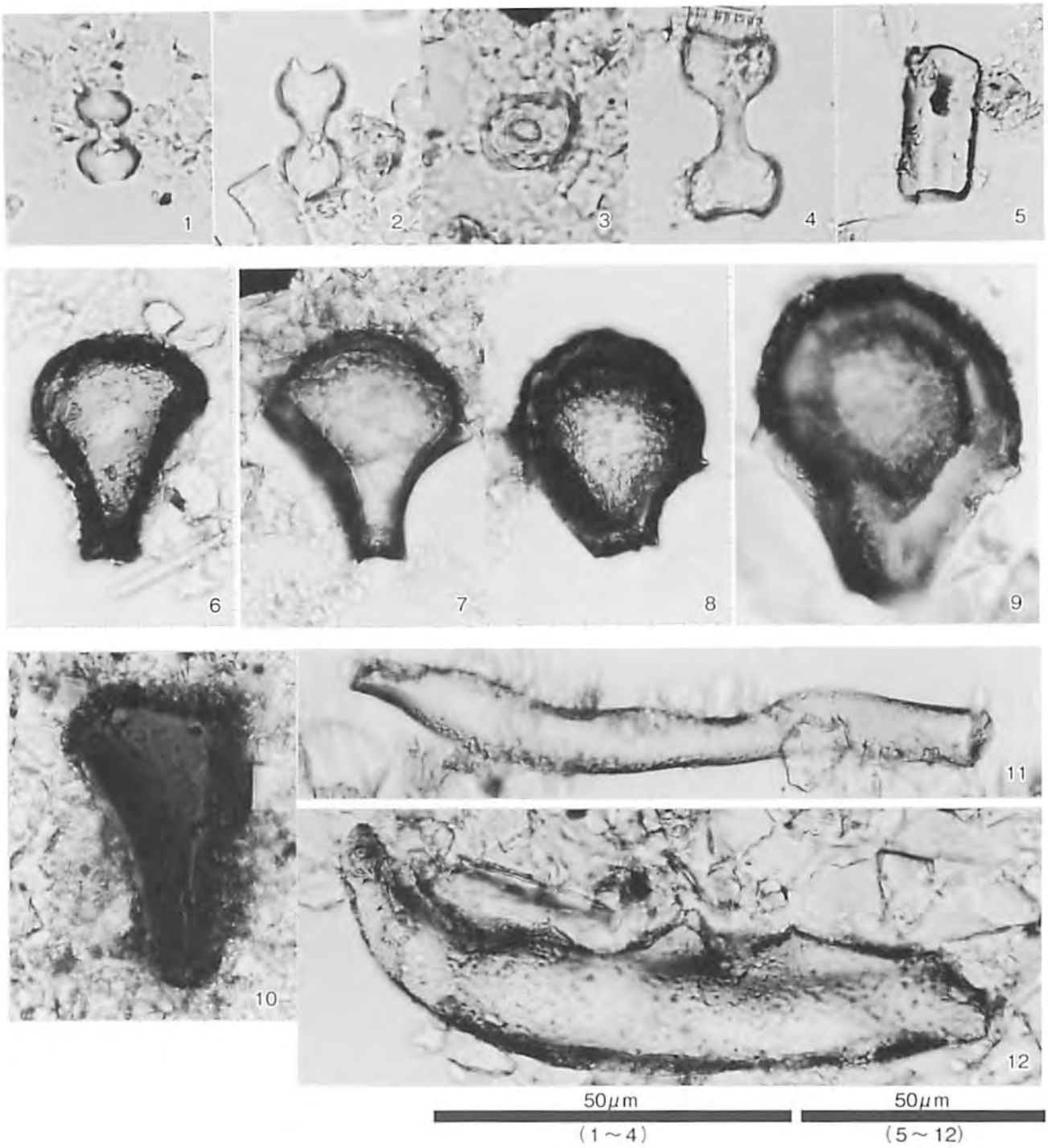
Tab.16　植物珪酸体分析結果 -1

（個/g）

2区ベルト1

種　　類	南側				北側	
試料番号	1	3	4	5	7	8
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属	122	74	67	82	25	66
タケ亜科ネザサ節	98	50	44	20	0	88
タケ亜科	49	50	44	41	0	66
ヨシ属	219	124	67	0	0	22
ウシクサ族コブナグサ属	24	0	44	0	0	0
ウシクサ族ススキ属	73	74	111	61	0	44
イチゴツナギ亜科	171	99	156	41	50	221
不明キビ型	439	322	400	61	25	177
不明ヒゲシバ型	0	50	22	0	25	0
不明ダンチク型	171	99	89	20	0	22
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	341	223	178	20	177	641
タケ亜科ネザサ節	146	25	44	20	0	155
タケ亜科	293	74	111	20	76	111
ヨシ属	341	74	67	0	101	442
ウシクサ族	49	25	111	0	25	199
不明	414	149	400	41	151	885
樹木起源珪酸体						
第Ⅲグループ	244	124	156	41	101	774
第Ⅳグループ	414	74	267	20	303	1,017
合　　計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	1,366	942	1,044	326	125	706
イネ科葉身機動細胞珪酸体	1,584	570	911	101	530	2,433
樹木起源珪酸体	658	198	423	61	404	1,791
総　計	3,608	1,710	2,378	488	1,059	4,930

Tab.17　植物珪酸体分析結果 -2



1．イネ属短細胞珪酸体（2区ベルト1:3）
2．イネ属短細胞珪酸体（2区ベルト1:8）
3．ヨシ属短細胞珪酸体（2区ベルト1:1）
4．ススキ属短細胞珪酸体（2区ベルト1:3）
5．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（2区ベルト1:3）
6．イネ属機動細胞珪酸体（2区ベルト1:3）
7．イネ属機動細胞珪酸体（2区ベルト1:4）
8．イネ属機動細胞珪酸体（2区ベルト1:8）
9．ヨシ属機動細胞珪酸体（2区ベルト1:8）
10．ウシクサ属機動細胞珪酸体（2区ベルト1:4）
11．樹木起源珪酸体第Ⅲグループ（2区ベルト1:1）
12．樹木起源珪酸体第Ⅳグループ（2区ベルト1:1）

Fig.64　植物珪酸体

PLATE

写真図版

撮影機材及び使用フィルム

カメラ　リンホフスーパーテヒニカ

レンズ　Nikon90mmSW、FUJINONW125mm

フィルム　Kodak T-max100、Kodak E100G

高城
安楽寺跡
梅林天満宮
太郎丸遺跡
祭田下遺跡
瀬萩遺跡
上津留遺跡
花群山、吉祥寺跡
津留中林遺跡
上津留古墳
群前遺跡
部田
寺田古墳群
城ケ辻城跡
世間部塚古墳
寺田久保
久保地下式横穴
城ケ辻古墳群
吉丸遺跡

菊池川左岸側、玉名平野（玉名市津留から玉東町稲佐迄の遺跡分布）

撮影日　2004 年（平成 16 年）6 月 3 日、撮影
使用カメラ　RC-20　5032
使用レンズ　f ＝ 153.24mm
使用フィルム　EK ダブル X
デジタルモザイクにて合成を作成（TIFF）
作業機関　写測エンジニアリング株式会社

1．1 区溝 SD002 検出状況　　2．1 区溝 SD002 完掘状況
3．1 区土坑 SK001 検出、半裁状況　　4．1 区土坑 SK001 完掘状況

1．1区土坑 SK002 検出、半裁状況　2．1区土坑 SK002 完掘状況
3．1区土坑 SK003 検出状況　4．1区土坑 SK003 完掘状況

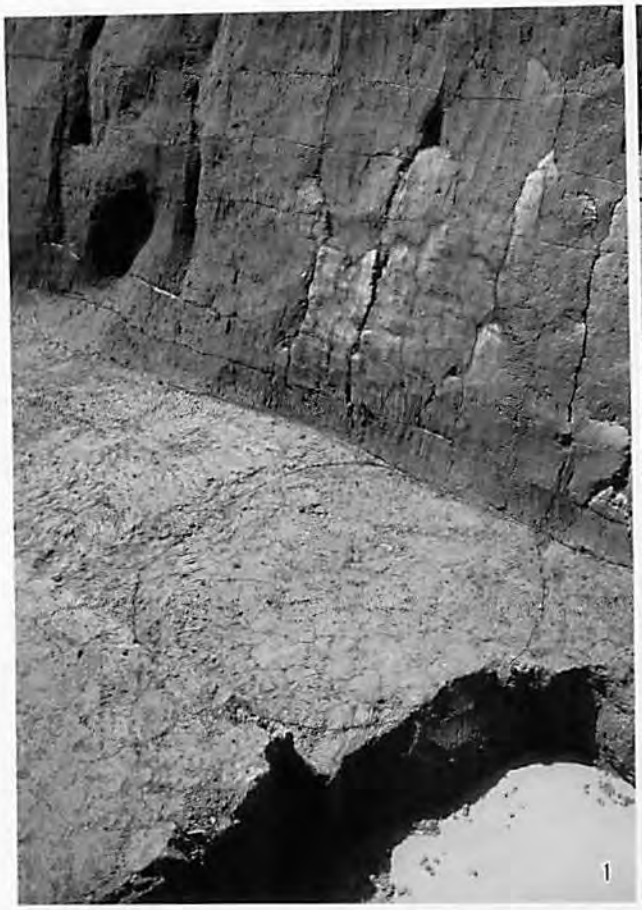
1区調査区と梅林天満宮

２区調査区完掘状況

1．3区柵列 SA001 検出、半裁状況　　2．3区柵列 SA001 完掘状況

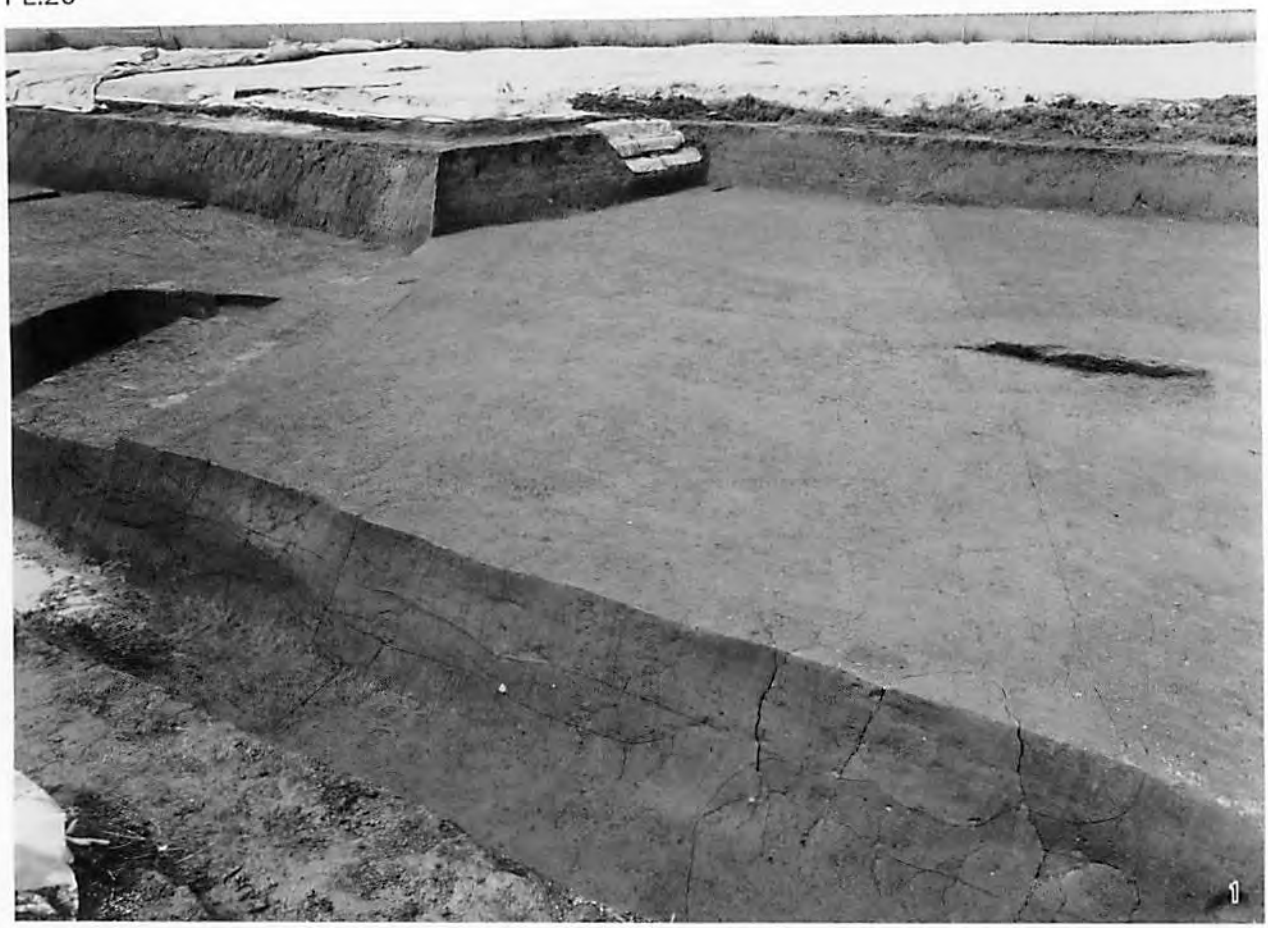
3．3区掘立柱建物 SB001（P_1·P_2·P_3）完掘状況　　4．3区掘立柱建物 SB001（P_3·P_4·P_5·P_6）完掘状況

1．3区溝 SD001 完掘状況　2．3区土坑 SK001 検出状況
3．3区土坑 SK001 半裁状況　4．3区土坑 SK001 完掘状況

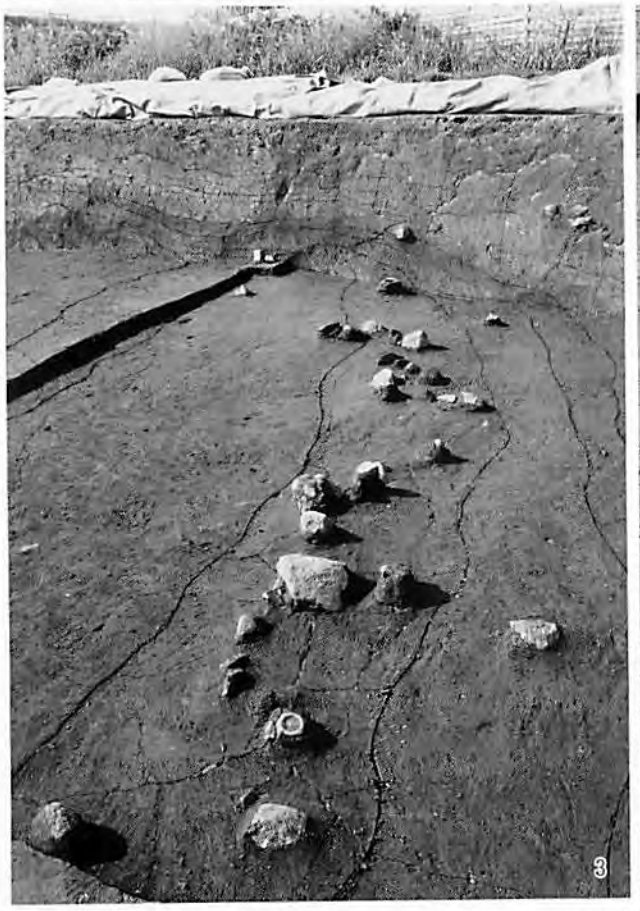


1．3区土坑 SK002 検出状況　2．3区土坑 SK002 半裁状況
3．3区土坑 SK002 完掘状況　4．3区調査区完掘状況

1．4区溝 SD001 検出状況　2．4区溝 SD001 土層断面、完掘状況



1．4区溝 SD002 検出状況　2．4区溝 SD002 土層断面、完掘状況

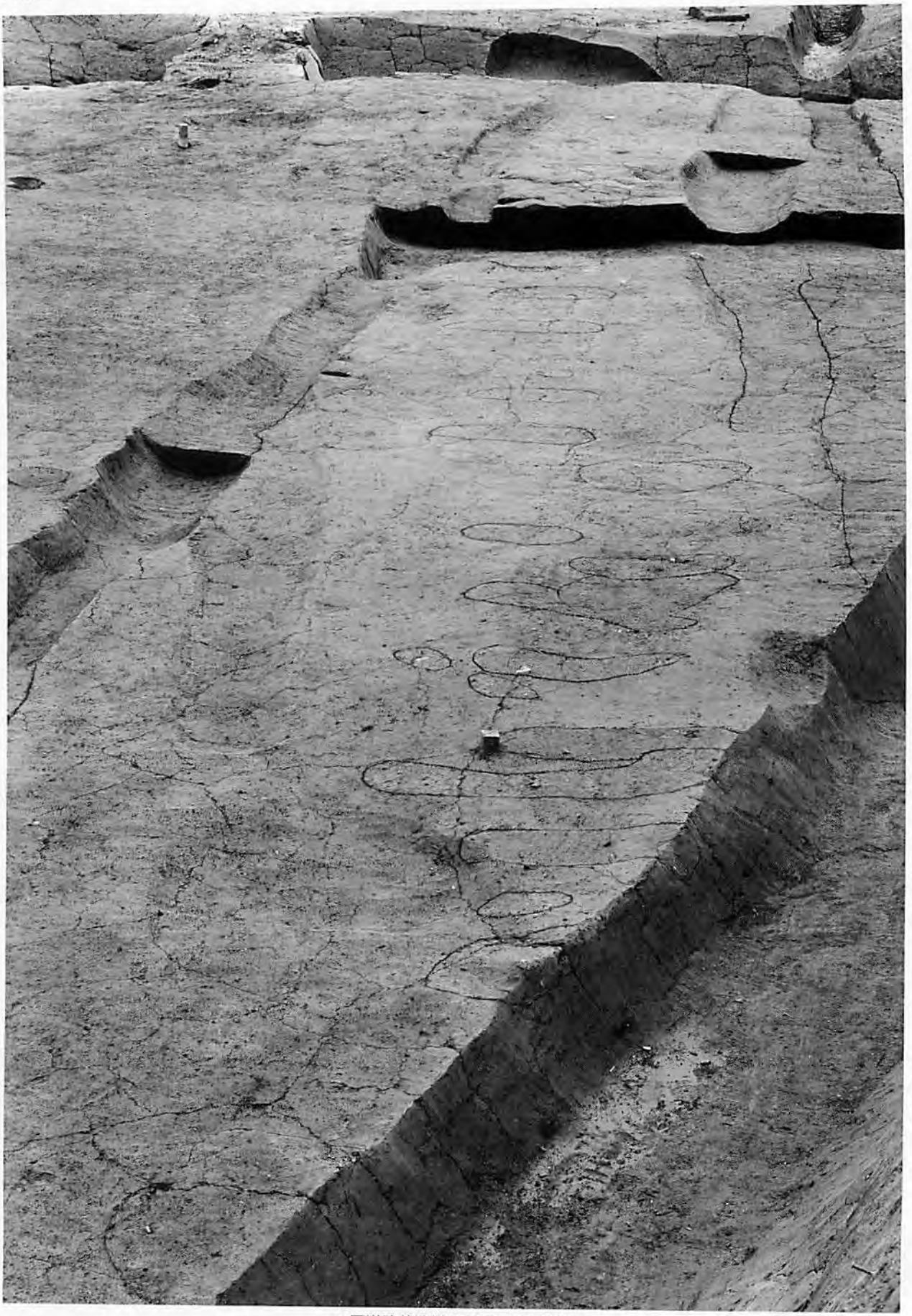


1．4区溝 SD003 遺物出土状況　2．4区溝 SD003 完掘状況
3．4区溝 SD004 検出状況　4．4区溝 SD004 遺物出土状況

1．4区溝 SD005 完掘状況　　2．4区溝 SD006 検出状況
3．4区溝 SD006 遺物出土状況　　4．4区溝 SD006 完掘状況

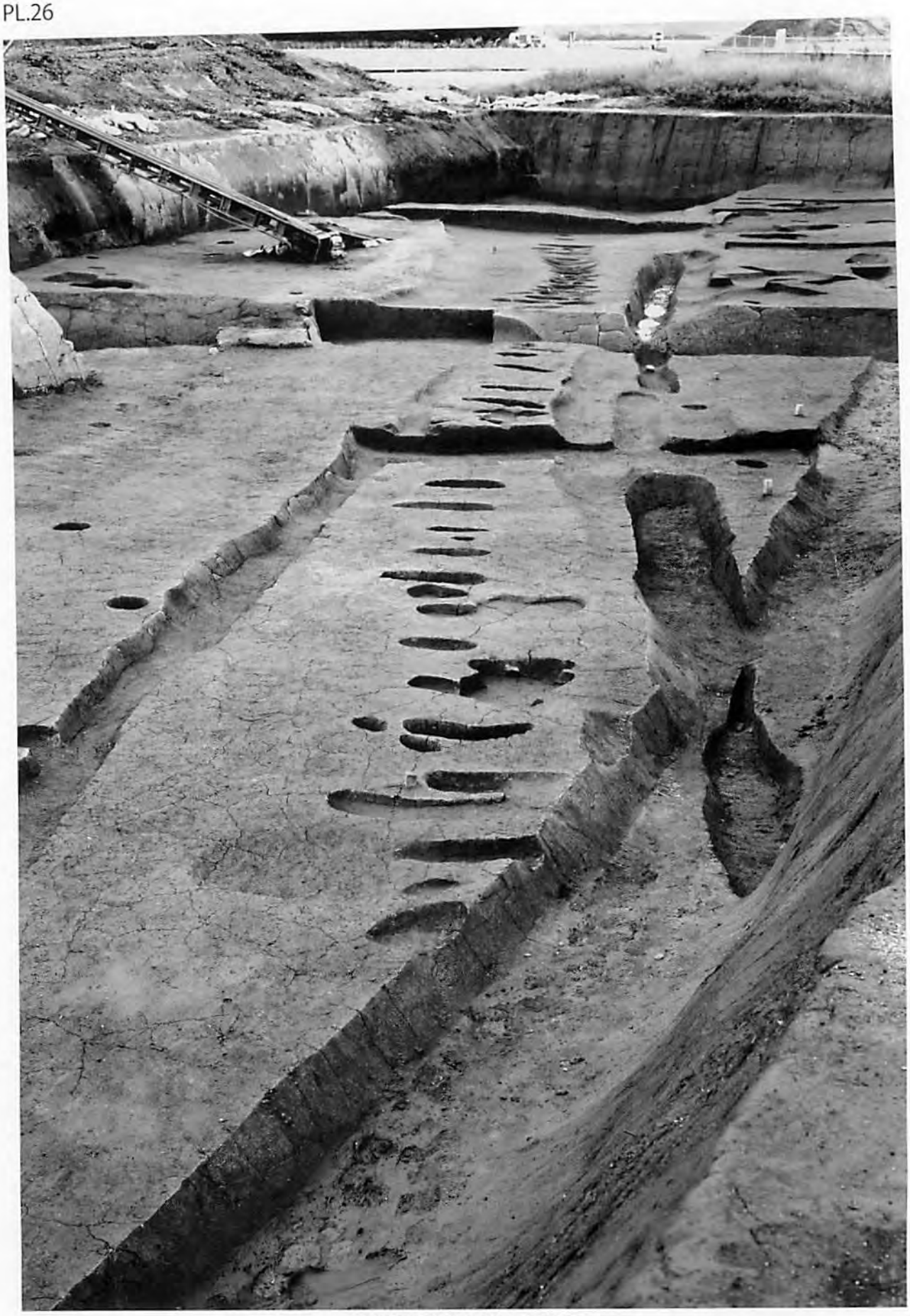
1．4区溝 SD007 完掘状況　　2．4区溝 SD008 遺物出土状況

3．4区溝 SD008 完掘及び土坑 SK001 検出状況　　4．4区溝 SD008 ～ SD011 完掘状況



4区道路状遺構 SF001 検出状況

1．4区道路状遺構 SF001 波板状凸凹検出状況　2．4区道路状遺構 SF001 波板状凸凹完掘状況
3．4区道路状遺構 SF001 遺物出土状況



4区道路状遺構 SF001 完掘状況

1．4区墓 ST001 検出状況　　2．4区墓 ST001 人骨検出状況

3．4区墓 ST001 頭骸骨検出状況　　4．4区墓 ST001 完掘状況

1．4区墓 ST002 人骨検出状況　2．4区墓 ST003 検出状況
3．4区墓 ST003 人骨検出状況　4．4区墓 ST003 頭骸骨検出状況

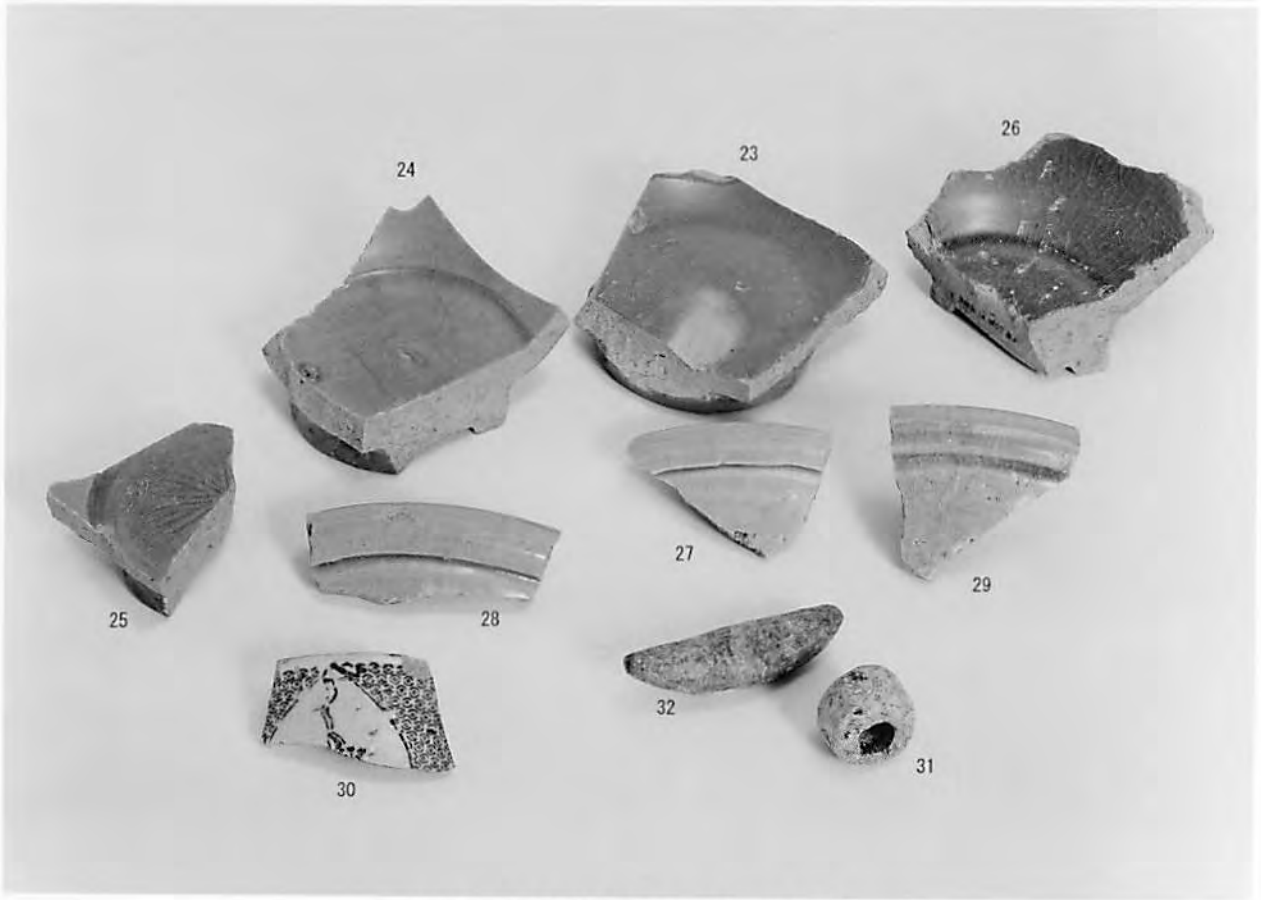
1．4区土坑 SK002 土層断面　2．4区土坑 SK004 獣骨検出状況
3．4区土坑 SK003 遺物出土状況

4区作業風景

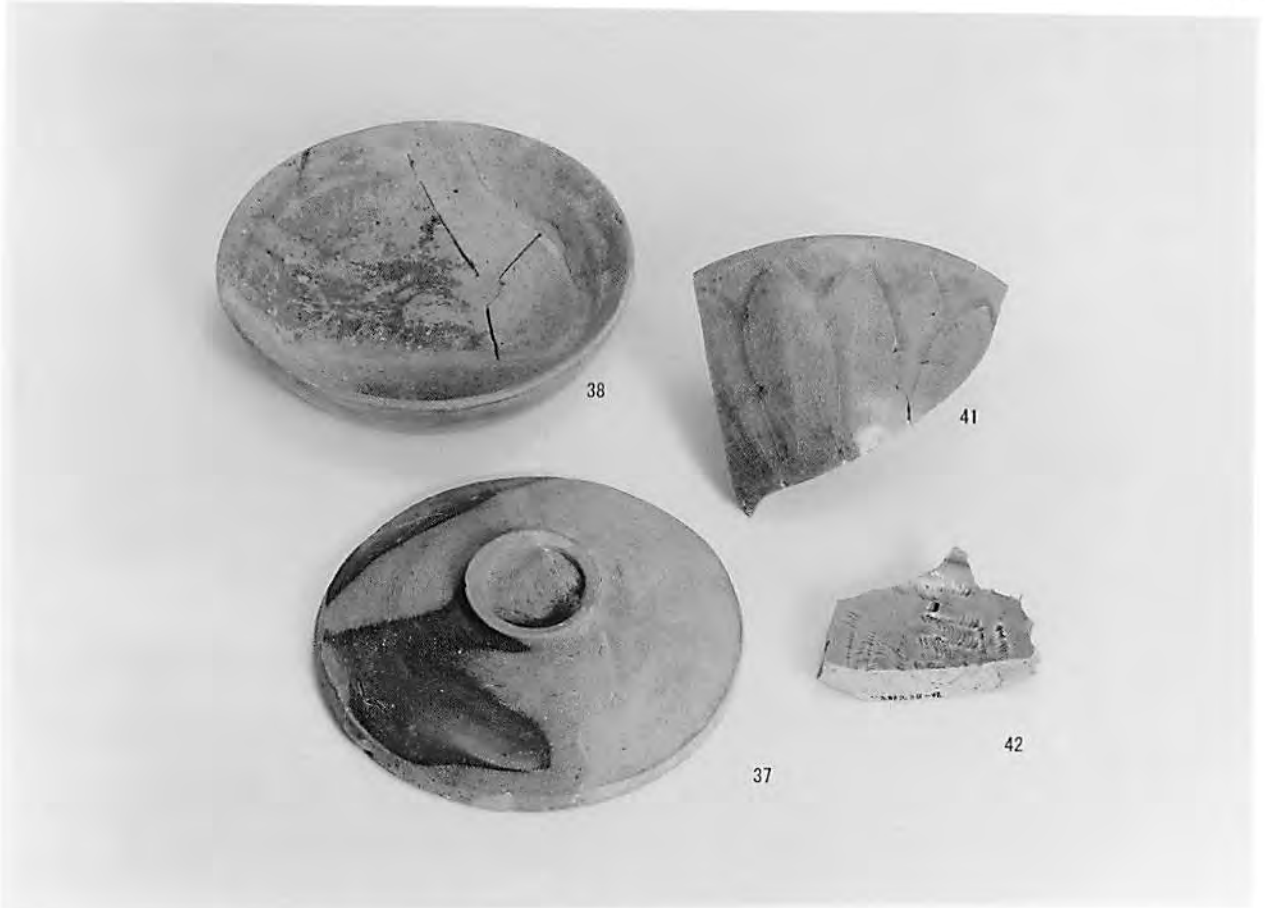
1．西屋敷遺跡１区No.１トレンチ掘削状況（北より）　2．西屋敷遺跡１区頂部五輪塔残欠検出状況（北より）
3．西屋敷遺跡１区No.４トレンチ掘削状況（北より）　4．西屋敷遺跡１区頂上部より西側落ち際礫検出状況

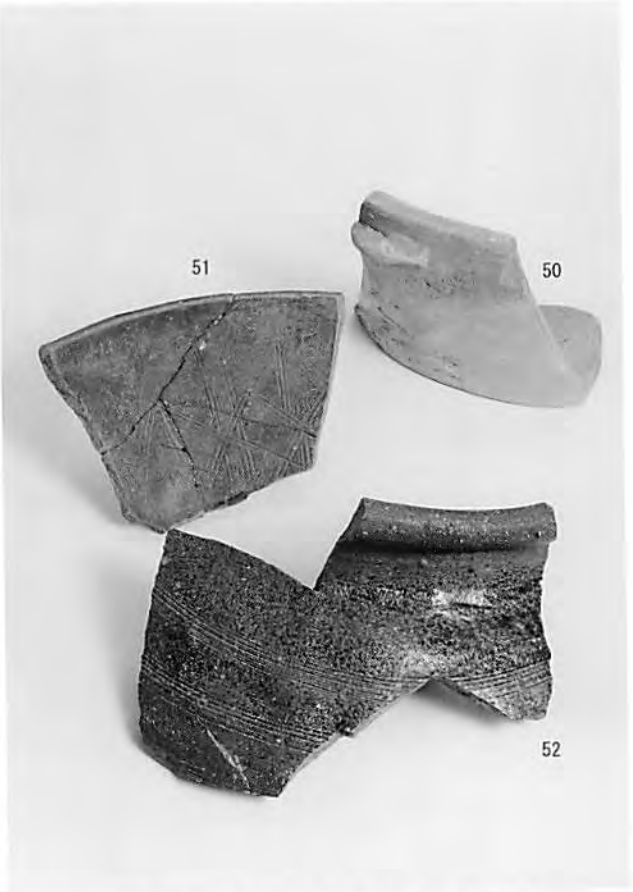
1．西屋敷遺跡１区自然地形露出状況　2．西屋敷遺跡１区全景
3．西屋敷遺跡２区全景

瀬萩遺跡 古墳時代面完掘状況



太郎丸遺跡１区包含層（８～32）出土遺物





太郎丸遺跡３区（37·38·41·42）・太郎丸遺跡４区溝 SD004 ～溝 SD008（44·48·50·51·52）出土遺物

太郎丸遺跡４区道路状遺構 SF001 出土遺物

太郎丸遺跡４区道路状遺構SF001（86～88）・土坑SK003（89）・土坑SK017（90）・調査区内（91～93）出土遺物

瀬萩遺跡竪穴住居跡SI001（1・2・4・5）・包含層（7・9・11）出土遺物

瀬萩遺跡竪穴住居跡SI002出土遺物

瀬萩遺跡包含層出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	たろうまるいせき　にしやしきいせき　せはぎいせき
書名	太郎丸遺跡　西屋敷遺跡　瀬萩遺跡
副書名	九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第２５０集
編著者名	長谷部善一、吉田徹也
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609　熊本市水前寺６丁目１８番１号　℡096-333-2706
発行年月日	2010年（平成22年）３月１日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査
		市町村	遺跡番号					
太郎丸遺跡（たろうまる いせき）	熊本県	玉名市	熊本県(43) 玉名市 (206) 261	32° 56' 00.33079" (日本測地系)	130° 35' 17.64789" (日本測地系)	2004 11.1 ～ 2005 10.31	14,148㎡	九州新幹線建設
西屋敷遺跡（にしやしき いせき）	熊本県	玉名市	熊本県(43) 玉名市 (206) 497	32° 56' 52.54971" (日本測地系)	130° 34' 05.32606" (日本測地系)	2005 4.9 ～ 2005 5.13	325.41㎡	九州新幹線建設
瀬萩遺跡（せはぎ いせき）	熊本県	玉名市	熊本県(43) 玉名市 (206) 434	32° 55' 31.13069" (日本測地系)	130° 35' 57.10046" (日本測地系)	2005 4.19 ～ 2005 9.30	2,395.35㎡	九州新幹線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太郎丸遺跡	散布地 集落	古代 中世	掘立柱建物、道路状遺構 土坑墓、土坑、溝状遺構	土師器、須恵器、中世須恵器（東播磨系）、瓦器椀・皿（肥後型）、青磁（龍泉窯系）、白磁、近世染付、滑石製品等	４区において、平野中央部に向う中世の道路状遺構を確認。道路状遺構と同時期と判断される掘立柱建物、土坑墓等を確認。
西屋敷遺跡	墓地	近世	近世墓石	なし	江戸後期から明治期までの一族の墓石の実測を実施。
瀬萩遺跡	散布地 集落	古墳 古代	竪穴住居跡 連結土坑	土師器・須恵器	沖積平野上へ張り出した低丘陵上の古墳時代における集落跡。時期は不明であるが、地下で連結する焼成遺構を確認。

印刷仕様

- 判型　／　Ａ４判
- 頁数　／　148頁
- 組版　／　写真写植（13級　小塚明朝 Pro）
- 用紙　／　表紙（アートポスト 220Kg）
  本文（上質紙 110Kg）
  写真図版（特アート SA 金藤 4/6 判　135Kg）
- 製本　／　左糸綴じ

熊本県文化財調査報告第２５０集
太郎丸遺跡　西屋敷遺跡　瀬萩遺跡

2010年（平成22年）3月1日
編集・発行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市水前寺6丁目18番1号
http://www.pref.kumamoto.jp/
印刷　コロニー印刷

21 教委　教文
② 0 0 2

【正誤表】

・P 56　Tab.6 太郎丸遺跡2区出土遺物観察表
<見出し>　(誤) 実測番号　→ (正) 遺物番号

・P 58　Tab.7 太郎丸遺跡3区出土遺物観察表
<見出し>　(誤) 実測番号　→ (正) 遺物番号

・P 104　<3行目>　(誤) 1 杯　→ (正) 1 鉢
<36行目> (誤)　22～30 小型丸底壺(土師器)
22～25は広口で口縁は短く、緩く外反する。
26・28・29は口縁が短く体部が球体を呈する。27・30は体部に比べ、口縁が広くまた長く伸びる。
→ (正)
22～24・27 小型丸底鉢
25・26・28～30 小型丸底壺

・P 110　Tab.14 瀬萩遺跡出土遺物観察表
<見出し>　(誤) b　→ (正) 種別
<遺物番号13> (誤) 口径 -　→ (正) 口径 (5.1)
<遺物番号19> (誤) 底径 -　残存高 5.9　→ (正) 底径 5.9　残存高 2.9

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 250 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：太郎丸遺跡 西屋敷遺跡 瀬萩遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/